
マレビット来たりて

安積

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マレビト来たりて

【Nコード】

N8578P

【作者名】

安積

【あらすじ】

典型的異世界トリップ……なんだろうけど、何でこの人たちこんなに異世界人慣れしてるわけ？

数ヶ月という短周期で異世界から人や何やらがやってくる世界に、何の因果かやってきてしまった日本人が、何とか順応しようと頑張って生きていく話。

基本、軽いノリでやっていこうと思います。不定期更新。

誤字脱字等発見しましたら、コメント等で教えていただければ幸いです。

序章（前書き）

他の方々の作品に触発され、どうしても異世界トリップが書きたくなりしました。

丁度良いので、年明けを契機に始めてみることにしました。
どうぞよろしくお願いします。

序章

序章

勢い込んで家を出た、初出勤のその日。

慣れないスーツに着られてる感は否めなくても、それでもやる気だけは一杯で。

意気揚々と家を出た。

ほんの少しの不安と緊張とそれに勝る多大な好奇心を胸に。

それなのに。

どうして私は異世界こゝろにいるんだろう？

意外に落ち着いてるもんだよねえ。

ただの娯楽でしかなかったファンタジー小説もこんな風に役立つことがある訳か。

予備知識も何にもなしにいきなり異世界に来ていたらきつとパニック起こしてただろう。

もしかして、昔から神隠しの話があったのってこういう現象に巻き込まれる人が実際にいたからなんじゃないかな？

となると、あくまで楽観的な予想に過ぎないけれど、場合によっては帰れることもあるわけで。

でも逆に言えば万が一どころでなく低い確率だけど、ここから更に別の世界にいったら可能性もあるわけか。

二度あることは…ともいうし、とりあえずは帰れるかもしれないけどこの世界での生活の目途をつけることが重要かな？

となれば、まずは職探しか。

……結局、辛い就活から逃れられてもまた職探しな訳ねorz
この世界にハローワークみたいなものはあるのかな？

異世界初日。

訳の分からぬままに保護された神殿で、空に浮かぶ7つの月に眩暈を覚えながらも、微妙に現実逃避をした脳は眠りという精神安定剤の補給に異議を唱えはしなかった。

序章（後書き）

年内完結を目指して頑張ります。

第1章 (1) (前書き)

主人公の一人語りでの説明的な回です。

第1章 (1)

何の因果か異世界に来て、1週間が経過した。

因みにこの世界での1週間とは6日のことで1月は24日である。

まあ、それはどうでもいいが、何とか現状を把握し慣れてきたかな、といったところだ。

異世界トリップものでは時たまあるバージョンだが、この世界は「渡り人」に慣れているようだ。

「渡り人」って言うのは私のような異世界からやってきた人々の事らしい。

別名「マレビト」。

これはこの国、アウトラーシェン周辺でだけ通用する言い方らしく、あまり一般的ではないのだそうだ。

話が逸れたが、何でも、毎年或いは数年に一度何処かしらには「渡り人」が現れるのだとか。

しかもこの国だけじゃなく、他の国でもそうらしい。

おそらく、この世界全体で見れば数ヶ月周期で渡ってくる人がいるのではないかと、私を保護してくれた神官が教えてくれた。

しかも、やってくるのは一つの世界に限らないらしい。

私と同じように地球から来る人もいれば、別な世界から渡ってくる人もいるとのこと。

人に近い種もいれば、所謂獣人や竜のような生き物である事も。

人種の垣塙やサラダボールなんて比ではない。

ある人はまるでゴミの集積場だ、と自嘲気味に言ったらしいが。

どうしてこんな事になっているのかは大分前に判明している。

嘘か本当か定かではないが、かつて神託が下ったのだという。

この世界に必要でありそうな人材を見繕って集めているのだと。

世界で生まれた人たちも元を辿ればそうやって集められた人たちの子孫なんだとか。

この神託を受けたのは特に信仰心が篤いというわけでもない、どこにでもいそうなおっさんで、神託を受けてからの開口一番の言葉が「余計なお世話だクソっ垂れ」だったと伝わっている。

なんでも、神託が下る前年に新たにこの世界に落とされた竜によって最愛の息子を殺されたばかりだったとか。

神と人間の価値観は違う。

人にとってはふざけたことでも、神にとってはこの世界が完成するのに必要な処置だったという事だろう。

今でこそもっと積極的にこの世界に関わりを持っている神だけれど、このときはまだ意外と放置気味だったらしい。

それにも拘らずこの話が信じられたのは、そのおっさんのように神なるものかもし実在するならば確実に恨んでいるだろう人々を中心にその神託が下ったからだ。

多くの証言者がいながら、何故かその中には一人も聖職者がいなかった。

それ故、なぜ自分に信託を下さらなかったのかと嘆いた聖職者も多くいたとか。

私が思うに、信心の篤い聖職者に神託を下したところで信憑性が薄かったり、変に歪められてしまうと心配したんじゃないだろうか。何となく、この世界の神様は人間臭い気がした。

とにかく、それらの証言の数々は神殿に集められ、一冊の本としてまとめられた。

今では世界中の誰もが知っている内容だが、世界は変われども噂とは人の口に膾炙されやすいものらしく、実は公にされてない神託があるのだ、世界の終末の預言があるのだの様々な都市伝説も合わせて広まっているらしい。

この手の噂を最初に広めたのはアメリカ人の「渡り人」ではないかな、と思ったりするが、それは私の勝手な想像だ。

でも、アメリカ人ってそういう政府陰謀系の都市伝説好きだよね。

まあ、伝聞が多くなったがそんなわけで「渡り人」たちはこの世界では当たり前の存在なのだ。

だから「渡り人」を迫害したり逆に優遇したりするような事はないが、普通に生活していこうと思えばそれほど困りはしないだけの制度作りはされていた。

「渡り人」が世界に必要な存在であると神から言われていることもあり、まずは何が出来るか、どのような知識や技術、能力を持っているかという事が調べられる。

そこで特別なものを見出されれば、研究機関やら何やらで仕事にく事も出来るが、そういう人物はあまり多くはない。

大抵はギルドにて自分のできる仕事を斡旋してもらう事となる。

そう、ギルドだ。

異世界トリップおよびファンタジー世界のファンが垂涎のギルドである。

もしかしたらこの仕組みはゲームやラノベ好きな地球人が考えたんじゃないのか、と思うほどその手のギルドに良く似ている。

間違っても、中世以後のヨーロッパでの商工会としてのギルドのあり方ではない。

何と言うか、分かりやすく現代の言葉に直すなら職業斡旋所：といってもハローワークではなく、人材派遣会社とでもいった感じだろうか。

そうあれだ、携帯ですぐ登録、週末には日雇いのバイトというグッ○ウィ○やらモ○イトやらそんなのによく似ている。

ギルドに登録したら、自分が請けることの出来る仕事の候補の中からやりたいものを選んで仕事に行き、仕事が終了したらまたギルドに戻って報酬を得る。

安定した生涯雇用（バブル崩壊以後有名無実となっではいるが）が当たり前だった現代日本人からすれば、職業に貴賤はないとはいうものの、日雇い労働者というのはかなり心理的抵抗のある職業であ

る。

というか、そうならないためにも大学まで苦勞して通って、就職難が叫ばれる中、それでも頑張って内定を得て、何とか無事に卒業して、今日から初出勤！という日に異世界なんぞに落とされて、挙句に別段特出した能力もないようだから日雇い労働に甘んじろ、というのはハッキリ言って、神がいるのものなら極刑ものだと言わなくとも私は思う。

それでも、生きてく為にはそれしか出来ない。

この中世的世界、安定した雇用を得るにはコネと伝手が何よりの頼りなのだ。

異世界からやってきたばかりの根無し草にそんなものはない。

ギルドでコツコツと信用を溜め、誰か自分の能力を買ってくれる人を見つけるか、売り込んでいくしかない。

と、まあ。

異世界に落ちてきてから保護された神殿で、1週間くらい掛けて色々教えてもらったり調べられたりして現状を把握する事は出来た。短い時間ではあったが保護される期間は今日で終わり、明日からは私の身は神殿ではなくこの区域担当のギルド預かりになるらしい。結構無茶な話だと思うだろうが、これらは良くも悪くも私たちのためのことなのだそうだ。

何も知らないまま放り出すわけには行かず、かといって長い時間保護してしまえば自立しこの世界に馴染む力をなくしてしまう。

ある程度落ち着いて自分の状況を把握して、且つ自分で世界に踏み込んでいく力も持っている。

その微妙なラインが凡そ1週間だったのだという。

これは神々がある程度、順応性やある意味での凶太さをもった人間を選別しているからこそできることらしい。

つまり、この世界に来てしまった私はとっても凶太い神経の持ち主

だという事を証明されたようなものである。

これを言われたときは流石に少なからずショックを受けた。

もしかしたら、この世界に来てしまったということ以上のショックかもしれない。

……恐らく、こういうところこそが私が選ばれてしまった所以の一つなのだろう。

明日、朝になれば私は神殿の庇護下を離れ、異界の地で自ら歩く術を身に付けていかなければならなくなる。

当分、心休まる日はないだろう。

こういうときは体力温存に限る、とばかりに異界の夜に浸るまもなくさっさとベッドに潜り込む。

新生活への多大なる不安と若干の好奇心と興奮を闇は飲み込み、夜は静かに更けていった。

第1章 (1) (後書き)

主人公、現状把握。

次回から他の登場人物が出てきます。

第1章 (2) (前書き)

暫く説明的話が続きます O r Z

第1章 (2)

異世界生活7日目。

庇護下を離れ、自立生活を目指して活動するという意味では実質1日目とも言えるだろう。

まあ、1週間というのはあくまで目安であって体調やら精神状態やら多くの理由で保護期間が長くなる人はそれなりにいるらしい。

私ももう暫くいても良いのだと言われたけれど、一度甘えればきつと離れられなくなる、そんな自覚がしつかりあった。

それに、本来であれば1週間前には新入社員として自立生活をスタートさせていた筈なのだ。

例え異世界だとしても、私がすぐに働く道を選んだのはある意味当然の選択と言えただろう。

でも、本当の理由は……。

「本当に登録してしまっていたいのですか？」

ギルドへ向かう道すがら、この1週間私の保護官であった神官がしつこく尋ねてきた。

そう聞かれてしまう理由は分からなくもなかったが、一度決めた事をグジグジといつまでも言われ続けるのは不快だった。

「もう、決めました。」

自然、言葉はそっけなくなる。

それでも、否いやそれだからこそか、強がっているように見えたのかも

しれない。

結局、ギルドへの長くはない道案内の間に15回も同じ質問が繰り返された。

曰く、その年では仕事はまだ無理ではないか、体力的に持たないのではないか、無理をしているのではないか、たった一人で食べていくのは難しい、もっと我々しんでんを頼れ、組織しんでんが嫌なら自分が個人的に面倒を見よう、否寧ろそれが良い、だのと。

まあ、どれも丁重にお断りしたが。

こんな暑苦しく押し付けがましい保護者は不要である。

暑苦しいとは言うものの、顔だけ見れば……ゆるく一つにまとめられた柔らかに波打つ稲穂色の長髪、瞳に映すは冬の青、コーカソイドに近い色白の肌はムカつくくらいにつるつる、顔のパーツの形も配置も抜群、とくれば……まあ、間違まちうことなき美形であろう。もし私が男だったなら、確実に「イケメン死ね」とか思ったことだろう。

「リア充爆発しろ」と、思うことはなかっただろうが。

何せ性格が……これこそが所謂残念な美形と呼ばれるそれなのだと思う。

やがて静かになった神官を先導にギルドらしき建物へと到着する。

石造りの重々しい雰囲気建物だ。

「ここですか？」

すべての提案をすげなく断られたせいか幾分意気消沈して見える神官を見上げ、尋ねる。

神官はまだ未練がましい瞳を向けてきたが、事ここに至ってはもう反対する気はないようだった。

「そうです、ここがエグザードナ地区のギルド本部です。」

そういうと重厚な重い木製のドアを開き、私が入るのに続いて中へ入ってきた。

どうやら私の登録が終わり、完全に神殿の庇護下を離れるまではついてくると決めているようだ。

なんて過保護なのだろう。

普通は道案内されたらそこで終わり、或いは場合によっては地図だけ渡されてそれで終わりという事もあるらしいというのに。

それはそれで困るのだが、逆の意味でとんでもないのが保護官だったなど、後僅かで彼との縁が切れることを神ではない別の何かに感謝しつつ、気づかれないようにそつとため息をついた。

早朝と呼ぶほどではなくとも早い時間だからか、ギルドの中は閑散としていた。

日本の日雇い労働のイメージだと、朝早くに仕事を貰って夕方帰ってくる、という生活パターンかと思ったのだが、どうやらギルド員たちの朝はそう早くないようである。

それでも、少ないとはいえ奇異なものを見る複数の視線を寄せられている事は分かった。

それらの視線の持ち主をやり過ぎし、幹旋内容を記した掲示板やら、おそらく受付か換金用であろう窓口を通り過ぎ、階段を上り2階へ向かう。

本当に、想像していた通りゲームの中のそれにそっくりだ。

「渡り人」は元の世界の時代を問わずやって来るらしいから、あなたが私の予想は外れていないのだと思う。

特に、この国は地球からの「渡り人」が多い事で知られているという事だから。

通常、ギルドの登録は1回の窓口で行われるのだという。

しかも地区内にあるギルドの各支部でも登録は可能だそう。

本部よりも窓口が込む事も少ないので、この近辺に居住しているものでもなければ、そちらで登録する者の方が多いよう。

だが、唯一例外がある。

異世界からの「渡り人」だけは、その地区のギルド本部の上層部でなければ登録できないのだそう。

それは時折、後になって能力を開花させる「渡り人」も少なくないため、その管理を行いやすくするという理由によるのだとか。更にはまだ世界に慣れない「渡り人」の援助をしやすくするための決まりでもあるそう。

確かに、お互い顔見知りであった方が何かと便利だろう。

階上に上がり、薄暗い廊下を進む。

神殿もそうだったが、石造りの建物は総じて日中でも暗い。

神殿はそれでも白い反射率の高い石を磨き上げて使っていたのでまだ少しは明るかったが、ギルドでは削り出しそのままの石を使っているのではなおさらに暗く感じた。

無骨な作りは威圧感も感じさせるが、恐らくはそういった効果をもたらすためではなく、経費面での理由故なのであろう。

まあ、それはさておき。

暗い廊下のその先には細かい装飾の施された大きな扉があった。

そこがこのエグザードナ地区担当ギルドの中枢だった。

ノックの後、保護官が先に入室する。

「神殿の者です、先に連絡を入れた”渡り人”の登録にきました。」

入りなさい、と姿は見えないが、それなりに年の行った落ち着いた感じの女性の声が聞こえた。

「……え？子供？」

入室を促す声に従って入った私の耳に一番に飛び込んできたのは、挨拶でもなんでもなく、気の抜けたようなそんな言葉だった。どっしりと重そうな執務机の向こうにいる女性も若干ビククリしている。

だが、どうやら先の発言はその隣にいる秘書（？）のもののようなのだ。既に連絡は言っていたはずなのだから、そこまで驚かなくてもいいと思うのだが。

「部下が失礼を。」

ですが、話には聞いていましたが、これは確かに驚くのも無理はありませんね。」

奥の執務机から初老の女性が立ち上がって声を掛けてきた。彼女がギルド長なのであろう、落ち着いた雰囲気、しかしそれだけではないだろうことを伺わせる独特の雰囲気的女性だ。

「エグザードナ地区ギルド支部長のハーナン・エルドです。」

はじめまして、異界から参られし方。」

「はじめまして、”渡り人”アトルディアです。」

ギルド長からの挨拶に対し、未だ言い慣れぬ名を返す。当然、偽名である。というか、正確に言うならば字、^{あざな}名乗りの為の仮名^{かな}という

べきか。

この世界、否、^{いな}この国はかつて言霊信仰が盛んであったために今尚その名残として真名^{まな}信仰が強く残っている。

そんな土地柄ゆえに、この国の出身者は本名を初対面の相手に教える事はまずないのだそうだ。

だが、どうやらこの支部長は異国人であるのだろう、恐らく先程の名乗りは字ではない。

なぜなら、通常字に姓がつくことはないからであり、また非常にシンプルな名であったからである。

真名信仰の盛んなこの地の人々の名前は、字に限らず本名もまた自らを守護する神々や精霊の名を組み込むために非常に派手派でしい名前なのだ。

私が名乗ったアトルディアもまた、そういった意味も込めて神殿から与えられた「渡り人」としての公の名である。

純日本人が名乗るには似つかわしくない名だが、致し方ない。通り名は好きなように付けて良いと言われており、普段からそう呼ばれるわけではない事だけが救いである。

「アトルディア……ああ、町の北西にある滝の名ですね。

元はそこに住む精霊の名だとも伝えられています。

貴方はあそこに” 渡ら” れたのですね。」

「はい。」

渡り人の名の多くは落ちた場所に由来するらしい。

その土地土地の神々や精霊が私たちに加護を与えるからだとされている。

私も例に漏れず、落とされてプカプカ浮いていたその滝の名を与えられたのだ。

元がその滝の精霊の名が由来であるから丁度良いだろう、とのこと

だ。

そんな適当で良いのか、と思わなくもないが、神殿のお偉いさんが
そう言ったのだからきつと良いのだろう。

それにしても、と彼女は続ける。

「先程部下の非礼を詫びたばかりではありますが……実年齢は22
だと言われましたか。」

「はい、今はこんな形なりなので信じ難いでしょうが。」

「そうですね、”渡り人”が非成人である事はないと知っていな
ければ納得できなかったでしょう。」

それを分けていても、失礼を承知で申し上げれば10歳を越えて
いるようには到底見受けられません。」

まるで幼子を見るかのような——実際彼女としては似たようなもの
だったのだろう——柔らかな微笑を浮かべられてはなんとも言いよ
うがなかった。

「……10歳以下、ですか。」

体感的には13歳のほどの頃とそう変わらないように感じている
のですが。」

純粋な子供にしては早熟に見られるであろう苦笑を浮かべつつ、そ
こだけはしっかりと主張した。

もはや異世界トリップのテンプレではあるが、この国の人たちの多
くが地球でのコーカソイドに近い事からも、より幼く見られるだろ
う事は十二分に有り得ると予想してはいたが、人からはつきりそう
言われると地味に堪えた……。

私だって、好きで子供になったわけじゃないんだい……。
望まぬ異世界トリップの上にガキ扱い……。本気でイジケても良いだ
ろうか？

第1章 (2) (後書き)

主人公が子供になってしまった説明は次回。

追記

一部記述を変更しました。 2011. 01. 08.

第1章 (3) (前書き)

今回で大まかな説明回は終わります。

第1章 (3)

私はこの世界に來たときに子供の姿になっていた。

恐らくは12、3歳くらいの頃とほぼ同等の身長なのではないかと思う。

中1の時には身長伸びは緩やかになっていたし、以前よりは微妙に低く感じる視点からして差ほどズレはないだろう。

こういう原理かは分からないが、この世界に來るにあたって体はこの世界に最適化されるのだという。

呼吸も食事も問題なく、また言語などが通じるのもその最適化された結果によるものなのか。

通常は容姿がそう変わる事もないらしいが、極稀に容姿が変化する人や色彩が変化する人、中には種族すら変わってしまう人もいるらしい。

そういう意味では、ただ単に若返った私はまだましな方なんだろう。ギルドに登録するのに外見年齢では年齢制限に微妙に引っかかるが、実年齢は22だと伝えてあるので書類上は一応問題ない。

その事はちゃんとギルド側にも伝えてあったはずなのだが、聞いてはいてもやはり実際に目にするのでは違ったようだ。

何より、私のように若返った「渡り人」も前例がなかったわけではないようだが、どちらかといえば珍しい部類であり、尚且つ成長を待たずにすぐにギルドに登録したものはほとんどいなかったと聞けば、なるほど、先程の驚きもおかしなことではないのだろう。

そして、神殿の関係者が口をそろえてまだ早いのではないかと言っていたことにも頷けた。

尤も、だからといってギルド登録を辞めるつもりは毛頭ないが。

ギルド長もその事は分かってくれているみたいだった。

私を子供呼ばわり（外見はまさしく子供なのではあるが）してくれ

た若い女性——ミリアナ・ファレルというらしい。彼女もまた他国の人である。ギルドの中枢という要職に外国人を配置するのは地縁や血縁による汚職を防ぐ一環なのだという。——の淹れてくれたお茶を飲みながら話を進める。

とりあえず、私に関する簡単な説明、神殿で受けたさまざまな検査や出身地、境遇に関してなどを話し終わると、早速登録のための書類を持ってきた。

書類に印字されているのは日本語ではない。

だが、私はそれを読む事が出来た。

この1週間のうちに神殿で教えられた事によれば、先に言った身体之最適化に付随する能力なのだそうです。

その人物が元々持っていた知識にこの世界のそれに同等する知識が関連付けされるのだと言う。

例えば元の世界で読み書き会話が出来れば、こちらの世界でも落ちた地域の国の主要言語の読み書き会話が出来るといったように。

元々知っている語彙ならば理解できるが、知らない言葉を理解する事は出来ない。

この便利機能のお陰で、日本人の「渡り人」は結構仕事面で優遇される事が多いのだとか。

まずほぼ確実に読み書きが可能で、計算も得意、好みはどうあれ本を読む事は必要な勉強と言われれば然程苦としない。

生憎、外見年齢のために当分私には縁のない話だが、日本人は各国の王族や神殿、大店に仕えることが多いのだという。

これはコネも伝も何もない”渡り人”の中では異例の待遇なのだろうか。

いずれ身体が成長した暁には、私もそんな職場に就職できれば良いのだけれど。

何せ、王宮や神殿といえど日本と言う政府であり、行政機関だ。

この世界では王族は須らく神の子孫である。

そんな彼らが国の中枢であり、政の担い手なのだから、当然、親たる神に仕える神官たちは行政機関の一員、言わば官僚、国家および地方公務員である。

当たり前のことながら、給料も良い。

しかし、当然の事ながら見た目子供が就職できる先ではない。体が成長するまで数年待つ？ 私に限ってはありえない選択だ。故に、私は自活を目指すならギルドに登録するほかないのだ。

勿論、成長する前に地球に帰ればそれに越した事はないのだが。

私が契約に関する条項を読み終えたのを見計らったのか、ギルド長が口を開いた。

「さて、そちらの契約書に署名してもらえば貴方はギルドの一員となります。

既に知っているとは思いますが、そうなれば、正式に貴方の身は神殿の庇護下から離れ、我々の預かりとなります。

とは言っても、先程も説明した通り、暫くの間は僅かではあります。が最低限の生活を保障するだけの金銭、或いは物資が神殿から支給されます。

それでも、今までのように神殿が何から何まで全て面倒を見てくれるという生活は出来なくなりますよ？

本当に、構わないのですね？」

覚悟を問うてくるような、その強い視線をしっかりと受けてめて答える。

「どちらにしても、いつまでも庇護下にいるわけには行かないのでしょうか？

それならば、私は早めに今後の生活になれておきたいんです。」

「わかりました。

では、登録前に確認ですが、今の貴方には後見人はいないのでですね？」

「はい。」

「この世界では、貴方の生まれた世界と違って血縁や地縁、コネや伝手と呼ばれる繋がりが非常に重視されます。

後見のない身では何事もなせないその事をよく知っておいてください。

では、”渡り人”の通例どおり、ギルドが貴方の後見を務めるという事で構いませんね？」

「は——

「後見は神殿で務める。」

——あ？」

はい、と言い切る前に後ろから邪魔が入った。

言わずもがな、あの男である。

思わず引きつった顔を取り繕う余裕もなく振り返る。

顔だけしか取得がないんじゃないかなろうかと常々疑っていた男は、至極真面目くさった顔でのたまった。

「後見には私になる。」

「ちょっと待ってください！私はギルドに頼むつもりで……」

「これは君を神殿から出す上での条件の一つだ。」

「聞いていません！そんなの。」

食って掛かろうとする私を制し、ギルド長が口を出す。

「それは、神殿の総意と見てよいのかしら？

それとも、貴方一人の考え？」

「どちらとでも。」

明確に答えはしないが自信を持って言う。

だが、勘でしかないが恐らくこれは彼の独断ではないのだろう。

これを言うためにわざわざここまで来たのかと、ようやく私は理解した。

「神殿が条件だというならば、こちらとしてはそれを覆す手はあまりないわ。

確かに後見役としては申し分ない相手ではあるけれど……。」

「……変更は、難しいんでしょうか？」

「神殿側が納得するだけの後見人を見つけるには時間がかかるでしょうね。」

そうなれば、ギルドの登録自体も遠のくわ。」

「……分かりました。では、これをお願いします。」

私としては苦渋の決断だ。

それでも、どうしても私には早急に仕事が必要だった。

私の表情に何か思うところがあつたのか、ギルド長が慰めと思われる言葉を口にした。

ギルドが単純に後見するよりもはるかに多くの優遇措置が受けられるのだから、儲けものとも思っておきなさい、他の「渡り人」がどんなに望んでも手に入らないものよ、と諭すように微笑まれては何も言い返せない。

頑張りなさい、とエールを送ってくれたギルド長に挨拶をし、満足げな顔の神官と共にその部屋を後にした。

帰り際、1階で早速明日からの仕事を探すため掲示板を見上げた。先程通り過ぎたときよりも好奇の目は増えていたけれど、神官がすぐそばにいる事からか見る以上のことはしてこなかった。

からかわれたらそれも利用してやろうかと思っていたんだけど……本当に、過保護な人だ。

恐らく、今日中には子供姿の「渡り人」がギルドに登録した事は町中に広まるだろう。

多少その情報を増やしてやる事は吝かではない。

とりあえず、目当ての依頼の紙を神官にとって貰う。

先に窓口へと進み始めた神官の眼を盗み、窓口へ行く前に、くるっと振り返りにっこり笑って一礼をした。

案の定、好奇の視線を寄せていたギルド員たちの視線はしっかり私に集中している。

神官が、私が何かをしようとしてることに気付いて止めるためか近づいてくるのが目の端に映ったが、もう遅い。

声が掠れないように、就職活動で鍛えたよく通る声を意識する。

「はじめまして、ギルド員の皆様方。

本日、ギルドに登録しました、異界、地球の日本から来ました”渡り人”アトルディアです。」

地球、日本という言葉に反応した人が何人か見えた。
若干、好奇の視線に好意的な色が混じり始める。

これは先人たちに感謝すべきなのだろう。

極力、明るい声と表情を心がけながら後を続ける。

「読み書き計算は得意ですが、今のところ特殊能力は発現しており
ませんので悪しからず。

こんな形ではあります^{なり}が、一応れっきとした成人ですのでどうぞ
宜しくお願い致します。」

よし、ちゃんと言えた！内心ガッツポーズをしながら笑みを浮かべ
る。

内容としては非常に短めだが、気分的には就活の面接での自己アピ
ールを無事終えたときに近い。

呆氣にとられている面々を尻目に再び一礼すると窓口にとってかえ
した。

何故だか後ろから笑い声が響いてきたが、悪い感じはしなかったの
で気にしない。

無然とした顔をしている神官だって気にしない。

爪先立ちで背伸びをしながら――再び後方から爆笑が響いたけれど、
以下略――窓口に依頼の紙と、先ほどギルド長に貰ったギルド員と
しての契約書の控えを出す。

この契約書の控えが、ギルド証が発行されるまでの私の身分証明書
となる。

神殿から発行されている身分証もあるけれど、それではギルドの仕
事は請けられない。

故にこの一枚の紙切れは私にとっては大事な命綱である。
確認され返された契約書を丁寧にバッグにしまった。

そして説明されるのは契約の履行内容についての説明、これはもうテンプレ的な内容だから以下略。

一つだけ違ふとすれば、明確なレベル設定は存在しないという事。個人の力量を正確に測るのが難しい、というのが理由の一つだが、ただ単純に必要なないからだ、と言うのが一番の理由だそう。

無茶だと思われる仕事なら一応ギルド側から注意が促されるけれど、最終的には受ける受けないは個人の自由であり、出来なければ違約金を払うというたったそれだけだ。

それ故に失敗を繰り返した場合、信用の失墜は免れず、その影響は大きい。

仕事を請ける受けないは個人の裁量に任せられるとは言え、評判が落ちれば依頼側からこの人だけはやめてくれ、と言われる可能性が出てくるわけだ。

因みに、この評判は街の噂と言う形で人々の口に乗る。

仕事上の信用問題だけでなく、人格の問題として扱われてしまう事もままあるため、当然無茶な仕事をする人と言うのは少なくなるので、レベル設定なんて必要ないのだそう。

他の情報ソースがほとんどないとは言え、街の噂恐るべし、である。日本では人の噂も75日と言ったが、実際75日も仕事が出来なければ基本的に日雇いであるギルド員は余程の貯金がない限り日干しになってしまう。

そりゃ、自ずと気をつけるようになるってものだろう。

そんなこんなで、私も確実に出来るだろう仕事を選んだ。

請ける仕事は単純な草むしり。

期間は明日から1週間、場所もギルド本部近くの民家である。

当然、賃金は低いが今の私ではこれがせいぜい。

それでも、これが私のこの世界での第一歩だ。

神殿の保護下は安全で安心で、何もしなくても良い所だった。

この世界に慣れるまで私を守ってくれた。

でも、何もせずただただ受動的に過ごす日々は、ふとした瞬間に地球のことを思い返させた。

両親は、兄弟は、友人たちは、一体どうしているだろう。

この世界に来てしまったことを認識するのに1日、理解するのに1日、地球を諦めるのに……まだ、私は諦め切れていない、とりあえず、現状を受け入れるのに1日、4日目には地球を 思い出した。ふとした瞬間に家族を、友人を、残してきた様々なものを思った。

早過ぎるといわれた仕事の開始。

でも、私は何も思い出す暇もなくいたかった。

無理無茶無謀なんて、想定のうちだ。

思い出してしまえば、泣かずにはいられなかったから、周りの人に当たらずにはいられなかったから、神を憎み恨み辛みを吐き罵倒し続けずに入られなかったから、己の不幸に溺れ嘆きつづけずにはいられなかったから、誰かを傷つけ、誰かから大切なものを奪わずに、この世界を呪わずにはいられなかったから。

何も感じずに眠りたかった。

だから、私は小さくなった体で無理を押してでも仕事を始めたかったのだ。

第1章 (3) (後書き)

仕事の内容から想像つくでしょうが、こんな感じでほのぼののんびりやっています。

戦闘とか戦争とか攻撃魔法とかは出てきません。

第1章 (4) (前書き)

お仕事前に準備をしましょう。

第1章 (4)

とりあえず、ギルド登録はなった。

依頼も請けたが、仕事は明日からである。

朝早くにギルドに来た為、まだ日も高い。

さて次は何をするか。

やりたい事は色々ある、けれど先立つものが何もない。

そもそもこの世界に来る時に持っていたものの他は、神殿で支給された2着の服以外、何も持っていないのだ。

つまり、生活に必要な様々なものが一切無い。

ありがたいことに、というかよくよく考えれば当然の配慮なのだが、自活出来る様になるまでは神殿から一定額の支給がある。

だが、これはいずれ成すであろう何かへの期待が担保である。

未だ何のためにこの世界に来たのかすら分からず、常々平凡・平均・どこにでもある存在であることを自負し、特別な何かを成す事が出来るとは到底思えない私としては、出来ることならあまり手を付けたくはない。

でも背に腹は変えられないので、最低限生活をなんとか出来るだけのお金はあるがたく使わせてもらうことにする。

何も気にせず支給金を使う人もいると聞いたが、人は人、である。

私がこんな考えをもつのも「他人に借りを作るな」という我が家の家訓故だろう。

異世界に来たからとはいえ、いやだからこそ、20年近く刷り込まれたそれはそう易々と消せるものではない。

それは私と、遠く離れた家族とを繋ぐものだから。

まあ、それは今は考えまい。

今、考えるべきは…。

「まずは住居か…」

ギルドと提携している安い宿屋もあるようだが、果たして子供の姿で借りられるのか。

「まさか、引越すつもりですか？」

一人考えに耽っていたら頭上から声がした。

駄目ですよ、許しません、とか何とか言ってる。

ああ、まだこいついたのか。

「でも、私は既にギルド預かりの身になりましたし、ただでさえ当面の生活費は援助していただくのですから、これ以上厄介になるわけには……。」

っていうか、勝手に私をこの世界に連れてきた神に関係のある場所に長居したくはないのだ。

そこにいるだけで、この理不尽に神経がささくれ立つのが分かるから。

「先程も言いましたが、我々としてはまだあなたを神殿から出すのは反対なんです。

例えば預かりはギルドに移ったとしても私が後見人である以上、神殿から出ることは許しません。」

私の意思を無視して勝手にあなたが後見人になったんでしょ。私はギルドに頼むつもりでいたのに。

「正直、神殿は気疲れするのです。

ただの穀潰でしかないのにあのような生活を送るのは息が詰まります。」

「それは、お役目が知れぬからですか？」

「……はい」

神が遣わしたって言われても何の能力もない私には、貴殿方の親切の陰に見え隠れするその期待が負担なんです。

きつと言っても分からないだろうけど。

1週間、共に過ごしてよく分かった。彼等にとって、「渡り人」は最も身近な神の力の体现、言わば神への信仰の対象の一片なのだ。しかも、あまりに身近すぎるために彼等自身にその自覚はない。無意識の期待、それは意識しないほどに深く染み付いているともいえる。

だからこそ厄介だと思うし、だからこそ私はそれが恐ろしい。もしも、彼等の期待に応えられなかった時、彼等がどう変わるのか。期待に応えられなかっただけならばまだ良い、ただの役立たずと呼ばれるだけだろう、或いは”まだお役目を知らぬだけ”と。

だが、もし、私にも役目と言うものがあり、それがかつて”災厄”と呼ばれたものと同様のものだとしたら……神と人の考えは異なる。私をもたらしものが災厄であれば、彼等は私を即座に排除しようとするのではないだろうか。

まあ、これはうがち過ぎた考えなのかもしれないが。どちらにせよ、未来を担保に借りを増やしたくはない。

「王宮と神殿を見ただけでは分かりにくかったことですが、こうして街を歩いてみればよく分かります。」

今の私は貴族並の扱いを受けているのでしょうか？」

恐らく国一番の豪華な場所と世俗と切り放された場所を見ただけで

は、ただ良い生活をさせて貰っている、くらいにしか分からなかった。

けれど、こうして市井に降りてみればそれが一般民と比べてどの程度のものであるかは容易に想像できる。

2着しか支給されていない衣服にしたところで、デザインこそシンプルだが市井に暮らす人々のそれと比べればその質の差は歴然だ。神殿はそもそも神に仕える人々の施設であって、彼等は基本的に自分の物という物を持たない。

その前提で考えるならば、高位神官や貴族が着ても見劣りしないだろう服を2着というのは既に破格の扱いだ。

「私は貴族でも郷土でもなく、普通の一般的な中流家庭の出です。社会構造、基盤そのものが違いますから、こちらの世界の町民やら商人と呼ばれる方々と同じとは言えませんが、少なくとも貴族階級の子女と同じ扱いは私には分不相応です。」

「確かに貴方の生まれはそうかもしれませんが。」

けれど、今の貴方は”渡り人”であり、そして神は人を生まれの貴賤で差別することはありません。

貴方はその生まれを恥じることはありません。

貴方はこの世界で成すべき事があると神が認められ、今ここにいますから。」

かもしれないって、何だ。

私は一億総中流とかって呼ばれた社会の列記とした庶民だし、そしてそのことを恥じてなんかいない。

望んで”渡り人”なんかになったわけでもない。

寧ろ、自分で道を選べたと言うのなら絶対に選びはしなかっただろう。

「だからなんだと言うんです？
世話してやっているんだからおとなしく受け入れろとでも？」

「そうは言っていないません。」

「同じことでしょうか？」

その生活そのものが苦痛だと言っているのに。

「誰もが傳かれる生活を願っているわけではありません。」

どうせ、言ったところで分からない。
ならば、私に出来るのは一つだけだ。

今神殿を出ることが出来ないと言うならば、早々に一人立ちをし神殿を出ることだ。

それまでの余計な出費が減ったと思えば良い。

日本にいた頃だって、引越するときには良い条件のところが見付かってからだったのだから。

「もう良いです、分かりました。」

それでは一人立ち出来るまで、もう暫くお世話になります。」

何を言っても、きっとこの人は理解しようとはしないだろう。

この話はこれで終り、とばかりに何か言いたげにしていた男の言葉をつむがれる前に切り捨て封じた。

異論を受け付けるつもりはない。

いかに言葉をつむぐうと所詮それは加害者側の都合でしかないのだから。

被害者側の人間である私が聞かねばならぬ道理はない。

「さて、次は古着屋ですね。案内をお願いします。」

なにはともあれ、まずは仕事をするために必要なものを揃えなくては。

ドレスは論外だが、神官服でだってギルドの仕事には向いているとは言えないのだから。

何故ここでの選択肢が古着屋なのかと言うと、この世界、まだ既製服と言うものがほとんど存在しない。

新品の服を買おうとすれば、布を買って自分で仕立てるか、仕立て屋に頼むかだけである。

となると、裁縫の腕がそれほどない人や、できれば早急に、或いは安く服を手に入れたい場合どうするか、そういった消費者のニーズに応えるのが古着屋である。

サイズとデザインの点で問題がないわけではないが、そもそも作業着として買うのだから今回に限っては問題ない。

こういった知識を私に与えてくれたのは、目の前の残念な美形ではなく、私の生活面での世話をしてくれていた女中さん？の一人である。

生きていく上で重要な知識はほとんどその人から教えてもらった。

エメラ：姉さん、本当にありがとう。

私のほうが年上なのに、思いつき子ども扱いされた上、お姉ちゃんと呼ぶ事を強要されたけど、それでも貴方には感謝してます。

勿論、流石にお姉ちゃんとはいえなくて、姉さんで妥協してもらったわけだけれど……。

因みに、この後の買い物で彼が全く役に立たなかったことをここに明記しておく。

そもそも古着屋の場所すら分らないとか……。

これだから箱入り育ちの坊っちゃんは……。

呆れ返った私の声を聞き届けたものはなかった。

エメラさんにお勧めの店の名前を聞いておいて本当に良かった。

町の人に尋ねながら漸くたどり着いたのが子供服専門店だったのはやっぱりちよっと凹んだけれど。

子供って、成長が早いからお古はこうしてよく売られるらしく、利用者も大人以上に多いんだってね。

お陰で良いものが揃いました。

明日から、頑張るぞー！！

安かったし、色々おまけしてもらったのでそれなりの量の子供服と、他にも色々と必要になるだろうと思われる小物類を抱えて日没ちよっと前に神殿に帰りついた。

なんか、今日はとっても精神的に疲れる一日だった気がする……。

夕飯もお風呂もそこそこに、今夜もまたさっさと寝床にもぐりこむ。木戸を閉めた窓からは外の様子は分らない。

私は明日のことを思い、まぶたを閉じた。

それでは、皆さんお休みなさい。

第1章 (4) (後書き)

お陰さまで、昨日の段階でPV2000アクセス、ユニークアクセス500人を超えました。

これからも頑張りますので宜しくお願いします。

第1章 (5) (前書き)

なにやら街で噂になってるようです。

第1章 (5)

「それでは行って来ます。」

いってらっしゃいやら気をつけて、頑張って来いといった多くの言葉に見送られて神殿を出た。

何で、こんな事になったんだろう？

早めの朝食を食べ、いざ出発と思ったら何故か大勢の神殿職員たちが玄關に集まっていたのだ。

神殿の朝は早い。

夜明け前の薄明に鳴らされる一の鐘の前に半数の神官は既に起床しており、日の出と共に二の鐘が鳴らされると神殿に住む全ての人が活動を開始する。

三の鐘が鳴る頃には食事も終えて、皆仕事を始めているのが常である。

私は今日から初仕事言う事もあり一の鐘で起きて、二の鐘が鳴る前には食事を終えた。

それから神官服から作業着に着替えるなど準備を整えて出て来たとはいっても、三の鐘は鳴っていない。

まだ仕事を始める時間ではないとは言え、この時間は食事をしたり身嗜みを整えたり、それが終わっていたとしても自分のために使える数少ない貴重な時間である事は変わらない。

なのに、何でこんなに出て来るんだ。

多分、神殿に住む人たちの3割以上はいる。

……特に神官長、あなたは今日は三の鐘からどっかの貴族だかとの急ぎの面会があるからゆっくり食事も出来やしないとか昨夜愚痴ってなかったか？

こんなところに来るくらいならゆっくり食事してれば良いのに。

最初は皆で集まって何をしているのかと思ったけれど、それがすぐに私を見送るためのものと気付いて何とも言えない気持ちになった。

この世界の神は嫌いだし、出来るものなら殺してしまいたいくらいには憎んでいる。

それでも、私のことを特別な目で見てくることに苦手意識は抱いていても、ここの人達のことまで嫌っているわけではないのだ。

何より一宿一飯以上の恩がある。

私への期待は正直言って逃げ出したいくらいに重すぎるけれど、彼らが私を心配してくれている気持ちもまた嘘ではないのだ。

神への憎しみだけでそれらを無碍にする事もまた、私には出来ない。

そう、たとえそれが、まるで”初めてのお遣い”を見守るかのような生暖かいモノだったとしても……。

神官長なんて、ちっちゃい子にするみたいに私の頭撫でていきやがった……。

やっぱりこの人たち、私が成人だってことちゃんと認識してないだろう……！

昨日は神官と辿った道を一人歩く。

今日は堅苦しい神官服ではなく昨日買った綿のようなもので出来た丈夫で動きやすい服だ。

街の人たちと着ている物はそう変わらない筈だし、浮いて見えることない筈……である。

今日は昨日みたいにキラキラしい派手な目印も傍にいない。
なのはどうしてこんなに声を掛けられるんだ!?

「マレビトさん」「今日が初仕事なんだって?」「頑張れよ」「頑張ってるね、ちっちゃいマレビトさん」

市の客があらかた掃け、店仕舞いをしているおじさんやおばさんたち、市帰りの街の人たち。

私はただ、神殿からギルドへ向かう大通りの隅っこを歩いただけだ。なのに皆が皆、私に声を掛けていく。

ビックリしたら、店仕舞いを終えた八百屋のおじさんがこれを食べて仕事を頑張るな、とプラムのようなネクターリンのような果物をくれた。

ありがとう、と言うと美味かったら鼻屑にしてくれ、と去っていった。

うん、商売上手なおじさんだ。

その後も、次から次へと声を掛けられ昨日は15分ほどで着いた道のりを30分以上掛けて進むことになった。

……早めに出て来て良かった。

ギルドに着く頃には微妙に疲労困憊気味に、少なかった筈の手荷物は倍以上になっていた。

けれど、漸くギルド到着しこれで終わりかと思われた受難はまだ続くのだった。

まず、第一の難関はギルドの重厚な扉だった。

昨日は神官が開けてくれが今日は一人だ。

この扉、巨大な一枚板で作られており、尚且つ鉄によって補強されている。

つまり、分厚い・デカイ・重い上に、こちらの人々の成人男性が用

いる事を前提とされているために取っ手の位置が丁度私の顔の辺りと高く掴みにくいのだ。

かと言って、ドアノッカーもまた高いのでこちらは背伸びをしても届きもしない。

とりあえず、扉そのものを叩いてみたが：ただ手が痛いだけだった。まさかこんな事になるなんて思いもしなかった。

ああ、情けない、意気揚々と出てきながら、職場にたどり着くことすら出来ないなんて。

そうやって暫く全体重を掛けて扉を引いてみたり、痛いのを我慢して再び叩いてみたりと奮闘したものの開くわけもなく、これはもう早朝である事を省みずに大声を出すしかないのかと悄然としていたところに堪え切れなくなった様な重低音の笑い声が響いた。

流石の私もこれには思わずキレそうになる。

苦労しているのに気付いたのなら、さっさと開けてくれればいいものを。

というか、いつの間に人が来ていたんだ？

ギルドの入り口は大通りからちよつと奥に入った所にあり、人通りが極端に少なくなる。

特に、ギルドに登録している人たちが出てくるのはもっと遅い時間と聞いていたので人がそばにいる事にも全く気付かなかったのだ。

誰かいたなら、すぐにでも手伝ってもらったものを。

開かない扉に向かって奮闘していた姿を見られていたと言う恥かしさもあり、ちよつと、否かなり恨みがましい目でもって振り返った。多分にそれは逆恨みの心持であったが。

わお。

ふぁんたじー。

そこには爆笑する熊がいた。

否、熊に似た何かがいた。

多分、所謂ヒト族に属する人間ではない……と思う。

ギルドの入り口は階段になっていて、その上に私は立っているのだが、相手は道路に立っているというのに尚見上げねばならぬ身長、全体的に筋肉質な重圧的な体、毛深……ではなく動物そのものといった感じの黒々とした毛並みに覆われた熊と虎と狼を足したり掛けたり割ったりしたような頭部、手はヒトに似た五本指で、爪は鋭いかどうかや肉球はないように見える。

神殿にはいなかったけれど、この人は恐らく話に聞く獣人という種族なのだろう。

彼？は一頻り笑い終えると、啞然として見上げていた私の傍にやってきた。

ホントにデカイ。

3 m……はないかもしれないが確実に2.5 mはあるはずだ。

「お前が新たなマレビトか、笑ってしまつて悪かった。あまりにも可愛らしく見えたのでな。まるで子供の遣いの様だ。」

子供の遣い……やはりそのように見えるのか。

なんだか、もうここまで来ると一々気にするのも馬鹿馬鹿しくなってくる。

そりゃ、これだけデカイ種族から見れば私なんて子供もいいところだろう。

実際、今は若返っているのだから。

成長が止まった後も今と5センチも身長は変わなかった事などこの人たちは知らないのだ。

それに、ここまできると最早コンプレックスを抱くとかどうとかと

言う次元じゃない気がする。

とりあえず、相手は私のことを知っているようだったからちゃんと挨拶をすることにした。

ここにいると言う事はこのヒトもギルドのヒトなのだろうし。

「はじめまして、既にご存知のようですが”渡り人”のアトルディアです。タキと呼んでください。」

タキ、と言うのは予てより考えておいた通り名である。

本名の滝根から取った。

アトルディアも滝の意味があるし丁度良いだろうと思ったのだ。

実際のところは分らないが、意外と私が滝に落とされたのもこの名前の影響もあったんじゃないかなんて思っていたりもする。

因みに、滝と言ってしまふと滝と勝手に自動翻訳されてしまうのだが、日本語がもつ同音異義、同字多義の特性のお陰なのか、音だけで”たき”と発音する事も可能だったりする。

まあ、どちらで呼ばれても私には特に意識していない限りは”たき”と聞こえるのだから問題はない。

「話に聞いたとおりの人間のようだな。私はエルトダム。見ての通りの獣人だ。普段よくいるのは郊外のギルド支部だがいずれ共に働く事もあるかも知れん。宜しく頼む。」

笑われたときから感じてはいたが、なかなかの良いお声の持ち主のようだ。

すぐには思い当たらないが、こういう声の声優さんがいたらきつと売れるだろう。

それは兎も角、一体どんな話を聞いたんだ？

きつと、街の人も同じ話を聞いたのだろうか。

「どんな話を聞いたのかは知りませんが……こちらこそ、宜しくお願ひします。エルトダムさん。」

「何、中に入ればすぐに分るさ。さて少し離れろ。扉を開けてやろう。」

「あ、ありがとうございます?」

中に入れば分るって何さ?

「ああ、そうだ。私のことはドムで良いぞ、タキ。さん付けされるのはむず痒い。」

「…分りました。」

ん? ドム?? 真っ黒いでっかい熊さんの名前がドム!?

しかもさつき日が射したとき気がついたけど、微妙にこの毛並み紫がかってるよ。

まさか三兄弟だったりしないよね……。

もしそうだったら、今は何とか堪えてる笑いを堪えきる自信はない、と断言しよう!!

私が一生懸命笑いを堪えてるなんてつゆ知らず（もしかしたら気付いているのかもしれないが、そんなそぶりは見られなかった）、エルトダムさんは私が全体重を掛けても開けられなかった扉を片手どころか指2本で軽々と開けた。

第1章 (5) (後書き)

ギルドまでたどり着きませんでした。
そして、ファンタジーの定番、獣人さんが登場です！

第1章 (6) (前書き)

熊さんは気配りの人。

第1章 (6)

扉一枚隔てただけのギルドの中は物凄い熱気に包まれていた。昨日の閑散としていた様が嘘のようだ。

人、亜人^{ひと}、獣人^{ひと}、人外^{ひと}、かなり広めだった筈の室内を埋め尽くすようにヒトで溢れかえっている。

皆さん私よりはるかに身長が高いものだから、窓口が……見えない。えーと、これは一体どんな状況なんでしょう？

何となく、予想はつかなくもないんですが、ちょっと逃げ出したい気分です。

誰かがエルトダムさんの後ろにいる私に気付き、声を上げた。

それは次々に連鎖していき、とてつもない大きな歓声に膨れ上がった。

歓声にまぎれて「ちっちゃー」とか「かわいいー」とか、中には「見えねー」と嘆く声なども色々と聞こえてくる。

その中に「もえー」「これがごうほうりというものかっ」「かわいいはせいぎ」とか言う声も入っていたような気がするが、これは絶対気のせいだろう、そうに違いない、そうであってくれ。

いくら過去に日本人がいたからって……まさかね？

ニホンが誇る変態因子が異世界まで侵食したなんてことは………全て気のせいだ、空耳に違いない。

たまたま、耳慣れた日本語として脳が変な誤変換を引き起こしただけに違いない。

単語によっては微妙に自動翻訳ではなかったような気がしたのも気のせいだ……。

どれほど気のせいだと言い聞かせても、この熱気のせいだけでなく、その言葉の内容に腰が引けてしまったのだけけれど。

私の前に立ちふさがり、壁となっていてくれたエルトダムさんは、思わず後ずさりそうになった私に気がつく、一歩だけ前に足を踏み出した。

そして、深く息を吸い込むと……。

吼えた。

まさにこれぞ鶴の一声。

一瞬にして辺りは静まり返る。

エルトダムさんが更に一歩踏み込むと、モーゼが海を割ったように一直線に窓口周辺に向けて道が出来た。

奥のほうで「ぐえ」だとか「ぎゃあ」「死ぬ」というくぐもった声が聞こえたような気がしたけれど、とりあえず気にしない方が良さだろう。

「仕事のために来たんだろう？」

と言うエルトダムさんに無言で首を縦に振ると彼に続いて窓口へと向かう。

得体の知れない静寂の中、特に響いている訳でもない私の足音だけがよく聞こえた。

窓口に着くと、朝一だというのになんだか疲れたような顔のお姉さん（実年齢で言うなら同年代だろうけど、この際もうそれは気にしない）と目が合った。

気持ちはとっても良く分るよ、と目線だけで返す。

私もなんか今の段階でもう疲れ気味だよ、これから初仕事が待っているというのに。

昨日と同じように背伸びをしてると一瞬の浮遊感の後、お姉さんと目線が合った。

うん、斜めに視線が交差するんじゃないくて、目の高さがお姉さんと一緒になったのだ。

後方から無声音のどよめきが聞こえた。

君たちは騒ぐか黙るかどっちかにしようよね、ビミョーにウザイから。

とりあえず、現状把握、と。

えーと……もしかしくなくても、抱っこされてますよね？

抱き上げるんじゃないくて、小さい子を椅子に座らせるときみたいに後ろから両腕の下に手を差し込まれて持ち上げられているような感じ……っぽい。

私の後ろに立っていて、そんなことを軽々と言えそうなヒトは多分、一人しかいなかったはずだ。

誰かが瞬間異動でもしてこない限り。

つまり犯人(?)は……お前だ!!

何をしてらっしゃるんですか、エルトダムさん??

真意を問いただそうと、私も持ち上げている腕の主を見上げてみれば、

「この方が楽だろう？」

ええ、まあそうですね。

色々と削られていつているような気がしますよ、主に精神的な何か

が。
今度から折りたたみの踏み台でも持つてくることにしようかな、そういうものがこちらにあるかどうかは別として。

そんな考えも頭をよぎる。

ええ、既に脳内は現実逃避始めてますけど何か？

とりあえず、気にしたところで始まらないので、そのまま窓口のお姉さんと話をする。

お姉さんはちらちらと私の斜め上の方を気にしていたけれど、先程以上の言葉は言わなさそうなエルトダムさんと全然気にしてない私を見て、自分も気にしないことに決めたらしい。

さすがにそこは荒くれ者を普段相手にしている窓口業務のお姉さん、切り替えれば仕事は速い。

まず渡されたのはドッグタグのようなもの。

これが所謂ギルド証になるらしい。

チェーン付だったので無くさないように早速首にかける。

このチェーンは呪い付きで、強化されているから滅多に切れることはなく、また引っ張られて装着者の首が絞められるということもないのだそうだ。

地味で目立たないけど実用的で便利な能力付与だと思う。

見ても何も分らないけど。

一見しただけでは何の変哲もないただのチェーンだ。

魔法使いは初見で呪いの類を見抜く目を持つと聞いたが、どうやら私にその手の才能はないらしい。

若干そのことを残念に思いながら、ついでとばかりに、元々ない方だった上に今では完全にぺったんこになってしまった胸で揺れているギルド証に目をやる。

ギルド証自体はまさに形がドッグタグそのもので、例の切り欠きもあったりする。

やっぱりこれって、用途はアレだよな？

気になるけど聞かないでおこう。

なんか最近私、そんなのばかりだな……。

このいい加減さが異世界で生きていくための条件の一つなのかもしれない。

そんなこんなで然程時間もかからず、昨日聞いた説明を軽くおぼろし、依頼主のお宅の場所と行き方、約束の時間などを再確認すると窓口での手続きは終了した。

すると静かに床に足が着く。

それなりにすぐ済んだとは言え、ちょっとした時間子供一人を抱えていたとは思えないくらい全く疲れが見えないエルトダムさん。

本当、この世界のひとと私では基礎的の身体能力がまるで違うようだ。神様もなんで私なんかをこの世界に連れてこようと思ったのか。

まあ、それは兎も角御礼をしなくては。

彼がいなければ、窓口に辿りつくことすらきつと出来なかっただろうから。

「ドムさん、ありがとうございました。」

一礼して見上げるとドムさんは苦笑いをしていた。

「気にするな、私も後ろの連中とそう変わりはない。」

どういう意味だろうか、と思い最初に彼が言っていた言葉を思い出す。

「通常使うギルドは郊外だ」と確か彼は言っていた。

つまり、彼もまた私^{マレイト}見学を目的とした野次馬の一人であったと言う事か。

それがたまたまギルドに来てみたら、その見物対象がドアの前で四苦八苦していたと……。

でも、まあ。

「助けてくれた事には変わりありませんから。」

それと、もし良ければこれ食べてください。

ここに来るまでに街の人たちから貰ったんですけど、私一人では食べきれないので。

お礼として受け取ってもらえれば嬉しいです。」

神殿を出たときに比べて倍近くに膨らんでしまったバッグから大きな果物を一つ手渡す。

エルトダムさんは苦笑いしつつも受け取ってくれた。

自分も野次馬目的で着たことにちよつと気まずさがあったらしい。そして更にいくつかの果物を取り出して窓口の台にも置く。

「皆さんもどうぞ。どうやら私のせいでご迷惑をおかけしてしまつたようですから。」

私が主導したわけではないが、どう考えてもこの事態は私が原因だろうし、これは完全な営業妨害だろう。

ならばせめて少しでもお詫びをせねばなるまいと思ったのだが。

「あら、気にしないでいいのに。」

彼らが早い時間に大勢で来てついとばかりに依頼を受けていたから今日の午前中の仕事はもうないのよ。」

とお姉さん。

後ろから「仕事とらなきゃここに居座るなって言ったのは誰だよ」とか言う声が聞こえてくる。

なるほど、ではいつもなら七の鐘がなる頃（凡そ正午）までに終わるかどうか、と言う仕事が三の鐘が過ぎた時点で済んでしまったと言う事か。

それならそんなに気にする事もなかったかな、とも思うけれど、逆に考えれば通常3時間以上かけて行われる仕事が2時間かからずに終わってしまった、しかも全ての依頼が無くなったと言う事はいつも以上のスピードでいつも以上の分量を捌くべく窓口は稼動していたと言う事になる。

そりゃ、最初にあったときに疲れた顔をしていたのも道理である。

「やっぱり、私にも一因があるようなので是非受け取ってください。」

「そう？ではありがたくいただく事にするわ。」

更に美容に良いと言われ手渡された小さな果物も一つ一緒に渡す。
それが見えたのかお姉さんはちょっと嬉しそうだった。
是非それを食べて疲れを癒してください。

さて、後は仕事先に向かうだけなのだが……。

さっきから相変わらずこちらを見つめてくる大量の視線……これを
一体どうしよう？

第1章 (6) (後書き)

次の難関は、何かおかしなテンションになってるギルド員たち？

昨日、累計ユニークアクセスが1,000人を超えました。
皆さん、本当にありがとうございます。

第1章 (7) (前書き)

さて、彼らはただの野次馬か、それとも…？

第1章 (7)

考えてみたところで始まらない、と言う事で。

とりあえず、まずは様子見。

エルトダムさんの後ろからこっそりと覗き込む。

……なんか、物凄い数の視線が。

振り向くまでもなく感じていたそれらを直接見るのは、ちょっとどころでなく怖い。

知らず、エルトダムさんの外套を握り締めていた手に力が入る。

すると、ぽんと軽く頭に何かが載った。

聞こえてきた「お前ばかりずるい」という声に、それがエルトダムさんの手であることに気付く。

ああ、やっぱり肉球はないんだなあ、と思いのほか毛の薄いその掌を眺めていたら、何となく恐怖が薄れた。

ふと、彼の言葉を思い出す。

そういえばこの人も私を見に来たんだと言っていたっけ。

つまり、ここにいるのは皆エルトダムさんと同じような人。

エルトダムさんは恐くない。

なら、きつとこの人たちも怖くない筈だ。

最初に見た姿が爆笑している姿だったからか、何故かエルトダムさんは恐くなかった。

身長なんて私の倍以上あるし、外見からすればこの中にいる誰よりも恐そうなんだけどね。

だから、勇気を出して一步踏み出す。

この人たちは今日から私の仕事仲間になる人たち。

怖いことなんて何もない。

これは新入社員が先輩方にする挨拶と同じようなもの。

結局地球では出来ないままだったけれど。

昨日だって、短かったけどちゃんと挨拶できたんだから。

昨日のは多分に、ちよつと驚かしてやれ、という気持ちが多かった訳だけれど。

それでも、昨日できた事は今日も出来るはず、状況はちよつと……

否、人数も状況も大分違うけど、やるべき事は一緒だろう。

まずは一礼。

さあ、行こう！

「はじめまして。

挨拶が遅くなり申し訳ありません。

昨日、本ギルドの一員になりました”渡り人”アトルディアです。

」

言葉を挟む隙を与えず一気に続ける。

「名前からも分るように、先日このエグザーダナの街の北西に位置する滝、アトルディアに落とされました。

出身は地球の日本です。

読み書き計算は得意ですが、いまだ特殊能力は分っていません。

ここに来てまだ日も浅く、私に出来る仕事も少ないと思いますし、まだまだ未熟者です。

皆様にご迷惑をおかけする事もあると思いますが、どうぞ宜しく願いたいします。」

ちゃんと、皆最後まで静かに聞いていてくれた。

顔をあげるとただの好奇心の塊と言った表情だったのが、だいぶ穏やかな感じになっていた。

その上、皆、何故かうれしそうに笑っている。

私が不思議そうに彼らを見渡していると、誰からともなく発せられた言葉が重なりあい、一つの言葉を紡ぎだした。

「ようこそアトルディア、俺達のギルドに。」

笑顔とともに発せられた言葉に、何かが解けていくような気がした。似たような事は神殿でも言われていた筈なのに、どうしてか今、心が温かった。

ああ、私の考えは間違っていなかったんだ。

彼らは、ただ私のことを知りたいだけだったのだ。

決して、私を傷付けるために押しかけたのではなく、私を迎え入れるために皆集まってくれたのだ。

そう気付いたら、作り笑いではなく、思わず自分の表情も緩んだのがわかった。

いきなり神様によって誘拐されて、訳の分らない状況に晒されて、多分、今まで私はこの世界の人たちを素直に見ることが出来ずにいたんだろう。

ここに来るまでの道のりでも困惑しか私にはなかった。

この1週間はほとんど神殿からも出してもらえず、言葉で説明はされて知識としては分った気になっていたけれど、全く自分の状況がどうなっているのか実感が持てないままだった。

神殿の人々は当然ながら神様よりの人だから尚の事。

今なら、少しは素直に彼らとも接する事が出来るかもしれない、とそう思った。

尤も、私の後見になったあの青年とはやっぱりウマが合いそうにないけど。

アレは……なんと言うか、その、暑苦しい……。

その後は質疑応答。

自己紹介は、いずれ個別にという事になった。

どこに住んでいるのか、といったことや、地球では何時代にいたのかなど、中には日本に住んでいたのなら聖地に行ったことはあるか、という質問まで。

日本の聖地ってどこだ…？

驚かれたのは年齢。

若返った事も、成人したともいっていたが、こちらと日本で成人年齢が違う事をすっかり忘れていたためだ。

彼らはどうも私が成人と入っても、成人したての12歳だと思っていたようだ。

…10歳もサバを読むつもりはないのだけれど。

まあ、そんな風に一応和やかに時間は過ぎてゆき、そろそろ依頼先に向かわねば、と言うときになって問題が起きた。

多くのギルド員が私を送っていくといって聞かなかったからだ。

それを解決したのはエルトダムさんと窓口のお姐さんだった。

「どうやら今日はここにはもう仕事がないようだしな。ついでだ、私が送っていこう。」

困り果てた私に提案をしたのはエルトダムさん。

すかさず、

「お前ばかりずるい」「ロリコンめ」「俺だって話したいのに」

などと言う抗議が起きるも、エルトダムさんが吼えるまでもなく、それらは窓口のお姉さんの一言で沈静化した。

「あんた達はさっさと仕事に向かいな！」

ドスの聞いた、お腹に響く声でした。

……そうだね。

ギルドなんて荒くれ者たちが自然と多くなるような職場の窓口業務を勤めるお姉さんが、唯の綺麗なだけの人なわけがなかった。

今度から、心の中では姐さんと呼ばせてもらおう。

「ドムさん、今日はどうもありがとうございました。

とても助かりました。」

あれからエルトダムさんに送られて、依頼主の家の前に到着した。市は終わったし、街のお店が開くにはもう暫くあるからか、それとも歩いたのが大通りではなかったからか、朝とは打って変わって街の中は人通りが少なかった。

それでも、少ない人々が私達の方を眺めてくるだけで誰も話しかけてこなかったのは、きつとエルトダムさんのお陰に違いない。

「いや、こちらとしても噂の”マレビット様”と話せて、良い話の種類が出来た。

きつと皆手薬煉引いて待っている事だろう。」

そういえば、忘れがちだけどこの人も野次馬に来たんだったけ。皆、ってことは郊外のギルドの人たちの代表だったのかな？

「あははは……あんまり、変な噂は広げないでくださいね？」

「善処しよう。」

見聞きしたことだけを話すことは誓えるが、その後どう尾鰭がつくかまでは分らないからな。」

「それで構いません、宜しくお願いします。」

約束の時間である四の鐘はまだ鳴っていない。

でも恐らくもうすぐの筈だ。

今朝初めて会ったばかりのヒトだと言うの、とても名残惜しい気がした。

けれどそれもここでおしまい。

私はじれから仕事で、エルトダムさんも馴染みのギルド支部へ行けば仕事があるのだろう。

だから、今日はこれでお別れ。

でも、同じ街に住んでいるのだから、きっとまた会う日が来るに違いない。

だからにっこりと笑って伝える。

「また、お会いしましょう。」

エルトダムさん。」

「そうだな、また合おう。タキIIアトルディア。」

まだ、この人にしか名乗っていない名で読んでくれる。

きっと、その意味には気付いていないだろうけど。

「ええ。」

それじゃあ、また。」

「ではな。」

静かにエルトダムさんが去っていく。

一緒に歩いていたときも思ってたけれど、本当に静かに歩く人だ。

エルトダムさん。

彼は知らないだろうけど、こちらの世界に来て初めて私から名乗った人。

そして、多分神殿の人以外で、最も一緒にいた時間が長い人。

貴方はどう思っているか知りませんが、私の中で貴方はこの世界での一番最初の友達に決定しました。

また会う日までどうか、お元気で。

そのときを楽しみにしています。

再びにぎやかになり始めた街の雑踏に消えていくエルトダムさんの姿が完全に見えなくなった頃、四の鐘が鳴り響いた。

さて、お仕事に行きますか！

第1章 (7) (後書き)

皆久々のマレビトに興味津々、と言うことでした。
漸く次回からお仕事です。

昨夜、総合評価が100ptを超え、小説を読もう！日間ランキングBEST100にランクインしました。
お気に入り登録してくださった方、評価をしてくださった方、本当にありがとうございます。

第1章 (8) (前書き)

漸くお仕事です。

第1章 (8)

依頼主の家はこの街のどこにでもありそうな普通の家だった。

ギルドや神殿と違って木造2階建の一軒家だ。

門扉や前庭などのようなものはなく、道に直接玄関が接している。

この家のノッカーには手が届くことはエルトダムさんと一緒にいたときに確認済みだ。

爪先立ちで背伸びをしながら戸を叩く。

……返事がない。

もう一度叩く。

今度は少し強めに。

しかし、返事はない。

あれ、場所を間違えたか？

エルトダムさんにも確認してもらったのだからそんなことはないと思うのだが。

念のため、と思い表札の番地と名前を確認する。

二の左街二の北小路三の西小路四

ハルディア

間違いない。

この街は碁盤目上に形成されており、町の真ん中にある神殿を中心にその西側を左街、東側を右街と呼ぶ。

南北では三つの街に分かれ、北側を一の街、真ん中を二の街、南側を三の街と呼ぶ。

後は家がある区画に面した道路によって指定している。

道路の名前は町の中心を十字に貫く、南北の神宮大路、東西の神宮大路の2本を中心に、神宮大路の南北、神殿大路の東西にそれぞれ一から六の小路が平行している。

依頼主のハルディアさんの家は西側の二の街、神殿大路から二本目、神宮大路から三本目の小路に面した区画の4番目の家、という事になる。

因みに、この住所表記、区画を表すとおりの名前が座標になっているので、実は〇〇街という部分は書かなくても十分通じたりする。それでも書くのは、その方がイメージ的に分りやすいのと、もはや慣習となってしまうているかららしい。

まあ、こんな感じに分りやすい住所表記となっているので郵便事情はとても良かったりする。

車もないというのに国内なら1週間以内に届くというのだから凄い話だ。

閑話休題。

大体同じ区画内で同じ仮名を付ける人というのはいないから、例えばギルドから貰った住所が間違っていたとしてもハルディアの名を表札に掲げる家が近所にあるとも思えないので確かにここであっているんだろう。

さて、どうしたものか。

とりあえずもう一度叩いて、声を出して呼んでみよう。

それほど大きくもない木造家屋なのだから、きっと呼べば聞こえる筈だ。

それでいなければ隣近所に聞くのも有りだろう。

そもそもこの世界、日本のように時間に厳粛というわけではないのだから。

それでは深呼吸して、

「おはようご——」

「あらあら、もういらしてたの？」

——ザイマス…、えっと、ハルディアさん？」

大きな声で呼ぼうとした所で、後ろから朗らかな声がかかった。

尻すぼみになった朝の挨拶の後、念のために誰何しつつ振り返った。

そこにはどこかのんびりとした雰囲気、買い物袋を抱えたおばあさんが一人立っていた。

なんか、今日はこんなばっかりか、私。

「ハルディアさん、これは？」

「ああ、それは抜かずにそのままにしておいて。

それと、その隣のは移植したいから、根の周りの土ごと深めに取って頂戴。」

「はい。」

現在絶賛庭弄り中です。

庭のベンチに座るハルディアさんの指示に従いつつ、雑草は抜き、必要なら花の移植などをしています。

土いじりにはリラックス効果があると以前何かで読んだことがあったけれど、確かにこれは楽しい。

まだ然程強くない日差しは暑すぎることはなく、時折吹き抜ける風が涼しく、心地良かった。

本当、気持ちいいなあ。

仕事で来てるのでなければ、このまま草の上で寝てしまいたいくらい。

よくよく考えれば、このところ緊張のし通しで心が休まる時なんて全くなかったのだ。

ずっと鬱屈とした思いを抱えていた事を考えると、なんだか自分でもおかしいなと思うくらい今の気持ちはすっきりしているが、もしかしたらこれも神とやらいじった結果なのかもしれない。

その事に苛立ちを覚えてもいいはずだったが、一度消えた暗い感情は早々に復帰する事もなく、どうせなるようにしかならないのだから仕方がない、と割り切った。

色々と考えながらも手は動かし、それに合わせるようにハルディアさんは次々と指示を出していった。

「あ、その花はその場所のままでいいから、花を全部摘んで頂戴。摘めばすぐにまた新しい芽が出てくるのよ。」

摘んだ花は美味しいお茶になるから、後で淹れて上げるわね。」

「楽しみにしてます。」

赤いコスモスのような色をした、うつすらと透き通る薄い花びらの花を摘んでいく。

枯れかけの花は抜いた雑草と一緒にし、新鮮な花だけを選び集める。まるでイチゴか桃のような甘い香りのする花だ。

ハルディアさんに言われて生のまま一つ食べてみたら、香りに反して酸味の強い花だった。

仄かに甘みも感じるが、香りで期待していた分、肩透かしを食ったような感じだ。

でも、このお茶なら味は期待できそうだ。

野外での仕事なので途中途中に水分補給挟みながら作業を続けること3時間ばかり。

こちらの時間で言うなら二刻あまり、七の鐘が鳴り昼の休憩を取る事になった。

食事のお供は早速ハルディアさんが淹れてくれたルータの花茶だ。

「あら、それじゃあ、貴方が噂のマレビトさんだったのね。

こんな仕事頼んじやって悪かったかしら。」

「いえいえ、私は何の力もありませんし、この体ですから荒事には向いていません。」

寧ろこういった仕事があって有り難いくらいです。」

「そう？

それなら良かったわ。」

「ええ、なので今後とも宜しくお願いします。」

ハルディアさんの依頼、それは年をとってあまり体が聞かなくなっただから、荒れ始めていた家の庭をきれいにしたい、というものだった。

ギルドの方にはそういった事情は一切書かれておらず、内容も草むしりだけ書かれていたけれど。

ハルディアさんは息子さんがひとり立ちしてからはずっと長い事一人暮らしをしているそうだ。

それでも今までは何とかやってこれたけれど、昨年足を怪我してからは無理もきかず、それでギルドに頼みに来たらしい。

ギルドではこういった街の人のちょっとした困りごとを受け付けている。

内容の微妙な食い違いは時折起きるそうで、街中での命に関わる事はまずない仕事だと特にその傾向が強いとか。

荒事になったギルド員からしてみれば、草むしりも庭整理もそう違いはないのかもしれない。

とは言っても、今日ギルドであつたような屈強な大人たちは、普段はより報酬が高く、その分危険度も高い依頼を中心にこなしているわけで、こういった街の困りごとを主に処理する人々はまた別の層なのだという。

大概それは、社会経験の一環、或いは小遣い稼ぎとしてバイト感覚でこなす成人したての少年であることが多いとのこと。

私もある意味ではその一人と言える。

他には、暇を持て余した主婦などがちょっとしたヘソクリ目当てでやる事もあるらしい。

ハルディアさんが朝いなかったのは、てっきり今回もそういう子供が来るのだと思ってお菓子を買いに行っていたんだとか。

確かにその年頃の男子はよく食べるしなあ、と思いながら聞いていたら、帰ってきたら随分と幼い子供がいてビックリしたと言われ、再び何とも言い難い思いを味わった。

体が子供になってしまったことをすっかり認識していても、やはり子供と言われる事には未だ抵抗があつた。

そうそう、ハルディアさんは私がマレビトだといさっきまで気付いていなかったらしい。

一応最初に自己紹介はしたのだが、「渡り人」とは名乗らなかつたので、随分ちっちゃい子が来たな、位にしか思っていなかつたのだそう。

朝市に出会った人々はすぐに私にマレビトと声を掛けてきたので、もしかしたら街中に認知されているんじゃないかなと思うていたのだが、どうやらそれは少しばかり自意識過剰だったようだ。

神殿が用意してくれたお弁当と、今朝貰った果物を食べて、昼食は

終わり。

果物はハルディアさんと半分にした。

仕事に来てもらっているのに、と遠慮気味だったが、それでもまだバッグの中に沢山残っているそれを見て、そういうことなら、と美味しそうに食べていた。

やっぱり食事は誰かと一緒にのほうが楽しいと思う。

八の鐘が鳴ったら作業再開ということで、暫しのんびりとお茶を飲みながらおしゃべりを楽しんだ。

かつては街で教師をしていた事もあったと言うハルディアさんの話は、分りやすくそして興味深いものばかりだった。

私の名前にもなった精霊アトルディアの由来や、精霊や神の加護の効能など、その話は尽きなかった。

午後の仕事はひとまず雑草抜き。

午前中に教えてもらった抜いても良い草をただ只管に抜いていく。

中には雑草だけれど薬効があると言う蓬やハーブのようなものもあるって、それは別なところを選び分けておいた。

それにしてもこの植物たちは繁殖力旺盛だな、と思いながら作業を続けているとハルディアさんが苦笑いした。

「本当なら悪い事ではないのだけれど、植物が良く育ちすぎちゃうのよね。」

私も水霊の加護を受けているから。」

これがお昼に教えてもらった精霊の加護の効能の表れなのだという。水霊の加護を持つ者は何かを育てるのに向いているそう。

どうやら、それは同じく水霊のかごを持つらしい私にも言えることらしく、よくよく見てみれば午前中に抜いた雑草が萎れることもな

くまだ青々としていた。

このまま放置したら、もしかしたら明日の朝には根付いたりしてるんじゃないだろうかと言う考えが頭を過ぎったが、まあ、それは考えすぎと言うものだろう。

やがて太陽が傾き、いくつかの月が昇り始めた頃、一先ず今日の作業は終わりと言う事になった。

ハルディアさんの家の庭はとても広い。

何でも、このあたりの家の二軒分の土地に家と庭を造っているとの事で、庭の広さは普通の家のほぼ1.5倍だ。

その広い庭に様々な植物が生い茂り、ちょっとした混沌^{カオス}状態になっている。

今日、手を入れたところはきれいになったが、まだ八割方が荒れたままだ。

一応、以前は花壇や畑だったんだろうなという区分けは何となく分るようになったものの、まだまだ色々な種類が入り混じり、この整理に一体何日かかるのか、と言った感じだ。

まあ、期限付きの依頼じゃないから数日かかっても問題はない、報酬額は決まっているから結果的に時給換算すると安くなってしまいうというだけのことで。

この分だと、今週いっぱい掛かるかもしれないと予測しつつ、ハルディアさんの話も面白いし、それもありかなと思いつながら家路を辿った。

途中ギルドに立ち寄り経過報告——するもしないもギルド員の自由だが、報・連・相は重要だ、どんな仕事であれ、有ると無しとでは印象ががらりと変わる——を済ませ、神殿へと戻る。

久々の肉体労働で疲れた体は、何よりも休息を望んでいた。

仕事を始める事にした当初の目論見どおり、というかそんなことも

何も思い浮かばないままに私の意識は闇に解けた。
こうして、私の異世界における社会人生活の第一日は幕を下ろしたのである。

第1章 (8) (後書き)

お仕事はまだ続きます。

第1章 (9)

初仕事開始から5日目。

今日もギルドへ寄ってからハルディアさんの家へと向かう。

初日のちょっとした騒動を知った神官がギルド本部までついて来るといふ過保護振りを示すのも、ハルディアさんの家までギルドの誰かが送ってくれるのも恒例となりつつある。

尤も、街の人も慣れたようで、神官が憑いて（変換ミスではない）いようと屈強なギルド員が傍にいようと全く臆することなく私に話しかけてくるようになった。

まあ、いくらギルド員が厳ついとは言っても街の人たちは直接的であれ間接的であれ彼らに助けられているということもあり、一瞬の躊躇はあれど、慣れればそれは障害足りえなくなった。

それでも彼らがいれば、街の人たちに囲まれて立ち往生するようなことにはならず済むので、初日と比べると効果は薄まったとは言え、私にとっては十分な助けになっていた。

彼らとしても、この時間を私と^{トビレ}かわりを持つ貴重な時間と捉えているようだ。

今までに現れたマレビトには^{のち}後にギルドで活躍した人も多かったと聞くから、今のうちに睡付けとこうみたいな心境なのかもしれない。初日にあれだけ集まっていたのも、そういう意味合いが強かったのだろうと思う。

このお朝の送迎（？）の独占は禁止だとかで、今後の当番も決まっているらしい。

つまり、ハルディアさんのところでの仕事が終わっても、暫くの間は私がギルドの仕事を請けるたびに誰かしらがついて来るといふことになるらしい。

私としても彼らとの交流は、神殿以外のヒトの目から見たこの世界

を知る良い機会なので悪い事ではないと思っている。

神殿から当分の間は離れられない身にすれば、ギルド員と仕事の依頼主だけが交流の持てる一般人であるといえる。

果たしてギルド員を一般人と言って良いかは分らないが、少なくとも神官や貴族と比べれば神から縁遠い人々だろう。

朝の僅かな時間では大概は彼らの自己紹介に終始してしまうとは言え、意外にお喋りな彼らが聞かせてくれる街の話が面白いのも悪くないと思う理由の一つだ。

たった4日の間でも、ハルディアさんがかつて教職に就いていたとか、その頃は怒らせると怖い鬼教師だったとか——実感がたつぷり籠っていたのは、恐らくそれを教えてくれた彼自身が当時ハルディアさんに絞られた一人だったからなのだろう——、私の後見でもあるあの神官はこの街に来てまだ間もないと言うのに街の女性陣から既に観賞用として認識されているらしいと言う話、エルトダムさんはこの街だけでなく、隣国にまで名の知られた戦士であるとか、どこで聞いてくるのか○○の商店——プライバシーに関わるので伏字にさせて貰う——の店主は実は鬘なのだとか、街のどこかに精霊のたむろする場所があるらしいとか、その内容は多岐に渡る。

中には買物物は毎月何日が安くてお勧めだとか、何処の店の料理が安くて美味いとか、街のお役立ち情報まであったくらいだ。

彼らの話をまとめればあつという間にタウン情報誌の1冊でも出来上がりそうだ。

情報の内容は玉石混交、たまにガセ入り、だとしても。

そんな話を聞きながら、時折質問を交えつつ、街の人にも挨拶をしながら今日もハルディアさんの家に無事に着いた。

これから街の外へと仕事に行くのだと言うギルド員を見送り、急いで庭へと向かった。

庭に着くと、ハルディアさんは既に外に出ていた。

荒れ放題だった庭も今はもう庭兼畑と辛うじて呼べる程度にまでは回復している。

雑草がなくなるだけでこんなにも雰囲気は変わるものかと、昨日までの筋肉痛に苦しめられた日々を思う。

ただ只管雑草を抜き、刈り、使えるものを選別していく、大変だったけれどその甲斐はあったなと感じる。

雑草と呼ばれる中にも薬効がする者が混ざっていると教えられたのは一日目。

選り分けておいたそれらは、ハルディアさんの手によって軒下いっぱいには吊るされた。

その薬草が作り出す木陰を抜けながらに葉の奥へと向かった。

「おはようございます、ハルさん」

いつものように庭の奥にある日当たりの良いお気に入りのベンチに腰掛けていたハルディアさんに声を掛けた。

ハルディアさんのことをハルさんと呼ぶようになったのは二日目以降の事だ。

天候か季節の話をしていたときだったか、日本でも主に春を意味するハルと言う名前は昔からあるポピュラーな名だと教えたら、是非そう呼んで欲しいと楽しげに言われたからだ。

「おはよう、タキ。

今日はちよつと早いね。」

まだ四の鐘が鳴る前に来た私にハルディアさんは微笑む。

ハルディアさんをハルさんと呼ぶようになったとき、私もタキと呼

んでくれるように頼んだ。

彼女との付き合いを今回限りで終わらせてしまうにはあまりに勿体無いと思ったからだ。

まだ聞いていないのだが、この仕事が終わってもたまに遊びに来て良いか尋ねてみるつもりだ。

かつて教師だったからなのか、それともただ単にそういう性格なのか、彼女は惜しむことなく多くの知識を私に与えてくれる。

それは作業中のことだったり、休憩中のことだったり。

一つの分野に囚われない広い知識は大いに私の好奇心を刺激した。もしかしたら既に、神殿で学んだ内容以上のことをハルディアさんから教わったかもしれない。

ハルディアさんはどう思っているか分らないけれど、できればこれから付き合いを続けていければ良いな、と思う。

暖かな朝の日差しを浴びながら、今日の作業の予定について雑談を交えつつ話をする。

一応の流れが決まった頃、四の鐘の音が響いた。

「それじゃあ、早速始めましょうか。」

「はい！」

水霊の加護がある者はそうでない者より生物をより上手に育てられると聞いたのは初日の事。

他の精霊の事なら兎も角、私自身水霊の加護を持つらしいのに、何で教えてくれなかったのだろうとと思っていたのだが、実は、後になって聞いてみたところ最初の1週間のときに神官がその事も教えてくれていたらしい。

あの1週間は精神状態が不安定だった自覚が今ではあるので、聞き逃すか覚えられなかったのだろう。

改めて聞きなおすついでにと精霊の加護について詳しい説明を求めたら、教えてくれた。

色々細かい蒔蓄まで話し始めそうだったので、とりあえず気になっていた土や光の精霊の加護では植物は上手く育てられないのかという点だけ聞いてみた。

植物の性質を知っていれば、植物の成長に水が大きく関わっているのは理解できる。

それなら、土や光の精霊の加護を持つ者も同じような特性があるのだろうか、と考えるのは当然の事だと思う。

結果として、やはり私の想像は間違っていなかった。

水に限らず全ての精霊、火や風、闇の精霊の加護でもうまく使えば生育は促進されるとの事。

ただ、それなりに条件もあるから大抵の場所で有効視されるのが水の精霊の加護なのだと言っていた。

例えるなら、極寒の地でなら火霊の加護はより有効に作用するだろうが、砂漠では悪化させるだけ、と言う事だ。

逆に言えば、水霊の加護だって氷点下の極寒の地や焼け石に水的な火山ではろくに効果は出ないと言う事だ。

それでも、精霊の中で水は天も地も廻るという特性から、特に汎用性が高く応用が利きやすいのだそうだ。

まあ、とにかく精霊の加護の効能というのは使い方次第、なのだと彼は言っていた。

そして今日、ハルディアさんに教えてもらったのは、まさにその実践版とでも言うべきものだった。

他の精霊の加護でもやり方次第で植物の栽培に貢献できるということとは、水霊の加護も工夫すれば更なる効果を発揮すると言える。

ハルディアさんが教えてくれたのはその手法だった。

水霊の加護を最大限に活かす植え方、というものがあるのだそうだ。苗を植えるにしても種を植えるにしても、少し気をつけるだけで収穫が格段に変わるらしい。

ハルディアさんの実演を見、細かな指導を受けながらその動きをなぞるように植えていく。

精霊の姿を直に見れるのなら楽に出来る様になるらしいが、残念ながら私は精霊が見れない。

だから、上手くいったのかも私には分らなかったのだが、どうやら移植作業自体も水霊の加護の増幅(?)も無事に終わったらしい。日本にいた頃には全く庭弄りなんてしたことなかった私には、比較対象がないのでどの程度の違いがあるのか全く分らなかったけれど。

「いずれ精霊の姿を見られるようになったらきつと分るわ。」

ハルディアさんはそう言って笑う。

いまだ精霊の存在を確信できていない私に、本当にそんな日が来るのだろうか、と思わずこぼせば、心配は要らないといわれた。

「あなたは、あの”アトルディア”の加護をもつのだから」

と。

それはどういう意味かと再度聞いてみても、いずれ分るから、と答えを貰う事はなかった。

この時、こうしてはぐらかされた事が、私が精霊に関心を抱くことになる一番の切欠だったのかもしれないと、後になって私は思った。

ハルディアさんと過ごす数日間はとても楽しいものだったけれど、

どんなものにも終わりは来る。

仕事を始めて6日目。

丁度一週間たったその日で、ハルディアさんからの依頼は終了した。見違えるようにきれいになった庭でハルディアさんは満足そうに笑っていた。

だから、ちょっと図々しいかなとは思ってたけれど、今度は仕事としてではなく、遊びに来て構わないだろうかと聞いてみた。

「こんなおばあちゃんところで良いのなら、是非遊びに来て頂戴。いつでも歓迎するわ。」

ハルディアさんは嬉しそうにそう言ってくれた。

帰り際、ハルディアさんはこれも持っていきなさい、あれもあったわ、と作業中に刈り取って干しておいた薬草数種やハーブティー、その他色々なものを持たせてくれた。

別れの言葉は「さようなら」ではなく、「また来て頂戴」。

「必ず、また来ます。」

そう告げて、ハルディアさんの家を後にした。

ギルドへ戻り報告をして依頼は完了、受け取った報酬は一分銀4枚。大体2〜3日分の生活費に相当する。

宿に泊まろうと思ったら、丁度1食付で二泊分だ。

6日働いて2日の生活費……。

神殿に住み込みでなければこの給料ではやっていけそうもないなあ、と改めて目標の遠さを再認識する。

それでも、初めてこの世界で自分で働いて得た報酬はとても嬉しいものだった。

第1章 (9) (後書き)

残り1話で第1章は終了予定です。

その後何話か短めの幕間を挟んで第2章に入ります。

あくまで予定は未定ですが。

追記

修正しました。

やっぱり寝不足の頭で書いたまま確認もせずに更新するべきではないですねorz

誤字脱字を発見しましたら、報告していただけると助かります。

第1章 (10)

異世界へ落とされて2週間と1日が経過した。

2週間と言っても、これはこちらでの数え方なので、地球の数え方でならまだ13日間だ。

半月も経っていない。

その割りには、慣れたかな、とは思う。

いつ帰れるのか、そもそも帰ることが可能なのかすら分らないけれど。

神殿の外に出るようになってから1週間、これをもうと言うかまだと言うかは人によるだろう。

ギルドの仕事をしてみたし、知り合いもできた。

その中で分ったのは、私が何も知らないということ。

当たり前の事だけれど、この世界のことを、私は何も知らない。

私に分っているのは、神が実在する世界だと言う事だけ。

その事を自覚したとき、「渡り人」が1週間という本当に短い期間で安全な庇護下から放り出させれるのはこのためだったのか、と気が付いた。

頭で認識するだけでなく、しっかり心でも受け止めなければ、人は前に進めないのだ。

なまじ下手に前の世界の知識が使えてしまうから、新たに覚えなくても生きていけてしまうから、神殿や王宮のどこかに閉じこもっていたらきつと気付かないまま、忘れてしまっていた。

忘れてしまえば、孤独ではなくなるから。

でも、そうなったたら、きつと私は遠からず病んでいただろう。

今なら”まだ”全部始まったばかりだと私は思う。
私は、変わることが出来る。

果たしてこれが、ヒト種に限るものなのか、それとも他の「渡り人」にとってもそうなのかは分からないけれど、少なくとも私にとってはこの期間は最適だったと言えるのだろう。

一月もたてば、甘えてしまう以外何も出来なくなってしまう自覚はあった。

でも、多分それだけではすまなかったはずだ。

私は、きつと、この世界を見ることも拒否したに違いない。

自分が変わることを、拒否してしまっただろう。

生まれ育った慣れ親しんだ世界から一人切り離されてしまった事を受け入れたくなくて。

それは多分、生きる事を拒否する事でもあったはずだ。

停滞した命は死んだも同じだから。

私は、これからこの世界で生きていく。

いつか地球に帰るためにも。

私は、生きなきゃいけないんだ。

生きると言うのは、ただ命を繋ぐ事だけを意味しているのではない、とよく地球にいる頃耳にした。

本当に、そのとおりだと思う。

この世界での成人は12歳なのだという。

それは一人立ちの年を踰しているのではなく、自ら責任のある選択が出来るようになる年なのだという。

私も、そう在ろう、そう在れる様努力しよう。

自らの目で見、耳で聞き、多くのヒトと関わり合って、色んなものを受け入れて、それらを消化して、自分の意思で選択して行こう。

それが多分生きると言う事であり、私が目指していた自立すると言う事なのだと思うから。

第1章 (10) (後書き)

今回は短いです。

もしかしたら今後長くする事があるかもしれませんが。

これで第1章は一応終わりとなります。

第2章 (1)

ハルディアさんの依頼から2週間、私は非常に大きな問題に直面していた。

仕事は至って順調である。

この2週間、いくつかの似たような家事手伝いの依頼をこなす日々が続いた。

草むしりはちよつと体力的にきつかったから室内作業の掃除洗濯とか、或いは半日の子守を3日間とか。

どの仕事でも自分の体力の無さを痛感させられてばかりではあったが、依頼主の期待には十分に応えることが出来たと思う。

ま、依頼内容以上にマレビトの加護なるものを期待されていたような気もするけれど、それはそれで仕方が無い事なのだろう。

地球でだって、もしも目に見える形で神の奇跡の体現があったとすれば、そのご利益にあやかろうという人はいるだろうから。

ギルドの人たちによる依頼先までの付き添いは今も続いている。

そのお陰もあってか、主に本部で仕事を斡旋して貰っている人たちとは顔馴染みになった。

何故か、声をかけてくるのは皆「まさに冒険者」と言ったような感じの、難易度の高い依頼を専門にこなしている人ばかりだったりするので、仕事はほとんど被らない訳だが。

仕事が被っている、この辺りに住んでいる年若いギルド員とはほとんど顔を会わせる事が無かったりする。

時々、出会うことがあってもすぐに逃げられてしまう。

理由が分らないので困惑するばかりだ。

現状では静観を貫いているが：その内こちらから働きかけをしたほうが良いのだろうか。

因みに、私が初仕事をした日に一気に消えた依頼書だが、ハルディアさんの依頼を終える頃にはほぼ同じ量まで、否、寧ろそれ以上に増えていた。

しかも、全て街中の、家事手伝いを中心とした単純な仕事ばかりだ。マレビトが仕事に来るかもしれない、と依頼に来る人が殺到したらしい。

尤も、本当に人手を要するもの以外の依頼は断られたとのことだが。エグザードナ地区におけるギルド本部の本来の役割は地区内の統括と各支部では対応しかねる依頼の受付、及び本部がある二の街左区からの依頼の受付なのだが、どうも管轄外の区域からの依頼も多かったらしく、それらの依頼は担当地域の支部に割り振られたそうだった。初仕事の朝のギルドでの騒動もそうだが、自分が直接引き起こした事ではないとは言え、その原因となったことは否めず、業務外の仕事を増やしてしまった事は日本人としては心苦しい限りだ。

かと言って謝ってどうにかなるような事でもなし、私自身に出来ることと言えば仕事を誠心誠意頑張るだけだ。

まあ、そういう理由もあって、当分の間は仕事に困らずに済みそうなことは確かである。

そんなわけで、仕事関係には問題はない。

では神殿関係か、と言われれば、そちらは神官が相変わらずちょっとしつこいくらいで変わりはない。

そう、問題は仕事でも神殿関係でもない。

もっと基本的なところに大きな問題が存在していた。

話は変わるが、この国には公の休日と言う概念がない。

勤め人なら定められた日に。

自営業なら休みたいときに休むと言うのが基本である。

暦があり、月や週が定められているが、地球のように日曜日は休み、

と言う考えはない。

6日間で世界を作り7日目に休んだと言う神がいなくてどこか、今尚他の世界から問答無用で拉致を繰り返すような神しくないのだから仕方がない。

そう考えると、嘘か本当かは別として、ユダヤ、キリスト、イスラムの神って案外優秀だったんだな、と思う。

まあ、実際には地球を作った神々も初期には異世界からの拉致を繰り返していたらしいが。

聞くところによれば、その名残がムーやらレムリア、アトランティスと言った消えた超古代文明の伝説となったんだとか。話が逸れた。

とにかく、この世界、この国では暦は定期的な市の開催日や季節の移り変わりの目安にされるくらいでしかないのだ。

これは長年、週休制の元で暮らしていた私にとっては驚きであり、最も馴染みのない習慣の一つだった。

で、まあ何が問題となっているかと言えば。

想像して欲しい。

例えば、急な転勤で海外へ、それも所謂後進国と呼ばれる国へ行く事になったとしよう。

そしてそこで休日もなく一ヶ月肉体労働に従事する事になったとしたら？

さて、日頃から運動など特にしてこなかったインドア派と言う名の出不精な人間はどうなるか。

しかも、体は子供、体力も当然子供並みでしかない。

さあ、ここまで言えば、もう答えは言うまでもないだろう。

私は過労によって療養を余儀なくされていた。

KAROSHIが日本人特有の現象だっていうの、何となく分ったような気がする。

何も、異世界に来てまで、しかもブラック企業に勤めてるわけでもないのに、ぶっ倒れるまで働く事は無いでしょうよ、私……。

不安を紛らわすために仕事に没頭するなんて、なんて素晴らしいワーカーホリック振りだろう。

第2章 (1) (後書き)

閑話を挟む予定だったけれど変更。
もしかしたら途中で入れるかも。

第2章 (2)

「こんな状態で仕事へ行かせるわけにはいきません。」

頭ごなしに否定の言葉を投げかけるは、一月経とうが経つまいが未だに良好な関係を築くに至っていない神官である。

まあ、過労で発熱、絶賛療養中の身では言い返す権利など欠片もない。

心配してくれているだろうことは分るのだが、どうもこの人とはウマが合わないのか素直に受け取れない。

日本にいた頃はこんなにコミュニケーションで苦勞した覚えは無いんだけどな。

「……せめて仕事に行けないことだけでも伝えに行きたいのですが。」

「受注していた依頼は昨日で終わったのでしょう？」

ギルドの仕事は基本的に個人の裁量に任せられます。

継続中の依頼がないのであれば、仕事をしない日に何かを伝える必要はありません。」

確かに間違いではない、が……。

「いえ、そこは日本人として連絡を怠るのは……。

今まで休み無しでしたからギルドの人も待っているでしょうし。

今日は、熱砂の風の方が送ってくださる事になっていたんです。

砂蟲退治に向かう道がてら……。」

先に言ったように、ギルド員が私を依頼主の元まで送ってくれと

言うのは朝の恒例となっている。

それは日替わりで、次は誰、と言う事が既に決まっているのだ。本部を中心に活動しているのは私のような近場の家事手伝い派の他は難易度の高い依頼を請ける上級者ばかりである。

彼らは一度依頼を受けると数日街に戻らない事も多い。だから既に私を送る当番が決まっており、それがあるからこそ今まで休みを取りにくかったと言う事もないわけではない。

荒野のオアシス的な街であるエグザードナは街とその周囲の森から離れば周りは岩砂漠となる。

交易都市であるこの街にとって街道の安全は何にも変えがたいものであり、それを脅かす魔物の存在には早急な対処が求められる。

熱砂の風は主に岩砂漠での魔物の狩りを中心に行っている集団だ。彼らは街道沿いに出没を始めた砂蟲を狩りに行くのだ。

そういう上級のギルド員が何故自分と関わりを持つとうとするのか、それが一種の願掛けや験担ぎであるようだと思付いていただけに、体調不良だからと連絡もしないのは気が引けた。

「……では早文を送っておきましょう。」

神官が溜息をつき、妥協案を提示する。

もとよりまともに動ける体でない事を自覚してはいたので特に反対することなく同意した。

「……すみません。お手数をおかけします。」

「少しでも反省の気持ちがあるのならば、今後は御身を労わり下さい。」

以前は大人の体だったのでしょうが、現在は幼子と変わらないと

いうことをお忘れなく。」

「肝に銘じます。」

どんな理由があろうとも、自分の体調を省みなかったのは私の落ち度だということは否定できない。

神官の嫌味も甘んじて受け入れた。

神官はそれ以上何かを言うこともなく、静かに部屋を出て行った。

悪い人ではない。

今だって、ほとんど足音を立てることもなく、扉の開閉の音にも気をつける、気配りの人なのだ。

なのに、どうしてこうもウマが合わないのだろう。

一人部屋に残され、うつらうつらとしているうちにいつの間にか眠ってしまっていたのか、気付けば傍にエメラさんがいた。

「起こしてしまいましたか？」

「……私、寝てましたか？」

聞くまでもなく、彼女が入ってきた事にも気付かなかったのだから寝ていたのだろうけど。

案の定、エメラさんの答えは肯定だった。

「僅かに。」

「まだ四半刻も過ぎてはおりませんよ。」

「そう、ですか。」

1刻は1時間半から2時間だから、どうやら20分程度眠っていたらしい。

エメラさんは静かな声で続ける。

「ナイル様から伝言です。」

熱砂の風の皆様を中庭までお通しするそうです。」

「え、と?」

その意味の把握に少し時間がかかった。

この部屋は中庭に面している、と言う事は……。

「部屋までお通しする事は出来ませんが、窓越しならばお話は出来ますよ。」

「……ありがとうございます、エメラ…姉さん」

うっかりさん付けで呼ぼうとしてしまって慌てて姉さんと続ける。

どういうわけか、この人は私に姉と呼んで欲しがるのだ。

下手にエメラさんなどと呼ぼうものなら他人行儀だと悲しまれるので要注意だ。

他人行儀も何も他人なのだが、まあ一番世話になってる人であるのは確かなので出来れば悲しませたくはないな、という思いはある。なんにせよ、今回は気付かれずに済んだらしい。

「はい、どういたしまして。」

でも、お礼はナイル様にもなさって下さいね。」

あの方が一番気に掛けて下さっているのですから、と言うエメラさんに思わずナイルって誰だっけ、と考えてしまう。

えーと、ナイル、ナイル……ああ、あの神官か。

そういえばそんな名前だったような気が。

名前で呼ばないからすっかり忘れていた。

「分かりました。」

そう答えると、エメラさんは微笑んで静かに隣の部屋へと向かって行った。

私の居室は1階にある。

それって防犯上どうなの、と思わないでもなかったが、そこは神が直接的な効力を持って実在する世界、神殿や王宮といった場所はそもそもが神力とやらが満ち溢れている場所で、そこに害意持つ存在は侵入することは出来ないらしい。

神力とはこの世界に存在する全てをあまねく慈しむ力だとかで、王宮や神殿だから加護があるのではなく、その力を悪用されたりしないためにその力が多くある場所に神殿や王宮を建てたのだと言う。

王族はその力を国中に拡散させることが仕事の一つだそうで、だからこそ国中に離宮が散らばっているし、同様にその力を濃いままに人々のために役立てることを旨としているのが神殿であり、こちらも同様に国中に散らばっている。

その神力溜まり、通称聖域に建てられているのが離宮か神殿かは各々の土地によるらしい。

更にそれ以外にも例外的な神力溜まりとして精霊や神が直接守護する土地があり、私たち”渡り人”にとっては関わり深いんだけど、それについてはまた別の機会に。

これら三つの聖域が一ヶ所に集中し、一つの町を形成しているエグ

ザーダナはアウトラーシエンのみならず、世界的にも珍しいそうだが、他の国どころか他の町すら知らない私にはまだピンとこない話だ。

居室の位置に関する話から大分話は逸れてしまったが、そんな訳で1階でも安全性は確保されているとのことだ。

日本ではアパートでもマンションでも借りるなら2階以上が望ましい、とされていたが、何とも便利な話である。

こちらでも聖域外の土地では同じようなものらしいけれど。

そう考えれば、防犯関連に気を取られずに住む神殿内に住めるというのは利点の方が大きいかもしれない。

まあ、2階以上に住むというのは防犯だけに限った話ではなくて、害虫関係も被害が少なくて済むという利点があったわけだけれど、そもそもこの国、蚊やらGの付く生き物とかを見かけだことがない。日本にいた頃だってGは滅多に遭遇した事なかったから——と言うかアパートを借りて一人暮らしをするまで本当にそれを見たことが無かったのだけれど、そう言うとなぜか学友たちにはあり得ない、と言われたりもした——可笑しくないのかもしれないけれど、日本ほど衛生観念が発達していないこの世界で見かけないということは、そもそも存在していないのかもしれない。

この世界に来て1ヶ月、初夏に荷か気候しか知らないから、まだはつきりとした事は分らないけれど。

もしかしたらこれから現れたりするのもかもしれない、要観察事項だ。本当、この世界は分らないことだらけだ。

とにかく、そんなわけで体力の乏しい私としては喜ばしいことに、1階の広い居室でそれなりの生活を送らせてもらっているわけだ。因みに寢室の他に応接間ともう一部屋を使わせて貰っている。

寢室だけで、日本で私が学生時代に住んでいたアパートの1室を越える広さがある、というのはある意味でトリップものの典型例と言

えるかも知れない。

そんなとこばかり典型例に倣うより、どうせならチートな身体と能力が私は欲しかった……。

せめて過労で倒れたりしない程度で良いから。

こんな部屋に住みながら、バイトみたいな仕事でちまちま稼ぐ私って何なんだろうと思ってしまわなくもない。

私の場合は半ば強制だったけど、こんな生活を続けたら自立する意志が挫かれるというのは納得の話だ。

どのくらいここで生活することになるか分からないけれど、出ていくときになって私は本当に大丈夫なのだろうかと余計な心配までしてしまう。

あくまで仮宿なのだから、あまりこの環境に慣れ過ぎてしまわないように気を付けなければいけないだろう。

話は戻るが、先ほどエメラさんが言っていた中庭に寢室の窓は面している。

部屋に熱砂の風のメンバーを通すことは出来ないが、窓越しなら話しても良い、というのは神官からの最大限の譲歩なのだろう。

私が住むこの区画は神殿の中でも奥に属す、そもそもが人の出入りを制限されている場所なのだから、本当に譲歩してくれたのだとよく分かる。

勿論、ここが聖域であることと、熱砂の風の面々の信用があつてのことだろうが。

彼らが来るまでの間もエメラさんは私の傍について色々と気を利かせてくれた。

濡れタオルを用意してくれたり、飲み物を用意してくれたり。

こちらが悪いと思ってしまうくらいにお世話になった。

快復したら、何かお礼をしたいと思う。

第2章 (2) (後書き)

そういえば、怪我でなく体調崩す主人公ってあまりいないよな、と思っ
て書いてたらこんな回に。

異世界に行くというとてもないストレッサーにも負けないチート
主人公たちの身体が本気で羨ましいです。

誤字・脱字等ありましたら、報告していただけると嬉しいです。

第2章 (3)

熱砂の風の面々がやってきたのはそれから間もないことだった。

「よう、嬢ちゃん。

元気にしてるか？」

にへら、と笑ってやってきた赤毛のヒト種がリーダー格のフェルデイモータ。

二つ名は“烈風”。

折角の渋い美形なのに表情がそれを台無しにしていることを本人は気づいているのだろうか。

「元気じゃないから見舞いに来てるんでしょう？」

にこやかに即座につっこみを入れたのは、その補佐を務めるヴェディエツド。

黄緑がかった金髪に、オークの肌、深い新緑の瞳の美人さんだ。
なのに何故だかその笑顔が恐ろしい。

「ごめんねえ、タキちゃん。

このヒト、阿呆で。」

そう言いながら、片手でフェルにアイアンクローをかましているようにとも、そして例え被害者が悶絶していようとも、美人さんは美人さんである。

こちらもヒト型種だけれど、彼女は通称森の人、樹精人と呼ばれる種族だ。

人の姿をしているけれど、彼女の本質は“歩く木”である。

彼女、とは呼んでいるものの実質的には彼でもあり彼女でもある。出るとこは出て、引っ込むべきところは引っ込んだ素晴らしいナイスバディな彼女に勘違いするヒト種の男は後を絶たないらしいが。この世界の全ての生き物が、他の世界から連れて来られた生き物の末裔と言われているが、一族の記憶を引き継ぎ続けるという彼らによれば、その祖先は元の世界ではまさしく歩く木ドリアードだったらしい。

こちらの世界で進化した結果現在の姿になったわけではなく、この世界に連れて来られたときに姿を作り替えられたのだとか。

気付いたら知らない世界にいて、人の姿になっていたの、なんて言うんだから、傍迷惑な誘拐魔な神様だがドリアードをヒト化とかその能力は本当にスゴい。

ただ若返らされただけの私でも困惑したのだから、おそらく当時の樹精人たちの困惑ぶりは相当なものだったろうと思うのだが、「ちよっとは吃驚したけどね、動き易くなって良かったよ」の一言で済ませられてしまった。

精神の有り様がどうやら私たちとは違うみたいだ。

熱砂の風の中で、一番最初に親しくなったのが彼女だ。

外見が厳つくないと言う理由から親しくなったというわけではなく、どちらかと言うと私が懐かれた、という方が正しい。

未だに自覚はないのだが、高位の水霊の加護を持つ私の側は、本性が植物な彼女にとっては居心地が良いのだそうだ。

「そこ、夫婦漫才は他でやってください。

俺たちは見舞いに来てるんです、それも他の奴らの代表で。

ほら、タキだって呆れ返ってるでしょう。」

的確な指摘でフェルとヴェディエッドを止めたのはこれまた美形の青年、熱砂の風の中でも若手だが既に二つ名持ちである“旋風”のナジクだ。

因みに、フェルとヴェディエッドがそう言う関係というわけではな

い。

フェルには誰もが羨む美人の奥さん（このことに関しては詐欺だ、とかギルド内七不思議の一つとかの声がよく聞かれる）と外見だけは可愛らしいお子さんが数人いるし——直接知っているのは二番目の子供だけだが、誰に似たのか性格が悪い。フェルには言えないが、あんなのはクソガキで十分だろう。ムカつくので詳細は割愛——、一方でヴェディエッドは「今は恋愛の気分じゃないの」だそうだ。樹精人は寿命が主なヒト種の軽く10倍近くあるためか、それとも元が植物に近いからなのか特定の伴侶を得ることに関心が薄いらしい。

さて、ナジクは金髪碧眼の正統派の美形だ。

顔立ちから、鋭くなってしまうがちな雰囲気も気さくな性格のお陰で、普段は優しい兄ちゃんといった感じだ。

これには賛否両論あるらしいが、戦闘時の鋭い鋼のような雰囲気とのギャップがまた良いわ、というのが街のお姉サマ方の総意のようである。

こう思うとこの世界って本当、美形率高いかも。

これが神好みに手を入れられてる世界ってことなのか？

などと私が変な考えに耽っていると、ナジクから声がかかる。

「ずっと休まず働き続けてたんだって？

気付いてやれなくて悪かったな。」

年下の家族を見守るような優しげな目だ。

もっとも、私の方が実年齢は上なわけだけれど。

でも、日本とこの世界との年代別の精神年齢を比較すればこちらの世界の方が高い感じだから、あながち間違いでもないのかもしれない。

い。

「こちらこそすみません。

約束をしていたのに守れなくて。

しかも見舞いまで……ありがとうございます。」

「気にすんなよ。

むしろ謝るならこっちの方だ。

こんな小さい体で頑張ってたってのに、無理してることに気付かなかった。」

「それこそ気にしないでください。

これは自己責任です。」

「ばーか。

後進の面倒みるのが先人の役目だったの。

俺たちは大人のマレビトしか知らなかったから、つい同じように考えちゃってた。

お前も奴らと同じ様な規格外なんだ、ってな。

お前はまだこんなに小さいのになぁ。

だから、悪かった。」

「こちらこそ、心配かけてごめんなさい。」

「だから謝るな、っての。

まあ、何にせよ思ったよりは元気そうで何よりだ。」

「ところで、マレビトが規格外ってどういう意味です？

私、他のマレビトにあったことがないので全く知らないんです。」

先程のナジクの言葉に抱いた疑問をたずねる。

マレビトが規格外の存在だと言う話は聞いた覚えが無い。

「ん？それはな……。」

ナジクが答えようとしてくれたところに……

「ちょっとおお、何タキちゃん独り占めしてるのよ！！」

ヴェディエツトが、

「マレビトがいかに関格外かというとな……。」

フェルディモータが、割り込んでくる。

どうやらナジク曰くの夫婦漫才は終了したようだ……。

「あ、抜け駆けわずるいわよ、フェル」

いや、まだ続いているらしい。

「おいおい……。」

ナジクも最早止めることはせず呆れ返っている。

まあ、見舞いに来てこういうことをする人はあまりいないだろう。

うん、ナジク君は意外に苦労人……なのかも知れない。

この人たちを抑えるのは大変だろうから。

普段はこんなでも、戦闘になると別人のように変わると言うのだから人間って不思議だ。

街を離れて荒野にまで出るギルド員は総じて能力が高い。

その中でも、熱砂の面々は特に評価が高い一団だ。

人型種が多いグループとしてはこの辺りでは最強であるとも言われている。

因みに、人型種にこだわらないのであれば、最も強いと言われているのはエルトダムさんと、私はまだあったことが無い獣人の二人らしい。

「皆さま、そろそろお仕事に向かわれたらいかがですか？」

と、盛り上がり始めたところで、先ほどまで後ろに控えていたエメラさんがスツと前に出てくると、賑やかな一団を一撃で沈めた。気付けば、三の鐘が鳴っている。

「おお、もうこんな時間か。」

「名残惜しいけど、戻らなくちゃ……。」

タキちゃん、この花を私だと思ってね。」

「ありがとうございます。」

樹精人である彼女が育てる植物は精霊の加護を持つ人間が育てるのはまた別の意味で質が高い。

何と言うべきかよく分からないが、生命力があるというか、瑞々しいのだ。

花は鮮やかに、そしてよく香る。

そちらを専門にすれば良いのに、とも思うのだけれど、彼女が言うには同族は売り物にするものではないとのことらしい。

頼まれれば譲りもするが、それだけだ。

そういう姿勢もまた彼女の花が人気の理由のひとつなのかもしれない。

「ヴェディエツドの花はきれいで良い匂いだからとても好きです。」

わざわざ見舞いのたまにもって来てくれたのだろう花は、優しい匂いがした。

「ああ、もう、なんて可愛いの！」

何が良いかったのか感極まっている彼女に後ろからフェルの声がかかる。

「おい、ほらもう行くぞ。」

「他の皆にもありがとうって伝えてください。
頑張って来てくださいね。」

「おう、嬢ちゃんも早く元気になれよ。」

「俺たちが帰ってくることは元気な姿を見せてくれよ。」

「それじゃ、またね。」

タキちゃん。」

「はい、皆さんお気を付けて。」

やがて彼らが庭木の陰に消え、姿が見えなくなると静かにエメラさんは窓を閉めた。

窓の向うをそれでも見続ける私に静かに声がかかる。

「大丈夫ですか？」

「バレましたか。」

実を言えば途中から起きているのが少し辛くなっていたのだが、エメラさんにはやはりばれていたらしい。

「無理はなさらないで下さい、と申しましたでしょうか？」

「ごめんなさい。」

でも、止めないでくれてありがとうございます。」

「楽しかったですか？」

「はい。」

部屋に閉じこもっていても気分が腐る。

外の人と話す事は、私にとって大切な日課だった。

僅かな時間でも、それを叶えることができた事に感謝がいっぱいだ。

「では、少し休みましょう。」

まだ貴方には休息が必要です。

何か、必要な物がありますか？」

「いいえ、大丈夫です。」

たぶん、寝てれば治ります。」

「それでは、ゆっくりお休み下さい。」

「ありがとうございます、エメラ姉さん。」

静かだ。

神殿の奥には滅多に人が入ってくることはない。

耳にはいるのはただ、自分の呼吸音と、時折吹き込む風の音。

日本にいた頃には味わうことのなかった静寂。

24時間、いつだって、どこでだって人の動いている音がした。

車の排気音や走行音、電車の音や外から聞こえてくる人の声。

家の中だって、テレビやパソコン、音楽機器、何かの機械の電子音。意図的に音を出していないときだって、時計の針の音や待機中の家電から微かな音が聞こえていた。

狭い家では、他の部屋にいる家族の存在が感じ取れたし、一人暮らしの時も薄い壁の向こうの隣人の生活音が漏れ聞こえていた。

だから、こんな静けさを、私は知らない。

こうして一人で寝ていると、日本にいた頃を“思い出”す。

薄情なものだ。

あんなにも帰りたいと願っていたのに、否、今なお願っているというのに、それなのに、私はもう日本を“思い出”としてしてしまっている。

認めたくなかったことだが、こうして正面から向かい合わせられる機会が来たことによって、気付きたくなくても気付いてしまった。日本での生活が、送るべき日常ではなく、既にかつて送っていた日常になっているのだ。

これが、“渡り人”の“渡り人”たる所以なのだろう。

そんなことを夢現に考えているうちに、眠りはすぐに訪れた。

第2章 (3) (後書き)

月10話更新の予定でいたのにorz
お陰さまで学位論文が受理されて、めでたく修士課程修了と相成りました。

ま、とりあえず、今月は先月の分を取り戻すべく18話更新の予定
です。

それでは今後とも宜しくお願い致します。

(予定は未定なんですけどね)

誤字・脱字等ありましたら、報告していただけると嬉しいです。
批評・感想等もお待ちしています。

第2章 (4)

あれから5日経ち。

未だに私はベッドの中にいた。

医者もそういったし、私自身ただの過労と思っていたのだが、なかなか快復することなく今に至る。

夜はひたすら眠り続け、昼もまた時折り目が覚めるものの、食事やら生理現象やらを除けば眠っている時間のほうが多い。

起きている間も僅かな時間を除いて、どこか夢現と言った感じで意識がはつきりしない。

寧ろ、最初の日より悪くなっているような感じさえしてくる。

あまりに眠ってばかりいるので、まるで猫みたいだ、とも思う。

折角休んでいるのだからと少しは勉強でもしようと思ったところで、気付けば本を抱えたまま眠る、と言う事が幾度が続き、エメラさんによって本は取り上げられてしまった。

暇だ、と目が覚めている時間は思うものの、睡魔を感じることもなく、いつの間にかやらと言うよりは唐突に意識が落ちているようだ。

そして眠りと微睡みの間を行き来している。

見舞い客も数人訪れてくれたようだが、大体の場合において私は眠っていて、ろくに会うことすら出来ていなかった。

地球にいた頃は、健康であることが数少ない私の長所であり、風邪で寝込んだ記憶は小学生以来ないし、記憶にある限りインフルエンザにかかった事も無く、こんなことは初めてだ。

もしかして、これもまた”渡り人”としての特性なのだろうかと聞いてみたが、少なくともエメラさんが知る限りではそういうわけではないようだ。

そもそも、”渡り人”は強靱な体を持つのが常らしい。

それが、最初の日になジクが私に言おうとしていたマレビトの特殊

性のことらしい。

元の世界ではどうであろうと、大概の場合、この世界の常人とは比べ物にならないくらい能力を発揮するようだ。

それは、熟練の戦士が思わず規格外と言ってしまうほどのもの、トリップもののテンプレとも言えるチート仕様が”渡り人”のデフォルトラしい。

そう聞けば、規格外には程遠い、今の私の状況やそもそもの私の体力の無さはどういうことなんだ、と聞いてみたいのだが、”渡り人”についての詳しい生態？は高位の神官しか知らないのだと言う。しかも、”渡り人”は同じ場所から来たもの同士でもそれぞれ異なる特性を持つことはよくあるそうで、これがもしかしたら私にとつての特性の表れであるかもしれないし、それとも全く違う何かが原因なのかもしれないそうだ。

まあ、つまるところ、現状では何も分らないという事だ。

こんな時こそ奴の出番だろうと思うのだが、倒れた日に会ってから、彼と会う機会もまた得られないままだった。

正しくは、何度か彼も様子見に訪ねてきてくれていたらしいのだが、何とも間の悪い事にその度に私は眠っているらしい。

この場合、間が悪いのは私か彼か。

私の後見を勤めてくれているとはいえ、仮にも高位神官。

仕事も多いのだろうから、きっと間が悪いのは私なんだろう。

眠りと微睡みの合間の僅かな覚醒時間に、そんなような事を考えたり、話したりしながら時間は過ぎ、七日目の夜。

それまでは唐突に意識を落としては、微睡みの中からゆっくりと覚醒すると言う事を繰り返していたのとは異なり、唐突に明確に私は覚醒した。

あんなにも長引いていた体のだるさも熱もすっかりと消え、意識は

しっかりと冴え渡っていた。

ベッドからそろりと足を下ろしてみれば、ふらつく事も無く、1週間もほぼ寝たきりで過ごしたとは思えないくらいに体は軽い。

窓から見える空の色は暗い藍色で、まだ夜明けが遠い事が分る。

1週間も寝ていたからなのか、妙に体を動かしたい衝動に駆られて、朝まで我慢する事が出来ずに、私は初夏の夜の涼しい空気の中へとそっと足を踏み出した。

第2章 (4) (後書き)

今回短めです。

第2章 (5) (前書き)

この度の東北関東大震災により亡くなられた皆様のご冥福をお祈りすると共に、被害を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げます。一刻も早い救援・復興が成し遂げられる事を願います。

第2章 (5)

部屋の中に明かりは無かったけれど、窓から差し込む月明かりで十分だった。

窓を見上げれば、木立の合間から3つの月が覗いているのが見えた。外に出れば、他の4つの月も目に入る事だろう。

でも、寝室に面した窓から外へ出ることは出来ない。

私に宛がわれている部屋は3部屋の続き間だ。

これは保護されていた期間を過ぎ、ギルドに所属するようになっても変わっていない。

いずれ成長した暁には神殿の庇護の下を離れる私としてはあまり贅沢な生活に慣れたくないのだけれど――何せ、一番小さな部屋でさえ私が学生時代に借りていた1Kのアパートよりも広いのだ――、他の部屋に変えてもらう事は出来なかった。

部屋の構成は一番奥が寝室で、真ん中は居室、最初の部屋が客を迎えたりする応接室になっている。

庭に降りられるのは、応接間の窓に併設したテラスからだだけだ。

応接間に向かうため静かに寝室の扉を開ける。

隣の部屋には誰も居なかった。

ここ数日はエメラさんや他の侍女さんが隣室に控えていてくれることも多かったけれど、調子は良くなりつつあったから今夜は皆部屋に戻っていたらしい。

再びそおっと扉を開け、忍び足で応接間へ抜ける。

やはりこちらも無人だ。

それでも尚音を立てないように細心の注意を払い、外へと通じる大きな窓からテラスへと出た。

庭に面したテラスは結構広い。天気の良い日はそこでお茶なども飲めるようにと椅子とテーブルのセットなんかがおいてある。

生憎と、私は一度も使ったことは無いが。

そんな余裕が無かったのも事実だが、そもそもお茶会、と言う習慣に興味が無かったというのも大きな理由の一つだ。

残念ながら私がこの部屋を使うようになってから利用される機会に恵まれていないテラスだが、見晴らしはとても良い。

テラスの前だけは目隠しとしての木々はなく、庭園のような内庭を一望できるようになっている。

内庭、といっても学校のグラウンドよりも広いんじゃないかと言うくらいの規模だからやはり庭園と呼んで差し支えないのかもしれない。

こういったテラスや内庭に直接面した外廊下——と私は勝手に呼んでいる。恐らく景色を楽しむ為なのだろうが、庭に面した壁がなく、柱だけで支えられている場所がいくつか有る。晴天の日はともかく、悪天候の日や冬は寒いだけだろうと思うのだけれど、どうなんだろうか——の前には目隠しの木立はない。

しかし、その他の各々の住人の私室、たとえば寝室の前などには花などが自然な感じに植えられたちよつとした空間があるだけで、絶妙な配置をされた木々によってうまい具合に外からは中を窺えないようになっている。

外から中が窺えないということは、逆もまた真である。

そんな訳で私としてはありがたいことに、今の時間なら中庭に出たとしてもそうそう気付かれにくいようになっているのだ。

何となく、童心に返った気がしてわくわくしてくる。

気分はまるで親に隠れてっこそり夜中に家を抜け出す小中学生のようだ。

テラスの隅にある小さな階段から静かに庭へと足を下ろす。裸足に芝生のような若草が触れてくすぐったい。

でも、歩きにくい、というものではない。

裸足で庭を歩き回るだなんて、何年ぶりのことだろうか。

何だかここまできると小学校低学年か幼稚園生のようなものである。

少なくとも、今ぐらいの外見になっていた頃には既にそんなことは辞めていた気がする。

それが、本心からのものであったのか、それとも子供っぽいことはしないんだという精一杯の大人ぶった姿勢故だったのかまでは覚えていないけれど。

久々にやってみると、意外にも楽しい。

もし、変に大人ぶった結果として辞めていったのだとしたら、当時の私は随分ともったいないことをしていたのではないかとも思うのだけれど、それは大人になった今だからその思いであるのかもしれないなかった。

まあ、子供っぽいことをしたとしても、今でさえこの世界の人たちは私を子供扱いしているのだから、特に問題はないだろう。

地球にいた頃見たことのある月明かりと違って、他に光源が要らないくらいに異世界の月はしっかりと照らし出す。

数が多いからかもしれないが、不安を抱くような暗闇はここにはない。

地球のそれとは違い、原理すらも異なる月たちはこの世界の衛星ではないという。

そもそも、衛星だけでなく恒星というものも存在しないのだ。

太陽は太陽であり、星ではない。

昼の世界を照らし出す役目を負った他の何かであるらしい。

神が昼と夜とを分け、昼の世界に太陽を、夜の世界に月と星をと配した、魔法の力あふれるここはまさに神話の世界。

この先どう変わっていくかは分からないが、今はまだ確かに神代の理が息づく世界なのだと言えた。

そんな風に教えられたことをつらつらと思い返しながら、幾つもの

影を引き連れて、特に目的もなく庭を歩く。

当たり前のように付き従う影たちを見て、そういえば、と思い出す。月と酒を飲み影と共に躍ったのは李白であったか杜甫であったか。月と影と自分との三人で遊ぶと彼は歌ったが、この世界に来たのならばきつと驚いたことだろう。

多いときで月は7つ、そうすれば影も7つだ。

そこに自分も合わせれば総勢15人の大所帯だ。

とても静かな隠遁生活を送る歌にはならなかっただろう。

そう思うと自然と笑みがこぼれた。

それとも、九つに増えた太陽のうち八つを矢で打ち落としたという伝説の残る国の人だから、一つだけ残して六つの月も射落とそうと考えただろうか。

打ち落とした太陽はカラスだったと言うから、この世界の月を射落としたならば、落ちてくるのはウサギだろうか。

どちらにせよ、向こうの世界で1000年近くも前に死んだ人間がどう思うだろうかなど考えるだけ無駄なのだが、夜の庭園を散歩しながらそんな無駄な思考を繰り広げるのが楽しかった。

月明かりの元の世界は、昼と違った顔を見せ、それもまた目に楽しい。

昼間ははただ太陽に照らし出されるだけであつた多くの花々が、月明かりの元では自らも仄かに発光し、月明かりには劣るものの柔らかな光源となり地面を明るく映し出す。

光っているのは花だけではない。葉も茎も、木々の幹でさえも、更には庭の小径に敷き詰められた小石でさえも仄かな光を湛えている。まるで、幻想の世界にいるかのようだ。

もし辿り着けたとしてもアポロ着陸船もルナ・ローバーも何もない月は未だに好きになれそうになかったけれど、それでもこの景色は嫌いではないなと、素直にそう思えた。

裸足に小石の小径は痛いから、柔らかな芝生のような草地を歩く。後々バレたら怒られそうな気もするけれど、その時はその時だ。

特に目的もなくふらふらと歩いていたわけだけれど、ふと、庭の真ん中で一際明るい光を放っている石造りの東屋が目についた。

目に付いた、というか先程から視界には入っていたのだが、急に気になりだしたのだ。

まるでそこから誰かが見ているような。

夜光石で出来ている東屋は、それ自体が発する光故に、そこに人がいるかは逆によく分からなかった。

誰かに今までの行動を見られていたら、と思うと急に恥ずかしさが全面にでてくる。

実年齢で大人だと言い張っていたのに、まるでこれでは完全に子供そのものではないか。

誰にも見られていない一人だけの空間でなら、子供っぽいこととしてるなあと笑い混じりでありこそすれ、恥ずかしくも何ともなかった行いだが、人に見られていたのなら今すぐにでも穴を掘って埋まってしまうたいくらいの行いに感じる。

何が恥ずかしいのかは自分でもよく分からないけれど、まさしく私は恥の文化の国、日本の育ちである。

欧米人ならきつと、他人の目なんて気にもかけずに思うがままに行動できるのだろうが、恐らく多くの日本人がそうであるようにそれは私には無理な話だ。

このまま逃げ帰るのが一番良いのだろうが、万が一にでも知り合いで有れば後が気まずい。

この際ここは異世界なのだから、旅の恥はかき捨てだ——現状が旅といえるかどうかはともかくとして、異世界“トリップ”と言うのだからもう一括りに旅でおkだろう——。

人が居るなんていうのは私の自意識過剰な気のせいでは有ればよし、

誰かが居たとしても知らない人で有ればそれでも良し、もしも知人であつたところで口止めを頼めばいい話だ。

せめて最悪の事態、我が保護神官殿でさえなければそれで良し、である。

もし彼だった場合、数時間に渡る説教コースは免れ得ぬだろう。

先程までの高揚感とは違う心臓の響きを感じながら、東屋へと向かう足を進めた。

第2章 (5) (後書き)

微妙に被災地に入っており、地震から数日、ネットに繋がられませんでした。

ネットに繋がるようになってからも気力が涌かず大分遅くなってしまいました。

漸く家の中のゴタゴタも片付いてきたところですが……原発、早く何とかしてくれよorzな辺りに住んでいるのでちよつとどころでなく心配。

もうこの2週間ちよつとではば2年分の放射線量超えちゃいましたし。

関東以北では大変な生活を強いられている方がまだまだ沢山いらっしゃると思います。

怒りやら悲しみやら色々あるでしょう。

頑張ろうだのなんだの言うつもりは有りません。

まずは、生きていきましょう。

誤字・脱字等ありましたら、報告していただけると嬉しいです。
批評・感想等もお待ちしています。

第2章 (6)

そこにいるのは誰かと内心戦々恐々としながらも足は止まることなく進む。

私が視線に気付いた事に気付いたかのように、もう視線を感じない。それでも、足は止まらない。

こんな深夜に出歩いている同士(?)、しかも人の事をどうやら観察していたらしい相手だ、その顔を見てみたいじゃないか。

近づくに連れて微妙に逆光気味ながらも見えてきたその姿にまずは神官でないらしいことにホッと、更に近付いてどうやらその人物がお茶を飲んでいるらしい——これは神殿長も好んで飲んでいるが、実は庶民向けのお徳用の紅茶に似たお茶の匂いだ——事を嗅ぎ取り、そして、顔がはつきり見えるようになって思わず歩みが緩んだ。

話は変わるが、まだ地球に居た頃の事だ。

昔、と言うほど昔ではないけれど、10年一昔ともいうのだから、まあ昔と言っても差し支えないだろう。

十数年前、小学校低学年の頃でさえ、いや、幼稚園の頃でさえ友人たちはアイドルグループの誰某が好き、という話をしていた。

彼女たちほど積極的にはなれなかったものの、確かに私もその中に混ざってはしゃいでいたのを覚えている。

だから、私の“この”変化は肉体年齢の遡行のせいではないのだろう。

それから更に時が下って、中高生にもなると相変わらずアイドルの話も有ったけれど、同級生やら他校生やらと随分身近ではあるが逆

に現実味を持った生々しいコイバナをしていたのだ。
だけど、どういうことだろう。

いくらあまり恋愛ごとに興味がもてず（二次元は別だが）、脳の性別診断で完全な男脳だと言う診断結果が出たり、とうとう恋人も無いままに社会人になってしまった私だったけれど、少なくとも、地球にいた頃の私であれば、この人を見て何も感じないと言う事はなかったはずだ。

この人に限らず、あの神官だって、顔だけなら日本にいた頃にはとてもじゃないがお目にかかる機会はなかっただろうという秀麗さだ。今の私にとっては何の意味もないことだけれど。

そう、今の私は…なんと言うか、“女”の部分がないのだ。

かと言って精神的に男だという訳ではない。

肉体的な性別は兎も角として、精神的には今の私は無性なのだと何となく自覚があった。

気付いたのは少し前の事だったけれど、これが“私”が元の“私”とは違うものになってしまったのだという一つの証でも有るように思えた。

全く、とこの世のものとも思われないような美形を前にため息をつこぼす。

異世界トリップの王道の一つにその世界の人との恋愛っていうのがあるけれど、どうやらそれは私には当てはまる事ないようだ。

過去の事を思うと不思議なのだけれども、現状としてはどんな美形を見ても「美形だな」つまり、造形的に美しいモノだ、という思いしか抱けないのだから仕方がない。

全く、何とも勿体無い事だ。

東屋にティーセットを広げ、月明かりの元でお茶を飲むその人は“人”とは思えなかった。

彼の神官殿も顔だけは美形なことは認めよう、性格はどこまでも合わないが。

けれど、この人はその更に上に行く。

例えるならば、神官が傾城とするなら、この人はまごうことなく傾国である。

いや、類稀な美貌と、更にその上を行く人外の美貌とでも言うべきか。

まあ、二人とも男だけれど。

その人は見てもいなかったのに、私の歩みがとまったことに気付いたのか若干俯いていた顔をあげる。

穏やかな表情をしているように見えるのに、一対の金が私を射抜く。蛇に睨まれたカエルとはこんな気持ちなのだろうか。

まるで金縛りにあったかのように動きを止めた体を振り切るように声を出す。

「こ、こんばんは……」

思わずついてでた言葉は平凡極まりないので、他に何か言い言葉はなかったのかとも思うが後の祭りだ。

うん、正面から見ても美人は美人だ。

「こんばんは、水竜の子」

一拍置いて絶世の微笑みと共に返された言葉に、相手が自分のことを知っていることを理解する。

水竜の子、それはアトルディアの加護を持つ私を示す呼び名の一つだ。

この神殿で今生活している子供（外見上の）は私一人で、この中庭にこの時間にいる人ならば、滞在者のはずであるから、そのことを知っていてもおかしくはない。

私自身、この一月余りの間に、見知らぬ人に自分のことが知られている状況には慣れてしまった。

でも、何故だろう？

この人は、“私”を知っているような気がする。
そして、私も……。

「えっと、初対面……で下よね？」

「いや、これで3度目だよ。」

「……すみません、記憶にないのですが」

「最初に会ったときは君に意識はなかった。」

いつの事だろうかと思い返し、この世界に来て意識がなかったことは……たった2ヶ月ばかりの間に地球に居た頃にはありえなくらいにあったな、と思い至る。

けれど、次の言葉でそれがいつであったのかすぐに理解できた。

「2度目に会ったとき、君はまだ名を持たず、起きてはいたが、まるで夢現のように見えた。」

そんな時は、たった一度しかない。
そのときにあった人物の事は、確かに話には聞いていたがまるで覚えてはいなかった。

その人物だけでなく、そのときの事自体をほとんど覚えていないのだから当然だ。

そうであるならば、この人は……。

「ようやく、“君”と話せて嬉しいよ。マレビト、アトルディア。」

差し伸べられた手の……。

「貴方は……。」

その指の数は……。

「改めてよろしく。」

人のそれによく似た、けれどただ一つ大きな違いがあるその手を思わず凝視する。

「貴方は……。」

6本指のその手を持つのは、この世界でただ一民族。

「私は、アカシエ。エグザードナの領主を務めるアカシエだ。」

それはこの世界で最も特別な種族。

神が神話ではないこの世界の、生ける神。

神族……。

それは、神が自ら遣わしたというその御子の血筋――。

第2章 (7)

神族、それはこの世界を生み出した神が、自らの意思を世界に繁栄させるために遣わした神自身の子であると言われている。

詳しい事を彼ら自身が語っておらず、その行動原理は今もって不明である。

かつて、この世界が出来た当初、この世界に神族はいなかった。

神族が現れたのは、神が世界に最初の神託を下して暫くしてから的事だったと言われている。

いくつか文献は残っているが、その正確な日時も場所も定かではない。

ただ、その頃辛うじて国家群のようなものを形成し始めていた世界に降り立った神の子供たちは、世界の中心から複数人ずつの集団となり、各地へと散らばっていったのだという。

以来、神の御子のいる地は豊穡が約束され、危険が少ないと言われるようになり、徐々に人々はそこへと集まるようになる。

そこに形成初期にあった国家群が組み合わさり、神族を盟主とするいくつかの都市国家群と、神族を王とするいくつかの王政国家が生まれた。

やがてそれらが統廃合を繰り返し、7人の神族をそれぞれ王とした七神王国となったのが記録上では459年前、現在の六神王国と一つの民主主義国家になったのは78年前の事である。

神王国といっても、その内実は真性の王政国家であったり、寡頭政治であったり、共和制であったり、立憲君主制もあれば、王国とは名ばかりの王が象徴とされている国もあったりと様々である。

アウトラーシエンは神王国の一つであり、特に早いうちから神族を王と仰いだ国でもある。

首都だけでなく、位置的にも国土の中心にある首都から同心円状に複数配置された離宮にはそれぞれ最低一人以上の神族が居を構え、

領主として周辺地域を治めている。
因みにこの国に貴族は存在しない。

中心にいるのが神族であるというだけで、実質行政を担っているのは試験を経て登用された官吏たちである。

彼らは神に仕える官吏である、故に神官と呼ばれる。

この国において、或いはこの世界のほとんどの地域においてと言い換えても良い。

神官とは特定の宗教における聖職者の事ではなく、日本で言うところの国家、及び地方公務員たちのことである。

マレビトの保護を神殿が行っているのも、マレビトが神が連れてきた存在であるという宗教上の事由だけでなく、行政上の保護政策という側面もあるのだ。

少し話が逸れたが、要は神族とは最も創生の神に、つまりマレビトをこの世界に拉致してきた神に近い存在と言う事である。

「どうした？」

日本で握手で挨拶をするのだろうか？」

「……なぜ、ここに來たのですか？」

「ふむ。やはりそれが気になるか。」

私はその手を取る気がないと察したのか、アカシエは特に気にした様子もなくその特徴的な6本指の手を降ろした。

「いくつか理由はあるが、……一つは、頼まれたからだ。」

「誰に、何を？」

「お前の守護者に。」

おまえの話を聞いて欲しいと。」

「守護者？」

「そこからか。」

どうやら本当に意思の疎通がほとんど取られていないようだな。」

若干の呆れを含んだ声音に少しだけ驚きを滲ませて彼は言う。

「お前は歴代のマレビトの中でも特に頑固者のようだな。」

己の意思に関わらず連れてこられた全く見ず知らずの世界で、頼る縁があるのならよすが縋り付きたくなるものだろうに。」

私に頼ることのできる相手などいただろうか？

見知らぬ世界の神に拉致られて、その信仰者の元に保護されて。

恨まずにいられるほうが余程凄イと思うのだけれど、どうだろう？

「……生憎、そこまでの信頼関係の構築にはいたっておりませんので。」

坊主にくけりや袈裟まで憎し、とはよく言ったもので、私は、根本的にはこの世界の住人を信用など出来ないのだろう。

「お前は覚えていないのかもしれないが、あの神官は、この先の一生をお前に捧げた。」

正真正銘、お前ために生きる、お前のだけの守護者だ。」

第2章

「それはどういう意味ですか？」

そんな話は聞いたことがない。

私に一生を捧げる？

何を馬鹿なことを。

「本当に何も聞いていないのだな。

彼のものはお前に名を捧げ、そしてお前の守護者となった。

どうやらまだお前は正式の了承してはいないようだが、それでもその誓いは有効だ。

あれはこの先お前のためだけに在る。」

「私だけの為……？」

理解できませんし、私はそんなものやりません。

私は、自分で言うのも癪ですが、ただの、地球ですら漸く大人の仲間入りをしたばかりの半人前です。

そんな人間に、どうして人一人の一生なんて背負えます？」

「お前が背負う必要はない。

ただ、あれが我等の前でお前に一生を捧げる誓いを立てた。

それだけの事だ。

現に、あれはお前の言うことを聴かなかったことはないだろう？」

「何事も反対されてばかりいますが。」

「だが、それでも最終的にはお前の言う事を聞いているだろう。」

否定の言葉は出なかった。

そうだ、確かにあの人は何かにつけ反対をしたが、それでも最終的には大抵のことで話を聞いてくれたし、無理なときでも次善案を提案してくれた。

わかってる、彼が私のためにいろいろ心を砕いていた事は言われるまでもなく分っていた事だ。

ただ、それですら私にとっては煩わしかったというだけのことだ。

「不思議に思ったことはないか？何故この世界に着たばかりのマレビトを早々にこの国では放り出すのか。」

「6日と言うのは確かに短いですが、それだけあればマレビトは十分対応できる精神構造をしているのでしょう？」

少なくとも私はそう教えられた。

「そのとおりだ。だが、中にはお前のように表面上は取り繕って、内心では周囲に壁を作るものもいる。」

よく分かっているじゃないか。

「そのためにいるのが守護者だ。」

「マレビトは、年に数人単位でこの世界に来ているのでしょうか？そのそれぞれに一人守護者がつくと言うんですか？」

そんなのは人的資材の無駄のように思えるのだが。

「言ったろう、何故この国では早々にマレビトを自由にさせるのか、と。他の国では最低でも半年、長い国では数年間は自由になれない。」

」

「……。」

「この国の方が特殊なんだ、そもそも他の国には常にマレビトがいる。」

だからマレビト同士の交流し、様々な事を教えあうのが基本だ。種族や出身が違えども、同じ境遇と言う事で受け入れやすいのだろうな。」

そんなの、初耳だ。

私もそっちが良かった……。

第2章

「この国はマレビトが少ない。

かつては多くのマレビトがこの国にはいたが、やがて世界の中で最もマレビトの少ない国となった。

だから、マレビト同士で学びあうと言う事がそもそも不可能なのだ。

その代案として考えられたのが、この世界のサポート役を一人つけ、後は実地で慣れさせると言う方式だ。」

習うより慣れろ、とは言うけれど、いくらなんでもそれって暴論じゃないだろうか？

顔に不満が出ていたのだろうか、アカシエが苦笑しつつ続ける。

「今まではこれで上手く言っていたんだ。」

それは、きっと、多分今までの渡り人たちが出来人だったんですよ。残念ながら私のような若造に、そんな余裕はない。

「第一印象で嫌がられることのないように、守護者の候補は優秀であることは勿論、若く見目良い異性が選ばれる。

見目良く、自分を気遣う者を嫌うものはあまり多くはないからな。

守護者との間に信頼関係を築き、多くのマレビトがこの世界に馴染んでいった。」

どうせ私は性根が曲がっていますよ。

そんな私をこの世界連れてきたのはそちらなのだからそのことで文句を言われる筋合いはない。

文句を言うなら早々に地球に帰してもらいたいものだ。

それにしても、その理屈は分らないことも無いが、外見で候補を選ぶってBB船のブローンじゃないんだから。

いや、意味合い的にも似たようなものかもしれない。

「ナイルもそうだが、ツェフも今でこそ年を取ったが、それでも見目が良いだろう?」

「……ツェフ?」

耳慣れない人名に思わず首を傾げる。

「名前までは知らなかったか。ここの長のことだ。」

ここというと、ああ、神官長のことか、あのロマンスグレー。

きっと若かりしころはさぞや美形だったろうとは思っていたけれど、あの人もマレビトの守護者だったとは。

確かに今でもご婦人方には人気がある。

まあ、私に対してはまるで初孫に対するおじいちゃんみたいな感じなんだけどさ。

あれ?でも……。

「守護者の契約は一生ものなんですよね?」

私は神官長の側にマレビトがいるのを見たことはない。

と言うか、この町に、私以外の”マレビト”はそもそも存在しない。

「マレビトと守護者の契約が解消されるのは、いずれかの死のみだ。マレビトは長命なものが多いのは事実だが、必ずしも全てのマレビトが長命であるというわけではない。」

ツェフが仕えたマレビトは既にこの世を去った。」

この世を去る、それはどういう意味だろう？
通常ならば死を意味するのだろうか。

「それは、亡くなった、と言う意味ですか？それとも……」

「守護者の契約が解消されるのは死のみだ、と言ったろう。
例え帰還したとしても、その契約は消えない。

あの契約は一種の宣言みたいなものだからな。」

では、その人は帰ることなくこの地で生を終えたのか。

「お前は、帰りたいのか？」

一瞬、何を言われたのか理解できなかった。

そして次に、この人は、一体何を言っているのだろう、と思った。
誰も私に尋ねなかったそれは、実際に聞かれてみれば酷く不快なものだった。

「当たり前のことを聞かないでいただけますか。

そんなの、聞くまでもない事でしよう。」

ああ、嫌だ。

今、自分がどんな顔をしてるのか容易に予想がつく。

押さえつけていた感情を剥き出しにされる、その不快感に更に感情は軋みを上げる。

表情を取り繕う余裕はもう残っていない。

鏡で見ることは出来ないが、相当酷い顔で彼を見ら見つけているはずだ。

なのに、そのことに何の痛痒も感じていないのだろう、アカシエは平然と言葉を繋いだ。

「そうか、ならば私はお前に言わねばならないことがある。それが、ここを訪ねた第2の理由だ。」

第2章 (8)

「この上何を言おうっていうんです？」

もはや取り繕う意思すら無くして、投げやりに問う。

「アトルディア、お前はもう地球に戻る事はない。」

時が、止まったような気がした。

何を、言われても動じないつもりでいた。

けれど、これは……あまりに。

「お前がお前であるままに、生きて地球に戻る事はない。」

私の中で時が止まっても、世界は無常に流れていく。

「諦め、そして受け入れろ。」

なんで、この人は、こんなに酷い事ばかり言うのだろう。

美しい顔と声で、私を絶望に突き落とす。

なぜ、どうして、私が……。

マレビトは、それを受け入れられる者だけかなるのではなかったか。
ならば、どうして私が選ばれたのだ……。

「……っ」

声に、ならない。

何も。

泣き喚いて、嘆いて、罵って、叫んで、そうすれば、楽になれるの
だろうか。

だけど、何も口からは出てこない。

涙すら、流れない。

どんなに、辛くともそうするのは私のなけなしの矜持が許さなかつた。

人に当たる事で地球に帰れるならば、そうすることに躊躇いすらし
なかっただろうが。

俯いてしまう事ですらまるでこの世界に負けを認めるようで、ただ、
ひたすら目の前の人を睨み付けた。

何分くらい過ぎただろう。

アカシエは何も言わず、ただ、静に私を見つめていた。
一時も視線をそらさずに。

やがて、吹き荒れるような感情の奔流が静まると、漸く私は口を開
いた。

「……どうして、私なんですか。」

神官は、この問いに答えられなかった。

けれど、彼は知っているのではないだろうか。

「マレビトは、皆この境遇に耐えられるのだと聞きました。

そういう人だけが選ばれるのだと。」

異世界に憧れていた青年然り、自分の世界に絶望していた人、その
ままその世界に留まれば絶滅していただろう種族。

皆、それぞれに受け入れる素養があった。

ならば、どうして私はこんなに苦しむのだろうか。

第2章

「お前にも、本来は界渡りの耐性はあるはずだ。だが、それはある要因によって阻害されている。」

「どうして、そんなこと分るんですか。」

直に会うのはたった3回目で、うち2回は意識もまともにあったとはいえない状態だったというのに。

「お前は、他のマレビトとは違う。
お前だけは、世界を成長させる要因としてではなく、お前が、お前であるが故に選ばれた。」

意味が分らない。

今夜は、分らないことばかりだ。

いや、この世界に来てから、ずっと分らないことだらけだった。

「これは、贖罪なのだ。

お前にとっては酷なことだろう。

関係者の一人でありながら、それを知らずに生きてきたのだからな。」

贖罪とか、関係者とか意味が分らない。

ただこの世界に呼ばれたマレビトと言うだけでなく、何か理由があったと言っても言うのか。

それこそ一体どこの厨二設定だ。

「お前は、地球にいた頃、違和感を感じたことはなかったか？」

誰も自分を理解は出来ない、自分は他の人間とは違う。」

「それは、思春期の人間ならばたいいの人が抱く感情です。何も私が特別にそう思っていたわけじゃない。」

「だが、それはもっと幼い頃から、そしてこちらへ来る直前ですらもその思いはあったのではないか？」

「だとして、何だと言うんです。実は私はこちらの世界に生まれるはずだった人間だとしても？」

「当たらずとも、遠からず、といったところだな。」

正しくは、前世のお前がこちらへマレビトとしてくるはずだった、ということだ。」

……前世？

異世界トリップも随分ファンタジーだと思ったけど……。

いや、それ本気の話ですか？

思いも寄らなかった言葉に氣勢を削がれ、怒りが萎んでいく。

「本気で言ってます？」

「異世界は信じられても、前世は信じられないか？」

おかしいそうに微笑むアカシエを見てももう苛立ちは感じない。一度静まってしまった感情はそうそう再燃しない。

「まあ良い。話は長くなる。こちらに来い。」

そうアカシエは東屋に誘う。

戸惑っているうちにテーブルの上には湯気の立つ二つのカップがおかれ、嗅ぎ慣れた香りが漂ってきた。

「とりあえず飲むと良い、ツエフの部屋にあったものだ。
格段美味しいと言うものでもないが、不味くはない。」

ああ、やっぱりか、と思いつつ温かいお茶に口を付ける。

涼しい夜風の中で飲む温かな茶に、ほうっと、気が抜けていく。
柱の間から覗く月はまだ天高く、とても長く感じていたのに、部屋から出てきてまだそれほど時間が過ぎていないことを教えてくれた。
言いたいこともたくさんあったのは事実だし、恨んでいるのも事実だけれど、どうしてあんなにも気を荒げたのだろう、と冷静になる
と思えてくる。

感情を押さえ込み、自身の中に飲み込んでしまうのは地球にいた頃から変わらない。

あまり感情を表に出さないでいることは、私にとって当たり前のことだったのに。

環境が変わればそれまで普通だったこともストレスになってしまうのだろうか。

「さて、話をしようか。」

ぼうっとし始めた頃にアカシエは静かに言った。

「古い話だ。」

この世界がまだ生まれてそれほどたない頃。」

「ある世界で、会える種族が滅びを迎えようとしていた。」

その世界は完成に近づき、創世の力が消えようとしていた。

その種族は、創世の力、この世界で言うところの魔力によって生きる生き物だった。

その種族が滅びるのを忍びなく思い、残り少なくなった彼らを全て創世の力あふれるこの世界に迎えることにした。お前は、その中の一つだった。」

ちよつとまで、その一員というのはまだ分かるが――

「“一つ”って、どういうことですか？」

「お前はまだ卵だった。」

卵……。

人ですらなかったのか!!

「そして、手違いで、その最後の卵一つだけがなぜか地球へと行ってしまった。」

「贖罪って、それが原因なんですか？」

「そうだ、その神々にすればほんの些細な手違いが、悲劇を生んだ。一族を何より大切にし、番と子との絆を最重要としたその種族は最後の一人だったお前を失い、全て狂った。」

「……。」

「その狂乱は、まだ幼かったこの世界に多大な傷をもたらし、ただの一頭を除いて全て狂死した。」

「それは……」

「話は、聞いたことがあるはずだ。」

「狂乱の竜――」

この世界で細々と暮らしていた人々を襲い、形成されたばかりとはいえ既にその態を成していた多くの国を滅ぼしかけた、そしてマレビットによって魔法を世界に齎すに至った、この世界の長いとは言えない歴史の中で最大とまで言い伝えられるようになった災厄。そして、それは――

「神が世界への介入を決める切欠となり、我ら神族は産み落とされた。」

私が、私のせいではないとは言え、その切欠となったのか。

気分がいい話ではないが、前世とか言われてもまるで実感はない。

仲間だったものが狂ったと言われても、その事に対し何も感じない。

「救おうとしたはずの一族を、逆に滅びへと誘ってしまった。

その上、ほかの種族にまでも多大の犠牲を強いた。これが、贖罪の由縁だ。

竜の魂を持つおまえをこの世界に呼び寄せ、本来であれば狂うはずのなかった竜種を新たにこの世界に根付かせる。

神々が何を考えてそのような結論を出したのかは知らんが、そのためにお前が生まれるのをずっと、待っていたのだ。」

確かにそれは、恐るべき災厄であったのだろう。

神々でさえ途中で止めることが出来なかったほどに。

だが、だが、それは……！！

「“私”には、関係ない話じゃないですか。」

生まれ変わる前はどうかあれ、今の私はただの人間だ。

例え、本当に前世が竜だったのだとしても。

それを確かめる術は私にはないのだから。

「そう、だから、お前には酷なことだと言った。」

この人はなんなのだろう。

私を苛立たせる言葉を吐くかと思えば、こうして神々への批判とも取れなくもない言葉も吐く。

「神々がそう望んだが故に、今のお前は、最早人ではない。」

なんだか、色々と衝撃的なことを一気に言われ続けたせいか、何も感じない。

人ではないと言われても、素直に受け入れるとは行かずとも、帰れないと言われた時ほどの抵抗感生まれなかった。

温くなってしまったお茶に口をつけ、一息ついてから訊ねた。

「私は、竜なんですか？」

「いや、人であり、竜である。

強いて言うならば竜人か。

人と竜、そのどちらの性も受け入れるために、お前は長い時間をかけて体を再構成された。

目覚めたときこそ最近だが、お前がこの世界にやってきたのは大分前の事だ。

今はまだ人としての意識が強く、尚且つ幼体だから変化は少ない

が、やがて人であったときのお前とは姿は変わっていくだろう。

帰ることはできないのはそれが理由の一つだ。

人でない身では、地球へは帰れまい。」

人ではないから帰れないのだと言われても、言うべき言葉が見つからない。

ただ、一つ不思議に思ったことを聞いた。

「なぜ、今更こんなことを教えるんです？」

もっと早く教える事も、逆にずっと言わずにいることもできただろう。

なのに、どうしてこのタイミングだったのか。

「必要だと思ったからだ。

このままでは、遠からずお前は壊れるだろうと。

全てを教える必要はないと、そもそも何一つお前自身のことを教える必要はないと言われていた。

やがて嫌でも分る事だから、と。

だが、それではお前は納得できないのだろうか？」

その通りだ。

訳の分からないまま訳の分からない世界につれてこられて。

「お前は全てを知らねばこの世界を受け入れられないだろうと、私が判断した。

今回こうして来たのは私の独断だ。」

もうずっと、辛くて辛くて堪らなかった。

ああ、そうだ。

私は、この世界に来てしまった事よりも、理由が分らない事が何よりも恐かったのだ。

第2章 (9)

分らない事が怖い。

当たり前だけれど、当たり前ではない。

だって地球にいた頃は、自分が生きる意味なんて考えたことすらなかった。

誰もが同じように、ただ生き、死んで行く。

生きる意味を明確にもって生きていた人もいたのかもしれないけれど、私を含め、多くの人がただ生きるために生きていただけだったように思う。

勿論、その生で何を成すか、というのは別の話だ。

その生の意味も目的も、自分で決めていくものであって、誰かが、少なくとも神というような得体の知れない何かに求められて事を成すわけではなかった筈だ。

「それは、地球を含むあの世界がもはや神の手を離れた場所だからだ。」

世界が世界として成り立ったら、神はその手を離す。

アカシエはそう言った。

それが本当なのかどうか走らないけれど、私はそういう世界で生まれ育った人間だった。

前世ですら、生まれこそ異世界であっても、生きてそして死んだのは地球だった。

生きる意味を背負わされる生なんて私は欲しくなかった。

役目なんて、どうでも良い、今でもそう思う。

だけど、どこかでホッとしている自分がいた。

自分が為すべきことを知る、それは見知らぬ世界にただ一人落とされた私に、確かに安定を齎した。

何も分らず保護されているのは気分が悪かった。

多分、私の中で一番大きな不安となっていたのは役目も知らず、何も為せず、彼らに失望され、そして捨てられることが恐かったのだ。強い繋がりを持たなければ失う恐怖に怯える事もない、と希薄で表面的な人間関係を望み、それでも捨てられる恐怖から多くの人との繋がり求めた。

何のことはない、自覚してみれば単純なことだった。

空になったカップに温かいお茶が注がれる。

「異なる世界へ行ってしまったことはお前にも影響を与えた。」

それは、私にだろうか。

それとも、私の前世にだろうか。

「お前はまだ生まれていなかったら、狂いこそしなかったもののそれでも、その精神に負担を強いたのは確かだ。

ただ一人、仲間から切り離されて別の世界で生まれたお前は、家族や住みなれた土地、そういったものから引き離される事に強い抵抗があるはずだ。

一人である、という事に強い不安を感じる。

ギルドに早くに所属したいと願ったのもその影響だろう。

心置けない神殿ではないどこか、それがたまたまギルドだったというだけの事だ。」

ギルドはマレビトとは深い関係が有る組織だからな、とアカシエは続ける。

確かにそうだ。

かつてマレビトが組織したものであり、今も多くのマレビトやその子孫が所属する。

国に縛られないから、他国のマレビトに会うのも容易になる。

私は、その繋がりを求めているのだろうか。

「だが、家族に対して強い執着があった一方で、お前は人間という種に対して違和感も感じていたのだろうな。

ギルドに所属した今もその違和感、いや、不安感と置き換えた方が適切か、拭いきれてはいまい。

だからこそ、その不安感をけすために仕事に没頭した。

かつては同種から引き離され異郷にて一人寂しく生きて死に、今度は再び家族や世界から引き離されてこの地へとやって来た。

状況としては、とてもよく似ているだろう？

現状に対してお前が強い不安を抱くのは当たり前前の事だ。

私は、それを解消するためにここに来たのだよ。」

「そのために、全てを話したという事ですか？」

「そうなるな。」

「どうして。」

「それについては言ったと思うが？」

「私が壊れると思ったから、ですよね。

そうではなくて、私が聞きたいのはどうして、そこまで私を気に掛けてくれるのかってことです。」

この人の言動は分からない。

私を怒らせたかと思えば、慰めのような言葉もかける。

「壊れるなら壊れるで、放置したってあなたには何の問題もないのでしょう？」

それなのに――」

どうして。

「お前は聞いてばかりだな。」

呆れたように言われても仕方がない。

「何も、知らないことばかりなんです。
聞かなければ、何も分らない。」

ギルド関連の人以外とはほとんど関わってこなかったから、この人がどういう人であるのかも知らない。

今夜再会するまでは、彼と会ったことすら忘れていた。

彼という人間の背景を何一つ知らないのだ。

彼だけでなく、神族という存在に関わる事を避けていたために、神族が何であるかすら市井の人が知っていること以下しか知らないのだから推測のし様もない。

「そうだな。」

私が必要最低限以外のことはこの世界について学んでこなかった事を知っているのだろう。

彼は軽く同意すると、彼は継ぎ足したお茶を一口飲み、幾分か逡巡した末ににこう言った。

「私は神が嫌いだ。」

「私は、私たちを生み出した神が嫌いだ。

神の御子、などと呼ばれてはいるが、その実、要は彼らの意のままに動く道具として作られた、世界を動かす歯車のようなものではない。

それも、なければ支障をきたすが、実際にはないからといってそれほど問題がでるわけでもない小さな歯車に過ぎない。

或いはなくなっても困る事はない代えの利く一つの螺子かも知れぬ。

意のままに動く事を許されず、神の望むままに動くことしか出来ない。

ただ、神の手間を省くためだけに生み出された操り人形だ。

だから、」

だから、神々に翻弄されるお前の境遇はまるで自分のことのように思えたのだ、と自嘲気味に苦笑した。

目を見れば嘘が分る、とはよく言うが、私にはそれが本当かは分からないし、その真贋を見極める目を持っている自信はない。

けれど、このとき彼の瞳に宿っていた光は、確かに真実を語っているのだと信じるに足るものだった。

「後は、同じく神を嫌っているだろうお前となら、良い茶飲み仲間になれるかも、という思いもあったがな。」

そう、茶化すように言ったときには、もう陰りは見えなかった。

「私が神を嫌ってなかったら、どうするつもりだったんです？」

彼が一瞬の張り詰めたような空気を壊すことを願っていたように思

えたので私も苦笑しながら言葉を返す。

「そうだったら、私がここに来る羽目にはなっていないさ。
なんせ、私は神を嫌う神族だからね。」

そのときはツイリル辺りがここに来ていただろうよ。」

「そうならなくて良かったです。」

本心からそう思う。

ツイリルはこの国の王だ、それも堅物と有名な。

いくらなんでもそんな人とは話にならなかっただろう。

尤も、神を恨んでさえいなければ、私はきつとこの世界にもっと早く馴染み、国王が足をほ運ぶような事態に陥ってはいなかったろうが。

どうやら私は今夜、少しばかりひねくれた性格をした茶飲み友達を手に入れたらしい。

それからいくらか碎けた調子になった彼と話しをし、愚痴を溢しあい、笑い、お茶を飲み、いくつかの月が壁の向こうに見えなくなつたころ彼が言った。

「ナイルのことは、信じてやれ。」

そういえば、彼に言われてアカシエはここにきたのだったか。

「あれは、若いころにマレビトに助けられて、そのせいで幾分……いや、かなりマレビトに対して傾倒しているが、悪気があるわけではない。」

あの人の場合、悪気がないのも問題だと思うのだけれど。悪気がなくても鬱陶しいものは鬱陶しいのだ。

「あれは、心底お前の助けになりたいだけなのだ。故に口煩くもなるし、心配もする。

まあ、ある意味で幼子をもつ親のようなものかも知れんな。私には子がないからその気持ちは分らないが。」

「ああ、それは分らなくも無いかも。確かに、一体あんたはこの母親だ、って言いたくなった事はあります。」

あの苛立ちは確かに思春期に両親に、特に母に対して抱いた感情によく似ている。

「つく。

あれが母親か。

その言葉を聞けば拗ねそうなのが一人いるが、まあそれはさて置き、あれは親のようではあるが親ではない。

それは分るな？」

「当然です、あの人に育てられた覚えはありません。」

「そうではない。

あれは親のようにお前を気に掛けるが、決して盲目的にお前を保護するわけではない。」

「意味が分りません。」

「だから、ちゃんと話をしろ、と言っている。」

あれはこの世界で唯一、何の利害もなくお前を助ける人間だ。ギルドの者も親切では有るだろうが、その根底にはやがてお前から得られるだろう利益への期待がある。

マレビトは身体能力に限らず、魔法に優れたものが多いからな。我らだとして、いつ何時神々からお前に対する命が下るか知れぬ。だが、あれだけは違う、あれだけはお前をけして裏切らない。名に懸けた誓約は神々でさえ覆せないのだから。」

アカシエには先程までのような茶化するような雰囲気はなく、真面目に私に言っただけで聞かせた。神々からの、と言うところでは少しばかり苦痛を滲ませて。

「あれはな、まだお前に何が出来て何が出来ないのか、何を知っている何を知らないのか。

お前が何を求め何を必要としているのか、そして本当に必要なものは何で不要なものなのかそれを見極めることが出来ていないだけだ。

それが分れば、もっと干渉は少なくなるだろうし、お互い意思の疎通も楽になる事だろう。

いくら、外見と中身が異なっていると知っていても、お前の姿は庇護欲を掻き立てるのだ。

己が子供ではない、と言うのであればそれをただ口にするだけでなく、身をもって証明しあれに理解させなければならぬ。」

今までを振り返り、自分がそう行動できていたかどうかと自身に問えば、答えは惨憺たるものであることは間違いなかった。

状況が状況だけに仕方がないという思いもあるが、あまりに自棄に走った言動が多かった気がする。

「そして、お前は既に一度失敗をした。

あれは何も言わずに今まで見守ってきたが、その結果としてお前は倒れた。

「今後はこれまで程楽に生活できると思うなよ。」

言われて漸くそのことに思い至った。

彼が口煩く言う一方で放任に近かったのは一応は私を自分で判断が出来る大人だとちゃんと認識していてくれたからなのだと。

つまり、私は彼に自己管理が出来ない子供なのだと今回の事で思わせてしまったわけだ。

ニヤリ、とアカシエはその秀麗な顔を意地悪く歪めると楽しそうに笑った。

「お前がこれからどうするか、楽しみにしているよ。」

その台詞自体も憎たらしいが、これほどの美形となるとどんな表情を浮かべてもさまになるのも腹立たしい。

ここで癩癩を起こせば楽かもしれないし、気も晴れるかもしれないが、このひねくれた神族にまでガキ扱いされるだろうことは目に見えていた。

そうなるのが癩で、ここは我慢だ、とひたすら自分に言い聞かせたが、そうすることがより一層、相手に背伸びをしている子供のように見せていただろうことは後になって気がついた。

逆に皮肉の一つでも返せていれば良かったのだろうか。

結局、私はそのまま引きつった笑みで帰り行く彼を見送り、白み始めた空を後に部屋へと戻った。

あまりにも感情の起伏が激しすぎた一夜に精神的疲労は蓄積し、部屋に戻ったその足ですぐに寝入ってしまったのだが、実は私が抜け出している間に侍女がそのことに気付いて騒ぎになっていた事など、

そのときの私には知る由もなかった。

後になってこの夜の事を思い返し、疑問点がいくつも出て出来たのだけれど、このときの私にはそこまで気を回す余裕はなく、ただ、とりあえず目が覚めたら今までのことは少しばかり謝罪しても良いかもしれない、と思いながら意識は深い眠りの淵へと沈んでいった。それは、もう今までのような逃避のための眠りではなかった。

第2章 (10)

「貴方は、そんなに我々に心配をかけることが好きなのですか。」

「働き詰めで倒れ、七日間寝込み、そして起き出したと思ったらその足で外に出て数時間庭に居ただなんて。」

病み上がりだという自覚はおありか。」

現在お説教の真っ只中です。

一番前に神官が立ち、私の罪業を読み上げ、その後ろにはエメラさんを初めとした侍女さんたちが並びその言葉に頷き、彼らの後ろで神官長が何とか宥めようと右往左往。

もうちょっと頑張ってください、しんかんちょー。

夜中に神族を招きいれたという点において貴方も同罪なんですからお茶まで提供しちゃった事実は既に上がっているのですよ、私の次は貴方の番なんですよ、と心の中で神官長に声援(?)を送りながら、表情だけは抜かりなく神妙そうに取り繕って謝罪をしている真っ最中。

何でこうなったか？

うん、私も良く分らない。

ただ、あれから少しばかり遅すぎる二度寝から目覚めると、既に周囲は今の面子で固められていた。

どうも、私が部屋を抜け出したとき誰も部屋に居なかったのは所用で席を外していたため、戻ってきたら私が居なくなっている事でごく一部だけはあるが騒ぎになっていたらしい。

なにせ、彼らの認識では私は7日間も眠り続けた病人で、彼女が席

を離れたときはまだ私は眠っていたからだ。

一時は誰かに浚われたかと、神殿中を叩き起こして搜索をすると言
う話まで出ていたようだ。

俄かに騒がしくなった館内に、神官長が気付いて今はアカシエが来
ていて私がそこに居ることを告げてくれたお陰で大きな騒ぎにはな
らずに済んだとのこと。

まあそれでもかなりの人数が叩き起こされてはいたようだが。

何せ、もしも浚われたのだとしたら神殿付近に留まっている筈はな
く、尚且つもしも本当にこの神殿に侵入しマレビットを浚えるような
犯人がいるとすればそれは相当な実力者であることは間違いなかつ
たからだ。

その話によって、神の守護地と雖もその守りは完全ではない、とい
うことを教えられた。

どのような事であっても抜け道は存在し、完全な安全など存在し得
ないのだからそのことを忘れないでほしいと念を押された。

そこから更に無茶な事を続けていたこの1ヶ月に話は及び……。

「本当に、申し訳ありませんでした。」

何も考えずふらふらと部屋を出てしまった以上、私には反論の余地
はない。

そしてどこかで無茶を無茶と知りながらも続けていてしまったこと
もやはり謝らねばならないだろう。

「以後二度とこのようなことがないよう努力いたします。」

将来何があるかなんて分からないから、確約できるのは努力するこ
とだけだ。

もしそれでは力及ばない事態に陥ったときは、諦めてもらうほかな

い。

「本当に、反省していますか……？」

「はい。」

流石に3時間ぶっ通しの説教を食らって尚反省しないほど捻くれた性格はしていない。

「迷惑かけて、心配かけて、本当にごめんなさい。」

私は、他に何と言えいいのか分らない。
神官、ナイルは一つ息をつくと言った。

「本当に、こんな事はもう二度としないでくださいね。」

「はい。」

「貴方に何かあれば、私たちが心配するのだという事を、忘れないで居てください。」

「はい。ごめんなさい。」

「分ってくださいたなら、それで構いません。」

ナイルが先に席を立つ。

彼が行ってしまう前に、今、これだけは言っておかなければならない。

「ナイル。」

神官の、ナイルの動きが止まる。

私が、彼の名を呼ぶのはこれが始めてのことだ。

今は他にも人がいるからかつて教えてもらった真名で呼ぶことはしない。

それでも彼にはそこに込めた意味は伝わるはずだ。

「エメラさん。ジルフェさん。神官長様」

みんなの目を良く見てから頭を深く下げる。

「今まで、色々心配かけてごめんなさい。

いつも助けてくれてありがとうございます。」

頭を上げ、いまだ固まったままのナイルに視線を合わせる。

「どうぞ、これからも宜しくお願いします。」

ギルドで皆に挨拶したときは少し違うけれど、気分的には似たようなものだ。

あの時持っていたのはこの世界で生きるための覚悟、そして、今抱えているのはこの世界で生きていく覚悟。

地球での生活は懐かしく恋しい。

残してきた人、物、いくらでもある。

けれど、それはもう帰れない場所。

私は、この世界で生きていく。

それは地球に帰るためでなく。

それまでの繋ぎとしてではなく。

この世界の生命として。

地球人、滝根真帆ではなく。

水竜の加護を持つマレビット、タキIIアトルディアとして。
いつかこの身が、世界へ還るときまで。

後に、このとき神官長が自分だけ名前を呼んで貰えなかったと気落ちしていたという事を、彼に愚痴られたと文句を言いに来たアカシエによって知ることになるのだが、それはまた別の話だ。

第3章 (1)

下手に言葉が通じてしまうために、時折この世界での常識が抜け落ちて、いる事を忘れられてしまう。これもそんなことのひとつだった。

「先生、魔法って誰にでも使えるものなんですか？」

「あれ、言ってなかったっけ？」

「ごめん、ごめん、日本人って聞いてたから知ってるものだとばかり思ってたよ。」

「何故、日本人だと知っているの？」

「え、だって、魔法使いの始祖は日本人だよ。」

「……ここでそれが来るか。」

「そんなに難しくないし、魔法史の本貸してあげるから自分で勉強しておいで。」

「丁度いいから、それ今週の課題ね。」

そんな会話があったのが数日前のこと。

私は先日の失態から、ギルドでの仕事を週の半分に制限されている。そしてその余った時間は神殿での勉強に費やす事となった。

最初の1週間で学んだのは必要最低限の知識。

今はそれだけでなく、この世界に関する幅広い知識を広く浅く学んでいる最中だ。

この世界では1ヶ月は4週というのは地球と変わらないが、1週間は6日で曜日というものはない。

一週間の最初の3日はギルドで働き、後半の2日は神殿で勉強、最後の1日は休日という過ごし方をしている。

そのため、出来る仕事は限られてしまっているが、それは仕方ないことだ。

神殿での勉強は時間に余裕のある神官や街で教師を生業にしている人、またハルディアさんのように今は引退した人が教えに来てくれている。

これは私の持つてゐる知識が誰かと一緒に学ぶには偏りすぎているため、ある程度出来るようになったら街の学校に通う可能性もあるらしい。

私一人のために色んな人を煩わせるようで気乗りがしなかったのだけれど、実はどの道いずれこういった勉強はすることになっていたらしい。

私がギルドに行つてばかりだったため、延期に続く延期で、その内私がこの世界になれてから、と思つていたところに先日のことがあり、ちょうど良い機会だから、と予定を組まれた。

つい先日まで義務教育を含め16年間の学校生活を送つていた身とすれば、勉強は懐かしい反面、悪夢のような時間でもある。

特に今は自分で何かをする、というよりはとにかく知識を詰め込むような講義ばかりで、さらに課題も出されたりするとその上更に気が滅入る。

しかし、それも数日前までのこと。

”魔法”という如何にも異世界らしい事象は、私にやる気を取り戻させた。

好きこそ物の上手なれ、オタク（軽度、これ重要）だった私にこれ

以上の餌はない。

折角の休日も潰す勢いで、部屋に引き籠って魔法史の本を読み薦めた。

……日本人が魔法使いの始祖って、マジな話だったようだ。
しかもこいつ、絶対オタク（重症）だっっっ！！！！！！！

第3章 (1) (後書き)

新章開始です。

第3章 (2)

一日中本を読みふけたお陰で、何とか魔法史の概略はつかめた。だが、その結果として、私は再び意欲を失った。

まあ、歴史を学んだからといって魔法が使えるようになるわけではないのは当然だが、それならば魔法のための勉強を始めればいい。だが、そもそも魔法が使えないのであればどうしようもない。

魔法の始まりは、この世界の住人なら誰だって知っている。

災厄の魔物を倒した異界から訪れし勇者の話。

まさに異世界トリップのテンプレのようなその話の主人公は日本という国からやってきた渡り人。

数々の偉業を成し遂げた彼は、囑望され竜退治へと赴く。

そして遂には魔法の力を得、災厄たる竜を滅ぼすに至る。

凱旋した彼は望まれてアウトラーシェンの王に就く。

善王と名高かった王はしかし、後に天より降った神王の一人に膝を付き禅譲したと伝えられている。

その後の彼の消息は、ギルドの冒険者となったとか、隠棲したとか様々に伝えられているが定かでない。

今も子供たちが憧れる英雄譚の一つだ。

私がこの話を知ったのも、子守りの依頼を受けたときに子供たちから教えられたからだ。

だが、有名すぎるほどに有名な彼の名は今の世に伝えられてはいない。

一説には真名信仰が盛んだった折りに彼の名も失われてしまったと言われている。

ただ一つ伝えられているのは、彼が日本の出身であったということ

だ。

そのせいかどうかは分からないが、後に彼について研究をしたのも日本人であった。

名を佐伯仁。

今、竜殺しの英雄について伝わっている資料のほとんどが、その彼が編纂したものである。

彼はその著書の中で断言している。

英雄は、オタクであったと。

第3章

英雄は、英雄となる前から偉業を成し遂げていた。

今に伝わるものは、特に知られたものだけでもギルドの設立、製紙技術や輪裁式農法、コークスを用いた高炉による製鉄の普及、教育制度の確立、火薬の発明など多岐にわたる。

まるで狙ったかのように未開化であったこの世界をたった一代で急発展させることになる知識の数々。

私も同類だから分る。

恐らくは自著でカミングアウトしている佐伯氏もまたそうだったのであろう。

類は友を呼ぶというが、オタクはオタクの臭いを嗅ぎ分けるのだ。

一つだけというならばまだしも、こんな普通の生活で必要性など全くない知識を保有しているのは、中世から近現代を専門とした研究者でもなければ特殊な人間だけであろう。

これらの知識が必要とされる状況下は極めて特殊だ。

そんな極めて特殊な状況下として一番に考えられやすい、もしかしたら異世界に行ってしまうことがあるかもしれない、なんてことを本気で脳内シミュレート（またの名を妄想という）してしまうのはオタクと呼ばれる人種だけである。

世界にとって必要な人間を呼び寄せる。

確かに、異世界トリップ、憑依、転生を好むオタクほど好条件な物件はあるまい。

大分話は脱線したが、私が呼んでいた魔法史概論は佐伯氏の著書である。

その中には魔法に関する歴史と合わせて、簡単な、本当に簡単な魔

法の概論が載せられていた。

私は見つけてしまったのだ、魔法を使うための条件を。

・魔法は、大人にしか行使できない。

一体どういう制約なのか、子供は魔法を使うことが出来ないのだという。

これは、新手の嫌がらせなのだろうか？

第3章 (3)

魔法は大人にしか使えない。

これは私に大きな衝撃を齎した。

なぜならば、実感としての実年齢こそ22だが、私の今の体はどう見ても子供である。

アカシエも私を成体ではない、と言ったことから私が使えない可能性は非常に高い。

かつて姿の変わったマレビトたちが魔法を使えたかどうかそれを調べた本を当たりたいところだが、期待が大きかっただけに本を読む気が失せてしまった。

はあ……。

「何かありましたか、朝からため息などついて。

昨日のやる気はどうしたんです？」

最近では一緒に朝食をとるようになったナイルが尋ねてきた。

うん、彼に不調とかと思われると途端に過保護になるのでこれはまずい。

隠すと余計に心配して大事になるだけなので、正直に言う。

「ナイル、魔法って大人しか使えないんですか？」

ああ、それでか、とでもいったような納得した表情で彼が言う。

「基本的にはそう言われていますね。」

昨日読んでいたのは魔法史だったと思いますが、魔法の概論も読み始めたのですか？」

「やっぱりかあ……。」

高位神官なら例外を知ってたりしないかな、と否定の言葉を内心期待してたりしたのだけれど、残念ながらそれが通説のようである。

「魔法の概論は読んでないけど、魔法史にもそう書いてあったんだよね……。」

パンをちぎって一口食べる。

相変わらずこの食事は美味しくて、沈んだ気分も少しは浮上する。今日は洋食風だが、勿論和食風のときもある。

味噌と醤油と米を広めた竜殺しの英雄はとても素晴らしいと思う。その博識っぷりが彼がオタクであったであろうことを尚更に裏付けるわけではあるが。

何はともあれ、美味しいご飯は人を幸せにする。

食事中に会話をしてはいけない、なんてマナーはこの国にはないので遠慮せず色々話しながら食事をする。

というのも、ナイルと一番会話が出来るのがこの朝食の時間だからだ。

今でも毎朝ギルドまで送ってはくれるけれど、あの時間は早々ゆっくりと話をすることも出来ない。

では私がギルドから帰ってきてからといえば、高位神官という謂わば官僚、国家或いは地方公務員であるナイルはいくら私の守護者であるとは言っても他に仕事がないわけではなく、残業とはいかないまでも結構遅くまで仕事をしているので話をする時間はあまり無い。私が望めば可能なのだろうけれど、出来ればそういうことはしたくなかった。

そんなわけで、朝は一緒に行動する時間が長いのもあってギルドに行く前に一緒に食事をするようになったというわけだ。

いくら仲良くなろうと思ったって、話もしない人とは関係の進展の仕様がなからね。

尤も、今日まではそれほど会話らしい会話をしていたとは言い難かったけど。

急に話をしようたって、何を話して言い分らないし、お互い、話の糸口をつかめずにいたというのが実情だと思う。

「この世界の人間が大人になれば魔法を使えない原因は主に保持魔力量にあります。」

一足先に食事を終えたナイルが教師モードで解説を始める。

今までの今までだから、微妙に他人行儀な距離感なのも仕方がない。時折、教師の一人として勉強を教えてくれているから、こういう話し方の方が彼にとっても楽なのだろう。

「通常魔法は自身が保持する魔力を使用して行使します。

しかし、渡り人と比べこの世界で生まれ育った生物はその保持量が低く、まず魔力の存在を感知するために必要な閾値に達するのに時間がかかるというのが理由の一つです。

一度認識さえしてしまえばその後はどんなに魔力が減っていても感知することが可能です。

しかし、少なすぎれば今度は魔法を行使するために必要な閾値に達せず、魔法を行使できなくなります。

つまり、ある程度以上の魔力を常に保持できるようになる大人でなければ魔法を行使することが出来ない、というのが真相です。

この辺りのことは魔法学の入門や概論に載っていますからそちらを読むと分りやすいでしょう。」

時折頷きつつ、パンを食べ、スープを飲みながらナイルの解説を聞く。

人の話を聞くときは物を食べてはいけません、とか小学校で習ったような気がしないでもないけど、まあそもそも食事中の会話から始まったのだし、問題はないはずだ。

彼も気にはしていないようだし。

第一、今手を止めたらギルドにつく頃は混雑が酷くなっていることだろう。

「渡り人の場合は、世界を渡る際に非常に大きな魔力を得るのが通常です。

貴方も潜在的な魔力保持量は非常に多いので、もしかしたら使用は可能かもしれません。」

……え？

喉に詰まりそうになったパンを慌てて牛乳に似た何かで流し込む。

「つつ、私でもっ出来る!？」

「可能性はあります。」

「試してみますか？」

「試す！」

「試す、今すぐにでも!!」

思わず前のめり気味に叫んだ私にナイルは苦笑しながら言う。

「今すぐは無理ですね。」

その無常な一言に固まった私に対し、彼は言った。

「さあ、早く食事を終えないと遅刻しますよ。」

第3章 (4)

「そんなに不貞腐れないでください。」

「不貞腐れてなんかいません。」

必要はないと思うのだけれど今日もナイルと共にギルドへ向かう。以前はこの間全く会話もなかったのだけれど最近では少しずつ会話もするようになった。

街の人たちがそんな私たちの様子を微笑ましく見ているような気がするのはきつと気のせいだ、多分。

長くても3日で終わる仕事しかなくなってからは、継続の仕事がない週の頭には朝市のはけ始める頃に神殿を出るようにしているの、大路の混雑もある程度緩和されている。

朝市の時間に来てしまうと話をすることでではなく、そもそも並んで歩く事すら難しい。

急ぐでもなく、歩いていると市から帰る人々が私と神官に気付き皆声を掛けてくれる。

「おはよう、マレビトさん、神官様」

「これを持っておいきよ。」

「たまには市にも来てくれよな。」

残り物をくれたり、声を掛けてくれる街の人たちに挨拶を返しながらギルドへの道を歩く。

「マレビト様、神官様、1週間ぶりだなあ。」

「また風邪なんか引かなかったかい？」

以前、プラムのような果物をくれた八百屋のおじさんとは今では顔馴染みだ。

週の初めの日にはこうしていつもの場所で私たちが来るのを待っていてくれる。

特に、風邪をひいて以降は体に良いといわれる食材を色々持ってきてくれたりするのだ。

「ほら、これ持ってきたな。」

これは喉に良いんだ、風邪なんてひかなくなるぞ。」

「いつもありがとうございます。お代はおいくらですか？」

「持ってたのに、相変わらずだな、マレビト様は。たまには素直に受け取れっての。」

「最初に十分すぎるほど頂きました。今はちゃんと、お小遣い分くらいは稼いでるんですから！」

小遣い分くらい、というのが何とも泣けてくる話だが、それでも神威を借りて集るような真似はしたくない。

決して、相手にそんな気持ちにはなかったとしても。

「神官様も言ってやってくれよ。」

こっちは好きでやってんのに。」

「本人の意思を尊重するのが神殿のあり方だ。」

ナイルが言外に反対する気はないと告げると、八百屋のおじさんは

大げさな身振りでわざとらしい溜息を吐く。

「全く、二人揃って融通が効かねーんだから。」

と苦笑いをしつつも代金を受け取ってくれた。
おじさんと別れるとギルドはもう間もなくだ。

「それでは今日も頑張ってください。
但し――」

「「けして無理だけはしないように。」

でしょう？

もう、流石に分ってますよ。

あんなに寝込む羽目になるのは懲り懲りです。」

もはや耳タコになったその言葉を諳んじる。

いい加減毎日繰り返されれば腹の立つ言葉ではあるが、言い返すことが出来ないだけのことをしてしまった自覚は有るので暫くは受け入れるしかない。

価値観やその他様々なことが違うからといって、差し伸べられた手を跳ね除けるような真似はすべきで無い。

「大丈夫です。

無茶だけは絶対にしませんから。」

「分かりました、それではお氣をつけて。」

そういうとナイルはギルドの重い扉を開けてくれた。
ある意味、彼にはこのためだけについてきてもらっていると言える
のかもしれない。

「じゃあ、行って来ます。」

この時間帯はほとんどギルドに来る人がいないから、扉の前で話を
していても邪魔にはならない。

とは言え、限度はある。

だから、いつもはこれでナイルが帰るのだけれど、この日は違った。
私がギルド内に完全に入ってしまうと、ああ、そうだ、と声が聞こ
えた。

閉まりかけた扉に慌てて振り返ると、

「今日、帰りが早ければ魔法の実践をしてみましよう。
用意をしておきますので、楽しみにしていてください。」

え、と聞き返そうとした時には扉は閉まり、ナイルの姿はもう見え
なかった。

魔法の実践……？

間違いなく、そう言ったよね？

——どうしよう、仕事中、気もそぞろになってしまいう気がしてなら
ないんだけど。

第3章 (4) (後書き)

5月14日 誤字訂正。

第3章 (5)

入り口の前で固まっていた私を解凍してくれたのは、受付のお姉さんの一人、クレオさんだった。

「アトルちゃん、どうしたの？」

アトル”ちゃん”。

不意ながらギルドの一部における私の呼称だ。

「あ、えーと、大丈夫です。」

「そう？」

「はい。」

「じゃ、今日はお仕事にする？ 今日もご指名多いわよ。」

「んー、今日は早めに上がれるのでお勧めありませんか？」

「あら、珍しい。今日は何があるの？」

「ナイルが――」

「あのヘタレ神官が？」

何故かは知らないけど、クレオさんとナイルは余り仲が宜しくないようだ。

他のお姉さんたちはそうでもないのだけれど、クレオさんはナイル

の名を聞いたとたん声が凍る。

仲が良くも悪くもないならそんなことにはならないだろうし、浅からぬ因縁のようなものを感じるのは気のせいだろうか。

ま、よくは分からないんだけど。

それはともかく――

「やっぱり秘密です。」

「そう言われると気になるな。」

「明日になったらちゃんとお話しますよ。」

まだ魔法が使えるかも分からないし。

大々的に言ってしまうと出来なかったときが悲しい。

「わかったわ。楽しみにしてる。」

「あんまり期待しないで下さいね。」

「はいはい。で、今日は早めに上がる仕事だったわよね。いくつかあるけど、

そうね、お勧めはこの二つ。」

そう言って取ってくれたのは2枚の依頼書。

第3章

「……バルドウク家の子守。」

思わず顔が引きつるのを自覚する。

クレオさんは気づいているのかいないのか、恐らく気づいているのだろうけれど、気にすることなく話を続ける。

「そ。どうやら来ないだったので懷かれちゃったみたいね。出来るのなら貴方に来て欲しい、ってヴァシーが言っていたわ。」

バルドウク家の子供たち、既にギルドで働き始めている15の長男を筆頭に揃いも揃って美形揃いなわけだが、若干一名、中身は真逆のとてもないクソガキだったりする上に、他も何かと手のかかる子供たちである。

ヴァシーはその兄弟の母親。

そして、エグザードナのギルドの七大不思議に数えられているフェルディモータの奥さんで、滅茶苦茶美人で性格も良い。

何で彼女の子供があんなにも悪戯好きのとてもない子供になってしまったのか、それはまあ偏にフェルディモータのせいだろう、というのはギルドの総意だ。

そんなわけで、時折ギルドにも依頼は出ているが、不人気依頼のトップ10にランクインしている。

以前、そうとは知らず、依頼を受けてしまって後悔したのはまだ記憶に新しい。

肉体年齢がどうあれ、流石に小学校低学年の相手は疲れるわ。

彼らは、私の手には余る。

「それは、例えば時間外手当がついたって遠慮します!」

「それは残念ね。じゃあ、今日はこれかしら？」

口ほど残念そうな表情もせずに次の一枚を取り出す。
その用紙の依頼人はよく見覚えのあるものだった。

「あれ？これってここからの依頼ですか？」

「そう。脳筋ばかりのギルド員じゃ、中々ここの仕事って勤まらないのよね。」

「仕事内容は簡単な事務処理、必要能力読み書き及び単純な計算……。」

「いつもの子がちょっと今帰省中でいないのよ。だから、ほんの少しのお手伝いでもしてもらえれば嬉しいのわ。」

「もしかして、こっちの方が本命でしたか？」

「さあ、どうでしょう？」

「まあ、良いです。もう一度確認しますけど、単純な計算を含む事務作業で良いんですね？」

「ええ、やってくれる気になった？」

「良いですよ、ただ期限は今日を含めて3日間、それでも構いませんか？」

「勿論。」

「では、これで決定ですね。」

第3章 (6)

「つかぬ事を窺いますが、事務職の方が帰省されたのはいつですか？」

積み上げられた書類の束を前に、思わずため息が出そうだ。

「確か間もなく1月経つんじゃないかしら？」

「その間、誰が処理すべき書類の担当を？」

「皆で少しずつ、やってはいたのだけれどね……。」

何せ、私を含めてここにいる人たちのほとんどがギルド員上がりでしょ。

つまりは……。」

「書類仕事は苦手なんですネ。」

「残念ながらね。」

これが大蚯蚓サンドワームの群れだったならなんて事ないんだけど。」

あんたらも脳筋共のお仲間か、とは口が裂けても言えない。

大蚯蚓はエグザードナの外輪に広がる砂漠に現れる俗に言うところの魔物のような存在だ。

実態は、蚯蚓の名の如く土地を豊かにしてくれもするのだが、その反面、増えると家畜や畑の作物まで食べるために農村部を襲うので時折駆除される。

その巨大さと増えると群れる性質から、それなりの経験がないと駆除も大変らしい。

何せ確実にしとめなければ切った先から分裂するのだから。
閑話休題。

今日の前にあるのは大蚯蚓ではなく、積み上げられた書類だ。

「で、間もなく上半期の締め新时期になるのでこれを何とか処理したい、と。」

「そういうこと。」

少しでも遅くなったり、計算間違いがあるとミリーが怒るのよ。」

ミリー、誰の事だろうかと思うそばからすぐに思い出した。

ギルドに登録に来たときに支部長の部屋にいた若い女性が確かミリアナ・ファレルといった筈だ。

「……ああ、ファレルさんですか。」

「そ、あの娘可愛い顔して性格とってもキツイのよね。」

提出書類が期日に間に合わなかった上にミスがあれば誰でも怒るでしょうよ、ともやはり言えはしない。

やると決まったからには、腹をくくって取り組むしかあるまい。

「それでは、始めるとしましょうか。」

第3章

私が処理すべき書類は、ギルドで扱った、或いは現在扱っている依頼の詳細――依頼内容、いつ依頼されていていつ受理されたか、報酬、請け負ったのは誰か、依頼達成にかかった日数、報酬の支払い状況、損害などの有無、またその補償の有無など――を1日毎、1週毎、1月毎に纏めなおすという単純な事務作業だ。

通常こういう仕事は一介のギルド員に回ってくるべきではないと思うのだけれど、別段これといった守秘義務やらもなく、逆にこれで良いのか、と疑問に思う。

やってみれば分かることだが、個人情報駄々漏れだ。

例えば、依頼者を秘匿している依頼もいくつかあったりするのだが、これを見れば、それらも丸分かりである。

他にもギルドだけを収入源としている人の収入も分ってしまう。

勿論、言いふらすつもりもないから問題ないといえば無いのだが、何となく釈然としないものを覚える。

まあ、秘匿されている依頼者名は別としても、大概依頼内容が報酬金額と共に公に張り出されているわけだし、それを誰が請けたかなんてその場で見ていれば分る事で、そこから調べようと思えばギルド員たちの各収入なんて、やる気と根気と時間さえあれば誰にでも簡単に割り出せるのだ。

そう考えれば、隠す意味もあまりないのだと思いつた。

そもそもこの世界まだプライバシーの概念もほぼ無く、個人情報保護についても関心は低いようだ。

その一方で、様々な情報が金銭でやり取りされているのだから不思議なものだ。

それともそれ故なのか。

情報が金になるのだから何の利も無いところで好き勝手に喋りまわる、ということも無いのかもしれない。

とりあえず、全ての書類を依頼された順に日ごとにまとめていく。いつどんな依頼があったのか、それを調べて情報を収集していけば、農畜産業に関する仕事など季節性のものなどは来年いつごろ依頼が来るのか、どのような仕事にどれだけ需要があるのか、そういうことを知るのに優れた資料となる。

ギルドだとして持ち込まれる依頼を待っているだけではなく、積極的に依頼を請けているからこそこれだけの発展を遂げたのだ。

だからこれらの書類をまとめるのはギルドの経営上とても大切な事後の一つであるのだが……肝心のギルドの職員がこういう仕事を苦手としているってどうなんだろう。

揉め事があつたとき、それを現場の人が抑えられないのでは意味が無いから、それなりの技術のある人が表の職員を勤めるとしても、こういう裏方仕事の人はもっと事務仕事に強い人を入れても良いと思うのだ。

というか、入れなきゃ駄目だろう、これは。

支部長がこんな職場の割りに随分とオフィスワーカー系の雰囲気がある人だなと思ったが、ああいう人で無いとこういう職場を支えることは出来ないのかもしれない。

トップまで脳筋だったらまともな運営は難しそうだ。

第3章

途中、食事を取りながら書類をまとめて数時間。

切りいいところまで薦めて、今日の仕事はそこで終わりとなった。まだ半分も終わっては無いが、ある程度分類しまとめたので、少しはすっきりとした感じだ。

片付き具合に比例して私の脳の疲労度は高くなっているけれど。

やっていた事は単純な事務作業とは言え、これが意外と頭を使う。何より計算が面倒くさい。

何が面倒なのかといえば、この世界は10進法ではなく12進法が基本だと言うことだ。

初めての買い物のときも思わず間違いそうになったし、今でも気を抜くとつい10進法で考えてしまう。

だが、それでも、日本の義務教育と今ではほぼ義務といっても過言ではないくらいの進学率となっている高校での教育には感謝せねばなるまい。

既に卒業してから4年が経過しているが、計12年の教育期間は伊達ではない。

計算を続けるうちに慣れてくれば、特に問題なく仕事をこなす事が出来た。

もつとも、これも単純な四則演算のみに限られたことだからこそ、ではあるのだが。

疲れる仕事ではあったが、それでも久々の頭脳労働はある意味で心地よい疲労を齎した。

たまにはこういう仕事も良いと思う。

慣れない12進法のお陰で気を抜く事も出来ず、結果的に今夜試す魔法に気を取られて失敗する、という事も無かった。

漸く今になって魔法の事が気になって仕方がなくなってきた。

帰り道で転んだりしないように注意が必要そうだ。

帰り支度を済ませていると、丁度カウンターに見覚えのある顔が見えた。

珍しい時間に、珍しい場所で、珍しい人。

その人はいつもだったらこの時間にこの場所にはいないはずだ。

そしてそのカウンターには用が無い筈だろう。

よくあるRPGや小説でそうであるように、ここでも窓口のカウンターは用途別に分かれている。

分かれている、とは言っても郵便局の窓口が郵便と金融とに分かれているような程度の別れ方でしかないが、一応は依頼の発注と依頼の受注、後は換金などに分割されている。

小さな支部だとそういう区別は無いようだが、ある程度以上の大きさの支部ではそのようになっていくそうだ。

私はここ以外の支部を見たことが無いのでその真偽は不明だが、こんな事で嘘についても意味がないので真実なんだろうと思う。

そこ、依頼の発注のための窓口にいたのは”熱砂の風”のフェルデイモータだ。

依頼を受けるならまだしも、依頼をするだなんて彼には珍しいことだ。

何かあったのだろうか、と窓口の方へ行こうとして足を止めた。

そのままきびすを返し、裏口へと向かう。

どうやら、彼は今日は“熱砂の風”としてきたのではなく、バルドゥク家の家長として依頼に来ていたらしい。

その後ろには、この界隈でのクソガキの代名詞たる彼の2番目の息子、フェクトがうろうろしていた。

見つければ最後、何をされるか分らないというのはもう身にしみて分っている。

どうにかこうにか無事にギルドを抜け出し、帰路へと着いた。

なんだが、最後の最後で冷や汗をかく羽目になった。

第3章 (7)

神殿に帰り、食事も入浴も済ませ——よく噛め、ちゃんと温まれとエメラさんに怒られたが——、応接室の座ると足がつかなくなるソファに腰掛けて内心そわそわしつつ、表面上はゆったりと待っていた。

魔法が出来る、と言われた途端これなのだから、私はやはり精神的にはまだまだ子供の部分が多いのだろう。

成長してくるにしたがって、それなりに取り繕う事を覚えはしたけれど、地球で社会人生活を送ったことの無かった私のそれは、まだまだ見戯の範疇だ。

やって来たナイルと神官長は顔を見合わせて苦笑した。

隠そうとしたって隠しきれないのならいっそ堂々と、とばかりに挨拶もそこそこにナイルを呼び立てる。

その様に神官ちよ……：……：……：そういえば名前で呼んで欲しいと言われていたんだっただか、神官長もといツエフじいちゃん——この呼び方もどうかと思ったのだが、本人が気にいっているようなので何も言うまい——が笑みを深めるがそんなことは気にしない。

部屋の入り口で立ち止まられたら時間の無駄なのだ。

例え月が歩みを止めたって、エメラさんは就寝時間を遅らせてはくれないのだから。

自分でも子どもっぽ過ぎる態度だとは思ったが、もしかした自分で魔法が使えるかもというこの興奮を、地球の、それも21世紀初頭の日本に生きたオタク諸氏ならば理解してくれると信じてる。

部屋の中に入ってきた二人は、せかす私に促されて向かいのソファに並んで座った。

「お待たせしてしまったようで申し訳ありません。」

「前置きは良いから早く!」

子供——実年齢は違うが便宜上——の夜は短いのだ。

「それでは、まず簡単に魔法について説明します。

一通りの概論は読まれた様ですので、さわり程度ですが。」

そう言って、ナイルは本当に簡単な説明を始めた。

とりあえず、重要なことは魔法とは意思の力でなす世界の改変行為だと。

そう在るんだと強く認識すればするほど、はつきりと魔法として現れる。

魔力保持量によっても多少は異なるが、基本にあるのは意志の力だ。例えば同じくらいの魔力保持量の人が火を出そうと思った時、その思いの強さによってマッチの火程度しか出せない人から、火炎放射器並みの火を出す人まで随分と幅があるようだ。

そういった魔法そのものの解説から、例えるならば花火の注意書きに書いてあるような、「花火を人に向けてはいけません」的な「魔法を人に向けて放ってはいけません」というある意味で一般常識的な話まで、話は1時間弱ほど続いた。

その間、ツェフじいちゃんは今頃口を挟むほかは、隣でエメラさんと一緒にお茶を飲んでいた。

第3章

一通りの話が終わった後で、ようやくナイルはこういった。

「少し話が長くなりましたが、それでは実践にいつてみましょうか。」

「うん！」

「では、まずはやってみてください。」

「は？」

「言ったでしょう？」

魔法は意志の力でやるものだ、と。」

「うん、聞いたし読んだ。」

でも、こういうのってまずその魔力の感知とか、そういうのから入るんじゃないの？」

でもってやり方とか何とか教えてくれるものなんじゃないだろうか。トリップもののセオリーではそういうものだ。

で、主人公は大抵一発で理解したりする。

……うん、私にそれだけの主人公補正があるはずなかったよね。

「まずはやりたいことをはっきりと思い描いてみてください。」

あなたは水霊の加護がありますから、水に関連したものの方がやりやすいかもしれませんね。

ですが、加護と魔法はそれほど強い関係性があるわけでもありま

せんから、どんなことでもかまいませんよ。」

「じゃあ、とりあえず水を出す？」

と、空になったカップに目を向ける。

なみなみと注がれた、ではなく、喉を潤すのに丁度良いくらいの1杯の水。

そこにそれがあることを強く思う。

いつそのこと何処かの魔王様のように巨大な竜でも出来ればいいのだけれど、そこまでいくとしっかりとイメージできる自信がない。

しかし、自分ではかなり明確にイメージできたと思うのだけれど、カップの中身は空のまままだ。

「あれ？」

せめてカップ1杯の水くらいなら…と思ったのだが、どうやらそれすら無理らしい。

地味に落ち込んでいると声が聞こえる。

「やはり出ませんね。」

「……やはり？」

なにやら聞き捨てならない言葉が聞こえてきたような？

「他意は有りませんよ。」

ただ、確認をしたかったのです。

貴方と同郷である始源の魔法使いは誰から教えられることなく魔法の力を発揮したとのことでしたから、もしかしたら貴方もそうな

るのか、とも思ったのですが。」

どうせ私はチート仕様じゃ有りませんよ。

「では、私たちが実践して見せますので、よく見ていてください。」

言うが早いがナイルの掌の上に、小さな竜巻のようなものが発生していた。

「分かりましたか？

では、次はエメラやってみてくれ。」

分かった、って何がだ。

って、エメラさんも魔法使えたの！！？

「はい。それでは。」

エメラさんも当たり前のことのように、100円ライターの火力を最大にしたときくらいの炎をピンと立てた人差し指の先に灯していた。

人間ライター、これで貴方も火種要らず……？

なんかよく分からん言葉が頭に浮かんだ。

疲れてるのかもしれない。

「では、神官長もお願いします。」

ツェフじいちゃんは一つうなずくと、軽く上げた手で直径30センチくらいの円を描いた、と思った瞬間にはその手の動きに合わせどこからともなく水が現れ、手がそこを離れると同時に空中に水で出来た円盤が浮いていた。

魔法だ。

どれもこれも、初めて見るけど確かに魔法だ。誰も気負ったところもなく、どう見たって不思議で仕方がないそれを簡単にやってのけて、それを当たり間のことのように平然としている。

その様子を見ていてなんとなく気づいた。

彼らにとってはこれは当たり前のことなのだ。

魔法がない世界から着た私だから不思議に思うのであって、彼らにとってはこれは日常の一部でしかないのだ。

宙に浮いた水盤に触れると表面に波紋が広がった。

これは、よくできた3Dホログラムでも幻覚でもなければ手品でもない、現実にもそこにある物質だ。

意志の力で魔法を使う。

そのために必要なのは、具体的に思う浮かべることだけでなく、それが確かに現実として起こるのだ、という明確な意思なのだろう。出来るはずがないという否定は当然のこと、出来るのかといった疑問もあってはいけないのだ。

望んだ事象そのものが現実であると強く認識しなくてはならないのだろう。

そういえば、この世界に来て初めて見る魔法なんだな、と妙な感動を抱いた。

第3章 (8)

彼らはそれぞれに出した魔法を消した。

それが当たり前のこととしてなされることに、また私は感動しているとナイルが聞いてきた。

「どう思いました？」

どう、といわれても返答に困るのだが。

「すごい！」

本当に魔法だった。」

魔法を実際に見たことのない人間からすれば、それが一番の感想だ。今までフィクションでしかないと思っていたものが実在する光景、それはまさに未知との遭遇だ。

「そういえば、特に呪文やら何やらがあるわけじゃないんですね。意思で使う、と言われてもなかなか理解し辛かったんだけど。」

「イメージの補強のために呪文のように言う人もいますよ。」

たとえば、火よ出でよ、とこのように。」

そう言いながらナイルは炎を先ほどのミニ竜巻のように掌に出現させた。

「私の場合も確かに得意でない魔法は言葉にしたほうが出しやすくはあります。」

得意であったり、なれていれば特に問題ないことです。

ほかにも呪文でなく、魔法のときはついこうしてしまう、という癖を持っている方も意外と多かったりしますよ。

それをやらなくても出来るのだけれど、大体初めて魔法が使えたときにしていたことを験かつぎの意味を込めて行う人が大半ですね。ほかにも、知人にはある特定の魔法を使わなければいけない日の朝食は必ず同じものを食べる人なんかがあります。

とっさにやらなければならぬ時でも出来るんですから、別に前もって分かっている時に同じ食事を取る必要はないはずなんですけどね。

本人曰く、気分の問題だそうで。

呪文を使う場合も大体その程度の意味合いのこととして覚えておけば問題は有りませんよ。」

つまり、どうしても必要なわけじゃなくて、そうしたほうが気分的に成功しそうだから、と言うだけのものなのか。

「始源の魔法使いは小説や漫画の呪文を唱えることで魔法を使ったと伝わっていますから、そちらのほうがやり易いのかもしれませんね。」

「それは初耳。

一体どんな魔法を使ったんですか？」

あくまで概論でしかない教科書には、そこまで詳しいことは載っていないかった。

小説、漫画から取った、と言うことはやはりオタクか。

というか、ラノベ的な小説や漫画がこの世界に広まっているくらいだから、始源の魔法使いを含め何人もの日本のオタクがこちらに移植(?)しただろうことは間違いないんだろう。

たった一人の人間が広めようとしたって、早々広まるものではある

まい。

「それが、後に本人が後に黒歴史だ、と言ってすべての記録を破棄させたそうです。」

そのため今では誰も知る人はいません。

唯一、真相にたどり着いたのではないかとされる研究者がいましたが、この彼が黒歴史ゆえに記録を廃棄する、と言う文書を発見した方なんですが、黒歴史を暴露するわけには行かない、と言って結局研究自体をやめてしまったそうです。」

「佐伯氏のことですね。」

「そうです。」

ああ、件の本も彼の著作でしたか。

同類の誼で、とのことだったようですが、それ以降彼を越える研究者は現れていません。」

「自分にもしものことがあったら、ダンボールの中身を親が来る前に処理してくれ」、と同様の情けをかけたんだろな。

相手が故人だとしても、同じく異界に連れてこられたオタク同士、何か思うところもあったのだろう。

例えば死後だったとしても、黒歴史は暴露されたくはないものだ。

特に、一度は王位にまでついた人だったのなら、そういう気持ちは特に強かったことだろう。

でも、調べれば樹精人あたりなら誰かしら知っていそうな気もする。彼らは先祖代々の記憶を受け継ぐから、そのうち一人くらいなら知っている人もいるのではないだろうか。

まあ、興味は尽きないが、それは今度本で調べるか直接樹精人に尋ねてみればいい。

都合の良いことに樹精人の知り合いがいることだし。

「さて、始源の魔法使いのことはまた今度授業で取り上げるとして、もう一度、実践してみましようか。」

「……はい。」

さっきの失敗を頭の隅に追いやって、もう一度強く思う。

一応、イメージ補助のために何か言おうか。

水…美味しい水……。

よし、これだ！

「六〇のおいしい水！！」

何故かふと浮かんだのは某国内産ミネラルウォーター。

エ〇アンでもヴィツ〇ルでもクリスタル〇イザーでもその他なんだって良かったはずなのだが、どうしてこれだったのかは私にも分からない。

因みに、名前が浮かんだ割りに、実は一度も飲んだことはなかったりする、多分。

何せ生まれる前からあった商品だ、小さい頃に知らずに飲んでいたことはあったかもしれない。

まあ、それはさておき。

カップを指差しながら叫ぶと同時に、ちゅぷん、という気の抜ける音と共に紅茶を飲み終えたカップに水が湛えられていた。

紅茶の残りと混じって微妙に色がついているのは気にしない。

「……。」

信じてはいた、が実際にそれが形を成すのではまったく異なる。
成功したのだから信じていたのは確かだろう。
しかし。

「……うそお。」

思わず毀れたのはそんな言葉だった。

第3章 (9)

結果として、魔法で出た水は美味しかった。

魔法で生み出される門は、元は魔力だけれど、一旦形を持つと魔力に戻ることはないらしく、飲料可能なのだそうだ。

魔力に戻らないのであれば、先ほど彼らが消したのはどうやったのかと思えば、風や火は魔力の供給が絶えたので消え、神官長が出した水盤はなんと電気分解していたらしい。

少量とはいえ、水が一気に気体になったのなら、それなりの体積になったはずだが、そこら辺がどう処理されていたのかは私には分からない。

もしかしたら他の魔法も使っていたのかもしれない。

因みに、魔力で出した火は、火単体であれば魔力の供給をやめると共に消えるそうだが、何かに引火させた場合は代わりに燃焼するものがある為、消えることはないそうだ。

「そういえば、朝言っていた準備って何だったんですか？」

確かナイルは魔法を実践するための準備をしておく、と言っていたはずだ。

でも、今この部屋にあるのはお茶のセットだけだ。

「この部屋に結界を張るための準備です。」

「結界？」

「もしも貴方の魔法が暴発した際、回りに被害を出さない為の結界です。」

その必要はなかったようですが。」

「それって、暴発する可能性があったということですか？」

「かつて始めて魔法を行使した際に、それなりに大きな館を全焼させたマレビトがいらっしゃいました。

何処かに引火して延焼した、と言うわけではなく、一気に建物全体を燃やしてしまったのです。

マレビトは非常に多くの魔力を有しています。

それを自由に使えるようになるのは成人してからとはいえ、貴方がそれを暴発させない可能性がないわけではありませんでしたので。

」

因みに今もまだ張っていますよ、と彼は続ける。

部屋の外に4人の神官、そして中ではツェフじいちゃんがその維持を行っているらしい。

単なる好奇心でやってみたい、と言ったのだが、思った以上の大事になっていったようだ。

そこまでしなければ出来ないのであれば諦めたのに、と言えば、

「教えないままですと、先のマレビトのようにいきなり暴発する可能性もありえましたから、どちらにせよ遅かれ早かれ一度はやらねばならなかったことです。」

と、なんでもないことのように言われた。

第3章 (9) (後書き)

お気に入り登録数が200件を超えました。
いつもありがとうございます。
これから先もどうぞよろしくお願いいたします。

第3章

それにしても、と彼は続ける。

「まさか成功させるとは思いませんでした。」

「成功すると思ってなかったのに、結界の準備をしたんですか？」

自身もあまり自信が持てなかったのも事実であつたため、素直に疑問を口にすれば、

「備えあれば憂いなし、とは貴方の国の言葉でしょう。」

と返された。

「魔法が使えるようになるのは肉体的に成長しきってからです。

この国では成人こそ12ですが、魔法を使えるようになるのは大体10代後半からです。

貴方の実年齢は二十歳過ぎであっても、現在の見た目が子供であることを考えれば使えない可能性のほうが高かったんです。

ですが、貴方はマレビット。

魔法がこの世界に現れてから、マレビットで魔法を使えなかったものは今まで記録上には存在しません。

そして通常のマレビットは成人しているものでした。

ですから、貴方の場合はどうなるか分からなかったのです。

予想としては失敗か暴走のどちらかだろうと思っていました。

それも成功させた上でも暴走ではなく、制御不能になった末の暴走になるだろうと予想していたもので。

正直、その場合はこの結界で防げれば良い方だな、と思っています

したよ。」

「良かったですね、成功で。」

私にとっても、貴方にとっても……。

魔法は一度出来るとあとはいくらでも出来る性質の物のようだ。

空になったカップを見つめ、今度は無詠唱（詠唱と呼べる類のものではないけれど）で水を注ぐ。

……なんか、とっても地味な魔法だ。

何で私、あそこでもっと派手なのやろうと思わなかったんだろ。

ああ、派手なのはイメージしきれなくて無理って思っちゃったんだよね……。

野球好きの某魔王様みたいに派手な魔法を使ったら、あちこち水浸しできっと大変だったろう。

ふと、これならばどうかと思い、カップの水をそのまま小さい龍の姿に替えてみる。

あ、出来た。

私の稚拙なイメージでも案外うまくいくもんだ。

因みに思い浮かべた姿はDBの神龍ではなくて、某昔ばなしのOPのんでん太鼓を持った坊やを乗せたあの龍だ。

たった二人の声優で何年も続けたなんて凄いよな、とか思考が横道に逸れたりしても、そのままの姿で小さな龍はカップ上の辺りをグルグルと回っていた。

とりあえず試してみるだけだったので、再びカップの中に戻すとわずかな波紋を残してただの水へと戻った。

まあ、なんにせよ地味であることに変わりはないかったが、想像することこそが最も重要であり、魔法そのものはかなりの自由度が高いことだけは判明した。

細かいことは、これからの授業の中で少しずつ覚えていけば良いだろう。

そう思い、水を飲み干すと、私が試行錯誤にふけっている間、どうやら視線を集めていたことに気がついた。

「やはり、マレビトさまですな。」

とは神官長。

「どうやら、完全に結界は必要ないようですね。」

とナイルは席を立つ。

外にいる神官たちにもう決壊が必要ないと告げに行くのかもしれない。

エメラさんも驚いてはいたようだが、すぐにお茶のお代わりは要りますか、と聞いてきた。

職業意識の高い人だ。

喜んでお茶を入れてもらいながら、部屋に残る二人に尋ねてみた。

「驚いていらっしやいましたが、どうかしたんですか？」

「はじめて使う魔法で、あれだけ制御できるものはほとんどありません。」

「普通は魔力量にもよりますが、数秒維持するので精一杯です。形を変化させると言うのは、そう簡単に出来ることではないんですよ。」

二人それぞれに説明をしてくれた。

室内で試すつもりはないから高出力が可能かどうかはまだ不明だけれど、どうやら低出力での制御は上手いほうらしいと理解した。細かい作業は高度なものらしいから、それをもっと極めてみるのも面白そうだ。

第3章 (10)

魔法が使えるかもしれないと知り、喜んで。

年齢制限で使えないかもしれないと知り、落ち込み。

でも潜在魔力が多いから使えるかもと言われ、再度喜び。

実際使えて、なおさら喜び。

だが、結局私には派手な大規模魔法が使えないことを理解するのに、そう長い時間は必要なかった。

加護の有無がもたらす魔法への影響についてはいまだ解明されていないとのことだが、それでも基本的には加護がある属性の魔法は使いやすいと言われている。

ナイルのように土の精霊の加護を持ちながら風魔法が得意で更に火も使えると言う人もいるけれど。

強力な水霊、水竜とも呼ばれるアトルディアの加護を持つ私は水との相性が良いだろうとのこと、水の魔法の練習ばかりやっていた。室内では魔法で発生した大量の水の処理に困るからと言う理由で、大規模なものは行わず、週一度の休みの日を待って、広い中庭で挑戦してみたものの、見事に不発。

ならば、と少量ずつ出していった水を一つにまとめようとしたら、まとめて行く先から形を崩し始め、最終的には局所的大雨となって降り注いだ。

結果、どうせ水をまいてくれるなら、もう少し時間を考えていただきたい、と庭師の一人には怒られてしまった。

面目次第もない。

ユニットバスになれた日本人にはとても広く感じる共同浴場の湯船でさえも出来たのはお湯をすべて浮かせることだけ。

しかもある程度の高さを超えたら一気に崩落、あたり一面水浸しと

なってしまった。

そんな幾回の失敗を繰り返し、どうやらこれはどうにもならないことらしい、と理解するに至った。

これで私もチートの仲間、素敵な異世界ライフが待っている、と思っていた私の細やかな野望はこうして打ち砕かれた。

私程度はいくらでもいた、とまでは行かないが、やはり上限があるのが痛い。

身体が成長しければ、存分に潜在魔力を使いこなせるようになるはずだ、とナイルに宥められはしたが……。

私の成長スピードを考えると暗澹たる気持ちになる。

私が大人になれるのって一体いつのことだろう……。

自由に扱えるのはコップ1杯の水。

まあ、実際にはカップ10杯くらいまでの水でも扱いきれれるとは思いますが、それだけの水、あっても使い道に困るのでカップ1杯の水でいつも練習している。

私が他の人より得意と言えるのは少量の水を使った魔法の制御力のみ。

この町に暮らす限り、町の外の依頼を受けたりしない限りは、必要になることもないだろうけれど、何かあったときのために何か攻撃手段でもあれば良いように思う。

せめてウォーターカッターくらいは使えるようになりたいな、と言うのが今の私の目標だ。

間章 1

魔法と出会って2週間。

明日は休日という夜、いつもは朝まで目覚めないのに今夜に限ってふと目が覚めた。

喉の渴きを覚え、指先に集めたピンポン玉大の水球に口を付け飲む。まるで無重力空間で水を飲むかのようだ、この飲み方に最近ハマっているのだ。

叶うはずもないと端から諦めていたが、かつて懂れていたのだ、宇宙飛行士に。

喉を潤し直近の生理的欲求が満たされると、どうにも外が気になった。

無視して眠れなくはないだろうが、どうにも気にかかる、そういう感じだ。

とりあえず、もう一度布団をかぶってベッドに潜り込んでみる。羊を175匹まで数えたところで仕方ないな、と諦めてベッドを後にした。

客間の窓を開けると、むあつとした夏の夕立後に似た空気が入り込んできた。

こんな風に不自然に目覚めるのはすでに数回目だ。そして、こういうときは必ず……。

ああ、やっぱりいた。

あの夜と、その後もあった幾つかの夜と同じように、今夜もまたアカシエが花茶を用意して待っていた。

相変わらず神官長のところからティーセットを持ち出したらしい。
毎度付き合わされる神官長も気の毒なことだ。
呆れ顔で近づけば、

「遅かったな。」

と悠然とのたまう。

まったくいったい何時だと思っている事やら。

「毎度こうやっていきなり睡眠妨害しに来るのはやめていただけないか？」

せめて日のある時間に、それが無理だとしても、人をおとなうに相応しい時間と言うものがあるだろうに。

「だからこうして休日の前夜にしてやっただろう？」

確かに翌日の仕事の有無は重要だ。

前回そのようにしろと文句を言ったような覚えもある。

「それでも、せめて先触れの一つも出せないわけですか。」

「そうしたらお前は断るだろう？」

その辺を面倒に思う性格はすでに読まれている。
だが、それだけが理由でも内容で。

「それに、そんなことをすれば、否が応にも大事になる。
お互い、それは望むまい？」

それは事実なので反論の余地はない。

そんな人の関心を集めるような、それでいて利は薄く出費ばかりがかさんでしまうようなことを望もうはずもない。

諦念を込めてため息を一つこぼす。

明日はせっかくの休日で、魔法でいろいろ遊んでみようと計画を立てていたのだが。

まあ仕方がない、ここは腹をくくるべきだろう。

どうせ、目が覚めてしまった時点でこうなることは目に見えていたのだから。

「で、今日は何用ですか？」

彼のことだから何もない、と言うことはないだろう。

何か、確実に私に関係のあることを伝えにきたに違いない。

もし、まかり間違って万が一にもただ単に茶を飲みに来た、などと言ったらただじゃおかないぞ、と言う思いを込めてアカシエを見つめた。

間章

「いや、用と言うほどのことでもないのだが……一応忠告をしに、な。」

用がないなら帰れよな、という視線に気づいたか、途中でアカシエは言葉を換えた。

あの夜の「茶飲み仲間」発言は冗談だと思っていたのだが、時折こうして何の前触れもなくやってくるのだ。

しかも、気をつけないとのらりくらりとかわし続けて、散々雑談に耽り、神や神族（彼にしてみれば血の繋がった親類のはずだ）への愚痴をこぼした挙げ句に、最後になっておそらく本題であっただろう言いたいことを言うだけ言って帰っていくのだから手に負えない。王族とはそんなに暇なのか、と嫌味がたら聞いてみたこともあるが、暇ではないからこの時間に来ているのだろう、と返された。

暇ではないならいつそ睡眠時間にでも費やせばいいものを、とも思うのだが、彼もまた様々なストレスの発散のために来ているのだろう。

私の前にその役目を果たしていたであろう神官長に、それとなく感謝された覚えがある。

仕事の邪魔をされる回数と離宮からの苦情がが減った、と。

かつてはどうも神官長をからかいにくることでの鬱憤を晴らしていたらしい。

しかもそれは本来、宮で神族としての職務を全うせねばならない時間帯に抜け出してきたようだ。

こんなのが神の裔かと呆れるほかない地味な嫌がらせぶりである。

それにしても、彼が尋ねてこうすぐに本題を口にするとは珍しい。しかも忠告、とはどうにもイヤな感じだ。

腐っても鯛というのは失礼な言い方かもしれないが、曲がりなりにも彼は神族だ。

つまりそれは神の子（彼自身は道具といい慣わしているが）であると言うだけでなく、最高位の神官の一人であり、神の言葉を直接聞くものであるということだ。

「忠告、ですか？」

「ん？まあ、忠告というか警告というか、要は気をつけろ、ということなのだが、最近魔法を頻繁に使っているな？」

「ええ、確かに。」

隠し立てするようなものでもないので正直に答える。

大きな魔法を試すときなどは念のため結果を張って貰ったりしているので、神殿関係者に聞いたらすぐにわかることだ。

「小さいものはいいが、あまり大きなものは使うな。

できるのであれば小さなものも控えて貰いたいが、そうも行くまい。」

「理由を聞いても？」

折角見いだした楽しみだ、すぐに手放せと言われて出来ることではない。

「これは先に伝えておくべきだったのだが、まだお前は子供だから使えないだろうと思って油断していたのが徒となったな。

ほかのマレビットについてはさておき、お前に関しては魔法の濫用は生死に関わる。」

……。

「詳細をお聞きしたいのですが。」

どうも、これはいつもの単純な話ではなさそうだ。

間章

「詳細を語る前に、さて、魔力とは一体何だと思う？」

「何だ、と言われても魔法の素である、としか分かりません。」

「では、魔法とは？」

「世界を改変する力、でしたっけ？」

「まあ間違いではないが、世界を改変する過程とその結果が魔法と呼ばれるものの正体だ。」

改変そのものを行うのは行使者の意思だ。

魔力とはただの思いでしかない意思を形にするための材料、といったところか。

「意思」という「手」によって、「魔力」という「粘土」を捏ね上げ形作る、それが魔法だ。」

何で私は夜中に起こされてこんな話を聞いているんだろうか。

どうやら魔法の基礎的な話のようだし、これなら講義でも教えてくれるんじゃないのかとも思うが、そういう内容を彼がわざわざ言うはずはない。

とするならば、このことはあまり一般に広く知られていることではないのだろう。

「で、それが私の生死とどう繋がってくるんですか？」

だが、それでも今の私に必要なのはその一点に尽きる。
まだるっこしいのはあまり得意ではない。

出来ればスパッと最初に結論を言ってもらえれば助かるのだが。
魔法を使っただけとはいけないと言うのなら、明日の予定は空くが、それならそれで寝ていたいと言うのが本心だ。
睡眠時間は大いにこしたことはない。

「まあ、焦るな。」

「焦りはありませんが、出来ればさっさと要点だけ話してくれないかな、とは思います。」

生死なんて重要なことでちまちまと話を進められるより、一気に本題に入って足りないところを後から補うほうが精神的な負荷が少なくてすみますから。

順を追って、といわれるとなんだか真綿で首を絞められているような気分です。」

「順を追っていったほうが私にとっては楽なんだがな。」

「その分私にとっては苦痛です。
このままだと途中で飽きて居眠りするかもしれません。」

「……生死に関わるのか？」

「最後に要点だけ聞けばそれで良いじゃないですか。」
ストレス対処法には逃避という素晴らしい物があることを知らないのだろうか。

「仕方がないな。
話を聞いてもらえないのであればする意味もない。」

「そういうことです。」

「要点だけいうならば、お前自身が魔力の塊でまだ状態が確定してなくて不安定だから、下手に大きな魔法を使おうとすれば、暴発して身体が崩壊しかねない、ということだ。」

「そうなった場合、この街だけでなく、この国の大半を道ずれにするだろう。」

「あまりに例えが大きすぎて理解しづらいのですが。」

「以前、お前の体は作り変えられた、といっただろう。」

「覚えているが、うなずくにとどめる。」

「確かあの時は再構築、という言葉を使っていたが、意味はそれほど変わらないのでそのことだろう。」

「それを成しているのは何だと思う？」

「……まさか、これも魔法ですか？」

「意思により世界を改変しているという点では同じだ。」

「ただ、行使者が神であるというだけで。」

「そしてそれはいまだ途中だ、だからお前は子供の状態なのだ、と彼は言う。」

「再構築は今も続いているんだ、お前の中で。」

「そう言われてなんとなく理解できた。」

「体を作り変える、それは確かにある意味では世界の一部分を改変す

るのと同じ意味を持っている。

生き物だとして世界の一部なのだから。

魔力を使って、私の体^{せかいのいちぶ}を作り変えていく。

確かにそれは、魔法だ。

そして恐らく、そのためには大量の魔力が消費され続けているに違いない。

「私が魔法を使うと、私の体になるために使われるはずの魔力を使ってしまうことになるんですね？」

「そういうことだ。」

良ければ、成長が遅れるくらいですむが、下手をすればそのため
に供給され続けている魔力すべてを暴発させることになりかねない。

」

「だから、死にたくなければ魔法を使うな、と。」

暫し考えるようなそぶりです、慎重そうにあかしえはくちを開いた。

「使うな、とまでは言わないが……先日のように多くの魔力を使う
ような魔法はやめるべきだろうな。」

ただの不発で済んだから良かったものの、それでもその分の魔力
がお前から失われたのも確かだ。

あれで、10年は成長が遅れることになるくらいの魔力は無駄に
したぞ。」

彼が言っているのは、庭で巨大な水の龍を作ろうとして失敗したと
きの話だろう。

1回目が発で、2回目は途中で崩れてしまった。

あれで10年分の成長が遅れるのか……。

確かに体から何かが急激に減っていく幹事はしたけれど、まさかそんなことになるだなんて。

「分かりました。」

魔法を使うのは諦めます。」

大人になれば使えるのだというが、今使うことでその大人になるための期間を更に延ばしてしまうというのなら、今は諦めるのも一つの手だ。

「そう極端に考えることはない。」

それほど魔力を使わないようなものなら、多少は使っても大丈夫だ。

食事や呼吸でも魔力は摂取できるからな。

その範囲内で使う分には問題ないぞ。」

「そうなんですか？

でも、最初に言ってたじゃないですか、魔法が使えないと思って油断してたって。」

「使えるようになったものを取り上げられるのはつらいだろう？

知らなければ、それが一番だったことに違いはないが、だからといって問題ない範囲まで諦めることもない。」

間章

特に地球生まれの人間は魔法に対し強い憧れがあるみたいだしな、と彼は続けた。

「じゃあ本当にこれから使ってもいいんですか？」

「構わない。

だが、限度があることを忘れてはダメだ。

最悪はこの国を巻き込んだの崩壊だが、多少成長が遅れるだけならまだしも、また倒れることにもなりかねん。

そうなればあらかじめ危険性を知らせなかった、と言うことで私が口煩く言われることになるからな、気をつけて使ってくれよ。」

前半は本気の言葉なのだろうが、後半は冗談だか本気だか分かりにくいことを言ってくれる。

普通ならば、場を和ますためとか、気を軽くさせるためとかもありえるだろうが、彼の場合は本気である可能性の方が高いように思えてしまうのは何故だろう。

「ああ、そうだ。

もし、どうしても強力な魔法を使いたいと思うなら、アトルディアの元を訪ねてみると良い。」

「アトルディア？」

今は私の呼び名でもあるそれは、本来は水霊の名だった。

「たまには人の言葉を素直に聞いてみることだ。

きつと、いいことがある。」

そこまでが彼の話したい本題だったようで、話が終わったのならと部屋に戻ろうかとしたのだが、気づけば結局はいつものごとくさまざまな愚痴を聞かされる羽目に陥っていた。

そんなわけで当然のごとく、翌朝は寝過ぎし昼過ぎに起きていけば、神官長ことツエフじいちゃんに労われ、お菓子をもらった。

……あの人、絶対私が本当は大人だってこと忘れてるだろ。

規模の大きな魔法は当分使用禁止ということだから、ちまちまと細かな魔法の研究でも続けることにしてみるか。

いつか行くといい、と言われたアトルディア（そこに住まう精霊の名であり、その滝の名でもある）は今の私に行ける場所ではない。

ギルドにはレベルなんていうものはないが、街の外に出るには一定以上の実力が在ることを認められなければならないのだ。

今の私では護衛を雇わなければ、街の外へ出ることは出来ない。

大規模魔法だって出来るようになった何かに攻撃したい、とか言う願望があるわけでもない。

ただ、使えるものなら使ってみたかったというだけの事だ。

私に加護を与えた奇特な精霊に出会う日は、まだ暫くは遠い日のこととなりそうだ。

第4章 (1)

「えーと、50円玉みたいなのが青銅貨で1ベクで、穴の開いた10円玉みたいなのが、半銅貨で6ベク、10円玉みたいなのが銅貨、12ベク、と。」

何をしているかと言えば、通貨の勉強だ。

実を言えば、今まで通貨のことをよく分からないままだったのだ。

ありえないような話だが、言われるままにどんな形のコインを何枚、と支払いをしていたのだ。

めったに買い物をしなかったのと、たいていそばに人がいて、マレビットを騙そうなんて人がいなかったおかげでそれで何とかなっていたが、さすがにこのままでは不味いのでしっかり覚えようと、ある程度貯まったお金を出してみていたのだ。

第4章

青銅貨が最小単位に当たり、単位はベク。

白銀色をしていて、最初それが青銅だとは分からなかった。

銅貨になると単位はセクトになり、12ベク＝1セクトである。

因みにこの銅貨と半銅貨、銅貨とは呼ばれているけれど実際は銅の割合が高いだけでこれらもまた青銅なのだろうだ。

穴の開いた白銀色のものを青銅貨、穴の開いた黄金色のものを半銅貨、穴のない赤金色のものを銅貨と呼ぶのが慣わしらしい。

日本円みたいに単位が一定だったら良いのに、とも思っていたけれど、基本が12進法なので今となっては単位そのものがかわってくれるのは非常にありがたく感じる。

でないと頭がこんがらがりそうでおちおち買い物も楽しめない。

更に貨幣価値が高いのはまず一分銀。

これは銅貨2枚分と同じで2セクト。

その上の銀貨は一分銀12枚分で12セクト、ここでまた単位が変わり1パラと呼ばれる。

その上には金貨がありこれは銀貨12枚分に相当する。

再び単位は変わり、金貨1枚は1ユナである。

更にその上に大金貨という日本で言うところの大判にあたるような金貨があるが、これは通常流通しているものではないそうだ。

大金貨はその時々で作られる大きさが違うらしく、1枚あたりの価値もその都度異なるらしい。

決まっているのは、最低12ユナ以上の貨幣価値であるということだけのようだ。

日常生活の中では、大金貨はもとより、金貨も銀貨もあまり目にすることはない。

利便性から通常は一分銀まででさまざまな支払いなどが行われるの

だそうだ。

そのため、銀貨以上は流通量そのものが少なく、めったに出会うようなものではない。

日常に出会う職業の人たちがいるとすれば、それは街の外での危険な仕事を請け負っているギルド員たちが多く、そういう点からもギルドというのは子供たちからすると憧れの職業なのだろう。

尤も、ほとんどの人が成長過程でギルドに所属することを諦めていくだけでしょ。

憧れから12歳を期に登録はしても、街中での小遣い稼ぎに終始してしまい、結局街の外まで出られるようになるのは本の一握りなんだそう。

第4章

そう考えると、かなりの額の給付金をもらっていることが心苦しくなってくる。

ある意味での慰謝料も込みにはなっているのだから気にすることもないのだろうが。

話は逸れたが、さすがに知らないままなのは拙いとはいえ、どうして急に貨幣の勉強なんかを始めたかといえば、そろそろギルドからもらった報酬もまとまった数になってきたので銀行口座を作ることになり、その序にちよつといういろと買い物をする事になったからだ。

銀行まではナイルが付き添うものの、その後は自分で買い物をしてくることになっている。

まあ、所謂「初めてのお遣い」のようなものだ。

この年になってそんなことをする羽目になるというのも物悲しいものがあるが、致し方ない。

この世界にやってきて、大分私も諦めるということ覚えてきたようだ。

買い物をするのは文房具の類だ。

普段から生活費を国からの給付金に頼っているのだから、文房具くらい神殿からの支給品でも良いと思うのだが、どうせなら気に入ったのを買ってこいとのことなのでお言葉に甘えることにした。

尤も、学期や学年の問題もあるので実際に通うのはもう少し先になるわけだが。

貨幣について急いで覚えようと思ったのもそれが一因だ。

さすがに自分よりも遥かに年下の子供たちと一緒に学ぶのに、お金

のことすら知らないというのはあまりに情けなさ過ぎる。

そんなわけで、今までの報酬を数えながら復習をしていたというわけだ。

貨幣の数は5種、1円、5円、10円、50円、100円、500円という6種の硬貨を使いこなしていた日本人にとって覚えるのはそう難しいことではない：と思ったのだが、ここで足を引っ張るのが12進法。

安産でおつりを計算という高度な技法は当分使えそうにないということだけはよく分かった。

さて、現在の全資産といえば、一分銀30枚、銅貨5枚、半銅貨15枚、青銅貨が7枚だ。

つまり、2パラ6セクト＋5セクト＋7セクト6ベク＋7ベク＝3パラ7セクト1ベクとなる。

うん、ややこしい。

4ヶ月あまり働いて得たこの金額が多いのか少ないのか、自費で自活しているわけではなく、この世界の物価を把握すらしていない私には分からない。

それは今後、神殿からひとり立ちした後非常に困ることになるということに、漸く気がついたのは情けないことについて最近のことだ。だから、ナイルからの話は正直、都合が良かったともいえる。

いつもギルドと職場、神殿の往復しか基本的にしていない私には、物価を知る機会からしてなかったのだから。

これを期に、いろいろと一般的な人々の生活を学んでいくべきだろうなと考えている。

買い物をすること自体久々なので、当然、それを楽しむつもりだ。

遠足前の子供みたいに眠れないなんてことはないが、似たような心持で明日を楽しみにして、眠りに落ちた。

第4章 (2)

「さあ、ナイル行きましょう！」

朝食を食べ終わるや否や、早速出かける荷物を持って（準備そのものは既に昨夜のうちに終わっている）号令をかけた。
が、

「慌てずとも大丈夫ですよ。」

銀行が開くのは四の鐘が鳴ってからです。」

と、優雅にお茶を飲みながらナイルは言った。

神殿の朝は早い。

普通の人が始める2の鐘の頃には既にみな活動を開始している。ギルドは例外的に一日中開いているものの（通常通り、というわけではなく、夜の間は例えて言うなら郵便局のゆうゆう窓口のような感じらしい）、朝市を除けば一般人が働き始めるのも、普通の店が開くのも4の鐘である。

異世界でも銀行の融通の利かなさは変わらないらしく、4の鐘から8の鐘までしかやっていないのだそうだ。

これは、若干季節による変動はあるものの、地球の時間で言うところの大体9時から15時にあたる。

銀行システムを考えたのも始源の魔法使い本人ということだから、つい頭にあったイメージどおりに作ってしまったのかもしれない。

彼はネット銀行やコンビニATMの便利さを忘れていたのだろうか……。

今はまだ3の鐘も鳴っていない。

通りでナイルがいつもよりもゆっくりしているわけだ。

彼は私の貢献および世話以外にも神殿の仕事をいくつも抱えている。だから、普段は忙しそうにしているのだけれど、彼が最も優先されるのは私関連の仕事なので、今日は銀行へ行くことが最優先事項ということになる。

つまり、彼にとって今の時間はたまにしか味わえないゆったりとした時間ということなのだろう。

そんな彼を煩わせるのも気が引けたので、しぶしぶ客間のソファによじ登る。

行儀が悪いのは承知の上だが、靴も脱いで足も椅子の上にかけて深く座り込む。

やはり、日本人としては床に座る空間がないというのは幾分寛ぎがたく感じるのだが、これも異文化として受け入れる他ないことなのだろう。

いつか一人立ちした暁にはアウトラーシェンの数少ない昼職人が手がけたという和室付の部屋を借りたいものだ。

そんな密かな夢を胸に秘め、あと1時間ほどある待ち時間を読書でつぶすことにした。

今日の本はこれだ。

「魔物図鑑 アウトラーシェン…エグザードナ・アトルディア近郊」意外にこれが面白かったりするのだ。

不気味な生命体の数々が多色刷りの詳細な挿絵付で紹介されている。女性には不人気とのことらしいが、今後必要になるだろう知識を得るためという目的を差し引いてみても、まるで画集のようですらあるこの図鑑は十分楽しめる本だと私は思う。

幾分迫力には欠けるものの、携帯に便利なポケットサイズというのも嬉しい所だ。

第4章

本を読んだりお茶を飲んだり、時折言葉を交わす他はお互い気ままに時間を過ごし、そして3の鐘が鳴って暫く、そろそろ4の鐘が鳴るんじゃないだろうかという頃に、ナイルが漸く重い腰を上げた。

「それでは、そろそろ行きましょうか。」

本をいつも使っている肩掛けのバッグに仕舞い、ソファから降りる。部屋に置いていても良いのだけれど、銀行といえば待ち時間、というイメージが強いので念のため。

一瞬、その表紙に目を向け、なんとも言えないような表情を浮かべたナイルだったが、結局何も言わなかった。

いつもギルドへ行く時間より大分遅くに神殿を出る。

そういえば、週の半分をギルド、残りを神殿とそれ以外にどこにも今まで出かけたことが無い。

ギルドに行くのはいつもほぼ同じ時間だから、この時間帯に街に出るのは今日でたったの2回目であることに気がついた。

1回目はギルドに登録に行ったときのことだ。

前回買い物をしたのもそのときである（朝市のおじさん除く）。

「そういえば、銀行ってどこにあるんですか？」

いつもどおりの見慣れた、けれど少しだけ様子の違う道筋を辿りながら尋ねる。

ギルドへ向かうのと同じ道を通っていくということは、ギルドの先にあるのだろうか？

必要な場所意外にはまったくと言って良いほど出歩かないためか、

今までそれらしき建物を見たことはない。

だからこそ聞いたのだが、ナイルは不思議そうな顔をして私を見下ろした。

「ギルドの隣にあるのですが、今まで気がつかれませんでしたか？」

いーえ、まったく。

毎日よそ見してる余裕なんてまったくありませんでしたよ。

まったく持って、驚愕の事実である。

週の半分通っていた建物の隣に目的の場所があったなんて、今の今まで知りもしなかった。

大体表情で察してくれたのか、銀行についての説明を始めてくれた。

「銀行はもともとギルドが、始源の魔法使いが始めたものです。

多額の報酬を手にながら、その多くが定住場所を持たないギルド員たちの資産を安全に保管するというものがそもその始まりだったようです。

ギルドの規模が大きくなっていくに従い、融資なども行うようになり、やがては別個の機関として独立しましたが、最大の利用者がギルド員であることに変わり無く、今尚ギルドと銀行は強い繋がりを持っています。」

ああ、確かにそんなような話を講義でも聞いたような記憶が無いわけではない。

今、思い出したけど。

まだ貴方には関係の無い話かとは思いますが、と前置きをしてナイルは続ける。

「銀行組織は現在各国で独自の機関として成り立ち、通常は相互の

取引はありません。

しかし、ギルド員の中には一国に留まらず、複数の国で活動する者も多く、そういった場合国を移動したからといって銀行が使えないというのは困りごとです。

だからといって、資産を引き出し移動するのも手間がかかりますし、何より道中何も無いとは限りません。

そこで各国の銀行間を取り持つのがギルドです。

予めギルドで手続きをしておけば他国の銀行も、口座を作成した国の銀行と同じように利用することが可能となります。」

なるほど。

つまり、各国の銀行はギルドを通じて提携しているようなものか。

「この制度はギルド員だけでなく、各国を渡り歩く商人も利用していることが多いですね。

今では寧ろ、そちらの利用者の方が増えているかもしれません。

そういう理由で、元が同じ組織だったためと、どちらかといえばこちらの要素が強いかもしれませんが利便性ゆえに、大抵の場合ギルドと銀行は隣り合っているのです。

場所によっては、今でも同じ建物の中に併設しているところもあるのですよ。」

「解説ありがとうございます。

勉強になりました。」

「いえ、講義のときにもそのあたりまで詳しく説明しておけばよかったですね。」

いろいろ聞いてみると面白いものだなあ。

そうこうするうちに見慣れたギルドに到着。

そういえば週末にギルドに来るのはひたすらギルドに通い詰めだった最初の1ヶ月以来だ。

今日は週の末日なのだと思い出し、よくよく考えて見れば週末だろうが関係なく毎日やっているなんて、この世界の銀行の方が日本の銀行より融通が利くんだな、と思い直すことにした。

尤も、公休日という概念の無い世界と比較すべきではないのかもしれないが。

4の鐘はまだ鳴らない。

少しだけ、ギルドによっていくことになった。

第4章 (3)

「あーら、小憎たらしいクソガキのナイル坊やが何の用かしら？
とうとう神殿を首にでもなったのかしら。」

「相変わらずのようだな、若作り。」

年々化粧の腕も上がっているようで何よりだ。

だが、あまり表情筋を動かすと化粧が剥げるのではないか？」

「見た目だけじゃなくて口も達者になったようだけど、頭の方はどうかしらね。」

「少なくともお前よりはマシだろうな、脳筋女。」

「はっ。頭でっかちで剣の一つも持てないようなヘタレた男に言われたって僻みにしか聞こえないわね。」

一体これはどういう状況だろう。

ギルド内にナイルが入ったとたんに何故かいきなり頭上で舌戦が繰り広げられ始めた。

内容は子供の喧嘩レベルの悪口雑言の連発なのだが、それを行って
いるのは窓口のお姉さんことクレオさんとナイルの二人だ。
というか、こんなナイルは初めて見る。

これは本当にナイルだろうか、いつもの温厚な姿は特大の猫だった
のか？

いや、それ以前にこれは本物のナイルなのか？
偽者？

いや、でも、クレオさんの話し方だとこれが標準^{デフォルト}っぽい？
初めて見るナイルの一面にある意味で私は混乱していた。

なんとなく、仲悪いのかな、と以前思ったことはあったけれどこれは想像以上だ。

アトルちゃん、と呆然と二人を見上げていた私に後ろから小さな声がかかった。

振り向けば、ギルドにはあまり似つかわしくない感じが拭えない、ほわほわとした雰囲気的女性。

「こっち、こっち」

と、手招きされて向かったのはちょっと陰になってる休憩スペース。普段はギルド員たちの待ち合わせやなにやらに使われている場所だ。言われるままに椅子に座っていると、先ほどの女性がお茶を二つ持ってきてきた。

「あの二人、いつもこうなの。
始まると、暫くかかるからお茶でも飲んでましょう。」

第4章

未だ鳴り止まない応酬を聞きながら、お茶を飲む。

始めてみる光景に思わず固まってしまったが、何とか人心地ついた。

「びっくりしたでしょう？」

隣に座る、お茶を持ってきてくれた女性がそう微笑みかける。

なんとなくそのまま着いて来ちゃったし、お茶ももらっちゃったんだけど、そういえばこの人は誰なんだろう？

……あれ？

・知らない人についてはいけません。

・知らない人から何かもらってはいけません。

ふとそんな言葉が浮かんだが、とりあえず、気にしないで置こう。

これって、小さい子に言うことだし。

うん、私は大人だ。

だから（？）大丈夫だ。

それに、この人は私を知ってるようだし……。

知人の振りをする知らない人は特に危ないと、小学生の頃の担任の言葉が頭の中をよぎったが、気にしてはいけない。

そう、知らない人なら知ってる人にしてしまえば良いのだ。

まあ、さつきカウンターの向こうから飲み物持ってきたから、たぶん職員の一人なのだろうけど。

「びっくりしました。」

ところで、貴方は誰ですか？」

「ああ！

ごめんなさい。

そういえばこうして顔をあわせるのは初めてだったわね。

いつも窓口の裏から見てたから、つい初めて話すって事を忘れていたわ。」

やっぱり、職員の一人という予想は外れていなかったみたいだ。

「私はタクス・オルド。

いつもはこの事務をしているわ。

この間は私の休暇中に書類を減らしてくれてありがとう。

急に実家へ戻らなくちゃいけなくなったんだけど、帰ってからのことを思うと憂鬱だったのよ。

きつと、書類が山のようになっているんだろうな……って。

帰ってきてびっくりよ、予想の半分以下、それどころかほとんどがちゃんと私が手をかける必要が無いくらい整理されていたんだもの。

だから、ずっと貴方にお礼を言いたかったの。

なかなか時間が合わなくて言えずにいたのだけれど、今日来てくれて良かったわ。

本当にありがとう。

今後もぜひ手伝ってくれとうれしいわ。

いえ、もうこの際ここに就職しちゃわない！？」

オルドさんはほわほわとした外見にそぐわず、一息にそこまで言い切った。

肺活量すごい。

というか、この人が脳筋だらけのギルドを陰で支えている、いわば縁の下の力持ちだったとは。

でも、ここで働いているんだから、こんななりをしていてもやっぱり相応の実力者なんだろう。

人は、見かけによらないものだ。

第4章

ギルドへの就職話をそれとなくそらしながら雑談を続けること数分。未だ、ナイルは戻ってこない。

もしかして、今日ここにきた理由を忘れてやしないだろうか……。そんな考えが浮かぶも、こんなナイルを見れる機会などそうは無いので、折角だからと壁の裏側からこっそりと観察を続ける。

毎日顔を会わせているというのに、こういう面もあるなんてまったく知らなかった。

私の知っているナイルは仕事ばかりしてて、いつも小難しそうな顔をしてる、なのに私に対してはまるで小さい子を持った母のように時にウザイ程に甲斐甲斐しく、時に苛立つほどに過保護で融通が利かない、でも最後には折れてちゃんと話を聞いてくれる、そんな人だ。

アカシエと話をするまでは、ナイルが折れてくれるまで粘る前に、私が話を放棄することが多かったから言われるまで気付きもし無かったけれど。

でも、あの頃はこの世界の人たち皆が拉致監禁犯であるこの世界の神と同じようなモノにしか思えてなかったのだから仕方なかった、と言っても文句は言われまい。

まあ、まさか帰りたいと言った次の瞬間にその可能性を全否定されるとは思わなかったが。

逆にそう言われて吹っ切れたのは事実だ。

感謝すべきかどうかは知らないが、あれで一応腹は括れたし、それなりに公平にこの世界の人たちを見られるようになったと思う。

お陰でナイルと歩み寄ることも出来て、話もちゃんとするようになって、それで、何となく彼のことを判ったような気になっていたのだ。

こうして新たな一面を見せ付けられて、今更ながら、私は彼ナイルについ

て何も知らなかったのだと気が付いた。

「あの、オールドさん。」

「なあに？」

あ、私のことはタクスで良いわよ、もしくはタクスお姉さん、とか。」

ああ、ここにもエメラさんの同類がいた。

タクスさんと呼ぼうかどうか迷ったのだけれど、”お姉さん”のところをあからさまに強調し、期待たっぷりの目で見えるものだからそれを無視するのは流石に気が引けた。

「あ…えーと、タクス：お姉さん。」

「はいはい、何でしょう？」

満面の笑みで答えてくれるオールドさん。

まあ、本人が喜んでいいるのだからこれで良いんだろう。気を取り直して、改めて聞く。

「クレオさんとナイルって、いつもこうなんですか？」

「残念ながらね。」

あの二人って昔っからあなのよ。

何が気に食わないんだか、小さい頃からナイル君ってばクレオに噛み付いてばかりだったのよね。

クレオも放っとけば良いのにワザと煽る様な真似をして、気付けばお互い目が合った瞬間に聞くに堪えない言葉の応酬をするように

なっちゃったって訳。

ここ数年はお互いエグザダーダナを離れてたし、こんなことも無かったんだけどね。

あ、もともとクレオはこの国出身じゃないのよ、この国にはファ―っていうマレビトに付いてこの国に着ただけだね、何を思ったか数年前急に引退してここに居つくことになって。

そうしたら、去年ナイル君も祭都から戻ってくるって言うでしょ？昔から住んでいた人は皆思ったものよ。

「またうるさい二人組みが揃うのか」って。

一応、祭都でナイル君が修行を積んできたわけだからその成果にかけてはいたんだけどね。

結果はご覧のとおりよ。

街の住民たちのある意味では予想通りに復活してしまったの。」

あんな風にね、とオールドさんは壁の向こうを指差した。

第4章

ふと、オールドさんの言葉に引っ掛かりを覚える。
何が気になるのだろうかと考えてはたと気が付いた。

「あの、クレオさんて、お幾つなんですか？」

確かナイルは20年以上前に祭都の神殿へ行ったと聞いた。
彼はあれで30を越えているらしい。

誰がそんなこと信じられるかと、聞いた当初は思ったものだ。
何でも高位の神官、つまりはそれだけ資質があるということらしい
のだが、そうなるただの人間であっても、長生きなんだそうだ。
ツエフじいちゃんなんて間もなく200の大台に乗る、と言うのだ
からこの世界絶対おかしい。

まあ、それはさておき、そのナイルが小さい頃？

クレオさんは現役のギルド員としてこの町に、マレビトと一緒に訪
れた？

もしかしてそれは、ナイルが助けられたと言うマレビトなのだろう
か。

そんな疑問も出てくるが、今重要なのは、20年以上前に現役でギ
ルド員やっていたとして、当時が10代だったと仮定したとしても
――10代で国を越えられるはずも無いのだから相当無理やりな想
定だが――クレオさんは現在30代後半??

どう見ても20代にしか見えません。

しかも、これは相当無茶な想定だから確実に有り得そうな年代と言
えば、当時30代以上だと仮定するのが妥当だろう。

ここは世界が安定した地球とは違う。

かなりの実力のあるギルド員でも、最も状態が不安定な国境付近を
越えるのはかなり厳しいと聞いた。

護衛されてくるならまだしも、ギルド員として実力で通ってきたとなると、相当な実力者だ。

そこまで辿りつけるのは、神官と同じく適正が高く更にその適正を伸ばすべく長年努力していた人間だけとなる。

少なくとも人間種ならば最低でも30代でなければおかしい。

……となると、今あの人最低でも50代？

あの、小学生じみた言葉の応酬している片割れが？

でもって、何となく聞いてはいけないという本能に従って聞けずにいるのだけれど、その当時のことを懐かしそうに話すこの人も一体いくつだ。

ナイル“君”と呼んでいるところからして、ナイルより年上なのは確定だろう。

どうみても、オルドさんのほうがナイルより若く見えるのに。

……この世界、やっぱりおかしいよ。

結局、問いの答えは得られなかった。

いや、にこやかにふふふって笑ってるのって本当怖いんです。

第4章 (4)

「あ、4の鐘が鳴りましたね。」

質問についてはうやむやに誤魔化そうと思っていたところに丁度よく鐘の音が響いた。

「あら、何かあるの？」

そういえば、今日は来るはずの日ではなかったのにどうして？」

オルドさんも話題の転換については異論は無かったようだ。

「今日は銀行に用事があったんです。

で、少し早めについてしまったから少しギルドによっていこうか、と言う話になりました……。」

「そうしたら、あぁなってしまった、と言うわけね。」

「です。」

「それは、災難だったわね……。」

そんなしみじみと言われるとちょっと悲しくなる。

私だって、まさかこんなことになるとは思ひもしなかったよ。まあ、ナイルの意外な一面を知れたって事で良しとしとくか。

「あら、あちらも終わったみたいよ。」

オルドさんの声に促されて壁の向こうをうかがってみれば、ナイル

が私を探しているようだ。

自分が何をする為にここに来て、何をしてしまっていたか漸く気付いたらしい。

手を振ってみると、こちらに気付いたらしい。

あわてた様子でやってきて……。

「申し訳ありません。」

膝を付いて謝った。

膝を付いたのであって、跪いたわけではない。

彼が座った私に視線を合わせるにはしゃがまないと無理だと言うだけな話だ。

その身長が5cmでいいから欲しいと思うのは贅沢な望みだろうか……。

その姿勢がまるで騎士のように様になっているのもまたムカつくのだが、これは低身長に悩む人間の僻みだ。

「気にしないでいいですよ。

こうしてお茶も飲みましたし。」

そう言ってみたら、どうもお茶を飲みきるくらい時間を無駄にした、とても受け取ったようで再び謝罪しながら項垂れた。

平均身長よりも高いやつにいじけられても邪魔なだけなんだけど、とは言わない方が良くんだろうな。

そして、クレオさん。

いくら嫌いな相手だからって、笑って見てるのはどうかと思いますよ。

第4章

振り返ったナイルがニヤニヤ笑うクレオさんと再び舌戦を始めそうになったところを、オールドさんの助けを借りてさっさとギルドから脱出。

いったい、何しに来たんだろう私。

別にこそそとしてる必要は無かったわけだし、ついでなんだから明日の仕事を決めておけばよかったんじゃないだろうか……。過ぎたことはどうしようもないけど。

あの混乱した頭ではきつとまともに思考なんて出来なかったのだから、これはこれできつと良かった、そう思おう。

でないとやってられない……。

でかい図体で悄然としているナイルの手を引き——後見と言うならもう少し確りして欲しいものだ。ほんの少し失敗したからといつまでもうじうじ鬱陶しい。失敗したなら次で取り返せばいいだけなのに。——、ギルドから出て十数歩、そこが銀行だ。

そうと知ってみればこんな近くにあったのに、まるで今まで気がついていなかったのだから人間の目と言うのは不思議なものだ。

ギルドと同じような入り口の5段ほどの階段を上り、扉を開く……

ここもか、貴様!!

低身長の人間に対する嫌がらせか。

なんなんだこのいかにも中世欧州風異世界ファンタジーです的雰囲気
気の重厚な扉は!!

分かった、私ここに銀行があることに気が付かなかったわけじゃない。

あんまり雰囲気似てるから、多分ここをギルドの続きだとも勘違いしてたんだと思う。

元は同一機関だったと言うのだから、雰囲気が似ているのは当然なんだろうけれど。

とりあえず、扉の前で立ち往生していても仕方が無いので、引っ張るときにつかんでいた袖を下に引いて未だ俯き加減のナイルを促す。非常に不本意だが、これが一番確実だ。

「ナイル、着きましたよ。
開けてください。」

全体この世界の建築基準は間違っている。

銀行にお使い……に来る子供がいるかどうかは別として、もしいたとしたらその時どうしろって言うんだ!!

いや、そもそもまだ10歳に間もなくなるというフェクトが私より大きかったりするのだから、私が特別ちい……いや、そんなことは無い。

きっと親のフルデイモータが大きいからフェクトも大きいんだ、きっとそうに違いない。

この際、ローティーンまでは女子の方が成長が早いなんてことは気にしてはいけない。

などとあらん限りの文句をぶつくさと言っている間にナイルも立ち直ったらしい。

うん、自分より混乱してる人がいると落ち着いたりするよね、でもさ、開ける前に一言声をかけて欲しかったな。

どうして初対面の銀行員の方に生温い目で見られなきゃいけないのかな、私は。

もう少しいろいろ考えようよ、ナイル。

きっと、こういう気の回らないところもヘタレ認定の原因なんだろうな……。

第4章

「では、こちらに署名と拇印の捺印をお願いいたします。」

言われたとおりにサインをして、捺印する。

サインだけではなく、捺印が必要なところに創設者が日本人であることが感じられた。

これ、持つてゐる人なら印鑑でもいいらしい。

大抵の人は持つていないからか、聞かれなかったけれど。

尤も、この世界の印鑑は印鑑というより印章という感じだ。

細長い円柱あるいは角柱の底面に名前が彫つてあるのではなく、円盤形のペンダントトップの片面や管玉のような円柱の側面に動物や幾何学模様の意匠が彫られていたり、指輪に印面が彫られていたり、といったような。

そういえば、私がこの世界にくるときに持つていた荷物はどこにあるのだろうか。

記憶には無いが身一つでアトルディアの滝で保護されたということだから、滝つぼにでも落ちてしまったのだろうか。

あの中になら判子が、シャチハタでも機械彫りの三文判でもない、就職祝いに彫つてもらった判子が入っていたのに。

ああ、こんなことを思い出すとまた泣きたくなくなってしまう。

この世界で生きていくことを受けたつもりでも、まだ、こういう風に日本を思い出させるようなものを見ると、普段は忘れてゐる郷愁の念が蘇る。

何をしてでも帰りたいと思う気持ちが首を擡げる。

でも、その一方で、あの夜の話し合い以降、この世界が私が生きていく世界なのだという漠然とした確信のようなものが胸の奥底で熾き火の様に燦っている。

二つの相反する思いが拮抗している状態が、偽らざる現在の私の心だ。

「アトルディア様、口座開設の手続きは完了いたしました。

ただいま、通帳を作成しておりますので、暫くお待ちください。」

物思いにふけっている間に、銀行側の処理は終わったらしい。

捺印後にいろいろと記入した紙を持って席を離れていた銀行員がいつの間にか戻ってきていた。

銀行での手続きは、日本に居た頃と同じだった。

口座を作ったのなんて、大学入学時と就職が決まったときの2回だけ、しかも二つ目の口座には、結局口座開設時に必要な1000円ぽっきりしか入ることは無かったけれど……。

建物と人が日本とはまったく違うことを除けば、やっていることは同じことだ。

建物そのものはギルドに似ていたが、雰囲気が正反対だ。

ギルドを100倍真面目に、100倍堅物にしたらこんな感じになるかもしれない。

窓口は立って手続きをするギルドと違って、どこも大が低く、椅子が用意されている。

一つ一つの窓口がパーテーションで区切られていて、半個室状態だ。パソコンもコンピュータもない世界での、手続き処理時間がかかることへの当然の対応なのかもしれない。

一つ、手続きの中に日本とはまったく違うことがあった。

この世界にATMは存在しない為、暗証番号の設定をする必要がなく、キャッシュカードも無いということだ。

お金を入れたり下ろしたいときは、身分証明書と通帳を持って本人が窓口へ行かなくてはならない。

例え委任状を渡したとしても本人以外は認められない。

因みに、この身分証明書にも格があるらしい。

誰でも申請すれば取ることが出来るのが国が出している証明書、次にギルドが一般のギルド員に与えているギルド証、最後がより多くの功績を残し、且つ人品卑しからぬギルド員（選定基準に問題があると訴える人物は少なくない）にのみ与えられる特殊なギルド証と神殿が発行する証明書だ。

何と、神殿からの証明書の信頼度というのは最高ランクで、欲しいからって手に入るものではないらしかった。

だからこそ、ギルド本部長のエルド女史は神殿の後見が得られるのであれば利用するのが手だと言ってくれたのだろう。

今更ながら、女史の言葉が理解できた。

第4章

「アトルディア様、大変お待たさせ致しました。

こちらが通帳となります。

登録内容の確認をお願いいたします。」

通帳と言われて渡されたのは、日本の通帳よりは少し大きめ、バイブルサイズくらいの大きさの薄いノートだった。

薄いといってもこの世界での基準で、日本で一般的に使われているノートくらいの厚さはある。

1ページ目を開いてみると銀行名と支店名、口座番号があり、名義人の署名欄と押印欄があった。

更にページをめくれば預金のページとなっており、先ほど頼んだ金額がそのまま記されていた。

日本で作った通帳だと、貯蓄預金と普通預金のページがあったが、この世界の銀行ではそういう場合は通帳そのものを別にするのだそうだ。

誰もが貯蓄もする、というわけでは無いのだから、恐らくは紙の無駄遣いを防ぐ為なのだろう。

金額の確認まで終わると、丁度良いタイミングで最初のページへの署名と捺印をするように言われた。

銀行の通帳といってもこの国では公共の場においても本名を名乗ることはない為、名義はタキ・アトルディアだ。

名前を書き、指印をするとこれでひとまずは終わりとなる。

「失くされますと、悪用される危険性もございますのでお気をつけ下さい。

もし、万一失くされた際には、ご連絡をいただき次第、即座に口座を凍結いたします。

営業時間内であればこちらへ、時間外であればギルドへ、忘れずにご連絡いただきますようお願いいたします。」

「分かりました、ありがとうございます。」

なくすと悪用されかねない、というのは世界が変わろうとどこも一緒のようだ。

オタク仲間にも時々勘違いしているようなのがいたりしたが、異世界は決して理想郷^{ユートピア}なんかではないという良い証左だ。

紛失した場合の手続きのみとはいえ一日中対応可能だというのは、終日営業（あれは営業というのだろうか？）しているギルドとの提携あってこそだろう。

元が同じというだけでなく、そういう点でもギルドとの関係は切れるものではないのかもしれない。

なくさないように通帳をバッグの内ポケットにしまうと、再び銀行員が口を開く。

どうやらまだこれで終わりというわけではないらしい。

「他国における銀行施設利用申請の手続きはなさいますか？

今こちらで行いますと、先ほど身分証の確認をさせていただきましたので、手続きの多くを省略することが可能となりますが……。」

当然、この国どころか街を離れる予定すらないのだが、どうすべきかと迷っていると、今まで隣で静かに黙っていたナイルが口を開いた。

因みにナイルは後見人として確かに私がアトルディアであり、既に成人している（ここ重要！）ことを証明する為にわざわざ一緒に来てくれたのだ。

私の身長が、外見が年相応の人並みの姿であったならば、必要の無かったと思われる。

彼には余計な手間をかけさせてしまった。

「あつたほうがいいでしょう。」

今後急ぎで国外へ行くことになった場合、無いと不便ですから。」

「えーと、そういうことみたいですのでよろしくお願いします。」

「はい、承りました。」

アウトラーシェン以外でも銀行を使えるようにする手続きはただ数枚の書類に署名するだけだった。

これで漸く、銀行での全ての手続きが完了した。

さあ、次は久々の買い物めぐりだ!!

第4章 (5)

「では、私はこれで神殿へ帰りますが、くれぐれも気をつけてくださいね。」

「分かってます。もう子供じゃありません。」

「そうですね、しかし貴方が外見上子供に見えることも、身体的にも子供並みであることもまた確かです。

つまり、そう思って侮るものがある可能性があります。

この街の住人でしたら既にあなたのことを知っているでしょうから問題は無いでしょうが、この街とて閉鎖されているわけではないのです。

外から来たものにとっては貴方はただの子供と同じことでしょう。これから行く先で何かあるとは思いますが、少なくとも、自ら問題に首を突っ込むような真似だけはしないでくださいね。」

「私、確かに過去無茶をしたことは認めますが、流石にそこまで向こう見ずじゃないですよ……。」

「とにかく、無理だけはしないでくださいね。」

「分かりました。」

と、そんな風にナイルと別れてからまだ1時間と経っていないはずなのだが……。

「……どうしてこうなった？」

もちろん、さっきの会話でフラグが立っちゃって…なんて話ではない。

その方がある意味では良かったかもしれない。

少なくとも心労的な意味では間違いなく……。

「……本当に申し訳ない。マレビト様。」

そう頭を下げるのは大人と呼ぶにはまだ線の細い、しかし子供と呼ぶのは躊躇われるような、そんな微妙な年頃の少年だ。

肩口まで伸びている艶やかな黒髪がさらりと流れ、褐色のうなじが覗く。

頭を上げてくれるよう頼めば、深い藍色の瞳には謝罪と疲労の色が滲んでいた。

そんな彼に首根っこを捕まれて、ローティーンと思しき少年が暴れている。

少し赤味があった癖のある金髪に色白の肌、おとなしくしてれば宗教画の天使像のごとき顔を歪ませ、きれいな碧玉の毗を吊り上げて口汚く文句を言っているのは、言わずもがな、この近辺を代表する悪ガキの一人であるフェクトである……。

逃げ出そうとしているフェクトを押さえつけている、大人と子供のハザマの妙な色気を持つ背の高い少年の名はセム、フェクトの兄だ。そして、そんな兄二人のことなど我関せずといった態度——少なくともセムの疲労の一因ではあるはずなのだが——私の腰にしがみついて離れない、フェクトよりも小さな男の子。

セムと同じような黒髪に、色白の肌、彼らの母であるヴァシーに良く似た新緑の瞳、こちらも見ただけは可愛らしいが非常に手のか

かるバルドゥク家の末っ子ゼナウだ。

あまり色合い的には似ていない三兄弟だったが、これが両親共に揃うとそれぞれ引き継いだ特徴が見て取れ、家族なのだな、とよく分かる。

顔立ちも強大としてはそれほど似ている方でもないが、三人とも将来が楽しみな容姿をしていることは共通している。

だが、見た目に騙されてはいけない。

自らもギルドに所属しているセムは除くが、雑用系依頼を専門に遂行するギルド員たちの間でブラックリスト入りしているのが彼らの子守、という内容的にはどこにでもあるような依頼なのだから。

一度受けたら、二度と誰も受けたがらないと有名なその依頼は、セムが学校に通うようになった数年前からほぼ常時張られ続けているらしいとの噂だ。

ただ買い物を楽しみたかっただけなのに。

極悪兄弟二人組み＋αに早々に遭遇してしまうだなんて。

……本当、どうしてこうなった。

第4章

一度憑いたら離れない……まるで子泣き爺の如きゼナウを腰に貼り付け、現在買物続行中。

もれなく妙に色気を振りまいている美形の兄とこまっしゃくれたクソ生意気なガキがついてきます……って感じ？

付属品がセムだけだったらギルドのお姉さま方はさぞかし狂喜乱舞されることだろう。

小遣い稼ぎやらバイト感覚の少年達の中でもセムはギルドのお姉さま方の間で類を見ない人気ぶりだ。

両親ともそれぞれに美形だから当然のごとく美形で、更にそれだけでなく、母親の形質を強く引いているセムはこの町の中では異国情緒漂う、といった感じに見られるらしい。

まあ、私から見れば皆外人さんだけど、確かにそういうところ不思議な色気の原因なのかもしれない……。

明るい髪色、明るい肌の人が多い中で、鴉の濡れ羽色の髪に褐色の肌のセムは人目を引く。

好意的な目は多いけれど、それなりの苦勞もきつとあることだろう。例えば同年代の同性からの嫉妬とか……。

でもそこら変は今の私には関係ないわけで。

今一番何が言いたいかというと、重い。

引きずっているわけではないんだが、ゼナウが重い……。

子泣き爺とは恐らく育児疲れの母親の気持ちを妖怪化したものだったのだろう、という思いが湧いて来る。

これはヴァシーの依頼から逃げまくっていたツケが回ったのだろうか。

だけど急ぎってわけでもなかったし、継続希望なんていわれても体力的にまず無理だし、できれば他の仕事が出来たら私だってそっ

ちが良かったんだから仕方が無い。

子守なんて一見簡単そうでその割には高給だが、何と言うか……この兄弟に限っては割に合わない。

今でさえ立った数分しか一緒にいないのにこの様だもの……明日の筋肉痛は免れそうに無い。

はあ……。

思わずため息も漏れるというものの、仕方なし荷何度目かになる提案をゼナウに持ちかける。

「ねえ、ゼナウ。お願いだからちよっと離してくれないかな？」

しかし、見た目だけは愛らしい少年（というか幼児か）は手を離すことは無く、首を横に振るばかりだ。

もうこうなったら最終手段、とその場で勢いよくしゃがみこんだ。

急に手が下に引っ張られたことにびっくりして漸くゼナウは手を離してくれた。

離さないで転んでしまったらどうしようかと思ったが、一応作戦は成功したようだ。

急な動きだったのに、ゼナウの後ろに回りこんでくれていたセムに目だけで謝って、そのまま丁度同じ位の高さのゼナウと視線を合わせる。

どこを掴むべきか迷っているのかさまよっている手を握りこんで微笑んでみる。

決して嫌われてはいないと思うのだけれど、この子は一度も声を発してくれたことは無い。

とは言っても耳が聞こえていないわけではないようだから、言葉だけで通じないということは無いと思うけれど、それでも、言葉以外

でも伝わるように、その小さな手をやさしく握り締める。

出来る限り、きつく聞こえないように優しく言うよう心がけて。

「急にしゃがんで、ごめんね。

でもね、ゼナウが服を掴んでるとね、とっても歩きづらくて大変なの。

それに、今みたいに私が急に動いたらゼナウも大変でしょう？
だから、服は掴まないんで欲しいんだ。」

分かる？と尋ねれば悲しげな顔で、けれど今度は首を縦に振ってくれた。

「それじゃ、手をつなぎましょう？」

そうにつこり笑うと、一瞬びっくりしたような顔をして、それからゼナウもにつこり笑ってうなずいた。

ほんと、笑うと可愛い子なんだけどなあ……。

第4章 (6)

一つ問題が解決すれば、別の問題が目にくるのが人間ってものなわけ……。

一番の問題だった歩き辛さが解消されれば、今度は人目が気になってくる。

正直言って視線がウザい。

だが、道行く人たちを恨めしく思うのは悪かろう。

もしも立場が逆転していれば、私だってきつと見てしまうだろうか。

何せ、いろんな意味で有名（うち一人はその悪名故だが）な美形三兄弟が勢揃いしており、更にそこに容姿こそ並だがこの街ではもう知らぬ者は無いってくらいに顔を覚えられてしまっているだろう私と一緒に歩いて歩いているのだ。

これで目立たない筈が無く、当然のことながら、道行く人が皆振り返る。

一部女性陣からの秋波も送られてきているのだが、その対象となっているセムは気付いているのかいないのか涼しい顔だ。

この面子で買い物に行くのか……。

思わず、溜め息が出た。

「そういえば、なりゆきのまま私の買い物先に向かっているんだけど、大丈夫？」

買い物先に向かう途中でフェクトに絡まれ、ゼナウにしがみつかれ、そこに追いついてきたセムに謝罪され……という経緯だったのだが、彼らの予定も聞かぬままに自分の目的地へと足を向けていたのだ。とりあえず、決定権を持っていそうなセムに尋ねる。

「お：私たちは問題ありません。

母に頼まれて弟達に付き合っているだけですから。

弟も目的があったわけじゃないようですし。

夕飯にさえ間に合えば、どこへ行こうと結構放任なんですよ。」

ヴァシーさん、とうとう疲れちゃったか。

育児疲れの母に代わって弟の面倒を見てるだなんて、良いお兄ちゃんだな。

「長子^{キミ}も大変だね。」

「流石に、慣れました。

これでも、最近はマシになってきたほうなんですよ。」

これでマシって……子育てって、大変なんだな。

「ところで、マレビット様はどちらに買い物に行かれるのですか？

こちらですと、三の街寄りになりますけど……。」

どうやら買いに来る方向が間違ってるのでは、と言いたいようだ。

この世界には神王族を除いて貴族階級と呼ばれる存在はいない。

でも、一応階級と言うほどではないし差別も無いが、ある程度の区分はなされている。

一の街は神殿や離宮関係者、つまり神官や官吏、国家魔法士、騎士と言った人が多く住み、二の町には商業関係者などの所謂二次や三次産業の人々が、そして三の街には一次産業の人が多く住む。

家賃もまた一の街から順に安くなっていくし、そこにあるお店も売っているものの値段は同じように三の街が一番物価が低い。

私が通う予定なのは神殿から程近い、二の街にある学校だ。

学校と言ってもかつて日本の江戸時代にあったような寺子屋や手習

所に毛が生えたようなもののようにだ。

当然、通っているのも二の街や三の街の家の子供達ばかりだ。

そこに行くのに一の町で買物はないし、第一、支給されているお金で買うならまだしも、私自身の懐具合ではそちらのものには手を出せない。

その辺りを細かく説明するのも面倒だったので、とりあえず、方角を間違えてはいない、と言うことだけを伝えた。

「ん、こっちで良いの。」

毎日じゃないんだけど、もう少ししたら学校に通うことになったからね、その文房具とか買いにね。」

「学校、ですか？」

「そ、こっちじゃ街のことも国のことも何も知らない子供みたいなものだから。」

漸く、学校で学んでも理解できるくらいには最低限の基礎知識は身についた、って認めてもらえたんだ。」

「いえ、そういう意味ではなく、街の学校に通われるんですか？」

神殿や、離宮ではなく？」

「ああ。」

神殿や離宮の学校って、官吏や魔法士を目指したりする人のところでしょう？」

私、まだまだそんな知識ないから。」

魔法士を目指す、って言うのは面白そうだけど、自分の魔力も一部しか使えない状況では学ぶ意味は薄い。

それよりはある程度自分で勉強しておいて、肉体的に成熟し魔力を

全て使えるようになった暁に正式に学校で学べば良いことだと思う。
何年後の話かは分からないし、もしかしたら途中で気が変わるかもしれないけれど、とりあえず今はそれで十分だ。

第4章

「それと、別に私に敬語使わなくて良いよ？」

確かに、この世界の人にとってマレビトって特別なのかもしれないけど、私は生まれた世界が違うってだけのただの人間（実は違うらしいことを最近知ったがそれをいう必要な無いだろう）なんだから。」

「いえ、母から言い付かっていますので。」

うーん、なかなか頑なだ。

ギルドのオネー様方は軽くあしらってたのに。

「君のお父さんはいつも普通にしゃべってるよ？」

「……後で母に伝えておきます。」

「いやいや、別に責めてる訳じゃなくてね。」

それに、キミのお母さんだって、私を名指しで依頼を出してきたよ。

それはちよつと断っちゃったけど……。」

「そのこともあって、マレビトさまには礼を尽くすように、と言われてます。」

なぜ？

機嫌をとって今度は断らせないようにする為に？

「どうして？」

「あの依頼、本当の意味で成功してくれたのはマレビト様だけだったからです。」

聞いてみたら更に訳が分からなくなった。

「……いや、すごく大変だったけど、でも、ただの子守でしょう？」
フェクトの嫌がらせに耐えかねた人がいたとか、か？

「まあ、そう、なんですが……こう見えてフェクトはまだ良いんです。」

悪気が無いとは言いませんが、ただのいたずらの範囲で済みますし、飽きればそこで辞めますから」

そう言いながら、おとなしくしているフェクトに目を向ける。

ただのいたずら、とは言うものの、あれは気の弱い女性なら気絶しかねない代物だったのだが、彼にして見れば稚い悪戯に過ぎないようだ。

今はもう大分静かだが、これが飽きた状態と言うことだろうか。

ひたすら暴れまわった後はおとなしくなるなんて、まるで遊び盛りの子猫みたいだ。

フェクトのほうを向いていたら、セムが再び口を開いた。

「……はじめてなんですよ、ゼナウが家族以外に懐いたのって。」

「へ？」

意外すぎる。

可愛らしいが、泣き出したらものすごい子だったりしたんだが、泣

き止めばおとなしくて手のかからない良い子だった。
そう言えば、ゆっくりと左右に首を振って答える。

「いつもは、他の人がいる間中、泣き続けなんです。
だから、いつもギルドの人たちにはフェクトの面倒だけ見てもら
っていた有様で……。」

気付いたらなんか、誰に教えられたか悪戯の度合いがどんどん酷
くなっていつてしまってたんですね。」

最後の方は遠くを見たまま乾いた笑いがこぼれていた。
うん、やっぱりお兄ちゃんでもちよつと抑えるのが大変だったっば
いな。

と、いつの間にか人の目も気にせず歩いてきてしまったけど、も
う目的の店がすぐそばだった。

今回もまたエメラさんセレクトのお店だ。

そういう点ではナイルは役に立たないのは既に学習した。

だが……これは……。

一瞬、なんと言うべきか迷う。

だが、ここは一応確認を取るべきであろう。

「あのさ、セム。

私の目的地の一つ、一応ここだったりするんだけど……一緒に入
る？」

何と言うか、そこは、地球で言うところのファンシーショップ的な
ところだった。

こういう所、男の子って入りづらいんじゃないだろうか……。
フェクトはともかくセムは男の“子”というのにちよつと迷いがあ
るが、彼くらいの年齢になると尚更入りにくいように思う。

て言うか、エメラさん、何でここをお勧めに??

セム君は質問の意図を図りかねたように一瞬きよとした表情を浮かべた。

そういう顔も新鮮でいいね。

もしカメラがこの場にあつて、今の写真を撮っていたら、ギルドで高く売れたことだろう。

セム君は最初どこの店のことか一瞬分からなかったらしい。

まあ、確かに普段私が持っているものとはかけ離れている。

支給品だから贅沢をしていないわけではなくて、ただ単に華奢なものや派手派手しいものより、シンプルな実用品の方が好みだからなのだが。

だから、きっと目的の店がここだとは思わなかったのだろう。

私だって、多分、エメラさんのお勧めで無ければこの店に入る勇氣は無い。

女子力が地球にいた頃から低かった人間にこういうものを求めているいけない。

セム君、キミの予想は決して外れたわけじゃないんだ、文句があれば神殿へお願いします。

「お……私は、ここで待ってます。」

彼はしっかりと店を認識すると、一歩下がって遠慮してきた。

そんなに嫌か、と微笑ましい気持ちで思えばその彼の後ろであのフエクトでさえ首を高速で左右に振っていた。

うん、やっぱりそうだよ、セム君、おとこのこおとこの男の子はこういう所は入れないよね、男の娘でもなければさ。

どうでもいいけど、セム君さっきから何度か”俺”って言いかけてるよね。

普通に話してくれて良いんだけどなあ……。

さて、どういう理由でエメラさんがここをお勧めにしてくれたのかは分からないけれど、とりあえず入ってみましようか。

「ゼナウは一緒に来る？」

そう尋ねれば、無言のまま可愛らしく頷いた。

やっぱり可愛いなあ、可愛らしい子はその存在だけで和むよね。

フェクトなんかは慄くように己が弟を見つめていたけど、果たしてその余裕がいつまで持つことやら。

こんな少女趣味全開の店先に、何時まで二人で立っていられるのかな。

とても、楽しみだ。

第4章 (7)

中は、店の外装のままに少女趣味満載だった。

もちろん、日本と違ってこちらは完全手作り一品ものばかりだから趣が若干違うと言えば違うが、雰囲気はまさにファンシーシヨップそのものだ。

昔からどうもこういうのが苦手で避けて通ってきた為か、何とか尻の据わりが悪いような変な感じた。

ここは私が来るべきではない、と言う思いが沸きあがってくる。

それに釣られて、こういうものが大好きだった母が思い出されて腹が立つような悲しいような言い様の無い感情に襲われた。

幼い頃からフリルの着いたスカートだのを押し付けられそうになったり、もっと可愛いものを可愛いものを、と自分の趣味を押し付けてくる母と折り合いをつけられるようになるまで結構な時間がかかったものだ。

思い出せば今でも腹が立つのだが、それでも、もう会えない人なのだ、こちらとあちらの時間軸は大分ぐちゃぐちゃなようだから向こうが今どうなっているのか分からないが、私は生きているのに、決して将来母も父も看取ることが出来ないのだと、そういう遣る瀬無い気持ちに駆られるのだ。

両親だけではない、兄弟達や従兄弟たち、家族に限らず友人たちとも、もう二度と会うことは無い。

それが、溜まらなく悲しい。

フリルのついた可愛らしい商品の一つを手に取りながら動かなくなっちゃったしまった私の手を誰かが……いや、ゼナウが引いた。

つないだ手の先を見れば、心配そうな顔でゼナウが私を見上げていた。

そこで漸く、今はもう帰ることも出来ない世界に思いを馳せていたことに、まだ癒えることの無い暗い思考の淵に沈んでいたことが付いた。

「ありがとう、大丈夫。」

そう伝えれば、分かった、と言うかのように頷いて、強く手を握り返された。

実年齢で言えば20近くは慣れている幼子に心配されるなんて情けないにも程がある。

内心恥じ入りながら、手に取っていた小物を棚へと戻した。

ここは可愛らしい小物がたくさんある。

ノートも鉛筆もあるのだが、あまり趣味ではない。

基本的に、こういうお店のものはあまり好きではないのだ。

「ゼナウは何か欲しいものある？」

そう聞いてみれば首を傾げるばかり。

やっぱり小さくても男の子、フリルやピンクの花柄やらアクセサリーやはあまり好みではないのかもしれない。

私なんかより、ゼナウのほうがよっぽどこういうのが似合いそうなものになあ。

エメラさんには悪いけれど、ここで買うのはやめて次へ行こうかな、と思ったとき、ある棚が目についた。

そこには大小さまざまなぬいぐるみが置いてあった。

目を引いたのは、その中でも特に小さな、例えるなら携帯のストラップにでもなりそうな動物の縫いぐるみだ。

可愛いものが苦手だった私が、唯一気に入っていたのが縫いぐるみだった。

その中でも小さい頃特に大切にしていたのは大きな熊の縫いぐるみ。ティディベアのような高いものじゃなかった。

でも、どこへ行くのも離さず連れて行って、小学校に上がることはもうぼろぼろだった。

それでも手放さずにいたあの熊は、ある日家に帰ると部屋から姿を消していた。

そのときのことは、もう、思い出したくない。

ああ、でも――

「お前、こんなところにいたんだね――。」

あの頃の縫いぐるみとは別物だと頭では分かっている。

大きさから何から全て違うのに、気付けばその小さな灰色の熊の人形を手にとっていた。

これを勝ったら早く次のお店に行こう、と思ったら、ゼナウが何かを差し出してきた。

青い、いるかに似た縫いぐるみだ。

「それが良いの？」

聞けば嬉しそうに頷く。

予算的にも問題なかったので、それも一緒に買うことにした。

灰色の熊と青いいるかの縫いぐるみを並べて会計に行くと、お店のお姉さんが何か変な顔をしていたのだけれど、一体なんだったのだろうか？

第4章

店を出るときに、そういえばと外においてきた二人のことを思い出す。

彼らは一体どうしてる、だろう……か。

と言う問いに対する答えはすぐに出た。

なにやら見せの前が女の子だらけになっている。

言わずもがな、その中心にいるのはあの二人だ。

確かに買い物してるとき、他のお客さんがぜんぜん入ってこなかったことに気が付いた。

どう見ても女の子に人気そうな店なのに。

こういう訳だったのか……。

まあ、確かに評判の美形兄弟がこんな如何にも名女の子向けの店の前で手持ち無沙汰にしてたら、それは気にもなるだろう。

困っているのはよく分かるのだが如何せん、私にはあの中に割って入る勇気は無い。

女の嫉妬が怖いのはどの世界でも共通だ。

ここは彼らの犠牲に涙を飲んで、気付かなかった振りをして立ち去るとしたものでしょう。

だが、そうは問屋が卸さないのが世の中と言うもので。

さあ、方向転換するぞ、と思った瞬間目が合った、そりゃもうばっちりと。

助けを呼ぼうとしたであろう開きかけた口が閉じる、恐らくこちらに累が及ぶのを防ごうとしてくれたのだろう。

キミのその精神には感謝する、だが、何とか頑張って自力で切り抜けてくれ、と言う思いを込めてにっこりと笑って手を振ってその場を離れた。

頑張れよ、君らの犠牲は忘れない……。

どうやら、ギルドの屈強なオネー様方は簡単にあしらえても、同年代の可愛らしい女の子にはどう接したらいいのか分からないようだった。

どうやって切り抜けてくるのかな、と思って聞き耳を立てていたら、待ち人が着たので失礼しますという、ありがちな科白を叫んだのが聞こえた。

まるで探し人でもするかのように左右を見る振りをして、少しだけ後ろを振り返れば、女の子達のブーイングが起きている中弟を抱えて走ってくる姿がチラッと見えた。

うん、どうやら逆ナンもされてたっぽいね、良かったあの中に近づかなくて。

また少しだけ歩いて、再び人を探す振りをする。

漸く追いついてきた二人に今気がついたかのような振りをして合流した。

まあ、こうすれば少女達の群れには不審に思われまい。

子供一人抱えて数十メートル走ったのに息切れなしとは、流石フェルの息子ってことなのかな。

「どこ行っただのかと思って探したよー。」

白々しい科白を棒読みで先ほどと同じ笑みを浮かべて言ってみる、もちろん態とだ。

「いや、気付いてましたよね!？」

って言うか、目え合いましたよね、しっかりと!!

あの中に置いてくなんて酷いですよ、マレビット様……。」

「じゃあ、私にあの中に入っていけど？」

「いえ、そうは言いませんが……。」

徒党を組んだ女の怖さは彼も分かっているらしい。

「それにしても、ギルドのおねー様方をあしらうのは得意でも、やっぱり同年代の女の子には気が引けちゃうんだ？」

確認の為に聞いてみる。

「……どう扱って良いのか分からないんですよ。

なんかまともに話に通じてる気がしなくて。

それに俺がうかつに触ったら怪我しそうだし。」

「まあ、そうだろうね。」

困ってる、と言うよりは戸惑っていると言う方が適切だろうか。

男兄弟で回りに女の子がいないならそういうものなのかもしれない。彼の周りにいる女性ってヴァシーさんか近所のおばさんたち、もしくは屈強なお姉さま方ばかりっぽいし。

「それに対して、あの人たちなら、俺が全力を出したってかすり傷追わせられるかどうかって人たちですからね。

遠慮なく全力で抵抗できるってもんです。」

なんか良い感じにやさぐれてるな、そして大分口調が崩れてきたね。その調子でいってくれと良いな。

と言うか、軽くあしらってるように傍目には見えてたんだけど、そうか、あれ全力で抵抗してたのか……。

「悪いこと思い出させて、ごめんね。」

「いえ、未熟な俺が悪いんです。」

早く、父みたいになりたいのに……。」

おや、意外だ。

真面目っ子な長男は寧ろ、フェルを反面教師にしているかと思いきや。

それとも、私がおちやらけてるところばかり目撃しているだけで、真面目な時は真面目なんだろうか？

まあ、たまに会うだけの人間と、毎日会っている息子とでは視点が異なっているのも当然だよな。

「頑張って、ギルドの人たち皆期待してるから。」

それってつまり、皆セムきみになら出来る、って思ってるっていうことだよ。」

「そう、でしょうか。」

ギルドのお姉さま方が揃ってセムは良い男になるっていつてるんだから、間違いない。

少なくとも将来の婿候補として唾つけときたいって思うくらいには優秀なはずだ。

彼女達がただ単に見た目だけで男を選ぶわけが無い。

「もちろん。」

私も、期待してる一人だからね。」

私の場合は純粹に能力的な面での期待だけだね。

いつか郊外に出るとき、優秀な護衛となりうる人間が多いほど良いし、その相手が気心が知れてるなら尚良い、って言うだけの打算に満ちたものだけだ。

それでも、その期待だけは本物だ。

「ありがとうございます、マレビット様。
俺、頑張りますね。」

「うん、でも無理はしないようにね。
ヴァシーが大変になっちゃうから。」

「確かに。
早くこいつも育ってくれと良いんですけど。」

そう行って肩に担いだ弟を見る目は優しいお兄ちゃんの顔だった。

第4章 (8)

次に向かったのは普通の文具系の雑貨店だった。

何を持って普通とするかは人によるだろうけれど、少なくともさつきみたいな少女趣味全開のお店ではなくて、性別年代問わず利用できそうなお店だ。

よく言えばシンプル、別の言い方をすれば飾り気のない、デザインの商品が多い落ち着いた店内は、私の好みにあっている。

デザインが単純と言うことは手間も少ないという訳で、全てが手作業で作られているこの国ではこういったものの法が値段が安いのも嬉しいところ。

如何せん、この外見では似合わないと言われてしまうだろうけれど、今度はセムもフェクトも一緒に中を見て回っている。

セムも何か気になるものがあつたのか結構真剣に見ている。

意外なことにその脇でフェクトも普段の騒ぎっぷりがうそみたいに静かに文具を見ていたりするから驚きだ。

こういうところはすぐに飽きてしまうのではと思っていたのだけれど、杞憂だったみたいだ。

ゼナウは余程気に入ったのか、いるかの縫いぐるみを片手で抱きしめたまま、それに夢中になっている。

私とは言えば、地球にいた頃からこういう文具関係のお店は大好きだったから、久々の至福の時だ。

21世紀の日本では単なる趣味としてしか見られていなかった封蝋がここでは本当の実用品として売られているのだから嬉しい。使う予定はないから今日は買わないけど。

羽ペンなどのツケペンの数も豊富だけれど、やっぱり勉強なら私としては鉛筆が一押しだ。

わざわざインクをその都度つけて書くななんて面倒極まりない。

もつとも、プラスチック消しゴムがないから字消し能力は劣るみたいだが。

ボールペンはなくとも、万年筆くらいは欲しいものだ。

「マレビト様、決まりましたか？」

「あ、うん。

ごめん、ちょっと待ってて、買ってくるから。」

つついあれもいつか欲しいな、とかあっちの方が良いかなと眺めていたら既に関物を終えたらしいセムに声をかけられた。

セムの後ろではフェクトが紙袋を抱えて、早くしろよー、と言っているのが聞こえたがとりあえず無視の方向で。

大人気ない対応かもしれないが、そもそも渡し一人の買い物についできたのはそっちの方だ。

そう思えば、セムにも謝る必要なかったんじゃないかと一瞬思ったが、まあ一緒に行くことに同意したのは私もだしね。

そう、会計へと向かおうとした私をセムが呼び止める。

「あれ、ペンとインクは買わないんですか？」

必要かどうか迷ったが、結局買わなくて良いかな、と思っていたのでそれらは持っていなかった。

私が小学生の頃は鉛筆しか使ってはいけなんという変な校則があったくらいだし、特に必要性を感じなかったのだ。

だが、彼の様子を見るとどうもこちらでは違うようだ。

「やっぱり、有った方が良い？」

「うーん、俺が学校へ行っていたときはペンを使っていたやつの方が多かったですよ。」

卒業後も何かとペンを使う機会が多いですし、慣れるに越したことはないと思いますけど。」

確かに、神殿やギルド、銀行などに置いてあるのもツケペンが多かった。

この世界ではつけペンを使うのが標準なのかもしれない。

「じゃ、買うことにするよ。」

ありがとう、私だけだとしても何が必要なのか分かってないところがあるから。」

「いえ、お役に立てたなら何よりです。」

結局、シンプルなB5判くらいの無地のノートを2冊と、鉛筆数本、硬い砂消しみたいな消しゴム1個、それから木の軸にガラスのペン先が着いたガラスペンを2本とブルーブラックのインクを一つ買うことにした。

ペンは某魔法学校モノの映画に出て来そうな如何にもな羽ペンにするか悩んだが、長く使えるのはこっちだという薦めに従ってガラスペンにした。

万年筆はあることにはあったのだけれど、軽く予算オーバーする為諦めた。

私の荷物が見つければ、その中になら入っていたのに……。

思っても仕方のない考えがまたムクリと心の中で頭を擡げるのを振り払って店を出た。

第4章

文具店を出る頃には既に日は中天を過ぎていた。

買い物をしていて気が付かなかったが、どうやら昼時の終りを告げる七の鐘はもう鳴った様だった。

昼時の始まりである六の鐘から七の鐘までの間は町の人通りが幾分か減るのだが、今は既に活気が戻りつつあった。

静かに文具店を見て回れたのも、店の雰囲気というだけでなく街の喧騒が薄れていたお陰だったのかもしれない。

何事かに集中している間は忘れていても、思い出した途端に主張し出すのが食欲というもの。

まだ昼食をとっていなかったなと気付いた瞬間にお腹がすいたように感じるのだから不思議だ。

今日は一人で屋台街を巡ろうと思っていたのだが、彼等は食事はどうするのだろうか？

「そろそろお昼にしようと思うんだけど、三人はどうする？」

「私たちのことは気にしないで下さい。」

優等生な発言はセム。

「俺、ガレット食いたい。」

自分の希望を即述べたのは言わずとしれたフェクト。

そして、何も言わず、近くに出ていた人形焼きっぽい屋台、というか出店？を指差したのがゼナウだ。

これくらいの年のとき、私は食事は家か学校でするものだったからその裁量が子供に任されている、というのは不思議な感じた。

「えーと、神宮大路の屋台街に行ってみようと思うんだけど、どう？」

賛成が得られたので、とりあえずゼナウが欲しがった人形焼きだけ買おうと、神宮大路へと向かった。

因みにそのお金はセムが払った。

自分より一回り以上も下の子供に奢ることさえ出来ないなんて……。やっぱり、経済力って大事だと思う。

第4章

屋台街というのはこの街にある二つの大路に食事時に現れる出店の集団の通称だ。

一応郭城都市であるエグザーダナの南の正門からまっすぐ北に伸びる大路が神宮大路だ。

街のど真ん中にその大路を塞ぐ様に神殿が建ち、大路の北の行き止まりには離宮がある。

門から伸びる、神殿と離宮へ至る大路だから神宮大路とも、神族の宮に至る道だから神宮大路だとも言われているが、どちらにせよ単純なネーミングだ。

もつとも、そう思うのは私には言葉が日本語変換されているように認識されているからかもしれないけれど。

そして神殿を中心に十字を描くように神宮大路と交わり東西に伸びている大路が神殿大路と呼ばれる。

こちらの名前からすると神宮大路も“神”の“宮”に至る“大”きな“路”という意味でつけられた可能性は高い。

で、私が行こうと思った神宮大路の屋台街というのは神殿の南側に日中現れる屋台群で、酒類を置いた店は少ないが、様々な軽食や甘味などを扱う出店が集まっている。

この大路は本当に広くて、日本で言うなら片側4車線くらいで、中央分離帯が公園になっているような道路が一番近いと思う。

神宮大路も道の真ん中は公園のようになっていて、屋台街はそこに店を出し、たくさんおいてある椅子やテーブル、その他いろいろな場所ですぐに飲み食いして良いらしい。

昼時から夕方にかけて、勤め人や学生、家事を終えた主婦達、子供達、いろんな人たちが利用している。

花見や祭りの出店が毎日出店しているようなもので、雰囲気的にはファーストフード店とファミレスと駄菓子屋がごちゃ混ぜになって

いる感じと思ってももらえれば間違いはない。

今までギルドでの仕事の途中で通りがかったことはあったが、立ち寄ったことはなかったので、絶対一度は行って見たかったのだ。

神宮南大路（神殿より南が便宜上そう読ばれている、北は勿論、神宮北大路である）にある屋台街が、所謂”昼の”屋台街であり、日中屋台街といえはこのことである。

それに対し、”夜の”屋台街と呼ばれるものがギルドもある神殿西大路のそれである。

ギルドの周りはギルド職員やギルド員が暮らす寮や月極宿や更にはマンスリーマンション銭湯が数多くある。

勿論、彼らに自炊派がないではないが、肉体労働系に従事している一人身の男達が余り料理をしないということに世界の違いはない様で、そういう人たちが仕事帰りや風呂上りに食事に或いは飲みに寄れるよう、日没後に数多くの屋台が出店している。

中には持ち帰りや宿への配達をデリバリーやっているところもあるらしく、店の種類は昼のそれに勝るとも劣らない。

ギルド員のお姉さま方御用達の店や夜勤の時にデリバリーを頼む店など色々あるようだ。

私は大抵日没前に神殿へ戻ってしまうので生憎まだ屋台”街”と呼べるほどのものを見たことはないのだが。

エグザードナには二の郭の本街、つまりは東西の一から三の街のことでだが、そこにあるギルド本部意外にも、三の郭（広大な農地を有す、この街の食料庫である）やその外（エグザードナの街の外である荒涼とした砂漠だ、大概の魔物討伐系の依頼はこちらのものだ）などにもギルド支部が存在する。

そちらにはまだ行ったことがないのだが、やはり夜になるとギルド周辺の雰囲気は似たようなものになると聞いた。

いつかは行ってみたいとは思いますが、今はまず昼ご飯である。

第4章（後書き）

一部追記。

第4章 (9)

屋台街は昼時が過ぎたとはいえ、まだ人がたくさんいた。

男性の数はあまり多くないが、女性と子供、学生らしき雰囲気の人々がいたところで食事やお茶をしている。

あちこちの屋台から美味しそうな匂いが漂って、初めて来た私はどれを買おうか目移りしてしまう。

たこ焼き、クレープ、焼きそばといったよく見知ったものから（名前が同じだけで別物である可能性は否定できない）、ケバブっぽい別の名前をした何か、フェクトが食べたいといっていたものだろうガレット、とにかくいろんな国のいろんな料理が一堂に会した、といった感じがする。

中には、魔法で凍らせた果物を、その場で魔法で粉碎すると言う豪快なシャーベット（？）なんてものもあった。

こういう食文化の豊かさは、多民族国家ならではのと言えるんだろう。今はそうではなくても、かつて多くの日本人がこの地へ来ていたと言ふことには感謝だ。

お陰で私は食事に限ってはホームシックにならずに済んでいるのだから。

というわけで、異世界にいながらたこ焼き、焼きそば、焼き鳥と言う、一体どこの祭りに来た的なかんじになってしまった。

神殿では和食は食べられるがこういう日本的なジャンクフードは食事に出ないのだ。

私が懐かしさに釣られて買ってしまふのも当然……だよね？

野菜が少ないような気もするが気にしない、普段は野菜たっぷりの栄養バランスが取れた食事をしてるのだから、たまにはこういう食事だって良いだろう。

「タキ様」

マレビトと言うと人が一杯いる中では、ただでさえ目立っているのに更に目立ってしまうからと、頼み込んだ名を呼ばれて振り返る。セムが木陰のテーブルのところで手を振っていた。

「タキ様、こっちですよ。」

どうやらいつの間にか席を取っておいてくれたらしい。

本当、気の利く良く出来た子だ。

この世界では12歳で名目上は成人となり言動に責任が伴うようになるとはいえ、16でここまで出来た子も珍しいのではないだろうか。

だって、ギルドで良く行きかう彼と同年代と思われる少年達は、やっぱりもっと普通（？）の少年だったし。

私のほうが年上なのにはつきり言えば、負けている。

テーブルまで着けば今度は椅子まで引いてくれるしさ。

至れり尽くせり？

いや、神殿でも毎日上げ膳下げ膳の生活させてもらってるけども。

……この人たちって、渡り人を大事にし過ぎるあまり自立心を挫こうとしてやいないだろうか？

私が椅子に座ると、セムが飲み物をくれた。

木の器に入ったそれは、さっきも見かけた冷凍果物を砕いたものにジュースを注いだものようだ。

「どうぞ、タキ様。

これ、美味しいんですよ。」

「ありがとうございます、えっと、これいくらだった？」

飲み物はバッグに入れた水筒のを飲むつもりだったのだが、実を言えば冷たい飲み物が欲しかったのだ。

さっきはシャーベットしか売っていないものだとはかり思ったから買わなかったんだけど、飲み物もあったのか。

「いいえ、良いですよ。

ゼナウにそのガザトーガの人形を買ってくださったでしょう？

そのお礼です。」

「え？

ああ、良いのに。

あれも、お礼みたいなものだったから。」

「お礼、ですか？」

情けないのであまり痛くない内容ではあるが、いわねばきつと気に已むだろう。

そう思い、口を開く。

出来る限り、思いを乗せず、軽い言葉で。

「そう、お礼。

ちよっと気分が滅入ってクサクサしてて、なんだか悲観的思考のドツボにはまりそうになってたの。

そしたら、ゼナウが心配そうな顔で私のことを見上げてて、ハッ

としてこんな小さな子に心配かけちゃだめだ、って思っ

一人だったら、きっと完全に深みにはまっちゃったと思うから。だから、気にしないで、飲み物の値段、教えてもらえる？」

この外見じゃ説得力に著しく欠けるのはわかっているけど、それでも年上の矜持として年下に奢ってもらうことだけは避けたいんだ！と内心念じながら言ってみたものの、どうやら私にテレパスの素質はないようだ。

「なら、これもお礼です。

人形を買っていただいたことにではなく、弟達の面倒を見る手伝いをしてもらったことへの、俺からの礼です。

受け取って、頂けますよね？」

ここまで言われては、固辞するのは単なる意固地になってしまう。第一、そんな話を続けていたら、せっかくの料理が冷めてしまうし溶けてしまう。

いつか必ず何か奢ってやる、と堅く決意を決めながら、ありがたく受け取ることにした。

「そういうことなら、喜んで。

ありがとう、セム」

どういたしまして、と彼は笑った。

第4章

早速貰ったジュースを飲んでみたら、プラムのようなさっぱりした甘さのジュースだった。

シャーベット状になっているのはまた別の果物のようで、そちらはもっと甘い。

両方が混ざり合うことで、うまい具合に良い味を出している。

「おいしい……。」

「でしょう？

これ、ちょっと前からギルドに来てる学生達の間で人気なんですよ。」

セムが意味ありげな笑みを浮かべ得意げに言う。

「ギルドの学生にだけ？

こんなに美味しいの？。」

これだけ美味しいのなら、他の世代、特に女性たちにはもっと人気だと思っただけけれど。

そう思って尋ねてみれば、ここだけの話し、とセムは教えてくれた。

「実はこれ、どこのお店にも売ってないんですよ。」

「これって、あそこのシャーベット屋さんのじゃないの？」

「半分は、そうです。」

「じゃあ、もう半分は？」

食事をしながら話をきく。

うん、このたこ焼き、微妙に蛸が硬めだけど確かにたこ焼きだ。ソースも美味しい、マヨネーズがかかってればもっと良いのに。後、青海苔も欲しいな……。

「このジュース、ポーションなんです。」

「……はい？」

ポーション。

言わずと知れたRPGの必需品である。

大抵道具屋やギルドなんかで買えるアレだ。

この世界においてはギルドと言う組織を作った始源の魔法使いが開発したものだと言う。

一体、どれだけいろんなものを作れば気が済むのかこの人は、と話を聞きたびに思うのだが。

まあ、それはともかく。

「ポーション、ですか？」

あの、ギルドで売っている？」

「はい、あの、です。」

ギルドのそれは、かつてコンビニで売られた某RPGのそれ以上に不味かった。

瓶目当てに買ったがああ味は売り物としてはダメダメだろう…？

少なくとも、普通の缶の第2段が出たときにはもう買おうとは思わなかった。

話が逸れたが、まあ、ゲーム内のものの商品化とは違い、味は二次三の次、効果があればそれでよし、というものだからギルドで売るには問題ないのだろう。

味はともかくどのような効果があるのかといえば、アリ○ミンやらリポDやらと似たようなもので、滋養強壮疲労回復、といったものだ。

ただし、その効果ははっきりと目に見えるように現れる。

1週間徹夜した人が即座に回復するというのだから、実は危ない薬でも入っているんじゃないかと疑いたくもなるが。

良薬は口に苦しとは言うものの、その効果に比例するかのようあの不味さはあまりにも有名となっている。

「あの激マズポーションが、これですか？」

「やっぱりマレ…タキ様もそう思います？」

「だって、別物でしょう!？」

「いえ、そっちではなく。

まあ、別物なのは同意ですけど。」

「飲み方変えるだけで、こんなにも味が変わるものなんですか……。」

例えるなら青汁にアイスクリームを入れたらメロンソーダになりました、ってくらいには衝撃的な変化だ。

「尤も、その分効果は薄れますけどね。」

「効果が薄れても、これだけ美味しくのめるなら誰も文句は言わな

いんじゃないですか？」

「ええ。

今のところ誰も文句は言っていないですね。

俺達、皆でどうやったら味がマシになるのか、色々試したんですよ。

そうして苦節半年。

数多くの更に不味くなってしまったポーションを飲み干しながら完成したのがこれです。

なので、未だに俺達の間でしか知られていないんですよ。」

彼の話聞いて思い出すのは、高校のときの文化祭の準備の時や大
学時代の飲み会の雰囲気だ。

余った飲み物をごちゃ混ぜにして罰ゲームをするような。

たまに美味しい組み合わせになったりすることもあるが、大抵が飲
めたものではない。

彼らもおそらく似たようなことを繰り返し、そうしてこの味にたど
り着いたのだろう。

その苦労は、元のポーションの味を知っているだけに想像に難くな
い。

よくも味覚異常を起こすことなくここまで至れたものだ。

「そんな部外秘のレシピ、教えてしまってよかったんですか？」

「大丈夫です、美味しく飲む為の黄金比と言うものがありますから。
それからズレると逆に不味くなっちゃうんですよ。」

それなら確かに問題ないか。

「でも、美味しいでしょう？」

「ええ、美味しいです。」

「それじゃあ、マ…タキ様も俺達の活動に参加しませんか？」

「……活動？」

「ええ、学生ギルド員限定の活動があるんです。

これの作成もその一環でした。

もうすぐ学校に通われるのだと聞いて、それなら誘おうと思いついて。」

何処か腹に一物抱えてそうな笑顔を浮かべるセムは、最初の印象には程遠く。

やっぱりこの兄弟の兄か。

大変な弟を抱える苦労性の兄かと思いきや、なかなかにしたたかで面白そうな少年じゃないか、と私は早々に彼に対する認識を切り替えることにした。

第4章 (10)

結局、あれから全ての買い物を終えて神殿へと帰り着いたのは日が沈む頃のことだった。

セムは活動とやらの詳しい内容はまた日を改めてとしながらも、とりあえずはサークルや部活動に似たものなのだけ教えてくれた。

参加条件は学徒であり、ギルド員であること。

額とでさえあれば、その所属先はどこであろうと構わない。

現に、魔法士や官吏、神官を目指す者もいると言う。

但し、前任メンバーの推挙があることが絶対条件とされる。

もし興味があれば、学校に通い始めてからまた詳しい話をします、とセムは締めくくった。

ポーシヨンの味の改善などの他にも色々と手を出しているようだが、詳しいことは聞けなかった。

得体の知らない活動に参加するのは、ナイルあたりが良い顔ををしながら、気になる以上は学校に通い始めたら一度は聞きに行くべきかもしれない。

そんな話をしながらの、ちょっと眺めの昼食の後は残りの買い物だった。

正直言えば、これが私にとっては少しばかり困ったものだった。

今私が持っている服はと言えば、神殿から支給されている神官服やギルドに行く時に着ていく作業着、それから部屋着や寝間着が何着

かずつといった程度だ。

ギルドと神殿の往復し貸していなかった今まではそれでさほど問題はなかったのだが、学校に行くに当たっては流石にそれでは問題だろうと、通学用の服も見えてくるように言われていたのだ。

私は、服を選ぶのが苦手である。

日本にいた頃でさえ友人達に女としてそれはどうなんだ、と度々言われていたほどだ。

きれいであることに関心がない、と言うわけではないのだが、基本的に動きやすくて丈夫で着心地が良くて、然程派手でさえなければ、デザイン性はそれほど問わない。

そんな私にとって、デザインを優先させて服を選ぶと言うのは難行でしかなかった。

気が進まない私を救ってくれたのはセムだった。

事情を聞くや、店員さん（以前、エメラさんに紹介してもらい、ナイルと訪れたあの店だ）と話をしながらあれやこれやと様々な組み合わせを提示し、私の僅かばかりの好みの傾向も考慮し、更に選りすぐって、試着もさせられ、気付いたときには私は着回しが利きそうな服を数着購入していた。

……何が起こったのか、良く覚えていない。

何だか途中から店員のお姉さん達や子供服を買いに来た主婦の皆さまにもいじくり倒されたような気がする。

いや、多分、気のせいではない。

それもどういうわけか私だけでなく、似たような背格好のフェクトもまた……。

あれだけフェクトを苦手に思っていたのに、最後の方ではお互い、同病相哀れむといった感じにまでなっていた気がする。

「兄ちゃん、時々、こうなるんだ……。」

遠い目をしながらそう語ったフェクトの言葉が耳に残った。

いつの間にやらゼナウを背負ったセムと心なしくたびれた感じのフェクト、三人に送られて神殿に着いたのが日没前のこと。

迎えに出てきたナイルと共に三人に礼を言ったことまでは覚えていたが、気付けばこうしてベッドの上にいたというわけだ。

大きめの寝台の上にはバッグと服の入った包みが体の脇に転がっており、どうやら誰の手も借りず寝室まで戻ったものの、そのままそこに突っ伏したらしかった。

「ああ、まあ。

たまには、こんな日もあるよね……。」

とりあえず、荷物を片付けなくてはとベッドを降りる。

窓の外では中天に幾つかの月がかかっている。

帰ってきてから思ったほど時間は経っていない様で、そのことに安心しつつ、まだ少し頭がぼうつとするが、誰かが部屋に来る前に片付けてしまうことにした。

銀行で受け取った通帳を鍵の掛かる引き出しに入れ、服はクローゼットへしまう、ノートやペンを机の上に置き、一息つく。

机の片隅には小さな熊の縫いぐるみが腰掛けている。

その首にはレースのリボンが蝶結びされている。

自分が着る服となると実用一辺倒になってしまう私でも、可愛いものが嫌いなわけではない。

指先で熊の頭を撫でがら、かつて持っていた良く似た熊と同じ名で呼ぶ。

何だか今日はずいぶん濃い一日だった気がする。

いや、気がする、ではなく、非常に濃い一日だった。

神殿以外で、仕事ではなく誰かと長時間一緒に過ごしたのはこれが初めてだ。

一緒に食事もしたし、買い物もした。

買い物に付き合ってもらっただけじゃなくて、服を選ぶのも手伝ってもらった。

今までは知人でしかなかったけれど、もしかしくなくても、彼らを友達と呼んでもさしつかえないのではないだろうか？

ふと、そんな思いが過ぎる。

生きる世界が変わっても、新たな人との縁が生まれていく。

それはとても不思議なことだ。

私の小さかった世界が、少しずつ広がっていく。

この世界で目覚めたばかりの頃、一方的に友人認定した人を思い出す。

そういえば、あの人も熊だったな、と指先の人形を突付く。

彼は、どうしているだろうか。

色々まとまりのない、取り留めない思考が頭の中をぐるぐる回って、徐々に目蓋が沈んでいく。

机に突っ伏して眠っていた私を起こしにきてくれたエメラさんに、手に握り締めていた縫いぐるみが実は熊ではなくガッラ・アルケダ毒爪熊という凶暴な魔物であり、ゼナウに買ったイルカの縫いぐるみもシエラ・ガザトーガ嵐鯨という水棲の凶悪な魔物を模した悪趣味な人形であることを説明されるのもう少し後のことで。

眠りの淵に沈んでいた私が、この日、フェクトもまた学校で使う為の文具類を買っており、同期の入学になるだなんてことを知ったのは、初登校の前日のことだった。

第5章 (1)

「何で誰も教えてくれなかったんですか……。」

「いえ、もう知っているものかとばかり。」

「知りませんよ、なんで知ってると思うんです。」

「最近、バルドゥク家の兄弟と仲が良いと聞いていますよ。」

「悪くは、ないですけど……。」

確かにあれ以来セムとは良く話すようになったし、微妙に苦手間も拭えた事だし、と1回だけヴァシーの依頼を引き受けた。

その日のうちに後悔したが。

だから仲が悪いとは言わないが、決してそれほど良いものでもないと思うのだ。

「ですからてっきり本人から、もしくは御両親から話を聞いているのだとばかり思っていました。」

フェクトが同じ学校に入学すると言うことを。

ああ、何で朝っぱらから溜息つかなきゃいけないんだろう。

あの買い物から明くる日にギルドへ行ってみると、ヴァシーの依頼を遂行した事になっていた。

ヴァシーには泣いて喜ばれ感謝されたのだが、した覚えのない仕事の報酬を貰うのは変な感じだった。

最初報酬は断ったんだが、ギルド側からした覚えがないのに依頼を受理したことになるって、受け取らないのはギルドの信用にも関わるとまで言われては受け取らないわけにも行かなかった。

何だか報酬がずいぶん多いな、と思ったのだが、とにかく受け取るよう言われたし、その日の仕事を探す時間が惜しかったのでその時は流してしまっていた。

てっきり、ヴァシーの依頼と言うのが以前指名で出されていた兄弟の子守の件だと思っていたのだ。

それがまさか、「息子フェクトが学校へ行くよう説得する」なんていう既に二年以上前に出されたままになっていた依頼のことだったなんて思うわけがない。

つい昨日になって、タクスさんに、

「とうとう明日から学校だね。

フェクト君とも仲良くね。」

といつものようにほわ〜とした口調で言われ、一体何の話かと聞き返すまで誰も何も教えてくれなかっただなんて、あまりにも酷すぎる。

説得した覚えは全くないが、あの買い物日に何故かフェクトが学校へ行く気になり、どうやらそれが私のお陰らしい？

あの時渡しうが文具を買った店で、フェクトもまたセムに文具類を買ってもらっていたなんて、自分の買い物に夢中で気付かなかったよ！

なんか買い物袋持ってるな、とは思ったけど。

それ以後も何で誰も言ってくれなかったのかと思ったが、どうも察するに、ヴァシーさんが三兄弟には口止めをしていたっぽい。

クレオさんとの話の最中にギルドへやってきたセムが話の内容に気

付いて慌てて謝ってきたのでそういうことなのだろう。

「フェクトはどうも苦手なんですよ。
虫攻撃とかトカゲ爆弾とか、普通に庭を歩いたら落とし穴はあるわ。」

まあその辺は良いんですけどね、と続ければナイルが呆れた顔をしていたが、まあ、日本でも田舎育ちだったからそれくらいには耐性がある。

「最近はおとなしくなりましたんですが、もう最初といったらひたすら生意気なクソガキで……。」

喋り始めたら止まらないし、どこ行くか分からないし、何するか分からないし、何でそんなものが有るのか知らないけれど毒草食べようとしたり、本当、手が掛かって掛かって面倒でしょうがないんですよ。」

ああ、思い出すだけで疲労感が……。

「まあ、学校ですのその辺は大丈夫じゃないですか？
貴方が面倒を見るのではなく、同級になるわけですから。」

「それはそれでなんか癪なんですよね……。」

年下と同級とか。

義務教育がないこの世界では様々な年代が学校に入るから特に珍しいことではないと言うが。

とりあえず、ナイルはここで（神殿の正面玄関ホールのと真ん中で）

話を続けてもしようがないと思ったのだろう、話を切り上げて出立を促す。

「さあ、初日から遅刻するつもりですか。」

「はい……。」

「いってきます。」

もう、テンションが下がるのは仕方ないってものだろう。

「忘れ物はありませんね？」

「……大丈夫です。」

お前は私の母親か、と言う言葉を何とか飲み込む。

「それでは気をつけて。」

「寄り道などしないでくださいね。」

「分かっています！」

「そこまで子供じゃありません!!」

ああ、通りがかった神官さんや女官さんが笑ってる…。

もう、それもこれも全部フェクトとナイルのせいだ!!

自分の子供にしか見えない外見を棚に上げて、内心八つ当たり気味の声を上げて神殿を出た。

第5章 (2)

神殿から学校まではギルドへ行くのとは真逆の方向、神殿大路を東へ向かう。

大体、私の足で30分くらいのものだ。

学校とは言っても、小学校や中学校のように通学が義務付けられているものでもないし、高校みたいな大学へ行く為の繋ぎの勉強をするような場所でもない。

決まったカリキュラムがあるわけでもなく、どちらかと言えば私塾に近いものがあるかもしれない。

毎日通わねばならないものでもなく、習いたいものだけを習う人も多い。

最も多くの人が通うのが読み書き算盤（算盤と言うよりかは小学校低学年向けの算数と言った感じだ）と言った生活の場面で求められる基本的な事だ。

理科や社会のような科目はもっと細かな区分けになっているし、技術・家庭のようなことは基礎が学べるが、それらは専門に独立した学校などがあり、最初からそちらで学ぶものも多い。

他にも、専門の学校へ行くのではなく、徒弟として奉公に入るものも多かったりする。

また、将来目指すものによって進む学校も異なってくる。

神官や官吏を目指すものはそれこそ最初からそれ専門の学校へ通うことが多い。

いわばこの世界における公務員職であるとおもえばそれらに惹かれないわけでもないが、仕える相手が異世界^神への拉致監禁犯ともなれば興味も失せる。

それに、今私が知りたいのはこの世界のことであり、それを知るには市井に混じるのが一番手っ取り早かった。

だから、私が通うのは基本的なことを幅広く学べる、且つ神殿から

最も近い（こちらの理由の方が第一かもしれない）学校だった。

二の街にあるこの学校に通う学徒は幅広い層が集まり、雑多なこの世界を知るには一番の場所、らしい。

私がここで学ぶのは、地理と歴史、そしていくつかの言語。

大まかなことは神殿で学んだけれど、それはあくまでが基礎も基礎、この世界の住人なら子供でも知っているようなことばかりだ。

よりしっかり学ぶ為に、とりあえずは子供に混ざっても大丈夫なレベルにまでしてもらったに過ぎない。

その後も神殿で学ぶと言う選択肢もなかったが、ともしればある意味で引き籠もりがちになってしまう（ギルドと神殿の往復のみの生活というのは引き籠りに分類されてしまっても致し方ない）私のことを考えた結果、学校へ行き他の人々とも触れ合いながら学ぶ時間があつた方が良好だろうということで学校へ通うことが決まった。

だからといって毎日通うわけでもなく、今までどおり週の半分はギルドへ行き、残る3日のうちの2日が通学に当てられる。

つまり、今まで神殿で勉強に費やしていた時間を学校へ行く時間に変えたというだけの事だ。

働きながら学ぶ人も多いので、週休2かならぬ週2日登校も別段珍しいことではないらしい。

学ぶのは社会科系科目だけだが、これは出来れば魔法も学んでみたかったけれど、私の場合外で魔法を行使すると万が一暴走した場合の対処が取れないから、と言う理由で却下となったのだった。

学校へ通うことが決まってから、実際のこうして通うまでに時間が少しかかったのは、学校のほとんどがセメスター制であることに起因する。

学期こそ4期だが、その途中での参加は認められない、というか参加できないことはないが単位としては認められないのだ。

第一、学期途中から入ったところで勉強についていける訳でもなく、半年や一年も待たねばならないというわけでもなかったのでそれま

では今までどおり神殿での勉強が続けられていた。
教師役を買って出てくれていた数人の神官を除けば、学校から来てもらっていた先生もいたので、実質勉強する場所が変わるだけ、とも言えた。

学校へ向かって歩いていけば、道行く人に同じように学校へ向かって歩いているであろう学徒と思しき人が増えてくる。

集団で固まって歩いている子供達や、おそらく魔法士の卵であろうローブを纏った人、いかにも学生ですと言った風情の青年。

神殿の西側にはギルド関連の施設が多いように、東側には学校関連の施設が多い。

それは結果的に治安にも関わってくるのだが、歩きながら私は非常にホッとしていた。

ギルドへ行くときは神官に送って行ってもらっていた。

帰りは一人であることが多かったが、実は影ながら護衛が付いていたということは教えられていた。

恐らく今も一人くらいは付いているのだと思うけれど、とりあえず、今日もいつものように一緒に行くと言って聞かなかったナイルをとにかく説得できたのは良かった。

こんなにたくさん学生がいる中で、あんなのに付き添われて登校したのでは目立って仕方が無いからだ。

ギルドへ行くときは大人が多い中に子供が独りいるわけだから目立つのは仕方が無いが、こちらでは子供も多いので私一人が目立つということはない。

いくら多くの人に顔を知られていると言っても、同じような背丈の子供たちにまぎれた私をそうと識別するのは難しい。

私は、久々に感じる、誰にも注目されない普通さと言うものを存分に満喫しながら学校へと足を進めた。

第5章 (2) (後書き)

2011/08/01 誤字修正

第5章

学校、学校とだけ呼んでいたが、一応ベルガディナル初等学校という名が付いている。

しかし、二の街にある初等学校はここだけで、更に言うなら同じ敷地内にベルガディナル高等学校とベルガディナル魔法士養成所、他多数のベルガディナル氏とその一族によって創設されたと言われる学校群が乱立している為、基本的にそれらを総称して学校、とだけ呼ばれている。

因みに、ベルガディナル以外の高等学校や魔法学校、神学校、他専門学校なども勿論あり、それらはそれぞれの名で呼ばれている。

とりあえず、学校と言えばベルガディナル、と思われるほどにかつてエグザードナにおける教育の普及に貢献した人物がいたという認識さえあれば問題はない。

そこがどんなところかと一言で言えば、とりあえず神殿や離宮ほどではないにしろ大きい。

幾つかの学校が敷地内にあるとは言っても、ここまでとは思っていなかった。

だって、日本に比べたら大分教育受けてる人口少なそうなのに、こんなに広いだなんて。

日本の大学くらいはありそうだ。

大学と言ってもピンきりだけど、都市部の狭いし基地内にひしめき合っているところではないけれど、郊外型の巨大なキャンパスまでは行かないような。

うまい例えが思いつかないけれど、とりあえず1周するには1時間ちかくはかかりそうな感じだ。

一応敷地は堀で囲まれていて、神殿大路に面した大きな正門があった。

門番と言うか、守衛だろうか。

門番というか、守衛だろうか、正門の両脇に二人立ってはいたが、特に何も確認されることなく立ち入ることが出来た。

門の中は複数の建物が立ち並び、車用に均した道のほかは芝生張りになっていて、あちこちにも木や花が植えられていて更にベンチやテーブルまであったりして、まるで公園のようにすら見えた。

実習用の畑なども敷地内にはあるとの事だが、それを見つける前に、目的地である初等学校の校舎に着いた。

それは敷地の広さに反してよろう以上に小さな木造校舎だった。

そして、非常に良く知っている気がする建物だ。

いや、実際に直接目にした事はなかったが、これに良く似たものを写真でなら何度も見たことがある。

なんといえば良いのか……。

これも昭和レトロ、或いは大正レトロとでも呼べばいいのか？

明治時代に作られた校舎が残っている学校が地元にあったから、それとは違うと言える。

ベルガディナル初等学校は、明治期の木造校舎のある種の華やかさは欠ける、イメージ的には戦前戦後あたりの小学校の素朴な木造校舎であった。

「一体、誰の趣味だ……。」

思わず、校舎を見上げてそうってしまった私を一体誰が責められようか。

日本人はこの世界に何を残していったんだ、と校舎前で頭を抱えたくなってしまったのは決して間違いではないはずだ。

第5章 (3)

外観で思わず脱力してしまったわけだが、中もまた予想通りの造りだった。

一体誰が教えたものか、見慣れたこれは下駄箱に違いない。

エグザードナに屋内で靴を脱ぐ習慣は一部にしか定着していないと聞いていたが、どうやらここは例外の一つらしい。

上履きが必要とは聞いていなかったのだが、とあたりを見回してみると見かねた上級生だろう年嵩の少年が声をかけてきた。

「君、もしかして新入生？」

顔が余り人に見られないように目深にかぶっていたローブのフードのお陰か、マレビトだとは気付かれなかったようで、そのことに安心しながらとりあえず頷く。

「もしかして、替えの靴が必要なのでしょうか？」

下駄箱と言う構造上、聞くまでもなくそうなのだろうけれど、一応確認をする。

「何かそうらしいんだよね、君もやっぱり知らなかった？」

黄緑色という、地球ではフィクションかファッションでしかお目にかかれなかった髪色の頭を掻きながら少年は答えた。

第5章

「入学の為に必要と連絡されたものは一応全て用意したつもりだったんですが。」

そう告げれば、オレもだよ、と少年も困惑顔だ。

その言葉によろやく、どうやら上級生と思った少年は同級らしいと気が付いた。

つい先入観から勘違いしてしまったが、そういえば入学の年齢は決まっていなかったのだと、一瞬すっかり頭から抜け落ちていたことを思い出す。

義務教育のないこの国では入学年齢の規定もない。

場合によっては一生教育機関に通うことのないものもあると言う。頭では理解したつもりでも、自覚しないままにかつての常識が現状の認識に邪魔をする。

隣国では種族によって若干前後するものの大概6歳から18歳までの義務教育があるそうだが、かの国はこの世界にある7ヶ国中唯一神族を王に戴かない民主制共和国家な上に、大分多くの渡り人が国の中心にいるようだから特別だろう。

入学年齢が様々なだけでなく、種族によっても成長度合いが異なるのだから気を付けなければ、と気持ちを新たにします。

目である程度学年が分かるシステムと言うのはそれが当たり前であれば気付かなかったが、便利なものだったらしい。

「で、どうする？」

唐突な少年の言葉に首をかしげた。

「どうすればいいかを聞こうにも誰もいないわけで。」

そう、辺りを見回す少年に、先ほどもでは何人搔いた他の生徒の姿が既に見えなくなっていることに気が付いた。

まだ始業の時間には余裕があるはずなので、巡り合わせが悪いときは重なるようだ。

このまま誰かが来るのを待つのもいいが、それでは時間の無駄だ。何も知らない場所だと言うならまだしも、ここは見るからに学校そのものであり、実際に学校なのだ。

ならば、壁一枚を隔てた向こうには多くの人がいるはずである。

「分からないことは聞いてみましょう。」

だから誰もいないじゃないか、と言う少年を背に、一旦昇降口を離れる。

すぐ隣には恐らくは教職員向けだろう玄関があった。

私の知る学校と同じ外観なら中身も同じだろうと言う楽観的な予想は当たったようで、そこに入ってすぐの小さな部屋には目当ての教室札が付いていた。

昔もこんな事をしたな、と子供の頃を思い出しながら靴を脱いで廊下上がる。

すみません、とその部屋の戸をノックするとすぐに人の良さそうな壮年の男性が現れた。

「おや、見ない顔だけど新入生かい？」

私と、後ろについてきたらしい先ほどの少年に目をやり男性はそういう。

「はい、今日から通うことになったルディア・アークです。」

学校用に新たに貰った名を名乗り、上履が必要だと言うことを知らずに忘れてしまったのだと現状を告げると、すぐにスリッパに似た、と言うかスリッパそのものを二足出してくれた。

その上で、下駄箱の今期の新入生用の場所と、校内の購買で上履きは売っているから、今日買っていくか、持ち合わせがなければ明日の朝早く来て買うようにと教えてくれた。

随分対応が早いな、と思ってみれば、どうやら今期は連絡をし忘れたところが多かったらしく、既に数人が来た後だったそうだ。

でもそれ生徒相手に愚痴ることじゃないから……。

教えてもらった下駄箱に行けば、私の名前も確かにあり、一緒に来た少年の名前もあったようだ。

すぐ近くにフェクトの名前も見つけてしまい微妙に落ち込んだこともここに付記する。

無事スリッパも借りられた事だし、そのまま少年とは別れて教室へ向かおうと思ったのだが、ローブをつかまれ引き止められた。

何かと思って振り向けば、ちょっと照れたように少年が言った。

「ありがとう。」

学校は初めてだからどうしたら良いか分からなくて、あのままだったらきつと誰かが来るのを待っていたと思う。」

「いいえ、気にしないで下さい。」

ただ少しだけ、私のほうがここのことに付いて知っていたって言うだけですから。」

この世界で会う人間は会う人会う人、皆美形ぞろいなのは何故だろうと内心で思いながら、そんなことはおくびにも出さずに答えた。鮮やかな黄緑色の髪に、釣り目気味の琥珀色の瞳の美少年を、リアルで見るとは思わなかった。

しかもよく見てみれば、この子エルフ耳。

ディー○リット系ではなく、指輪物語系のあれだ。

「オレはユーリグ。」

宜しく、ルディア。」

「こちらこそ、宜しくお願いします。」

外見に見合った快活さでもって、先ほどの挨拶を聞いていたのだろう、少年ことユーリグは仮の名前で私を呼んだ。

学校側には私がマレビトであることは伝えてあるものの、学生間に余計な騒ぎを起こさない為に私はただの一般生徒として所属することになった。

これは高い魔力保持者であることが知られると、魔法士見習いに目をつけられたりすることがあったりもすると言うことで、そういった面倒を避けるという意味合いもあるのだという。

都合の良いことに、私の顔が知られているとは言っても、行動範囲が今までは左街に限られていた、つまりはギルドを中心とした街の西地区に集中していたことから、右街ではそれほどまでには顔を知られていない。

だから、ナイルと連れ立っていたりしなければ、私が”アトルディア私”であるとはバレにくいのだ。

故に、名前もアトルディアの一部であり、且つ水の精霊の加護持ちならありきたりなルディアを名乗ることとなっていた。

名字のアークはアカシェの真名の一部を借りたものだ。

名は兎も角として、名字はどうするかかなり揉めたらしいのだが、ツェフ爺ちゃんとナイルとアカシェが話し合った(?)結果、アカシェの名を借りることになっていた。

挨拶をしてしまった以上、何となく一人で行くのは気が引けたので、そのまま連れ立って、各々の教室へと向かうこととなった。

何と言うか、アカシエやナイルは別格としても、フェルのような野性味溢れる美形、ナジクのような正統派美形に、セムの大人と子供の間、危うい色気とか、性格はともかくとして外見は子供らしさ溢れて可愛いフェクト、天使と見紛う様な愛らしいゼナウ、そして正に少年、といった感じのユーリグとか。

更に付け加えるならロマンス・グレーのツエフ爺ちゃんとか、ふと気が付けば何故か様々な年代の様々な美形がいつの間にか周囲に揃っている。

リアルにはいなかったけれど、ネット上でのオタク仲間達が彼らを見ればきつと狂喜乱舞したはずだ。

ゲームや小説なら逆ハーになっても良い環境だよね、これ、とは思うものの、アカシエ曰く種族特性故に残念ながら、その誰にも心惹かれない訳なのだけだ。

ああ、なんて宝の持ち腐れ……。

第5章（後書き）

昨日の更新間に合わなかったorZ

第5章 (4)

小学校みたいな外観とは言っても、その受講方式は大学のそれに近い。

クラスがあるわけではなく、受講する講義は自由に選択できる。

私が今日受講を予定していたのはアウトローシェン史だったが、ユーリグは算術を学ぶとのことだった。

ユーリグと分かれ、一人目的の部屋を目指す。

今日受講を予定していた歴史は、神殿でも教えてもらっていた教師の講義である為、初めての場所とはいえ緊張はあまりない。

神殿での最後の授業の際に講義前に尋ねる様言われた研究室に向かった。

余裕を持って神殿を出たつもりだったが、思わぬアクシデントで時間を食ってしまった為、微妙に早足気味に廊下を進む。

そのお陰か、何とか予鈴の前に研究室へと辿りついた。

ノックをすれば誰何の聲がかかり、それに答えると中へ入るよう言われた。

静かに引き戸を開ければ、薄暗くあまり広いとはいえない室内の両側面はぎゅうぎゅうに詰まった本棚が占領し、そこに入りきらなかったのだろう本の塔ががただでさえ狭くなっている室内に林立していた。

多少は予想していたが、予想を軽く上回るその様子に思わず腰が引ける。

「どうしたの？」

入っただけで。」

「あ……はい。」

よく小説なんかでそういうとんでもない部屋を生み出す人間というのが描かれるが、生でそれを見たのは初めてだ。

実際にそういう人物と部屋にお目にかかれたことに妙な感慨を抱きつつも、どうやって部屋に入るか、と考えていると本ことは気にしないで入るように勧められる。

そうは言われても、仮にも本好きのオタクであった身としては本を手荒に扱う気にはなれず、一步一步注しながら足を進めた。

日当たりのいい窓辺（逆に言えばそこにしか光が当たってないともいえる）に置かれた机まで何とか近付くと、書類に目を落していた教師が顔を上げた。

「ごめんねアトルディア、呼び出しちゃって。」

「いえ……。」

呼び出されたことそのものは特に気にしていなかったので言葉を濁す。

「ブラーシェ先生、それで一体話ってなんですか？」

「うん、実はさ、本当は今期も講義をやるはずだったんだけどね、受講生が君しかいないんでここでの講義なくなっちゃたんだよ。」

「は？」

「あまりにも僕の講義はマニアックすぎるとかでね、初等学校向けじゃないって言われてさ。」

一応それでも講義継続の申請は出したんだけどね、と先ほどまで見ていた書類を渡された。

そこには簡単に言えば初等学校で難解な講義を続けることは認められないという内容が小難しい言葉で回りくどく書かれていた。

しかも、日付は今日だ。

講義初日に中止が決定とは一体どういうことか、と思わず握りつぶしそうになった書類をすつと指の間から引き抜かれる。

「こういうわけなんだよ、怒りたい気持ちは分かるけど破かないでね。」

校長の無茶の証拠として取って置くんだから。」

いかにも腹黒そうな笑顔でブラーシェ先生は引き出しの一つにその紙を丁寧に仕舞うと、鍵をかけた。

その引き出しに似たような紙が幾枚も有った様に見えたのはきつと気のせいだろう。

「で、話って言うのはこれからのことなんだ。

あ、勿論講義自体はするんだよ。

ただ、場所と時間が変わっちゃったから、一応君にどうするか聞いておこうと思ってね。」

「どういった候補があるのか、教えていただけますか？」

「うん、まずはね——」

1. ブラーシェ先生が担当することになった初等学校向け世界史概論を復習がてら受講する。

2. 時間は遅くなるものの、高等学校、或いは魔法学校で行わ

れる当初受講予定だった講義を受ける。

3. 両方受ける。
4. 両方受けない。（他の講義を受ける。）
5. 両方受けない。（今日は休みにする。）

ブラーシェ先生から提示されたのはその5つの候補だった。

2に関しては高等学校と魔法学校で同じ講義を時間と曜日を変えて行うので都合の良いほうを選べば良いとの事だ。

「えーと、高等学校の講義はいつですか？」

「ん？今日は魔法学校での講義が午後からだから、明日の夕方だね。それは毎週変わらないよ。」

ナイルやアカシェからは魔法学校にはあまり近付くなといわれている。

ならば、選べるのは一つだ。

「……それでは、3で。」

そもそも今日は歴史の授業一択のつもりだったから、何もしなくて後は帰るだけになってしまう。

復習するのも悪くはないし。

何せに詰め込んだだけで繰り返し覚えたわけではないのだから。

「魔法学校と高等学校なら？」

「高等学校で。」

「ん、了解。

それじゃ、いまから歴史概論初級の講義に行きますか。
荷物持ち、手伝ってもらえる？」

「分かりました。」

そうして、大きな地図を抱えて先生の後を付いていった。

第5章

ブラーシェ先生についていったの教室は、見るからに普通の教室だった。

私のように特定の科目だけ受講する学生も多いが、逆に基礎教養科目を決められた時間割にあわせてクラス単位で受講する人たちもそれなりにいるらしい。

ここはそういった教室の一つのようで、科目ごとの履修生は基礎科目に限ってはそこに混ざって講義を受けると言う形ようだ。

先生に続いて教室に入り、持たされた地図を広げ黒板に張る。

その脇では先生が同じように年表を広げている。

後ろを振り向けば、15人ほどの10歳前後と思われる子供たちが席についていて、授業を受ける体制になっていた。

10歳前後といっても、この世界基準でのそれだ。

私の感覚的には小学校高学年、或いは中学程度のようにも見える。ギリギリ私の身長だここに混ざっていても違和感がないか、といった程度に収まっているのが救いだ。

とりあえず、見知った顔がそこにはないことに安堵し、手伝うことはもうないと判断すると自分の荷物をまとめて教室の後ろへと移動し、一番奥の空いている席に座りノートと鉛筆を机に広げた。

生徒達の間を通るときに注目されはしたが、まあ然程気にすることでもないだろう。

新学期の授業初日に教師と連れ立ってくる科目履修生がいたらなら、余程他者に無関心でない限りそれを気にしない方がおかしい。

そうこうしているうちに本鈴になり、ブラーシェ先生は教壇に立ち軽く自己紹介をし、授業を開始した。

こうしてみるとやはり先生なのだな、と思う。

神殿で個別指導してもらっていたときは、どうもその若い外見から

かバイトの家庭教師っぽい雰囲気が強かった。
いや、家庭教師に習ったことなんてないからあくまでイメージなの
だけだ。

ブラーシェ先生は若くは見えるが、実際には純粋なヒト種ではない、
魔力特性の高い長命種の血が混ざっているため20代前半に見える
外見とは裏腹に既に齡100を超えている。

そして広く渡り人に関する研究を行っている歴史家でもある。

そういう経歴からマレビトに詳しいと言う実績を買われ、私の教師
役の一人に選ばれたという経緯がある。

私がこの学校に通うことが決まったのも、彼がベルガディナル（ベルギー）の専
任の講師であるということが大きかった。

今日の講義内容は初日と言うこともあってか、アウトラーシェン、
中でもここエグザードナに焦点を当てるようだ。

すでに学んだ、当たり障りのない表層的な事象のみを抜き出して簡
単にこの町の歴史と、それに絡めてアウトラーシェンの建国までの
経緯を簡単に解説していく。

私に教えたときには横道に逸れがちだったこの街で尤も有名な精霊
アトルディアについてや、建国の英雄王、竜殺しの英雄、始源の魔
法使い、などの複数の二つ名を持つ日本出身のマレビトについても
さらりと流して、現代に至る神族が生まれた経緯を語っていく。

幼い生徒達はその話と判所を必死にノートに書き写している。

私はと言えば、既に学んでいることでもあり、横道に逸れることの
ない講義に若干の物足りなさを感じつつ、要点となる箇所だけをノ
ートにとっていった。

こうして普通とされる授業を聞いていれば、彼が本来この場で教え
るつもりでいたものが、禁止された理由が分からなくもない。

ブラーシェ先生が本来担当していた、マニアックと評された世界史
も前期までは基礎科目の一つだったという。

となると、彼の講義を基礎科目として行うわけにはいかないというのは納得がいくものだった。

私が学ぶつもりでいたのは、渡り人とこの世界との関連についてを中心とした世界史であり、それを基礎教養とするのは大きな問題があるような気がする。

何と言うか、確かにそれもまた正史といえるのだろうが、偏りがあるのだ。

渡り人を中心にして世界史を見ると、どうしても渡り人としての視点が入る。

私自身が渡り人であるからこそ言える事だが、それはこの世界に生きる人の視点とはやはり異なったものなのだ。

同じ世界に生きてはいても、見え方は異なる。

それは、この世界に生まれ育った人が基礎として学ぶにはやはり不適切であると言える。

そして、どのような渡り人がいつ来たかということを詳しく知るということは、この世界の神々が世界をどのような方向へと導こうとしているかを読み解く鍵ともなる。

それは最早神学の研究の域にも入ると言え、やはり子供や初めて歴史を学ぶ人間に勧められる領域ではないだろう。

途中に数度の休憩を挟みつつ、午前中いっぱい講義は終了した。

休憩時間に、何人かの生徒に声をかけられ、質問攻めにあい掛けたが、無難に答えるに留めたお陰で人見知りすると認識されたようだった。

その為か、授業終了後、開始前と同じく先生の手伝いに借り出されても何も聞かれはしなかった。

第5章（後書き）

微妙に加筆訂正。

第5章

子供特有の姦しさから解放されてホッと一息ついていると、ブラーシェ先生に苦笑された。

「外見ではそれほど違いはないように見えるけど、やっぱり子供相手は苦手みたいだね？」

「貴方に言われたくはありません。」

先生は10代の若者と一緒に平気でいられるんですか？」

意趣返しにそういつてみれば、

「私は平気だよ。」

外見^体だけでなく、精神^{こころ}も若いつもりだから。

でもね、どうも相手が嫌がるんだよね。

こんな外見だからね、たまに絡まれるんだけど、最終的には向こうから逃げてっちゃう。

逃げるくらいなら最初から絡んでこなればいいのにね。」

そうにつこりと微笑まれた。

嫌がる相手の気持ちも分からなくはない。

見た目が似たようなものでも、中身が老獪な狸爺ときたら、一緒にいたくはないだろう。

この世界、どうも美形も多いようだが腹黒と呼びたくなるような人物も非常に多いようだ。

思わずこぼれかけたため息をそっと留めた。

たとえば腹黒だろうと何だろうと優秀な教師には違いない。

「それでは、明日の午後またここに来れば良いですか？」

とりあえずは、今後の予定だ。

目的の講義は明日の午後からのはずだ。

第5章

「ん？」

ああ、そうだね、明日は他には何の授業の予定があるの？」

「えーと、グレイズ先生の『異種間コミュニケーション初級』とナブドウカ？先生の『今すぐできる精霊交流術』です。」

「ナブドウカ、だよ。」

舌噛みそうな名前だね。

それにしても、そりゃまた、随分マニアックな選択したね。

彼らの講義が残って、僕の講義がなくなるのって、随分不公平だ
と思うんだよね。」

マニアック度では絶対同レベルだよ、そう愚痴るが、まあ、それは
需要と供給の問題だろう。

「歴史を知ってるかどうかは生活に密着していないからじゃないで
すかね。」

異種間コミュニケーションも精霊交流も、歴史と比べたら大分生活
に密着した内容だ。

なんせこの世界には様々な種が入り混じっているのだから。

そして精霊の加護なんてものが実在しているにもかかわらず、私の
ようにその存在を認識できないものもそれなりにいる。

そういうものにとっては必須科目だと思うのだが。

「まあ、それもそうなんだけどね。」

何か納得いかないというかね……。

っていうか、君、まだ精霊見れてないの？」

それだけすごい加護を持ってる？そんな風に呆れ顔で見られても見れないものは見れないもので仕方がないと思うのだ。

「見えないし、声も聞こえませんよ。

だからこそその授業選択です。

ただ私の部屋の周りの緑の繁殖力が旺盛なのと、水をあげると成長が著しいと言う点でしか、加護の存在を認知できません。

それにしたって気のせい、で済まそうと思えば済ませる範囲ですし。」

「いや、あれを気のせいで済ませるのはよっぽど図太くないと無理でしょ。」

私の部屋を知っているからこそその言葉だろうが、たとえば他の部屋の前に比べて2倍以上成長スピードが速だろうが、そんなものは気にしなければならないのと同じだ。

まあ、庭師の職人さんには手間をかけさせてしまっただけ少し悪いとは思うが。

「じゃあ、私の精神はきつと先生が呆れ返る位図太いですよ。」

「あああ、最初にあった頃はまだ神経質っぽかったのに。

これだから開き直ったマレビトは怖いんだよね。」

ため息混じりだが、明らかに軽口のそれだ。

「まだこれで、ぜんぜん割り切れてなんかいませんよ。

本当に割り切ったら、きっと呆れるくらいじゃ済まなくっちゃう

んじゃないですか？」

軽口には軽口で。

そんな会話の応酬を繰り返した末に、脱線した話を元に戻す。

「で、明日はいつ頃来ればいいんです？」

「あ、そうだったね。

とりあえず講義が終わって、特に用事がなければそのまま来て
良いよ。

何か用があるなら、十の鐘で高等学校のほうへ行くから、それ
でに来てくれれば問題ない。」

何か質問は、と聞かれても特に何もなかったので首を振る。

「それから、高等学校での講義ってものあるけど、日没までには終
わるけど、帰りは遅くなるからちゃんとその辺は神殿の方に伝えて
おいてね。

後になって高等神祇官殿に文句を言われるのはごめんだよ？」

「高等…？」

「ナイル坊やの事だよ。

君の過保護な守人。」

「ああ、そういうばそんな役職でしたっけ？」

「ちゃんと、その辺も授業で説明してあげるけどさ、自分の守人の
ことくらいもっと知っておこうよ。」

覚えていないのは事実だが、本気で呆れられてしまった為、流石に
ばつが悪くなりそのまま逃げのように帰途に着いた。

第5章 (5)

「ああ！いたっ！」

もともと今日はブラーシェ先生の授業の他はなかったため、迷うことなく帰宅することを選んだわけだが、校舎を出る間にいい加減聞きなれてしまった大声が耳に入った。

聞きなれはしたが、できることなら1対1で会いたくはない相手だ。その兄が一緒だと非常におとなしくなると言うのは最近知ったことだが。

見たくはなかったが、目をやればバルドゥク家の次男がバックを振り回して手を振っていた。

残念ながらその兄の姿は近くにはないようだ。

そのまま気付かない振りをして通り過ぎてしまいたかったが、そんなことをすれば奴の事だ、大声で私の名を呼ぶだろう。

それではせっかく、学校専用の偽名を使っている意味がない。

仕方がないので、走りはしないがフェクトのほうへ足を向ける。

私が気付いたことに気付いたフェクトは走りよってきたので、何かを言う前に手で口をふさいでやった。

体格がまだ私のほうが背が高いからそれで抑えられるが、あと1年たつかというくらいにはもうこんなことは出来なくなるだろう。

我に帰って手を引き剥がされる前に言うべきことだけは言う。

「廊下では静かにしましょうね。」

につこりと言ってみれば、意外なほど素直にフェクトは首を縦に振った。

手を離しても何も言わないフェクトに、次いでとばかりに、他の人には聞こえない程度に声を潜めつつ多少の威圧感を込めて言う。

「私の名前はルディアです。
他の名前では呼ばないように。」

一応、私の立場と言うものを理解してはいるのか、そちらも黙って
頷いた。

「言われなくても分かってる。」

大人ぶりたい少年特有の生意気さも滲ませつつも、以前までのいた
ずら小僧の片鱗はなりを潜めているようだ。

「つ……ルディアも学校に通うって聞いてたのに、どのクラスを見
てもいないから探してたんだよ。」

早速名前を言い間違えそうになったようだが、声にはならなかった
ので、まあいいだろう。

「生憎、私は初年の講義はとってません。
受講しているのはほんの一部ですよ。」

「そう、なのか。」

「ええ、ですから貴方と同じ講義を受けることはないんじゃないで
しょうかね。」

で、用件はなんですか？」

幾分残念そうな表情を浮かべるフェクトに、思わず気が緩みかける
が油断大敵だ。

たとえどんなに外見が美少年だろうと、これはギルドで恐れられる

悪戯魔王その人なのだから。

「何で用があるって分かったんだよ？」

不思議そうな顔で聞いてくるが、そんなのは一目瞭然だ。

「用がない相手を探してまで声をかけたりしないでしよう、貴方は。」

そして、彼を使える人間は本当に限られてくる。
案の定、フェクトは一通の手紙を出して私に渡した。

「兄ちゃんからの伝言。」

とりあえず、読んでくれて。」

「そう、ありがとう。」

もしかしてこれが前回言っていた活動の勧誘なのだろうか。
とりあえず、礼だけはいっておく。

第5章

もしかしてこれが以前言っていた活動の勧誘なのだろうか。
とりあえず、礼だけはいっておく。

「今日は何の授業だったんだ？」

先日、その兄も含めて三兄弟と買い物したときとは打って変わり、初めて会ったときのように今日のフェクトは良くしゃべるようだ。用件が済んだら戻るのかと思いきや、当たり前のように会話を続けた。

別に答えられない質問でもなかったので気軽に答える。

「ブラーシェ先生の世界史……です。」

詳しい話をしようかとも思ったが、面倒なのでそれだけに留める。

「って言うと、9期目から受けられる奴？」

あれを好んで受けたがるのは物好きだけだ、って聞いたけど。」

「そうですね、その講義はお陰で今期からなくなりました。

仕方がないので5期の講義に混ざって受けてきましたよ。」

「へえ、そうなのか。」

期と言うのは学期と学年が混ざったようなものだ。

義務教育ではなく、誰もが一定期間学校に通えると言うわけではないので、1年を4期に区切った学期を基本単位をして講義が行われている。

初等学校の基礎と呼ばれる全ての講義を普通に終えるには順調に進んで3年かかる。

つまりは全12期が基本的な構成だ。

当然試験に通らなければ次の期には進めないが、科目ごとに試験に通っていればその科目だけは次の期のものを受けられるようになっている。

12期全てを修了すれば、初等学校の卒業証明がもらえるが、ごく基本的な最初の8期、或いはそれより先の4期程度で辞めていってしまう生徒も多い。

私やユーリグのように必要だと思う科目だけ受講する生徒も少なくない。

家庭環境や、その後の進路などにも寄るのでそこら辺は本当にバラバラだ。

進路によって、と言うのも初等学校後に高等学校に進む生徒もいれば、初等学校中退後に神官になるための学校に行く、といった生徒もいるのだ。

そのあたりは大分ゆるい、と言うか自由度が高く出来ている。

大体、アウトラーシェン国内ではどこも似たような教育システムになっているらしく、街から街を移動することがあっても、それまでの科目の受講修了証さえあれば、いつでもどこでも勉強の続きを行うことができるのだそうだ。

因みに、授業料はかかるが入学金等はない。

大きな学校だと、奨学金の制度があったりもするので、勉強することに関しては非常にいい環境を整えている国だと思う。

「で、ルディアはこの後どうするんだ？」

「勿論帰るんですよ。」

「えー!？」

「何です？」

貴方も昇降口（こ）にいるのなら帰るんでしょう？」

何を驚くことがあるのかと聞いてみれば答えは簡単だった。

「いや、おれはこれからメシ。

どうせならルディアも誘おうと思ったんだけどなあ。」

どうやら外に食べにでるつもりでいたらしい。

外とは言っても構外ではなく構内だ。

食べ盛りの子供の胃袋を満たす為に様々な店があるらしい。

勿論、大路の屋台街とは規模は比べ物にはならないが。

中には大路からの出張店もあったりするらしい。

その誘いは、相手を除けばとても魅力的なものではあったが、残念だ。

「今日は講義後すぐ帰ると言ってきたてしまいましたからね。」

今頃きつと神殿の料理長が昼ご飯を用意してくれていることだろう。

屋台で食べる食事嫌いではないが、神殿の食事も美味しいのだ。

それに何より、護衛の人もそのつもりで待っているはずだ。

「そっか、じゃあ仕方ないよな……。

なら明日はどうだ！？」

「明日ですか……。」

特に明日は問題ない。

午前にグレイズ先生、午後にナウブドウカ先生の授業があるだけだ。

まあ、その後夕方にブラーシェ先生の講義があるわけだが。とりあえず、昼休みには特にやるべきことはない、はずだ。

どうしようか迷っていると、後ろから名前を呼ばれた。

この学校で名前を知っている相手と言えば目の前の一人を除けば3人で、内子供は一人だけだ。

ならば、考えるまでもなく後ろにいる人物が誰だか分かった。まったく、どこの世界でも子供は大声で人を呼ぶものらしい。

「ユーリグ、貴方も昼食ですか？」

フェクトへの返事はとりあえず保留して、振り返る。

「も、つてことはルディアも？」

にぱーと言う効果音でも付きそうな良い笑顔だ。

……おかしい。

エルフっ子のはずなのに、何故か一瞬ユーリグにピンと立った犬耳とブンブン横に振れる尻尾が見えた気がした。

「残念ながら、私はこれから帰宅するところです。」

そう言えば、尻尾が垂れたような幻覚が……てっきりネコ属性かと思いきや、このこはワンコ属性だったか……。

ていうか、一体いつここまで懐かれた？

「それは残念。」

オレまだ他に知り合いなくってさ。

一緒に食べられたらいいなあ、と思ってたんだけど。」

心底残念そうに言いながらも、私の後ろにいるフェクトを気にする
ように視線を向ける。

フェクトもまた気にしている様子が背中越しにひしひしと感じ取れ
る。

ここは私がお互いを紹介すべきなんだろうが、何故私がこんな事を
せねばならんのだろうか。

第5章

「ユーリグ、後ろにいるのはフェクトです。」

知人の息子と言うか……友人の弟、と言うか、友人、と言うか。まあ、そういう関係です。」

何故かフェクトを友人と断言するのは憚られてつい遠回りな紹介になったが、どうもむくれているようだったので少しずつ修正してみると満足したようだった。

私としてはまだフェクトとは友人、と言う気はしないのだが。あまりに年が違いすぎると言うか。まあ、そんなことはさておき。

「フェクト、こちらはユーリグです。」

同じく今日入学だそうです。」

ユーリグのことは紹介しようにもあまりに情報が少ない。そんな感じで終わらせてみれば。

「ルディアの友達のユーリグだ。宜しく、フェクト。」

何故かそうユーリグがフェクトに言った。

私は君も友人と思っているわけではないんだけどなあ。

「フェクトだ、こっちこそ宜しく。」

何だかお互い相手を見定めようとしているみたいだ。うん、男のこって良く分らない。

だからといって女の子のことなら分かるってわけじゃないけど。大学時代の友人には女失格の烙印押されたくらいだしね……。ああ、何かむなしくなってきた。

「さて、それじゃあ私は帰りますね。

そうだ、食事の相手が欲しいなら、二人で行ってはどうですか？もう、知らない者同士って訳でもないでしょう？」

では、また。

そう帰ろうとしたらフェクトに再び呼び止められた。

「ちょっと待った、結局明日は！？」

「ああ、すみません、忘れてました。」

すっかり忘れていたことを言われて思い出す。さてどうしようか。

食事の時間に子供のお守りというのみな、と思うと悩んでしまう。だが、私一人で屋台を見て回るのは効率が悪そうでもある。迷っていると追加の情報が耳に入る。

「兄ちゃんも一緒なんだけど！」

「セムがここに来るんですか？」

「うん、兄ちゃんも明日は学校あるって。

本当は今日も来たかったらしいけど、今日は講義無いからってギルドに行ったよ。」

確かに一昨日ギルドで会った時は今日も仕事だと言っていた気がする

る。

でも、そうか。

明日はセムが来るのか。

なら私が子守をしなくてもフェクトはおとなしくなるはずだ。でもって、彼なら美味しい店は知っていることだろう。

「分かりました。

なら、明日は一緒に食べましょう。」

「ん、兄ちゃんにも言つとく。」

「……なあ、そのとき俺も一緒にいれてくんない？」

フェクトとの話がまると、ユーリグが言ってきた。

「私は良いですよ。」

といって、フェクトを見れば。

「おれも良いよ。

じゃ、折角だし、一緒に今から屋台行こうぜ。」

「ありがと。」

ほっとした様に笑顔がこぼれたユーリグはかなり可愛かった。

っていうか、知り合いないって言ってたから実はかなり心細かったのかもしれない。

あまりそういう風に見えないから気にしなかったけど、もっと気にかけてあげれば良かった。

本当、私の対人スキルって低いなあ。

若干の後悔を胸に仕舞い、今度こそ別れの挨拶をすると学校をでた。話をしていた分、短くなってしまうた昼休みを取り戻すかのように子供二人は校舎を飛び出していった。

因みに、セムからの手紙は予想には掠りもしない、お勧めの美味しい屋台リストだった。

第5章 (6)

「と言うわけで、明日は帰りが遅くなります。
問題ないですよね？」

ナイルに授業時間の変更についての話をしにいかうかと思ったら、
今夜は一緒に食事が出来るということで、夕飯を食べながら話を
しているところだ。

「出来れば夜の外出は控えていただきたいのですが……。

まあ、仕方が無いでしょうね。」

渋々、と言った感じを十全に発しながらもナイルは了承してくれた。

「ありがとうございます。」

でも、何でそんなに夜は駄目なんですか？」

特にこの街の治安が悪い、という話は聞かないし、何より様々な学
校が密集している所謂学校区とも呼ばれる地域から町を中心である
神殿までならばそう危険は無いと思うのだ。

これが夜は飲み屋街と成り果てるギルド周辺だと言うのならはまだ
話は分かるのだが。

第一、夜といってもまだ夕方の範囲である。

夕日がかろうじて地表に顔を残している、この世界特有の夜しか現
れない月と星は未だ姿を見せぬ時間だ。

日本で言うならば所謂黄昏時の少し前くらいに当たるだろうか。

夜の外出は極力避けるべきだと言う考えは、日本育ちの私にとって
はなかなか理解しがたいものがある。

思い返せば友人の中にも夜中の散歩を好んでするものがいた。

尤も、彼女は危険だから辞めろ、と私以外の友人からよく叱られていたようだ。

言わなければバレないものを、と私は内心思っていたのだが。

私が彼女を叱ることが無かったのは、偏に私もかつて覚えがあっただけの話である。

それも高校に上がる頃にはやめてしまっていたが、夜遊びと言うではなく――そもそも遊ぶような場所は無い田舎だ――、ただ漫然と夜道を歩くのが好きだった頃があった。

田舎育ちゆえの危機感の無さなのかもしれないが、あまり夜道を危ないと思ったことは無い。

「治安の問題ではありません。

ただ、夜の方が拐しやすいのは事実ですし、それは裏を返せば護衛がしにくくなると言うことと同義です。

何より、魔法学校の近くというのがいただけない。

貴方は魔法士の卵たちからしてみれば垂涎モノの魔力の塊だと言うことを忘れないでくださいね。」

「そうは言われても、実感がなかなか伴わくて。」

「実感は無くても自覚だけはしてください……。」

空笑い共に本音を告げてみれば、溜息をつくようにナイルが溢した。脱力から回復すると、彼は話を続けた。

「それから、先ほど言ったように護衛がし辛くなるのは事実ですから、直接迎えに行かせます。

イドゥンとフィズは分かりますね？

二人、或いはどちらか一人が必ず学校まで迎えに行きます。

決して一人で帰っては駄目ですよ。」

「分かりました。」

えーと、イドゥンさんは赤毛のツンツン頭の人で、フィズさんはくすんだ銀髪、と言うか灰色ですかね、あれは——灰色の長髪の人ですよね。

はい、大丈夫です、覚えています。」

フィズさんはともかく、イドゥンさんはよく長身であんな燃えるような赤毛の短髪のツンツン頭なんていう目立ちそうな人がこっそり護衛なんてできるよなあ、と思ったのだ。

それとも私が気付いていないだけで、普通に他の人には分かるように護衛しているんだろうか？

「ツンツン……間違いではありませんが、一体どういう覚え方を——」。

因みに私のことは何て覚えて……いえ、やはり良いです、聞かないで置くことにします。

とにかく、二人のうち一人は必ず迎えに行きますからそれを忘れないでくださいね。」

「はい、分かりました。」

どういう覚え方も何も見たまま覚えていただけの事だ。

ちょっと反論してみたいことは無いではなかったが、おとなしく余計なことは言わないように話を終えた。

うん、やっぱり本人には言えないよね。

以前はウザイ傾城、だなんて思っていただなんてさ。

いくら今は違うといったって、言って良いことと悪いことってあるからね。

第5章

明けて翌朝。

さあ今日も学校へ行くぞ、と思いながら神殿の正門に向かうと、ナイルだけでなくその後ろには昨夜の話にあった二人がそこにはいた。遠目にも分かるあの姿は間違いない。

只でさえ身長が高く目立つナイルの後ろにさらに大きな二人組み。赤毛のツンツン頭ことイドウンさんと、灰髪のフィズさんの二人だ。記憶の中の通り、やっぱりツンツンしている。

二人ともどこかのRPGにでも出てきそうな雰囲気だ。

まあ、そもそもこの世界そのものがファンタジーな世界ではあるけれど。

二人も雰囲気は、典型的な昔ながらのRPGの職業的に言うのならイドウンさんが盗賊、フィズさんが暗殺者のような感じだ。

もっとも服装は特に黒だったり暗色系というわけではない、あくまでイメージの話だ。

まあ、夜ならばともかく日中の護衛でそんな格好をしていれば返って目立ってしまうのだから当然と言えば当然である。

だが、普通にしているととても目立ちそうな二人だけれど、陰ながらの護衛なんてものをやり遂げてしまうのだから、あながち間違ったイメージ得もないのかもしれない。

そんなことを考えながら彼らの方へと近づいていく。

それにしても、直に護衛して貰うのは帰りだけと聞いていたけれど、どうということだろうか？

ナイルは朝食の時には何も言っていなかったのだが。

まさか朝からあの二人を引き連れて登校しろとかいうのではないだろうな、と一瞬暗澹たる思いに駆られる。

表だって連れて歩けば、ナイル並、あるいはそれ以上に目立つ二人

である。

そんな登校をしたら一発で一般人ではありませんと公言しているようなものではないか。

だが、そんな感情はおくびにも出さずに挨拶を交わす。

「イドウンさん、フィズさん、おはようございます。

それと、いつもありがとうございます。」

「おはようございます、マレビット様。

どうかお気になさらず。」

「おはようございます。

ここだけの話ですが、貴方の護衛は人気職なのですよ。

ですから、氣遣いは無用です。」

風体こそどこぞの冒険者、と言った感じだが二人はれきとした神官である。

神殿がそもそも国の行政機関であるのだから、たとえ国同士の戦争が無いこの世界と言えど、その代わりにある魔獣などの被害に対抗する為の武力は当然のことながら保有している。

彼らはそういった荒事を専門とする部署に所属する人間――便宜上人と呼ぶが、種族は聞いてないので正確なところは不明――だ。

とりあえず、どうして今ここに二人がいるのかとナイルを見上げる。

「ナイル？」

「昨日確認はしましたし、このように目立つ二人です。

必要ないかと思いましたが、もう一度会っていた方が良いかと思っています。」

確かに顔に覚えがあるとはいえ、実際に会ってから日が経っている。似たような背格好の人間を連れてこられたら間違う可能性が無かったともいえない。

でも、今こうして会っていれば、確実に分かる。

「そういうことですか。」

お手数をおかけしますが、今日も宜しく願います。」

「承りました。」

では、帰りは我々のうちのどちらかが行くまでお待ちください。」

「なるべく、先にいくつもりではありますが、何があるかは分かりませんので。」

「分かりました。」

「それでは、行きましょうか。」

行きはいつもどおり、我々は陰に控えさせていただきますので、お気になさらず。」

「はい、それでは宜しく願います。」

ナイル、行ってきます。」

私が神殿を出る時には既に二人の姿は見えない。

一体どうやっているのか、もしかしたらこれも魔法を使っていることかもしれない。

さて、今日の講義は楽しいものだの良いな。

昼休みには約束が会ったりもするし。

なんだかんだで、意外と再びの学生生活満喫している気がする。

これで周りの平均年齢がもう少し高ければ文句なしなんだが。
まあ、それは高望みと言うものだろう。

さあ、今日も頑張ろう！

第5章 (7)

「この世界は神々が様々な世界から選びぬいた数多くの種によって成る。

多くの種がこの世界に定着して久しいが、言葉こそ共通語があるものの、今尚、お互いの生活習慣、成長過程、特有言語などといった種族的、或いは文化的差異による衝突が小規模ながら起こっている。

故に、この講義ではそういった無知故に引き起こされた、知ってさえれば避けられた事件を、実例を参照しながら学んでいく。

この世界に生きる者は、誰も他種族と関わることなく生存は出来ない。

それはこの街で生きる者も、この街を離れるつもりのもものも変わりは無い。

世の中にはそれを忘れて己が種の優位性のみ高らかに叫ぶ者たちがいるが、それが如何に愚かであるかこの講義では学んで貰いたい。

「

グレイズ先生の講義はそんな言葉で始まった。

「では、この世界にいる主な種族の説明から始める。

とりあえず、一方的に説明していくが、何か質問があればいつでも言ってくれて構わない。

まずは、神族だ。

皆も知っての通り、この世界を作られた神々が遣わされた御子の血族だ。

神族、或いは神王と呼ばれている。

最も数が少ないとされているが、最もこの世界では重要な種族だ。現在、六系統の血脈が確認されている。

隣国ザウルディカのみ神族の血統が絶えたとされているが、研究者間ではどちらかと言うと否定気味だ。

まあその辺はいずれ上級で教えよう。

とりあえず、初級では神族については詳しく話さない。

知りたい奴は来期以降に上級の講義を受講してくれ。」

黒板には神族、獣族、鱗族、人族、羽族、その他少数種族、精霊族とそれぞれ間を開けて書いてある。

精霊族を除外した5種族を一括りにした大括弧は人型種となっている。

神族のところに「神々の御子、神王」とだけ書くと、次の獣族を指して先生は説明を再開した。

「次に、最もこの世界で多い種族が所謂獣人、と呼ばれている獣族だ。

アウトラーシェンやザウルディカでは獣族よりも人族が多いが、世界全体で見れば獣族が最も数が多い。

だが、種族として一纏めにされてはいるが、獣族には様々な氏族が存在する。

氏族ごとに身体的特徴が異なる為、それぞれを別種としてはどうかと言う話が出たこともあったが、そうなるとあまりに種の数が増えてしまうと言うことで見送られたと言う経緯がある。

基本的な獣族の特徴としては、全身が濃い体毛に覆われ、氏族の名となっている獣の特徴を多く持つと言う事だ。

人族などとの混血になるとそれが耳や尾、爪などといった末端にのみ獣化が起るか、或いは人族の身体的特徴に獣族の身体能力を持つ子供となる。

何故一部にのみ獣化が起きるのかは明らかとなっていない。」

意外だ。

どうやら町で見かける獣耳の人たちは獣族ではなかったらしい。

こういう細かいことまでは神殿では習わなかったから、てっきり今まであの人たちも獣人なのだとばかり思っていた。

っていうか、この世界の遺伝子はどうなってる。

まさかあれだけ半獣人の人たちがいるのだから彼らが皆生殖能力が無い、ということはありえないだろうし。

そんな私の疑問に答えるかのようにグレイズ先生が続ける。

「そうそう、言い忘れていたがこの世界に生きる人型種の全ての交配が可能だ。

異なる種族の両親から生まれた子供は双方の特徴を受けつぐが、神族に関してのみは神族ではない他種族の親の特徴のみを子供は引き継ぐことになる。

故に、この世界に降り立った際の神の御子がどのような姿をしていたのかは不明だ。

当時の資料が有ればよかったんだが、どうやら意図的に残されなかったらしい。」

神族に関して先生が愚痴っているがそんなことはある意味どうでも良い。

重要なのは、この世界の人型種全てが交配可能というこの点だ。

ということは、地球の考え方で行くなら、あんなに姿形が違うのに皆同一種ってことになるのだろうか……？

第5章

質問したいけれど、恐らく、正常な交配可能Ⅱ同一種という考え方は地球特有のものである可能性が高い。

後で先生に直接聞くか、神殿で誰か詳しそうな人に聞いてみればいいだろう。

一方的に説明だけをしていく、との宣言どおり、途中で問題を出したり、意見を聞いたりすること無くひたすらに説明を重ねていく。板書は多い方ではなく、ほとんどが口頭のみで進められていく中、私含め生徒達に質問をする余裕はあまり無い。

質問が浮かんでも、次から次へと書かねばならないことが出てきて頭を整理する暇が無い。

ノートをとらなければその限りではないのだろうけれど、書かなければ書かないで覚えていられそうも無いため、浮かんだ質問も一緒にノートに書き込んでいく。

因みに、ノートはほとんど日本語で書いてある。

特に意識しなくても、読み書きは全てアウトライシンの言葉で書くことが可能だし、慣れるためにも神殿での講義の際には常にこちらの言葉で書いていた。

でも、こうも早く書かなければいけなくなると、いくら知識がほぼ完全に関連付けされているとは言っても、やはり脳は使い慣れたほうを使いたがるらしい。

脳、というかしきたらこれは手が記憶している通りに動いているのかもしれない。

ノートを見返せば、所々、こちらの世界の固有名詞のところだけがこの世界の言葉で書かれている。

もともと字がきれいな方だとはいいいがたかったが、二ヶ国語が混じった、しかも急いで書いた為に蚯蚓が這った様な有様のそのノートは読みやすい、とはどうあっても言えそうには無かった。

これは、忘れないうちにノートをまとめなおした方がよさそうだ。

獣族の説明が終わり、そのまま止まることなく、鱗族へと進んでいく。

鱗族とは、簡単にまとめれば読んで字の如く、鱗の生えた人々だ。地球の生物に当てはめるならば、魚類から爬虫類までの人型の進化系の総称とでも言えはいいのだろうか。

所謂“人魚”は純血種としては存在しないが魚人は存在するらしい。魚人との混血には人魚に似た姿をするものもいるようだが、滅多に存在しないという事だ。

何故ならば、魚人は完全な水棲人類であり、陸生人類と交配する機会というものが滅多にないからだそうだ。

かつて記録にはあるが、残念ながら現在においては生息は確認はされていないという。

鰓呼吸と肺呼吸、そんな大きな壁を乗り越えてカップルとなった人々がかつて存在したということ自体が私にとっては大きな驚きだ。他に鱗族には幼生は水中で育ち、大人になると陸生に変わる両棲の種族や、所謂リザードマンや恐竜人間によく似た姿をした種族がいるのだという。

だが、鱗族は今では余り数は多くない。

その理由が、“竜”に似ていたことから他種族によって迫害を受けた、と聞けば私に責任のあることではないとはいえ申し訳なく思ってしまう。

ただ“鱗”がある、たったそれだけの理由で竜の同属に扱われたことがあった、そんなことが起きるほどに竜はこの世界に恐慌を齎したのだと思うと、哀しくなる。

鱗族にとっても、竜にとっても、その外の人型種にとっても。

なんで、そんなことになってしまったのだろう。

そんな暗い気持ちのまま、授業は一端休憩となった。

第5章 (8)

グレイズ先生の第一回目の授業は各種族特徴を細かく説明することに終始した。

来週種族間のは対立の歴史について軽くおさらいをして、再来週から特に近年よく見られるタイプの事例を元に授業をするそうだ。

ちなみに、渡り人は学術的には全ての種族と異なるものとして扱われるらしい。

生まれが異界であるという点だけでなく、その身に宿す膨大な魔力、また強靱な身体、驚異的な身体能力、しかしこの世界に生まれた者が持ち得ぬそれらの能力は多くの場合只一代のみで失われる。

次代にその能力が継承されることがほぼないが故に、交配こそ可能なもの、一代限りの特別種として認識されているようだ。

講義を終えて教室を出る。

少し早めに終わったが、フェクトたちはもう集まっているだろうか。

とりあえず昇降口まで降りてはみたものの、探し人の姿はない。

そういえば――

「待ち合わせ場所って何処だっけ？」

さて、約束をしたことは覚えているのだが、何処で待ち合わせるかを決めていただろうか？

「――記憶に、ないな。」

どうするべきか、此処でこのまま二人を待つか、それとも外に出て

セムを待つべきか。

「さて、どうするかね。」

徐々に子供たちで賑やかになりつつある昇降口の端っことで、私は一人、途方に暮れた。

第5章

まずはとりあえず二人の下駄箱の確認をしてみる。

まだ靴が入っている、ということはどうやら授業は終わっていないようだ。

ならば先に外に出ているのも拙いだろうが、間もなく午前の授業が終了次第多くの学生が外に出ようとここに集まってくるだろう。

二人がその集団の先頭を切ってくるというのなら別だけれど、それはあまり期待できない。

ここに突っ立っていたらその人たちの邪魔になるし、何より大勢の子供がいる場所に正直な話あまりいたくはない。

まだたった二回の授業ではろくに知り合いもないけれど、室内でも相変わらずローブを羽織っているから顔はともかくとして、姿は覚えられているだろう。

興味深げに私を見ていた視線も幾つかあったし、その人たちに手持無沙汰で突っ立ているところを見つかったら声をかけられないとも限らない。

できればそれは避けたい事態だ。

……ギルドの人たちは平気なのに、どうしてこんなに子供は嫌なんだろうか。

精神年齢で見れば私も高校生あたりからそう変わったという認識がないのだけれど。

うん、セムなんかは絶対私より精神年齢上だよね……。

まあ、そこらへんは世界が違うから、ってことで良いや。

地球でだって基本的に平和ボケしてた日本と中東あたりとではきつと子供の精神年齢って違っていたのだろうし。

何せ日本なんて成人年齢を30歳にしろ、とか言われてたくらいだし私の精神年齢が低かろうともそれは私のせいだけではない、はず

だ。

対人スキルが低いのは、人間関係を形成するのが怖くて人見知りが強すぎた私のせいだったと思うけれど。

そういう意味では、こっちの世界で少しは成長、したのかな？

第5章

と、そんなことを考えながら下駄箱の前に立っていると、徐々に人の声や足音が聞こえ始めた。

どうやら授業が終わったらしい。

この場で待っていても、人波に埋もれるだけと割り切って、とりあえず外に出ることにする。

昇降口前のロータリーのような場所の先には小さな木立があって、ベンチはないが少なくとも木陰で芝生に座ることができる。

二人を待つならそこが良いだろうと、一番太い木の根元に座り込んで二人が来るのを待つことにした。

やがて昇降口は沢山の学生を吐き出し、それぞれが帰宅やら昼食やらへとある程度の塊ごとにバラバラに散っていった。

ある程度、人がまばらになっても二人の姿は見えなかった。

もしかしたら見逃してしまったのだろうか。

それとも、約束は今日ではなかったのか？

もしくは実は単なる社交辞令だったとか？

待っていても待ち人が現れないという事態に嫌な疑いばかりが浮かんでくる。

いや、だがフェクトはセムも来ると言っていた。

今日はセム自身も学校があるから、と。

フェクト自身はともかくとして、セムはそんな嘘は言わない……と思う。

それとも、急にギルドの仕事が入ったのだろうか、昨日までの仕事
が伸びたとか？

いや、学生のギルドでのバイトは学業に影響の出ない範囲において
と決められていた筈だ。

確か、不可抗力の場合を除いて3回講義をサボるとギルドの登録を抹消されるとかじゃなかっただろうか。

だから日数的に無理な依頼は受けられなかったはずだ。

そういう規定があるからこそ、学生ではなかったものの、私自身週の後半は勉強があるから仕事はしない、ということを受け入れられていたのだから間違いない。

私を誘ったことなど、忘れてしまったのだろうか。

昨日会ったときフェクトとユーリグは結構気が合ってたっぽかったし、先に声をかけて私のことなんてすっかり忘れてしまったのかも。などと不安に駆られ、年甲斐もなく思わず涙ぐみ始める。

信用した、された、と思った相手に裏切られる――というほど大袈裟なことでもないのだが――というのはとても堪える。

どうやら、だいぶ神殿で甘やかされていたせいだろうか耐性が低くなっているようだ。

ただ相手が遅れているだけかもしれないのに、こんなではダメだ、と思いつつも俯かずにはいられなかった。

耳慣れた優しい声が聞こえたのは、それから暫くしてのことだった。

第5章

すぐそばの芝生を踏む音に、俯いたまま慌てて目元を拭う。
顔を上げる前に、問いかけるような声が耳に届いた。

「ルディア？」

それはこの半月ほどで大分聞きなれた声で、すぐに誰だか分かった。
顔を上げれば宵闇の優しい瞳が目に入った。

「セム……。」

探しに、来てくれたんですか？」

いつもとは違う呼び名に、彼も私がここではマレビットではないただ
の子供として通っていることを知っているのだと分かった。
それに併せて、いつもより丁寧な口調で答える。

「ごめん、弟達がちゃんと話をしてなかったみたいで。」

「ちゃんと聞かなかった私も悪いんです。」

同じ学校と言ってもクラスも学んでいる内容も違うのだから、す
ぐに会うのは難しいって分かっていたんですから。」

「いや、悪いのはあいつらだ。」

さつき漸く、待ち合わせ場所を伝えて無かったって気付いたから、
迎えに来るのが遅れてしまつて。

一人で待たせて、ごめん。

見つかって、本当に良かった。」

一人でも十分立てるのだが、好意を無碍にも出来ず差し伸べられた手につかまって立ち上がる。

「ありがとうございます。」

ところで、人のことを置いてきぼりにした二人はどこです？」

「とりあえず、先に食事を買に行かせた。」

多分、今は場所取りもしてるんじゃないかな？

置いてきぼりにしてしまったお詫びと言ってはなんだけど、今日は俺が奢るよ。」

セムに促されながら昼食の臨時屋台が軒を連ねる中央広場へと足を進める。

「あの二人にならともかく、迎えに来てくれたセムに奢ってもらう所以は有りませんよ？」

「まあ一応、ここではフェクトの保護責任者だから。」

と、いつかの”お兄ちゃん”の顔でセムは苦笑する。

ああ、やっぱり「良いお兄ちゃん」なんだな、と思う。

でも、待っていた時の気持ちは別として、流石にそれくらいのことです。奢ってもらうのはこちらとしても気が引けるのだ。

「とりあえず、忘れきってはいなかったってことで今回のことは帳消しで良いです。」

それでは気がすまない、っていうなら、昨日お勧めの屋台を教えてくださいませんか？

今日、その何処かを直接紹介してください。」

「了解。」

それじゃあ、今日はファビアさんところ紹介するよ。」

第5章

セムに紹介してもらったファビアさんというきれいなお姉さんのお店はお菓子屋さんだった。

ケーキとか生物はなくて、皆焼き菓子ばかりだったけれど、どれも美味しいそうで迷った結果、クッキーっぱいお菓子とマドレーヌみたいなお菓子を一袋ずつ買った。

このお店は食事向けではなくて、結構遅い時間まで学校に残る学生が軽食としたり、早い時間で帰る初等学校の生徒たちが学校帰りのおやつとして買っていくのだそうだ。

特に女子に人気のお店だと言う。

世界は違えども、女性が甘いものをこめむのは変わらないらしい。午後になると混むので、昼時の方が空いてて買いやすいのだと教えてもらった。

セムが自分で甘味を買っているのは意外だったが、実は結構甘党らしい。

ゼナウが甘い物が好きでよく買って行っていたら自分でも時々食べるようになったのだとか。

尤も、「自分で買いに来るなんて珍しいわね、色男君。」なんてファビアさんに笑われて苦笑いしていたから、最近はどうやら彼が甘党と知った女性陣から色々と貰っているようだ。

それはさておき。

そんな風にちょっと寄り道しながら、他にも昼食を買いつつ年少組二人のところへ向かってみれば。

「「ごめん！」なさい。」

謝罪の二重唱が待っていた。

4人掛けのテーブルには彼らの荷物以外見え、どうやらまだ食事を買いに入っていないようだった。

私をそのつもりは無かったとはいえ、約束をすっぱかしかけてしまったことを後悔していたようだ。

「大丈夫です、セムが迎えに来てくれましたから。」

そう言っても、

「でも、誘ったのはおれの方だったのに。」

と、悄然と項垂れる。

いつもと全く違う様子にこちらの調子が狂ってしまう。

「私もちゃんと確認しなかったのだからお相子です。
それ以上気にされても私が困ります。」

「でも……。」

「それより、二人とも食事はどうしたんですか？」

いくら休み時間が長いといっても無限にあるわけじゃないんですから、早く買いに行きましょう。」

食べる時間がなくなっちゃいますよ、と言うと漸く慌てたように駆け出した。

正攻法で行っても納得しないな、と思いつつと食事方面にずらしてみたのは正解だったようだ。

食事を買って戻ってきたときには、もう先程までのことは頭に残っていないようだった。

良い意味で単純というかなんというか……。

まあ、これも彼らの子供らしい良いところ、ということにしておこう。

寧ろ私みたいにうじうじ考えてしまう方が、周りにとっては面倒くさいしね。

自覚はあるのだけれど、なかなか改善できそうにないのが尚更困り者だ。

第5章

「ルディアは次の授業何とってんの？」

何気ない質問だったろうそれに、同じ質問をした人を思いだし、逡巡したが、結局答えることにした。

「……精霊交流術です。」

思った通り、三人の視線が集まり、一瞬の沈黙が走る。それを破ったのはフェクトだ。

「は？」

「なんで？」

「どうして？」

順にユーリグ、セムと続く。

三者三様に驚きの表情で見つめられても、困るのだが。

「どうしてって、必要だからです。」

「だから何で？」

純粹に何故なのか分からない、といった顔で聞いてくるのはフェクトで、ユーリグは訝しげに聞いてきた。

「そうだよ、あれって精霊の加護が欲しい奴が学ぶもんだろ。」

でなけりや何の加護持ちか判らない奴が。
何でルディアに必要なんだ？ そんなに水霊纏わり付かせてるってのに。」

「纏わり……って、そんなにですか？」

再び満ちる沈黙。

セムの方を見れば視線を逸らされた。

その表現を否定する気は無いらしい……。

「それを纏わりと言わずに何と言えと！？」

ちっこい水霊がウジャウジャ寄ってるじゃないか。」

「ウジャウジャ……」

流石にその表現は引く。

加護がある、とは聞いていたがそんな表現をしてきた人は始めてだ。
もしかして、今まで皆見える人たちはそんな風に思っていたのだからか……気が沈む。

「……まさかと思うけど、見えないのか？」

「……。」

沈黙は肯定と同じだ、とは誰の台詞だったか。

「信じらんねー。」

ルディアって一体いくつだよ。

オレとそんなに変わらないよな？

加護持ちなのにその年まで見えないって有りうるのか！？」

まさか、実年齢は22歳ですとも、地球には精霊なんていませんでした——少なくとも私は見た記憶はない——とも、言うわけにもいかず、私がマレビトと知る二人も何も言えずに沈黙するのみ。

「……人には色々事情というものがあるんです。
とにかく、ご飯食べてしましましょう。」

こういうときは流すに限る。

ややぎこちなくはあったが、セムとフェクトが食べ始めるとまだ何か言いたそうにしていたユーリグも渋々と食事を再開した。

誰も口を開かないままに、あらかた食事を終えてしまった。話ながらだとそれなりに時間がかかる食事も、無言のままだとあっという間だ。

誰もが喋りかねているのも気まずく、藪蛇になるかも、とは思いつつも話しかけた。

「ところで皆さんは次は何の講義があるんですか？」

まだ口に肉の塊が入ったままのフェクトが答える。

「ほへははんふあふ。」

案の定意味が分からない。

「……とりあえず、飲み込んでからもう一度お願いします。」

「たぶん、算学って言いたいんだと思うよ。」

呆れ顔でそういうセムに、フェクトは首を激しく縦に振った。
そんなフェクトに苦笑しつつもユーリグが答える。

「オレも算学。」

「ってか、オレとフェクト同じクラスなんだ。」

「そうだったんですか？」

「昨日はお互い知らないようでしたけど。」

「そりゃ、クラスで各自自己紹介する訳じゃないし、教室の端と端じゃ1回同じ講義受けた位で顔なんて覚えようもないよ。」

「……確かに、それもそうですね。」

「だろ？」

それに、ルディアだってせっかく期が同じかと思えば、講義が全く被ってないしさ。」

「私は科目履修のみなので。」

「それで、上級の講義受けてるんだから凄いやな。」

「まあ、他の学校に通っていたこともありますし、最近まで家庭教師がいきましたから。」

ちょっと違うが、まあ似たようなものだろう。

数学とかを学んだのは地球だし、神官方や神殿まで来てくださっていた先生方を家庭教師と呼び習わすのはどうかとも思うが。

「なのに、精霊が見えないとか。

勉強に力を入れた家庭で育ったにしては変なんだよな。

まあ、言いたくないならこれ以上は聞かないけどさ。」

やっぱり、藪蛇だった……。

第5章（後書き）

数秒差で16日投稿に間に合わずorz

この二日間、何度も来て下さった皆様ありがとうございます。
明日以降はいつでもおり時間は未定ですがほぼ毎日更新の予定です。

第5章 (9)

「で、それでユーリグ君とやらには話したの？」

今日の講義を終えて、今はブラーシェ先生の研究室で休憩中だ。

授業が終わったらすぐ来て良い、と言われたとおり、他に行き場も無いのでここにいる。

「話したくないなら聞かないとの言葉に甘えさせてもらいました。」

「ふうん。」

案外君も酷いねえ。

それがただの建前だったのは分かっているんでしょう？」

それは当然分かっている。

でも――。

「……彼を疑うつもりはありませんけど、それでもマレビトだと騒がれるのは嫌なんです。」

彼がそういう人かどうか分からないけれど。

「そんなものかねえ？」

「先生たちは違いますけど、神殿にいと特によく分かります。」

マレビトって、やっぱりこの世界の人たちの多くにとっては信仰対象なんです。」

ギルド関係者はそもそもがマレビト、渡り人に近い人々が多いか

ら然程私への特別視は無い。

先人達と同様な魔力や技能を求めこそすれ、私を通してその後ろに神を見ることはない。

けれど、ギルドの外は違う。

ギルドに行く途中で行きかう人々も、やっぱり私という”神マレの力の顕現”に神の存在を見ている。

神殿では私の後ろに神を見る人が多いのは感じている。

神官たちだけでなく、髪を求めて神殿を訪れる人々の目にも、個人としての私は映っていない。

私の手を戴いて額づく人や、遠くから手を合わせ祈りを捧げる人。

私は巫女でも神像でもなければ、神本体というわけでもないのに。

あれは、一種異様で、私にとっては恐ろしくも思える。

最初は、ナイルたちもそういう人と同じだと思っていた。

アカシエに言われてただ単に度の過ぎた過保護なのだと知ったけれど。

年齢やらなにやら、色々誤解の上ではあるけれど、いま友人のように付き合ってくれている彼が、もし私をそんな目で見たら？

——それは決して、耐えられない程、ではないだろう。

ショックは受けるだろうけれど、立ち直れないほどにはならないという自信がある。

でも、万が一だとしてもそんなものは嫌だと思ふし、もしもそれを防ぐ手立てがあるのならば、それを実行したいのが人というものだろう？

第5章

「確かにね。」

まあ、多くの一般人にとってはマレビトは神の力の顕現の明確な形のうちの一つだからね。」

「一つ？」

「もう一つはあそこ。」

と、北西の方角を指す。

そちらには窓は無いが、指が示す先にあるものが何であるかは知っている。

「神族、ですか。」

離宮には神族がいる、神の御子と言われる、少なくとも私たちマレビトと同じように意図をもってしてこの世界に使わされた存在が。確かに、それは神の存在を明確に示すものの一つだろう。

「そう。」

だから、これでもマレビトに対する感情はマシな方なんだよ？

ここは離宮があるし、それについて20年ちょっと前にマレビトが一時滞在していたこともあったしね。」

離宮が無いところじゃ本当に現人神扱いだよ、と辟易した様子で口にする。

他の国と違って、最近ではマレビトが減ってしまったこの国では特にそんな傾向が強いようだ。

ブラーシェ先生の言葉に引っ掛かりを覚えた私は愚痴のようなその
呟きに割り込む。

「この街にマレビトが来たのは140年ほど前だったのではなかつ
たんですか？」

確かそのように話を聞いていたと思ったのだが。

先生は愚痴を途中で妨げられたことは全く気にならないらしく、質
問に答え始める。

「それはこの街、というか君と同じようにアトルディアに顕現され
たマレビト様のことだね。

神官長が守を勤められた方だよ。

その方ではなくて20年位前にね、隣国のマレビトが来たことが
あったんだよ。

そういうことは無いわけではないけど、まあ珍しいことではある
ね。

アカシエと親交があるらしくてね、彼を訪ねてきて――数年くら
いかな？

この街に滞在していたんだよ。」

「そうだったんですか。」

「うん、そう。

だから、まだこの街の人たちはマレビトを”人”として認識して
いる方なんだよ。」

「はあ……。」

私の気の無い返事など聞こえなかったように先生は続ける。

懐かしいなあ、とその頃を思い出すように目を細めた。

「彼女は君と々世界の出身者でね、僕も話をしたけど、面白い人だったな。」

実を言えば僕が君の教師役を引き受けたのは彼女のことがあったからなんだ。

地球の話をもっと聞いてみたいと思ってね。」

「まあ、機会があれば。」

「うん、機会は作るものだよね。」

楽しみにしてるよ、と笑うその表情が獲物を狙う猫のようであっ多様な気がしたのは気のせいでは有るまい。

「まあ、それはさておき。」

そんなわけだからさ、あまり気にしなくても大丈夫だと思うよ。そりゃ最初は驚くかもしれないけどね。

それでも、その彼は君を特別視したりしないんじゃないかな。」

「そうでしょうか。」

「うん、マレビットだって誰彼構わずに言触らせてって訳じゃないよ。でも、友達だと思うんだろう？」

なら、友達くらいには隠す必要ないと、僕はそう思うよ。」

「友達……。」

私たち、友達なんでしょうか？」

ユーリグは、私を見る目を変えたりしないだろうか。

それ以前に、私たちの関係は友人と呼べるものなのだろうか――。

「違うの？」

まあ、君の実年齢からすると大分年が離れているとは思うけど、外見年齢にはあってるよ。」

「やっぱり、年離れてますよね……。」

「友達に年齢なんて関係ないと、僕は思うよ？」

どうせ年の差なんていづれ割合的には縮んでいくものだしねえ。

あと50年もたってごらんよ、別に気にならなくなるよ。」

「でも、子供の頃の数年の差って大きいじゃないですか。」

10代での5年の差は大きい。

一番年齢差の少ないセムとだって6歳差だ。

彼の精神年齢が高いから話しをしてもあまり違和感を感じないけれど。

流石に10以上離れているフェクトを友人、とは断言しがたい。

ユーリグもまた然り、だ。

でも、なら私たちの関係はなんだろう？

友人、と呼ぶには色々足りないような気がするけれど、知人と呼ぶには近い関係だ、と私は思っている。

「僕が思うにね、どちらかが友人だと思っていたなら、それは友人なんだよ。

そう在ろうとし続ける限りね。

で、話を聞くに、だ。

君はやっぱり彼らとは友人なんだと思うよ。

友人でない単なる知人が態度を変えたところで別に気にもならないでしょ。」

「そうなんでしょうか……。」

何か、もう対人関係にしろ何にしろ、こっちの世界に着てから分らないことだらけです。」

地球にいた頃、何もかも分かっていた、なんてことはなかったけれど、それでもこんなに何も分からず不安であったことも無かったように思う。

少なくとも、こんな風に誰かに相談なんてした覚えは全く無かった。ただ単に、相談できるような知り合いがいなかっただけなのかもしれないけれど。

「それは良い事なんだよ、分からないということが分かるようになったって事だからね。」

地球にいた頃、本当に君は全てを分かっていた？」

「全てなんて分かっていますでしたけど……そうですね、確かに私は漸く分からないでいた、ってことに気付き始めたばかりなのかもしれないです。」

思えば、ただ流れるように周りに合わせて生きていた。

流されるままに、ろくに考えることなく生きていたのかもしれないなかった。

「まあ、人生長いんだから気楽にね。」

考えることは大事だけど、そればかりが全てでもないからね。」

「分かりました、程ほどに考えるようにしてみます。」

「それが良いよ。」

何せ、君はまだこの世界に着たばかりだ。

時間をかけていろいろ知っていけば良い。」

「ありがとうございます。」

話を聞いてもらって、少しすっきりしました。」

「いつでも話くらいなら聞いてあげるよ。」

その代わり、そのうち地球の話も聞かせてね。」

ナイルと違って、ブラーシェ先生は何となく話がしやすい。

これも年の功って奴なのかな。

それからもう少しおしゃべりをして、私たちは高等学校の校舎へと向かった。

第5章（後書き）

2011／08／24 一部改稿。

第5章

高等学校は、同じ敷地内にあってどうしてこうも様式が違うんだと言いたくなるような、某魔法学校の映画にでも出てきそうな雰囲気
の建物だった。

建物の規模としてはあれよりはこじんまりとしたものだが、石とレンガで造られたその建物は、石畳の街中に於いて離宮や神殿、ギルドなどといった石造りの建物と並べても景観に違和感のあるものではない。

尤も、初等学校校舎だけが異様であっただけとも言えるが。

離宮や神殿などとも大きさこそ違えどもよく似た雰囲気
の造りから、恐らくは同時期に作られたものだろうと推測できた。

“異世界の学校”らしさ、というものがあるかどうかは別として、そういう空気を強く感じた。

「随分、雰囲気違うんですね……。」

「緊張する?。」

「いえ、そういう訳じゃないんですけど、なんていうかファンタジック
って感じで。」

私がそこに通う、と言うことに何となく感慨を覚えるというか……。」

「へえ。」

たわいない会話をしながら校舎内を歩く。

当然のことながらこちらは土足だ。

大理石によく似た床石は磨きたてられ、廊下だというのにまるで鏡

のように反射している。

アーチ上の窓には一部ステンドグラスがはまっていて、何かの物語を題材としているようだったけれど、それが何なのか分からないのが少し勿体無い気がした。

「さ、アトルディアは後ろの席にでも着いていてね。」

やがて教室の前に辿り付くと、先生はそう言った。

どうせ高等部の学生にはギルドで顔を知られているのだから、こちらでは名前を隠す意味は薄いよ。と言われこちらではアトルディアで通すことにしている。

初日の今日は目立たないに越した事は無いからと助言は甘んじて聞き入れることにた。

第5章（後書き）

2011/07/28

誤字修正

第5章

重厚な木製の扉を開ければ大きな階段教室が広がっていた。

先を歩くブラーシェ先生に続いて教室内へと入る。

既に教室内にいた生徒たちの視線が先生を向き、次いで私のほうへと向いた。

先生と一緒に教室内に入ればそもそも目立たずに、というのは無理であったことに漸く気付いたが遅い。

我関せず、といった風に全く振り向こうとしなかった生徒もいたが、半数近くが私たちのほうを見ていた。

その中にはギルドで見知った少年や青年達も多くおり、フードを深深に被っているとは言っても、恐らく私であることは気付かれているだろう。

そもそも高等学校の教室に子どもが入ってくる時点で目立たざるを得ないということに思い至り、顔を知られていようがいまいが名前を隠す意味がない、という意味がよく分かった。

教壇へと向かって降りていくブラーシェ先生から離れ、言われていたように一番後ろ、階段教室の最上段の端の席に腰を下ろした。

私が席に付いた後にも何人かの生徒がやってきたが、特に私に気付いて何か言ってくる人も無く静かに休憩時間は過ぎていった。

やがて鐘が鳴ると講義が始まった。

ここにいる生徒達は皆ブラーシェ先生のことを知っているようで、昨日の初等学校でのような自己紹介などは一切無かった。

ブラーシェ先生は、教科書はただの参考書に過ぎず、資料としては役に立つが授業ではそれを使うことはないと前置きをすると、白墨片手に生徒達を見上げながら話し始めた。

こちらの世界の人間にしては若干身長が低めで小柄にも見られる先

生だが、マイクも無いのに広い教室にその声はよく響いた。

——かつて神々は世界の元を握ね、四つに分けた。

まずは昼と夜に、天と地に。

昼と天が交わり、空には日が生まれた。

夜と天が交わり、空には月と星が生まれた。

昼と地が交わり、大地には生命が満ちた。

夜と地が交わり、大地には精霊が満ちた。

それは、この世界に伝わる神話の始まりだ。

神族が地上に顕現する遙か以前、神託の一つも無く、ただ神隠しの如く異世界から連れられて来た人々が残した神話。

これが事実であるかは重要ではない。

重要なのはこれがこの世界に残る最古の文献に記された神話であるということ。

この文献を残した人々がどのような人々であったかを知る術は最早無い。

物語とは“紡がれる”ものだ。

彼らは、あたかも繊維を縫り合わせて糸を紡ぐかのように、自分達と世界を結んだ不可思議な縁を神話として紡ぎ上げた。

生れ落ちた世界とは違うこの世界との繋がりが無いことなど、彼ら自身こそが分かっていただろう。

だが、神話を作り出すことによって、彼らはこの世界に生きる覚悟を決めたのだ。

彼らより先の世代が、この世界と確かな繋がりを持てるようになるために。

今では、その神話が真実ではないことを皆知っている。
それでも、この神話は異なる世界からより集められた全ての人々を
繋ぐ神話なのだ。

第5章

「この世界はまだ未熟で、この世界で誕生した種は存在しないときれている。

即ち、我々は、マレビット本人を除けば例外なくマレビットの末裔であるということだ。

神族ですら、神の実子であるといわれている初代を除けばマレビットの血が入っている。

故に、私は彼らの目を通した歴史を辿ることこそが、この世界の歴史を知る上で最も重要であると考ええる。

何故ならば、マレビットは常に神がこの世界に必要なとするものを齎す為にこの世界へと渡ってくるからだ。

彼らが成し遂げたことを見ていくことで、神がこの世界をどういった方向へと導こうとしていたのか、神が目指す先を知る手助けとなるはずだと私は思う。

私は今度、そういう趣旨を持って、この講義を行っていく。

この講義を受講することを選択した君たちならば理解していると思うが、そのことを常に胸に受講して欲しい。」

ブラーシェ先生は、神話の一説を暗誦した後、そう言って講義を開始した。

「さて、先ほどの神話だが、これはこの世界へやってきた始めのマレビットたちが作ったと伝えられている。

彼らは口伝でそれを伝え、やがて訪れたマレビットがそれを文字として記した。

彼らがそのような種であったかは今となっては定かではないが、たったこれだけの事実からも分かることは数多い――」

「当時は今以上に世界は混沌としていたことは想像に難くない。

神はその不安定な世界にも適合でき、かつ言語を持つ種族を最初にこの世界に連れて来た。

口伝で神話は伝えられたのだということから、次のマレビトが訪れるまで既に数世代を経ていたと考えられる――」

「また、口伝で伝える必要性があったことから、彼らが樹精人ではないことが分かる。

彼らは生まれつき親の記憶を引き継いで生まれてくるため、そもそも口伝で何かを伝える、ということは滅多にない。

その特性から歴史研究には彼らの協力が不可欠だが、その種族的性質上各国が正式な暦を始める以前のことは時間間隔がかなりあいまいなので注意が必要だ。

また、彼らは文字を持たない種族であったことから、第二の種族もまた樹精人ではなかったことが分かっている――」

先生は教壇の前に立ち、背にした黒板へは目もくれず、口頭で講義を続けていき、私たちはおのおのが必要と思う箇所をノートにとっていた。

途中、休憩を挟みつつ3時間、漸く講義が完了する頃には、日は沈み、既に幾つかの月明かりが窓から射していた。

第5章

「疲れた……。」

講義が終わると荷物を片付ける余裕も無く机に突っ伏した。

日本で言うなら大学レベルの講義を長時間聞き続けるのは流石に疲れる。

グレイズ先生の授業以上にきつかった。

まあ、あちらは説明が早いだけで、内容的には比較的子供向けなのだから当然といえる。

この世界の基礎知識に欠ける状態で理解しようと思うのが間違いないのか。

それでも、異世界人としての視点が入るこの講義は、他のこの世界に生まれ育った人を対象にした授業より、ある意味で理解しやすいものだった。

久々に脳を酷使して疲れたが、まあ悪い気分ではない。

のそりと体を起こし、微妙に凝ってきた肩を回す。

体は若いはずなのに肩凝りだなんて……。

多少暗くなる気持ちを抑えてノートを片付けると、まだ、先ほどまでの私と同じように机に突っ伏す学生や、雑談をしている学生達がいる教室を後にした。

行きと同じ道を通るだけならまだしも、知らない教室にでも入ったら即迷子になってしまいそうな廊下を慎重に辿り、入り口へと辿りつくつと背の高い見知った影が目に入った。

そういえば、帰りは送ってくれるのだったと思い出し、慌てて駆け寄って頭を下げた。

「イドウンさん、フィズさんお待たせしました。」

廊下からは逆光気味でシルエットしか分からなかったけれど、紛れもなく朝も顔を合わせた二人だ。

「走らずともよろしかったのに。

それほど待ってはおりませんよ。

では、帰りましょうか。」

「はい。」

そうイドウンさんが差し伸べた手を取ろうとしたらフィズさんがそれを遮り、しゃがみこむと私と目を合わせた。

「どうか、しましたか？」

「……大分、講義は長かったようですが、お疲れではないですか？」

「大丈夫です。

ちよつと久々に頭を使いすぎて疲れましたけど、体の方は問題ないです。」

嘘ではない。

確かに脳を酷使した感はあるが、体の方はただ座って手を動かしていただけだからさほど疲れてはいない。

「……。」

「え、と、あの――？」

その筈なのだが、何故かフィズさんにじっと見つめられている。そんなに疲れた顔をしているのだろうか？

と思ったら、その後ろからイドウンさんも覗き込んできている。

「あのう……。 」

「――イドウン。 」

「うん、そうだね。

そのほうが良い。

上級神官殿に怒られたくはないからね。 」

フィズさんがイドウンさんの名を呼び振り返ると、イドウンさんも頷く。

一体何の話でしょうか……。

ナイルが怒るとかなんで？

「マレビット様、失礼いたします。 」

フィズさんは、そういうと軽々と私を抱き上げた。

お姫様抱っことかそういうんじゃない。

もろ、子どもを抱き上げるときのあれだ。

「もう、夜も遅いのでこのまま神殿へ向かいます。 」

「マレビット様も帰りが遅くなって上級神官殿に怒られたくはないでしょう？ 」

夜も遅いと言ったって7時を回ったくらいのもので、私にとってはそう遅いと感じられるものではない。

だが、彼が私を運ぶ方が私が歩くより早くつくだろうことは確かなので、そのまま運んでもらうことにした。

ここで歩く歩かないと押し問答するだけの氣力がなかったただけとも言おう。

「本当、御面倒をおかけします……。」

「朝も申しましたが、マレビット様が気にかけることはございません。」

「すぐ着きますので、どうか御辛抱ください。」

「辛抱だなんて。」

「宜しく願います。」

そのまま私はフィズさんにおとなしく抱っこされ、途中まではいつもより高い視線を楽しんでいたのだけれど、意外に疲労していたらしく、気が付けば眠っていたようだ。

目を覚ましたのは部屋へと向かうナイルの腕の中で、受け渡されたときも目を覚まさなかったらしい。

その時は当然のことながら下ろせ下ろさないの押し問答を続けたわけだけれど、そうこうしているうちに部屋についてしまったのだった。

……本当に、子どもの体って不便だ。

第5章（後書き）

2011/10/06

誤字修正

第5章 (10)

学校へ通い始めてから今日で3日目。

と言っても、今日は受講している講義はない。

正しくは、興味を引かれたものはあったけれど週に一度の休みと決めた日だったから受講しなかっただけだ。

今期で学校に慣れたら来期は休みの日をずらして取ってみようかなとは思っている。

だから、学校へ通ったのはたった2日。

しかも受講しているのは4科目だけだ。

本当は後2科目受講科目があるはずだったのだけれど、それは教授の都合で来週からとのことだった。

それにも関わらず、この疲れ様は何なのだろう？

流石に昨夜は失敗した。

まさか帰ってくる途中で寝てしまうだなんて。

もしかしたら二人には相当私が眠そうに見えていたのかも知れず、それ故の申し出だったかと思うとかなり恥ずかしい。

学校生活なんてたったの半年振り——大学4年はあまり通っていないからそれを除外するとしても1年半ぶりではない——なのに、世界が違うからか大分要領が違う感じがした。

小学校時代からすれば16年間も学校に通ってたと言うのに、何だか慣れない。

もしかしたら、それはただ単に周囲に子どもが多いからなのかもしれないけれど、或いは体が子どもに戻ってしまったせいなのかもしれないがどうも疲れが溜まりやすい。

小学校に通ってたときは疲れが溜まってしまふなんてことはなかったように思うのだけれど。

やっていることはと言えば、学校まで徒歩凡そ30分の往復と、あ

とは講義を聞きながらノートをとるだけ。

ギルドへだって似たような距離を歩いているわけだから、そう遠く
なったと言うほどではない。

体感的には12歳かそこらの頃と同じように感じているわけだけれ
ど、それなら6時間くらいの勉強は問題ないはず……。

……？

そういえば、小学校の授業って45分授業だったっけ。

大学が90分だから忘れていたけど、確かそうだった。

しかも6限までであったのは確か週1回だ。

それに対して昨日は……日が高く上る前から、日が沈んで月が出る
頃まで学校だったな……。

休憩はしっかり取ったとはいえ。

あー。

なるほど、単なるオーバーワークだ。

この世界の子ども達は平気そうな顔で授業を受けていたから気付か
なかった。

今まで神殿で勉強していたときは、そういえば頻繁に休憩があった。

学校で授業を受けるときの倍くらいあったんじゃないだろうか。

そして、慣れた環境で、見慣れた人に囲まれて。

自覚はなかったけれど、多分精神的にすごく楽だったのだろう。

つまり、慣れない場所で知らない人に囲まれて、長時間講義を受け
ると言うそれなりに緊張を強いられる状況にさらされていた、と。

……それは疲れもする。

こんな感じで、更に講義受けて大丈夫かな……？

とりあえず、今日は一日完全に休養日。

疲れる理由が分かったなら、それなりの対処も出来るわけで。

一番は、よく寝ること。

来週は、早めに寝よう。

そう思いながら、押し寄せる睡魔に身を任せた。

第5章 (10) (後書き)

2011/07/28 誤字修正

第5章

日当たりの良いソファで、本を読みながら睡魔に身を委ねたのはまだ日が上りきる前のこと。

目を覚ませば、毛布がかけられ、本はテーブルの上に。

部屋の窓からは太陽は見えず、既に日が傾いて大分経つことが分かった。

背が低いお陰で二人掛けのソファでも体のはみ出ることはないものの、流石に長時間同じ体勢で寝ていた為かあちこち軋む体を伸ばす。確かに疲れを感じてはいたが、まさか半日寝て過ごすとは思わなかったが、お陰で頭はすっきりしている。

明日はギルドに行くのに、疲れを残してたらやっぱり不味いよね。

まさか学校がこんなに疲れるとは予想外だったから、明日以降の仕事が心配になる。

あまり疲れなさそうなのがあると良いが……まあ、あんまり楽すぎるような依頼なんて出る分けないのだけれど。

ソファから起きて色々考えていたら、エメラさんがお茶を持ってやってきた。

私起床したの、いつ気がついたんだろう……？

お茶と一緒に軽食が用意されていて、そういえば昼食を食べ損ねていたことを思い出した。

本当、エメラさんて気が効くなあ。

どうやったらそんな風に成れるのだろう。

気を配るのが苦手な私としてはとても懂れる。

「昨日は、大分お疲れだったようですね。」

一緒にお茶を飲みながらエメラさんが言う。

私がナイルに運ばれている途中で目を覚ましたときそばにはいなかったけれど、やはり何処かで見られていたらしい。

内心で収めたくとも恥ずかしさはすぐに表に漏れ出してしまう。

「……寝るつもりはなかったんですけど。」

「眠れるのであれば心配はいたしません。

疲れを自覚しないまままた倒れられるより遥かにマシです。」

そう言われては、何も言える言葉はない。

自分を案じてと分かる言葉に何か言えるような身ではない。

自分に非があったのだから尚更だ。

無茶を自覚してから一度謝罪している以上、ここで謝るのも変だし、かと言って「気をつけます」ではまるで気を付けていなかった様に聞こえるし。

まあ、実際早速自分の体力忘れてやらかしたようなものだったのだけれど。

……。

もしかして、護衛の二人と一緒に帰って濃い、と言うのはああなることを想定してのことだったのだろうか？

ふと浮かんだ想像だが、あまりにも有り得そうで聞くのが怖い。

実はさっきの言葉も「また無茶しやがって」という言葉をオブラートに包んだものだったのか！？

考えれば考えるほど疑心暗鬼というかドツボに嵌りそうで、なんと答えたものかと迷ってしまう。

途方に暮れているとエメラさんが先を続けた。

「どうか無理はなさいませんよう。」

疲れたと思ったときは、しっかりと休んでくださいね。」

これならば答えられる、と当然のように肯定の意を返すとエメラさんは安心したように微笑んだ。

どうやら、杞憂、だったのだろうか？

それ以降その話題が出ることもなく、内心首をかしげながらも、のんびりとおしゃべりを続けていると、この時間にしては珍しくナルが来、やがて神官長ことツエフちゃんもやってきた。

誰も明確には口にしなかったけれど、やっぱり半日も眠りこけていたから皆心配してくれたのだと思う。

来週は、こうならないように気をつけなくては。

……学校で昼寝が出来ればいいのに。

思わず浮かんだ考えだったが、案外これは良いかも知れない。

今度学校へ行ったときにはブラーシェ先生に相談してみよう、そう心に決めた。

間章

学校に通い始めて暫く経った、漸く休日を寝て過ごさなくても済む位になれた頃、ギルドにある依頼が寄せられた。

「私に指名の依頼、ですか？」

「そ。しかも流石にこれには断っても良い、とは私からは言いにくいわね。」

「拒否不可ということは、ギルドギルドからの依頼でもなく、バルドゥク家からの依頼でもない、と？」

拒否不可の依頼なんて滅多にあるものじゃない。

ギルドは常に中立で公平であり、依頼者と受諾者は対等である、というのが建前だ。

だから基本的に、指名された仕事でも請けるか請けないかを決めるのは当人の裁量に任される。

それでもたまにはどうしても断れない仕事というのも発生するわけだけれど、そういうのは例えば街が危機に瀕している、とかそれを請けないことで多大の損害が発生すると予想される場合などだといわれている。

あくまでもそういうのは熟練者ベテラン向けの依頼であって、私みたいなヒヨコどころかまだ卵といっても過言じゃないような新米に来るような話ではない。

「そういうこと。」

ヴァシーもフェクトに手がかからなくなったお陰で最近は依頼に來ないしね。

うちも今はそんなに忙しくないし。」

「私が今までしてきた仕事って、家事手伝いが主だと思うんですが、どうして拒否不可、なんてことに？」

通常そんな依頼、私みたいな新米に来たりしませんよね？」

「そうね、普通はそんな依頼来るわけないわ。でも、貴女だから。」

「……マレビトだから、というわけですか？」

実際マレビト見たさに私に指名の依頼が来ることはよくあるが、というか多分今も何枚か依頼書が来ているはずだ。

だが、そういう興味半分の依頼に関してはギルドは請ける必要がないと言ってくれているし、私も受けるつもりはなかったから請けたことはない。

なのに、今回に限りどうしてだろうと聞いてみれば、クレオさんはため息をつきつつ心底呆れた顔でその依頼書を差し出した。

「――説明するより見て貰った方が早いわ。

どちらにせよ拒否はほぼ不可だから見て頂戴。」

渡されたのは、何の変哲もない依頼書。

ちよっとばかり紙の質がいいような気がするけれど……紙の一番下にある見知った名前のサインに頭を抱えなくなった。

「アカシェからの依頼、ですか。」

「内容は書いて有るとおり簡単な荷運びよ。
これを依頼した当人に届けて欲しいって。」

これ、とクレオさんが示したのは綺麗に包装された、掌サイズの小さな包みだ。

「報酬は破格の金貨1枚。

今日から3日間、毎日昼までに届けて欲しいって。」

「……は!？」

金貨？

銀貨ではなく？」

銀貨でさえ普通の生活の中で見かけることはないというのに、あろう事か金貨とは。

通常1食にかかる金額が半銅貨1、2枚、つまり6〜12ベクといったところ。

半銅貨1枚ならファーストフード店の安めのセット、2枚ならファミレスとかラーメン屋で1食、といった感じだ。

大分物価にバラつきがあるから確かなことは言えないけれど、半銅貨1枚は500円くらいに例えても良いかも知れない。

金貨1枚、1ユナの貨幣価値はそんな半銅貨の凡そ600倍弱。

単純計算するだけでも日本円にして30万弱といった報酬という事だ。

たった3日、しかも仕事は簡単な荷物運びで、この金額だ。

これを破格といわずしてなんというおうか。

「ごめんなさい、アトル。

流石にギルドも離宮からの、しかも殿下御自らの依頼を断るのは

分が悪いのよ。」

殊勝なことを口にしながらも、クレオさんの視線は遠い。

幾分げんなりした様子を見ると、彼女も神官長と同じく彼の人の被害に遭ったことがあるのかもしれない。

「……仕方ないんで、お請けします。」

私も溜息をつきたくなるような気分で、そう告げた。

間章

ギルドから離宮までは私の足では、恐らく1時間弱程度だろう。

歩いていても良いのだが、面倒なのと時間を考えると昼までに届けるには徒歩では間に合わない可能性もあったので、乗合馬車を利用することにした。

神殿を中心にして、神宮大路と神殿大路で区切られた4区間をそれぞれ周回している、まあ日本で言うところの路線バスみたいなものだ。

馬車と言っても地球の馬とはどこか違った――例えば、麒麟のように脚に鱗があったり、蹄が偶蹄類のものだったり、角が生えていたりと様々だ――馬のような生き物や、大型の鳥類――ダチョウや絶滅した大型鳥類、恐鳥モアにも近いといえば近いが、首は細くはなく、全体的にはどちらかと言えば某RPGのチ○コボのようなかなりがっしりとした体格の鳥だ――などが車を引いており、それらを総称して馬車と呼んでいる。

街中に幾つかの停留所があるほか、呼び止めればどこでも止まって乗せてくれるし降ろしてくれる。

まあ、その分スピードは遅いのだが、歩くよりは格段に早く運賃もそう高くないので多くの人が利用している、との事だ。

因みに、話を聞いたことはあるが、乗るのは今日が初めてだ。

乗合馬車で離宮まで行ってみたいから乗り方を教えて欲しいと頼めば、神殿はこれだから教育が偏っている、と呆れながらもクレオさんは詳しく教えてくれた。

都合の良いことにギルドも離宮も停留所があるので、初心者の方に安心だ。

まるで初めて一人でバスや電車に乗ったときのような気分で、ギルド前でクレオさんと一緒に話をしながら馬車が来るのを待った。

やがてシャラシャラと鈴の音が聞こえ始め、続いてガラガラという馬車の車輪が音を響かせながら馬車の姿が目に入った。

やってきたのは麒麟とユニコーンを足して2か3で割ったような姿の馬モドキに牽かれた馬車だった。

停留所で止まった馬車から降りる人を待って、クレオさんに礼を言う。と初乗合馬車へと乗り込んだ。

馬車には幌はなく、代わりに屋根はあるものの、座席より上は転落防止及び用の柵があるだけで窓はなく吹き抜けになっている。

雨の日はさぞ濡れることだろうと思いつつも、今日は快晴なので何ら気にすることなく見晴らしの良い窓際の座席に座った。

20人くらいは座れるだろう座先も時間帯の影響か今は疎らだ。

いつもは徒歩で行く道の、いつもとは違う視点、スピードを楽しみながら、初めての乗合馬車を満喫した。

神殿どおりを神殿に向かい東に進み、神殿からは神宮大路に曲がり、離宮へと北へ進む。

普段行くことのない、高級商店街？やらを通り抜け、目的地である離宮前で降りた。

ここまでの、というか周回馬車はどこまで乗っても運賃は変わらず1回1ベク、5円玉に似た青銅貨1枚だ。

この運賃の安さが人々に広く利用される一番の理由だろう。

帰りもまた馬車に乗ろうと思いつつも、離宮の正門へと向かった。

間章

流石に離宮の人は私の顔を知っていたようで、特に何の問題もなくすんなりと離宮内へと通された。

そんな防衛体制で良いのか、と思わず聞いてしまいたくなるくらいに。

衛士から連絡を受けた宮の人がやって来ると、下にも置かぬ扱いで離宮の奥の方へと案内された。

……正直言って、凄く居心地が悪い。

慇懃無礼、というわけではない。

慇懃だけだ。

彼らからすれば私は神が遣わした存在なのだろうから、そういう扱いになってしまうのかもしれないけれども。

ただの人間でしかなかった、しかもかつての災厄のある意味で遠因となっていた私にそういう態度をとられても……困る、非常に。

これだったら、子ども扱いされる神殿や、時々拝まれることもあるけど気さくに接してくれる町の人たちの方がずっと良い。

私マイレベトでこれなのだから、アカシエ神の裔はさぞや大変だろう。

ほんのわずかな時間いるだけでもそう思うに余りある場所だった。

離宮こしはとても居心地が悪い。

アカシエはだから時々ここを抜け出してくるのかもしれない……。

恐らく、離宮の中でも執務を行ったりするのは異なる、公よりは私寄りだろう。応接室へと通されて、監視なのだから護衛なのだからよく分からないけれど警護の人と二人で残された。

……気まずい。

この部屋まで来る途中、たいていの人には慇懃に対応されたけれど、通りがかりに睨み付けてくる文官らしき人も居たりで、漸く部屋で落ち着けるのかと思いきや何も言わない人と々部屋に閉じ込められるとか……。

これ、実は嫌がらせだったりするのだろうか。

向こうは仕事だから当然なのだろうけれど、私にだけお茶が出されているのも気まずさに拍車をかける。

フィクションではそれなりに読んだり見たことのある光景だけれど、その中に自分がいるとなると違和感は半端ない。

結局、出されたお茶に手をつけることもせず、微妙な緊張感を孕んだ空気の中で、動くに動けず、自分で呼んだんだから早く来やがれアカシエ、と念じ続けた。

果たして願いは通じたのか、否か。

硬直した体が凝りを訴え始めそうになった頃、閉ざされていた扉は開かれた。

間章

扉を開いて現れたのは、相変わらず無駄なまでに輝かしい美貌を携えた人で、慣れぬこの場所で唯一といっても良いほど見慣れたその姿に、緊張していた体がほっと解けた。

いつもと違い、しかつめらしい顔でその場に現れたアカシエは警護と思しき人に何事かを告げると、微動だにすることなく直立無表情を維持していたその人は、一瞬ためらうような表情をした後に退室した。

部屋に二人だけになると、アカシエはいつもの夜のように気さくな表情を浮かべた。

仕事中だからなのか、若干疲れたように見えるのは気のせいだろうか。

「久しぶりだな、アトルディア。」

アカシエは向かいのソファに腰を下ろすと、元気にしていたかと聞いてきた。

「お久しぶりです。」

私は元気ですよ……アカシエは少し顔色悪そうですね。

まあ、それはさておき早速本題ですが、どうぞお届けものです。」

「……少しは気にかけて欲しいものだな。」

「こんなふざけた呼び出し方する人にはこんなもので十分かと。」

あ、受け取りのサインお願いします。」

自分で自分宛に荷物頼むとか、全くの無駄としか思えない。
しかも中に何が入っているのか知らないが、掌サイズでとても軽い。
せめて形だけでももう少しもってもらいたいものはなかったのか。

「まあ、待て。」

せっかくだ、茶でも飲んで行け。」

さっさと受け取りのサインを貰って帰れないかな、と思ったがやはり無理なようだ。

予想はついていたが、恐らくこちらが本題か。

「出来ればここ、早く帰りたいんですけど……。」

それでも一応悪足掻きを試みたが一蹴された、と言うか私の発言を無視して渡したばかりの小包を手に入ってきたのとは別の扉を潜っていつてしまった。

戻ったときには湯気を立てる茶器を盆に載せて運んできたから、給湯設備かなんかが隣の部屋にはあるのだろう。

漂ってくる香りは、いかにも豪華な内装のこの部屋に似合わない、最早アカシエとの茶会では定番のツェフじい御用達の徳用茶葉のものだ。

……もしかして。

「さっきの荷物はこれですか？」

「ああ、そうだ。」

先日街に降りたときにギルドに頼んできたのだ。」

堂々と言うことじゃない、とも思うが、仕方ないと諦めてアカシエのお茶に付き合うことにした。

「なんだって、こんな回りくどい真似を……。」

そう尋ねれば。

「夜行っても、このところずっとお前は寝ていただろうが。」

……なるほど、最近来ないと思っていたが私が気付かなかったただけだったのか。

「……あー、そういえば、最近は学校に慣れるのに精一杯で夜は熟睡してたかも？」

ということは、事を大袈裟にしたくない、と言っていたアカシエにとって、これが次善の策だったというわけか。

「それはお手数をおかけしまして。」

「全くだ。」

まあ、代わりにツェフのところに入り浸っていたがな。」

……神官長、憐れな。

あとでお菓子を買って帰ってあげよう。

意外にあの人は駄菓子系が好きだと知ったのは最近の事だ。

きっと喜んでくれるだろう。

とりあえず、ここに呼ばれた理由が一応は判明したが、聞きたいことはまだある。

「それにしあって、金貨一枚って何ですか。こんなことに血税使わ

ないでくださいよ。」

「安心しろ、それは政務以外で稼いだ私財だ。私事に公費を使うほど愚かではないぞ。」

「私財、ですか……。」

でも、だからって、いくらなんでもこの金額はないでしょう?」

「何だ? 少なかったか?」

「アホか! 多すぎだったの!!」

思わず、素が出てしまったのは私が悪いわけではない……はずである。

と言うか、政務以外で稼いだ私財って一体……相変わらず得体の知れないところがある。

「ははっ、冗談だ。」

「金貨一枚でも冗談かと思いましたよ。」

そう半ば本心からぼやけば、すまん、と笑う声が聞こえた。

そうまでして私と話がしたかった、と言うわけでもないだろうが、幾分疲れた様子を見てしまうとこれ以上文句を言う気も失せた。

私には無茶するな、と言った本人がこれでどうするんだか。

間章（後書き）

2011/07/30

誤字修正

間章

「さあ、話を聞かせてくれ。色々楽しんでるのだろう？」

「は？荷物運びだけの仕事じゃないんですか？」

事実、依頼書に書かれていたのは荷物の運搬、それだけだ。

暇つぶし、気分転換の相手に慣れて置いうことは記されてはいなかった。

まあ、話のほうがメインだとは分かっているので、これはある意味での意趣返しみたいなものだ。

「ついでに茶を飲んでいけ、と言う話だ。」

「全く、書かなかったのはわざとですね？」

ギルドの依頼書には、依頼内容の概要さえあれば、詳細を書かなくても良かったりする。

これが討伐系統の危険性が高いものとなるとそうもいかないが、街中での仕事では家事手伝いと言われて行ってみれば子守もだったり、またその逆もしかりと言う感じでかなり融通が利くといえれば利く。

「まあな。」

書いたら何かしら理由をつけて断ったろう？お前は。」

取り繕いもせず、あっさりと認めてしまうその態度に思わず嘆息が漏れる。

流石は同類、私の性分をよく分かっているらしい。

「はあ。どおりで文官の方々に睨まれるわけですよ。」

途中の文官に睨まれたのは、恐らくそういう意味だろう。

つまり、アカシエをサボらせてんじゃねーよと言う非難の視線だったという訳か。

訳も分らず睨まれて気分が悪かったのは確かだが、分かってみれば何のことはない。

マレビトとして慇懃に接せられるより、ある意味ではマシと言えた。勤勉な文官さんたちには悪いが、まあ、今日から3日間だけは諦めてもらうとしよう。

神族だって、疲れが溜まったら少しくらい休養が必要だろうから。

間章（後書き）

2011/07/30 加筆修正

間章

「私が王都に、ですか？」

話を聞く前に、言っておくことがあったと前置きをしてアカシエが告げたのは、王都へ行く気はあるか、というものだった。

旅行や観光ではなく、拠点为王都に、しかも王宮へ移す気はあるか、という問いだった。

彼自身、苦虫を噛み潰したような表情をしながら口に使っていたので、彼の意味によるものではないのだろう。

私がこの世界の神々を嫌っているということを知っていて、それでいて、アカシエとは違うまさに神族の鑑とでもいうべき堅物の王がいる場所へ拠点を移すつもりがあるかを聞くだなんて。

そんなの聞くまでもなく答えが決まり切っていることなど分かっているだろうに。

それでも、直接聞かねばならなかったというのなら、それが彼に課されたものであったということか。

彼に嫌々でも言うことを聞かせられる人物なんて——寧ろその相手からだからこそ“嫌々”なのだろうが——、そんなのそれこそ神王か神そのヒト——呼称が“ヒト”なのはおかしいというのはこの際置いておく、それ以外に表現が浮かばないからだ——しかないじゃないか。

「……遠慮しておきます。何かフラグ立ちそう。」

「フラグ、ね……。多分、別のフラグは立ったと思うが。」

小声で零れた後半も耳ざとく聞きつけて告げる不穏な言葉に、否応なく嫌な予感というものが膨れ上がる。

「……別の？」

「まあ、いずれ分かるだろう。」

聞きたくないけど、聞かなければ後悔する。

そんな予感に駆られてあわてて尋ねるも、その答えは素気無いものだった。

「ちょ、すっごく気になるんですけど！？ 一体なんなんですか！ 教えてくださいよ！！」

「まあまあ、後のお楽しみ、というやつだ。」

「逃げるなあ！！」

「さあ、これでも飲んで落ち着け。私自らが煎れた茶だ。有り難く飲むが良い。」

そういつて勧められたのは先ほど彼が持ってきた茶器だ。

話をしている間に大分湯気は薄れてしまっていたが。

「貴方と飲むときはいつだって貴方が手ずからに煎れてくれたじゃないですか。今更有り難みなんてありませんよ。」

神族を崇め奉っている人たちからしてみれば不遜極まりない言葉を吐きながらも、温くなってしまったそのお茶に口をつける。

こういうところに来た時くらいは高いお茶を出してくれたって良い

んじゃないか、と思いつつも、どちらにせよ自分にはお茶の良し悪しを見定めるだけの舌を持ち合わせていないという事実の前に、ならば何にせよ同じことかと諦めた。

どうせ、こうなつては彼が決して口を開かないだろうことは、まだ長いとは言えない付き合いの中で既に学習している。

言わないと決めたことは決して口を開かない、そして言いたいことだけ言っていくのがいつもの彼のやり方だ。

いつものような愚痴の嵐でなかっただけマシでもある——ただ単に敵(?)も本拠で愚痴るのは憚られただけかもしれないが——。

それに安物の徳用茶葉とは言っても不味いわけではないのだし、と頭を切り替えて、こちらは離宮用のものだろう街では見かけないちよつと高級そうなお菓子を頬張った。

……なんで私、この人自らがギルドに頼んだ茶葉を運んで、こんなところ離宮なんかで飲んでいるんだろう。

茶を飲みお菓子も食べて一息つくと、そんな問いが一瞬頭を過ったが、きつとそれは氣にしたらダメなんだろう。

お菓子を食べる私を、アカシェがまるでツェフじいが私に菓子をくれた時と同じような——つまり孫に菓子を与えてほほえましそうに眺めてる祖父のような——表情で見ていたのも、きつと氣にしてはいけないことなんだと思う。

「さてと、嫌な話も終わったことだし、お前の学校生活とやらを聞かせて貰うぞ。」

随分と楽しいことをやっていると聞いたからな。」

「楽しいって、誰から聞いたのか知りませんが、普通の……では

ないかもしれませんが、そう変わったものでもありませんよ。」

おそらくツェフじいあたりに来たのだろうと思うが。

学校生活と言っても、週二日しか行っていないのだから、そうたくさん話すことがあるわけもなく、別段面白いとも思えないのだが、アカシエはそれを聞きたいようだった。

「その普通の学校生活が聞きたいのだ。

私は経験がないからな。

ツェフやナイルにしたところであれらも神官になるための勉強しかしていないからな。」

「……そういうことでしたら、まあ。そんなに面白いものでもないですからね?」

「ああ、それでも良い。聞かせてくれ。」

結果的に、私にとっては何の変哲もないような話がアカシエには受けたようだった。

そんなこんなで、毎日昼頃までに小包を届け、日が傾くまでアカシエに請われるままに話をする、そんな時間が3日間続いたのだった。

第6章 (1)

「『秘密の花園』の真相解明？」

「はい。」

この依頼、一緒に受けてはみませんか？」

いつもながら色気ダダ漏れの美少年というか美青年というかどちらで呼ぶべきか迷う風情の――まあ、便宜上少年としておこう――セム少年が、某世界名作劇場を思い起こさせる或る一枚の依頼書を持ってきたのは、私がある事に頭を悩ませているときだった。

時の流れは早いもので、気付けば学校に通い始めて3ヶ月目に突入しており、中間考査の時期が迫っていた――因みに1年は24ヶ月、1期は6ヶ月である――。

まさかこの世界にもあるとは思わなかった中間試験。

最終試験だけじゃなかったのか……。

まあ、学校教育制度を最初に始めたのが“始源の魔法使い”とも聞けば納得のいく話ではある。

しかも、通い始めてから知った話だが、ここ、ベルガディナルの諸々の学校の創立時の貢献者もまた日本産のマレビットだったというのだから、さもありなん、といった感じではある。

まあ、それは今の私にはどうでも良いことだ。

先人たちが何を考えていたかなど私には関係ない、そう、今この時に単位を落としてかけている私にとってはそんなのは些事に過ぎない。

大学も無事に一度もダブることなく卒業した今更、こんな悩みを抱くことになるとは思ひもなかった。

問題なのはある1科目。

他は基礎科目だったり、筆記中心だから問題はなかった。

だが、ある1科目だけは考查が実技課題で行われるのだ。

にも拘らず、授業の中での練習中、私一人が一度も成功していなかった。

その講義の講師の名は、ナウブドウカ先生。
講義名、「今すぐできる精霊交流術」。

課されたものは――精霊召喚。

第6章 (2)

“今すぐできる”というだけあって、この授業は精霊交流——あるいは交渉とも呼ばれる精霊族とのコミュニケーション法——の初歩も初歩、入門編、基礎編といった内容のはずである。

今まで受け持った生徒で、ごく初歩の精霊召喚をできなかった生徒というものはほとんどおらず——その全てが魔力適性がないか、或いは精霊との相性が悪いというものだった——、まさか「魔力適性も高く、精霊との相性も抜群」の生徒が一番最後までその課題を成し遂げられないという事態に陥ろうとは、ナウブドウカ先生も予想だにしていなかった展開のようであった。

因みに、「魔力適性も高く、精霊との相性も抜群」というのは先生の言葉であり、私の認識ではないことを明記しておく。

私としてはその真逆なのではなからうかとの認識がますます強まる一方である。

何事にも例外はつきものだが、精霊族は基本的に魔力——言い方を替えれば神の創世の力の残滓だ——が強いものを好む。

魔力適性とは文字通りある魔法を使うに当たって適性のある魔力であるか、ということである。

魔法を使う上で最も重要なのは想像力であることは確かだが、それ以外にも魔法の属性に適した魔力があると考えられている。

その魔法の属性というのは、精霊の属性にも相通ずるものがあるといい、それが魔力適性が高い、延いては精霊との相性がいい、ということにつながるらしい。

例えるなら、私の場合は水霊の加護があるために、魔力適性としては水の属性が高く、故に水属性だけでなく、枝属性である氷や複合属性とされる雷、他にも親和性の高い植物系の精霊との相性がいいらしいのだ。

最も、この属性とやらを決めているのは人なので、どこまでが確かなのかは不明である。

実際、初めて使った魔法こそ水を出現させるものだったが、それ以後神殿で実験的に行っていた魔法訓練では、水を出すのも火を出すのも私にとっては何のの違いもなかった。

そしてそれは精霊にも言えることで、私自身には見えないのだが、見える人（こういう言い方をするともまるで靈感のようだ）たちに言わせれば、私の周囲に群がっている精霊たちは水に限らず、属性を持たない無属性精霊から、各属性の精霊たちとバラエティに富んでいるのだという。

まあ、これは私がマレビットだからなのかもしれないので、検証の仕様がわからないわけだが。

もしも精霊たちと会話ができるのであれば、いずれそのあたりのことを聞いてみたいものはある。

しかし！

そう、何より大事なことは、会話どころか精霊の姿を見ることがさえ出来ていないということである！！

見えないということは、目の前にいても分からないということ、声が聞こえないというのは意思の疎通が取れない、ということである。

これは、精霊に呼びかけて自分のところに来てもらうという召喚のものとも基本の部分ができていないということである。

趣味の範囲内であれば出来ないことを諦めもするが、単位がかかっているならば話は別である。

何としても見る・聞く・話すが出来ようにならねばならない。

しかし、先生が勧めるどのような方法でも上手くいくことはなかった。

そんな悩みを口にしたところ、セムが持ってきたのが例の依頼書だ

った。

『秘密の花園』とは、エグザードナの街の一角にある、精霊が大量発生していると噂の場所なのだそうだ。

常に大量発生しているというわけでもなく、時折場所を移動することもあるというのだが、兎に角その発生量が半端じゃないらしい。つまり、一匹二匹――私に群がってるのはその域を疾うに超えてはいるようだが――で見えないなら、大量にいれば見れるのではないか、ということらしい。

今まで受けたことのないタイプの依頼だが、セムやその友人たちとの共同受領ということなので、彼らに話を聞いた私は藁にも縋る思いで、その依頼を受けたのだった。

第6章

「それで、概略は分かったけど、具体的にはどうすればいいの？」

「特に難しいことはありません。

とりあえずは、移動しましょうか。」

セムと二人で依頼を受けるための手続きを終え、立ち話だったのを。通常、複数名で依頼を受けるときはその全員が手続きを行う必要があるが、セムたちは隊を組んでいるから代表者が一人いれば良いのだそうだ。

私のことに巻き込んでしまつて悪いと思つたのだが、彼らも気になつていた依頼ということなので、甘えることにしたのだ。

セムに案内されたのはギルドの3階の個室だった。

今まで初日に2階に行つたきりで、上の階に来るのは初めてで新鮮だ。

「こんなところ、有ったんですね。」

「予約制ではありますが、ここはギルド員なら誰でも無料で使えるんですよ。」

隊や、ギルド員同士での話し合いによく使われることが多いようです。

俺たちも隊や例の活動のときにここをよく利用しています。」

防音魔術があるんでいろいろと便利なんですよ、とセムは笑った。

”いろいろ”とは何か、とは多分聞かない方がいいことなのだろう……。

「さ、どうぞ。」

進められて入った室内は……なんというか、混沌としていた。

セムの話だと、時間貸しとのことだったように思うが……一体どうやったら短時間でこんな有様に？

いやいやいやいや、短時間でこれは絶対ありえないだろう！？

「あの、セム？

ここって、長時間借りることも可能なんですか？」

「え？

ああ、はい。

特に他の予約がなければ、最長半年駆け続けることが出来ます。

延長も出来るので、俺たちの代になってからで1年、先輩達から数えると数年借りてるんじゃないですかね。」

なるほど、他に希望者がいなければ借り続けることも可能、と。

確かに、これは昨日今日形成された混沌具合ではない。

ちょっと居心地よさそうかも、なんて思ってしまう自分の性格も困りものだけど。

「あの、ギルドの一角をこんな風に占有してしまっているんですか？」

「問題があれば借りられませんよ。

さ、中へどうぞ。」

「じゃあ、お邪魔します。」

促されて入った室内で待っていたのは、ギルド内では年若い方である、ギルド員兼学生の面々だった。

見知った顔も多い。

ギルドだけでなく、学校で、ブラーシェ先生の授業で一緒の人もいた。

あまり広くはないが狭くもない室内に6人ほどが思い思いの格好でくつろいでいる。

部屋の隅、一部腐海を形成している一角に蹲っている？影は人に含めていいのだろうか……。

じっと見つめてくる目や呆れ返っている目、訝しむ目、私を見る目は様々だけれど誰も言葉を発しない。

もしかして、私がここに来てはいけなかったのだろうか、とそんな風に思いながらも、後ろのセムに促されるままに部屋の真ん中にあるテーブルへと辿りついた。

すると、腐海の影を除く6人とセムの合わせて7人が、そろそろとテーブルに並んだ。

窓を背にしたそれぞれの顔は逆光になって見えにくい。

一瞬の静寂が流れ、上座のセムがそれを破った。

「ようこそ、我らが『若き賢人の間』へ。

我々はあなたを歓迎します、アトルディア様。」

まるで何かの儀式のように芝居めいた言い回しをしたセムに困惑を感じる前に、一同の爆笑が響き渡った。

「因みに、別名は『変人どもの巣窟』だ。

ようこそ、マレビット様。

君が本当に来るとは思わなかった。」

目尻に涙を浮かべながら言ったのは、如何にもな魔法士姿の青年だ。

「この部屋に入れる女がいたなんて。本当に女か？」

それとも異世界の女は特別なのか？」

と、ちよつとばかりでなく失礼な科白を言つてのけたのは、訝しむ目で私を見ていた人だ。

「前から君は変わってる、って思つてたけど、やっぱり君も辺人の仲間だったようだね。」

呆れた目をしてそう言つたのは、高等学校でブラーシェ先生の講義を受けてる一人だ。

「……あの、これは一体？」

「以前、言つたでしょう？」

ギルド員で且つ学生であるものたちで集まつて自主的な活動を行っている、と。

ここがその本拠地です。

そして、俺が今所属している隊のメンバー達でもあります。」

再び私のそばに戻つてきたセムに聞けば、そんな答えが返ってきた。

「私、まだ入るって言つてなかったと思うんですけど。」

「実はこの部屋に入れるかどうかが入部試験を兼ねてまして。入れた人物は問答無用で辺人たちの仲間入り、と言うわけです。」

それに、この空気嫌いじゃないでしょう？とまで言われては何とも言い返しようもない。

「あの腐海を除けば、確かに面白そうなところですね。」

そういうのが精一杯だった。

なにやら飲み物や食べ物を持ち出し始めた少年達の様子を見るに、なかなか、依頼のへの本題に入るのは難しそうである。

だが、こういう雰囲気は嫌いではなかった。

第6章 (3)

窓からの明かりしかなかった部屋に、魔法の明かりが灯る。

先ほどまで雑然としていたテーブルの上はきれいに片付き、菓子や人数分の飲み物が用意されていた。

腐海の隅に埋もれている一人を除いて全員が席に着き、セムの左隣から順に自己紹介が始まった。

因みに先ほどは下座だったが、今はセムの右隣に座らされている。

「アルシュだ。

魔物の生態学を専攻している。

依頼は基本的に個人で請けているな。

だが、時折、研究の為に砂漠への依頼に参加させてもらうこともある。」

恐らくこの中では一番年長であると思われる青年が言う。

鋼色とでも言えればいいのか、光沢のある濃灰の髪に、琥珀の瞳、狼を髣髴とさせる精悍な青年だ。

長剣を携えたその姿は、戦士や剣士、下手をしたら傭兵とでもいつてしまいたくなるものだが、どうやら学者の卵らしい。

人は見かけによらない……。

「イシャーラ。

こんな形をしてるけど、実は神官見習いだ。

魔法士が夢だったんだけどね、適性がなくて諦めた。

この格好は”こすぷれ”とでも思ってくれば良いよ。

ギルドに入ってるのは簡単な魔法を教えてもらえるのと、学資援助を受けるためで、もっぱら雑用に勤しんでるよ。」

如何にもな魔法士のローブ姿の青年は、どうやら苦学生らしい。

魔法を使うのはある程度は誰にでもできる事らしいけれど、適性がなかった、と言うことは職業に出来るだけの魔力を持っていないと言うことなのだろう。

私を見る目に、若干羨望が見えた気がしたのはその為かもしれない。薄金の髪に空色の瞳の色白の美青年だ。

「僕はゲルド。」

高等学校に通ってる。

まあ、同じ講義とってるから知ってるよね。

セムとは同じ隊でよく一緒に依頼を受けてる。

どう、もしよければ君も入らない？」

よくギルドで見かけていたうちの一人で、ブラーシェ先生の講義でも会うが、話をするのは今日が初めてだ。

私はいつも先生と一緒に教室に入り、奥の席に座っているから話をする機会はなかった。

黒髪に象牙の肌、焦げ茶の目と、モンゴロイド的な色彩だけど、顔立ちはコーカソイド系だ。

やっぱり顔立ちは整っている方だと思う。

「ソレム。」

魔道具や鍛冶、そのほか色々と学校で学んでいる。

いずれはどこかの工房に入りたいとは思うが、今のところまだ何をやりたいか決めあぐねているってところだな。

ここでは試作品の実験をよくやってる。

良ければ今度協力してもらえると助かる。」

例の美味しいポーションのメイン製作者ですよ、と小声でセムから

注釈が入る。

何か危なそうな人だが、恐らく悪い人ではないのだろう……多分ね。目も髪も茶と地味な色合いをしているが、彼も日本にいたら確実に美形の粹に入るだろう。

「ファベルという。

ベルガディナルではないが、高等学校に通っている。

最終試験が迫っているので、あまり会うこともないだろうが宜しく頼む。」

先ほどは失礼なことを言った、と謝ってくれたのは白い長髪を高く結い上げた、赤い目の青年だ。

褐色の肌だけれど、もしかしてアルビノだろうか？

やっぱり彼も……以下略。

まあ、確かに失礼な発言とは思ったけれど、さっきまでの混沌具合では入るのを拒否する人は男女問わずいる筈なので、言われても仕方のないことだったようにも思う。

というか、私が一瞬不快に思ったのに気付いたのか……。

これは私が感情を顔に出しやすいのか、それとも彼が人の感情の機微に聡いのか、さてどちらだろうか。

何を考えてるかよく分からない、と昔はよく言われていたのだけだ。けれど。

アルシュとイシャーラ、ファベルの年長組三人はギルドで見かけた覚えがないので、多分私とは違う時間帯にここに来ているのだろう。

「タウイーザです。

初等学校の10期目です。

ギルドには昨年から登録しています。

これからよろしくお願いしますね。」

可愛らしく微笑んだのは、この中では最年少の少年だ。

ギルドで合うことが一番多かったのが多分、この中では彼だろう。何度か話したこともあるので、全く知らないというわけでもない。明るい茶色の髪 of 彼は、まるでゴールデンレトリバーの子犬。

年上の女性には絶大な人気を誇るだろう彼も、またやっぱり、以下略だ。

これで、テーブルを1周した。

順番で言うなら次は私だろうか、と思ってセムを見上げれば、徐に彼が口を開いた。

そして指し示したのは……忘れていた、まだもう一人残っている。

「そして、あの、あなたが言うところの”腐海”で潰れているのがレーグラです。

この中では唯一、国家魔法士の勉強をしています。

今日はちょっと……疲れが溜まっているみたいですね。

一応、一度は起こしたんですが……。」

と、少しばかり困り顔だ。

だが、首を左右に振り、もう気にしないことにしたらしい。

「最後になりましたが、改めまして。

私が『若き賢人』たちの当代の代表を勤めさせていただいています。

魔法士としての勉強を始めたばかりです。

どうぞ宜しく。」

そういえば、セムが何の勉強をしているかを聞くのはこれが初めてだった。

16で魔法士として学び始めるって、結構早い方なんじゃなかった

っけ？

たしか、20代以降で体が成長しきった頃から魔法を使い始めるのが普通だと聞いた気がする。

血筋なのかもしれないが、きっと優秀な部類に入るのだろう。

とりあえずは、これで全員終わり。

全員の視線が集中しているのは気にしない。

この数ヶ月で、人に見られるのに慣れたからというのもあるが。

「えーと、顔見知りの方もそうでない方も、御存知だとは思いますが、マレビトのアトルディアです。

タキと呼んで下さい。

初等学校と高等学校で幾つかの講義を受けています。

ギルドでは、簡単な家事手伝いなどを中心に依頼を受けています。今のところ、どこの隊にも所属していません。

どうぞ宜しく。」

その後は、無礼講と言う感じだった。

酒が入っているわけではなかったのだが……。

因みに自己紹介の後で、彼らから敬称はいらない、と言われたので呼び捨てにさせてもらっている。

代わりに私のこともタキと呼び捨ててくれて構わないと言ったのだが……セムとイシャーが最後まで渋った。

結局、セムは学校と同じようにルディアと呼ぶことにし、そうすると全員がタキではなくルディアと呼ぶことに決めたらしく、イシャーもこの場に於いてだけはそう呼ぶことを受け入れたのだった。

……タキって、そんなに言い難いのかな？

そんな中で、私の悩みの種である精霊が見えない、と言う問題について一通りの討論がなされ、アルシュとソレムには特に興味深そうな視線を向けられた。

私は実感がないため言われても分からないのだが、私に群がる精霊の数と言うのは本当に異常らしい。

タウィーザも精霊に好かれやすい体質らしく、精霊と関わることは多いそうなのだが、数が異常なだけでなく、私が全く見えていないのにこんなに懐いているのも非常に珍しいことなのだと教えてくれた。

アルシュは純粹に研究者としての――精霊に関しては今も分かっていないことが多く、実は魔物と同類、或いは近種なのではないかと言う説もあるのだそうだ――興味で、ソレムはただ単に珍しいものが好きらしい。

結果としては、やはりほぼ確実に一気に大量の精霊に遭遇できる、且つさまざまな目撃情報がある『秘密の花園』に行くことが一番の近道だろう、との事だった。

何でも、実際にそうやって精霊を見れるようになった人が過去にもいたのだとか。

原理としては、例えがあっているかどうかは分からないが、靈感がなかった人が心霊スポットに行って幽霊を見てしまい、それ以降幽霊が見えるようになってしまった、と言うのと同じようなものらしい。

要は、ラジオのチューニングと同じようなもので、周波数を合わせるように、精霊を見るための波長を合わせるのだそうだ。

『秘密の花園』ではどういうわけかは分からないが、靈感のない人にとつての心霊スポットと同じように、適正が低い人でも波長が合いやすくなる特性があるらしい。

理屈はよく分からないが、多分、そういうことなのだと思う。とりあえず、明日の朝、その場へ行ってみることが決定した。

メンバーは、私、セム、ゲルド、アルシュ、タウィーザの5人。

待ち合わせはこの部屋、3の鐘になるまでに、だ。そこまで決めて、今日は解散となった。

結局、唯一、レーグラさんの顔だけは見ることが叶わなかったが、きっと彼も美形に違いない。

本当、この世界はなんだってこんなに美形が多いのだか。

別な意味で居心地が悪いと言うか、美形に囲まれて居たたまれないと言うか、なんと言うか。

美形が多くなるように神が世界を制御していると言われてもきっと私は驚かないだろう。

もうここまできると、美形のゲシュタルト崩壊を起こしそうだ……。

——自分の容姿に関しては、あえて考えまい。

第6章 (3) (後書き)

2011/08/05 一部改稿。

第6章 (4)

いつもより早めに家を出たお陰か三の鐘がなる前にギルドへ到着した。

隣にいるナイルは……あまり良い顔をしていない。

どうも、私が『若き賢人の間』の面々と付き合うことを良くは思っていないようだ。

彼らが別名『変人の巣窟』と呼ばれていることもその原因の一つらしい。

イシャーラみたいに神官見習いの人もいるのに不思議な事だ。

「兎に角、何かあれば近くに護衛の誰かが必ずいるから助けを求めるように」と、最後まで念を押して、後ろ髪を惹かれるように何度も振り返り振り返り、神殿へと戻っていった。

目立つ集団だろうとは思ったけれど、一体どんな悪名を持っているのやら……。

昨日のうちに手続きは済ませてあるので、顔見知りの人々に挨拶だけして3階へと向かった。

「……お邪魔します。」

誰か来ているか分からなかったが、静かに扉を開ける。

まだ慣れないので、恐る恐る部屋に入ると奥の方から声がした。

「おはよう。」

どこことなく眠そうな、間延びした声はまだ聞いたことのないものだ。もしかしてレーグラさんか、とまだ薄暗い部屋に目を凝らす。だがよく見えない。

「おはようございます。

……もしかして、レーグラさんですか？」

「うん。

おはよう、るーちゃん。」

るー……？

「えっと……。」「

「ああ、ちょっと待ってねえ。
今窓開けるから。」

そんな声と共に、明るい日差しが部屋の中に飛び込んできた。
ローブ姿の誰かが、窓の木戸を開けている。

逆光で輝く真っ白な毛が、外から入ってきた風にふわふわと揺れて
いる。

その頭天边には……二対の角と、一対の獣耳。
振り返ったその顔は……。

「あれ？

ビックリしちゃった？

魔法士の勉強してるレーグラだよ。

昨日は寝ちゃっててごめんね。」

……。

「……ネコ？」

レーグラさんは、エメラルドの瞳の目をぎゅっと細め、ヒゲをさわさわさせて……多分、微笑んだ。

第6章

まずは座るといい、そう言われて昨日と同じ席に座らせてもらった。
まだ他のみんなは来ていないらしい。

「よいしょっと」

掛け声と共にレーグラさんが高めの椅子によじ登る。

丁度、テーブル越しに同じくらいの視線だ。

レーグラさんがしっかりと椅子に座りなおすのを見計らって、先ほどのことを謝った。

「先ほどはすみません、ネコなんて言ってしまった。」

「ん、気にしない、気にしない。」

間違う人は多いから。

僕らは狩猫族、でも通称ネコマタ族って言う方が知られてるかな。

」

「猫又？」

「うん、そう。」

ほら、尻尾が二本あるでしょ？」

と、ローブの裾を持ち上げて二本の尻尾が現れる。

確かに猫又の名にふさわしい。

その耳と耳の間に生えている短い角を除けば、だが。

「昔話に出てくるネコマタって言うのに似てるって言うから、そう

名乗るようになったらしいよ。

他の国だと、ケットシー族って名乗るところもあるみたい。」

「……そうなんですか。」

渡り人がマレビットと呼ばれるのと同じことか。

地球人ってかなり文化的な影響力強いのか？

そんなことを考えていたらレーグラさんがいきなり謝ってきた。

「こっちこそ、昨日はごめんね。」

「何のことですか？」

謝罪される理由も分らず尋ね返せば。

「見苦しいものを見せちゃって……。」

と、部屋の隅を指す。

そこは機能はゴミも本も一緒にごちゃ混ぜに積み重なり、腐海と化していたように記憶しているのだが、今ではきれいに片付いている。

あれだけ乱雑だった空間をたった一晩でよくここまできれいにしたものだ。

背の低い本棚に大量の整然と本が詰め込められ、その前には巨大な……巨大な猫つぐらが……。

あれはもしかしくとも……。

「……あの、もしかして、レーグラさんてここに住んでらっしゃるんですか？」

「レグで良いよ、るーちゃん。

うん、ここに泊まることも多いかな。」

一昨日まで試験とレポートの提出が続いてて、片付ける時間なかったんだよね、と申し訳なさそうに耳を掻いた。

「ここって、そんなことまで出来るんですね……。」

なんでも、飲食店（屋台含む）は多いし、近くに銭湯もある。

終日営業だし、学校に匹敵する（ジャンルによってはそれ以上の）蔵書を誇る大きな図書室も完備。

勉強するには困らない場所なのだとか。

まるで、大学のサークル棟のようなではないか、と思ったのはあながち間違いでもないのかもしれない。

第6章（後書き）

2011／08／07

一部改稿

第6章

そんなこんなでレグと話をすること十数分、そろそろそのもふもふの誘惑に我慢できなくなりそうな頃、アルシュさんがやってきた。呼び捨てでいいって言われても、見た目年上には思わず”さん”付けしたくなっちゃうよなあ。

「早いな、ルディア。
もう来てたのか。」

「おはようございます。」

「はよー、あーちゃん。」

「ん、珍しいな。」

レーグラがこの時間に起きているとは。」

「流石の僕も一日以上寝てれば目も覚めるよ。」

「そうか。」

……なんか、今変なの見なかったか、私。

”あーちゃん”？

アルシュがあーちゃん？

それを何でもないことのように平然と会話している……。

ファベルの方がより厳しい顔つきだが、アルシュだって相当無骨な顔立ちだ。

二人とも美形ではあるが。

それなのに、その彼をして“あーちゃん”？

「……あーちゃん？」

「何だ？」

思わず声に出してしまっていたらしい。

っていうか、それで返事しちゃうんですか、アルシュさん！？

「つつすみませんっ、ごめんなさい、なんでもないです、アルシュさん！」

「そうか？」

慌てて謝るも、それだけ……。

ここ、予想以上に変な人の集まりだったのかもしれない。
今更ながらこう――

「――ああ、そうだ、ルディア。

昨日も言ったが、アルシュで構わん。

もし言い難いようだったら、こいつと同じようにあーちゃんでも
構わないからな。」

「は、はい。

アルシュ。」

そんなこと、ニッコリ言ってくださなくても良いですから。
腹黒系ではない、優しい微笑みに余計居た堪れなくなる。
て言うか、この人も私の年齢勘違いしてるだろ……。

誰でも良いから早く来てくれ。

そう願わずにはいられなかった。

果たして願いが聞き届けられたのかどうかは別として、ドアが再び開くのにそう長い時間はかからなかった。

第6章

「じゃあ、そういうわけで。

まずはルディアが一人で廃園に入る。

それで見えるようになれば良し、ならなければ今回の依頼は諦め
ということだ。」

それで良いかと、最終確認をするセムに皆が頷く。

「そして、ルディア。

恐らく、ここでも精霊を認識することが出来るようになる筈で
す。

それで、もし精霊を認識できたなら、あなたに気付いてもらえた
精霊達が一気に押し寄せると思います。

その時、できる限り冷静に、彼らに接してください。

彼らは絶対にあなたに危害を加えることはありませんから。」

「うん、分かった。」

「それから、俺達が近付きますから、逃げないように彼らを説得し
てください。

それが出来れば、この依頼は半分くらいこなしたようなものです。

その先は、まあ運次第ですね。

では、行きましょう。」

笑うセムに先導され、手を振るレグに見送られながらギルドを後に
した。

結果を出せるかどうかは運次第。

そうセムが言うにはわけがある。

この依頼、出されてからもう20年近く解決したものがないのだ。何でも、大量に現れるくせに、その精霊達は人が一定以上近寄ると一瞬にして姿を消してしまうのだと言う。

今まで、目撃例こそ数え切れぬほどだが、接触例は一例もない。

精霊との直接の接触がなくとも調査は出来るだろう、と思われたのだが、実際には精霊の身ではないヒトビトにとっては何ら他と違う要素を見つけ出すことは叶わなかった。

かくなる上は、精霊に聞く事だが、近寄れば消える精霊に何も聞くことも出来ず、他の精霊達に聞いても何も答えないとなっては手の打ちようもなかった。

そこに登場したのが私、と言うことらしい。

未だかつて類を見ないほどの精霊からの好かれ具合。

精霊達は基本的に自分達を感じ取れるヒトを好む。

それが、全く認識していない段階でありえないほど好かれている私が、もし見えるようになったなら――？

計画ともいえないような計画だが、うまく行けば儲けモノ、位の感覚でいるようだ。

成功すれば私は単位がもらえるし、彼らも実績を手に入れられる。失敗したところで、私が単位を諦めれば済むだけで、彼らには何のデメリットもない――依頼の受付から数年経っても解決が見られなかった場合、その依頼は失敗してもペナルティを受けないと規則に明記されている。そしてこの依頼はそれに該当しているからだ――。だから、皆ある意味でお遊び気分であり、私に付き合ってくれているだけとも言えた。

単位の為にも、手伝ってくれる皆の為にも、良い結果を出せるとい

いんだけど。

さあ、頑張りますか！

……ま、ただそこに行くだけなんだけどね。

第6章 (5)

通称、『秘密の花園』——おそらく、この命名は地球人の誰かだろう——、廃園とも呼ばれるそこは、離宮にも程近い、かつては大きな屋敷があったというその敷地内にある、打ち捨て去れた庭園だ。ヒトの手が入らなくなってからも数多の花々が咲き乱れるその場所は、少なくとも100年以上の長きに渡り放置されてきたらしい。離宮近くにそんな廃墟を残し続けることには問題も多く、何度も潰すことが計画されたものの、精霊が大量出現すると言う珍しさから、様々な研究機関や神殿からの嘆願、そして最終的には神族の命により、今尚存続している。

防犯上の観点から庭園から離れていた母屋や他の建物こそ取り壊されたものの、堀に囲まれた広大の敷地そのものが手付かずのまま残されている。

建物を壊すことで、精霊達に何らかの影響を与えて染むのではないかと危惧されたものの、それは杞憂に終わり、今では敷地全体に蔓延るように広がった植物達に付いて行ったかのように、敷地内のどこにでも現れるようになったと言う。

それでも、もともと始まりの庭園であった場所が最も出現率が高く、ついで季節の花々が咲く場所に現れることが多いといわれている。因みに、ヒトの手こそ入ることはなく放置されているが、敷地内への出入りは自由であり、子供の遊び場になっていたり、まるで肝試しのように精霊を見に来る若者達がいったり、精霊研究に従事するものたちが訪れたり、それなりにヒトの出入りは多いそうだ。全て、同行の皆からの受け売りである。

私の認識は、そういえば、こちらの世界に来たばかりの頃にハルデアさんから何かそんな場所があるようなことを聞いたような気がするな、程度のものだったのでとても助かった。

場所は神宮大路に突き当たりで交差している離宮前小路、文字通り離宮に面した通りの東の端の区画だった。

日本的に言うならば、エグザードナにとっての鬼門に当たる位置である。

離宮にも幾つかの区画が間に入るものの、隣り合っている区画——歴史を辿れば、それらの区画もかつては離宮の一部であった時代もあったようだ——である為、確かに防犯上はここを放置するのは危険だという意見が出ていたというのにも納得である。

私の足でなら、1時間以上はかかったであろうここに辿りつくのに、果たしてどのような手段がとられたか。

——抱っこされて来ましたよ、アルシュさんに。

まあ、確かに一番体格良いし、わたしなんか抱えたところでまったく何の疲れも感じてないようでしたけどね。

私と似たような背格好のタウィーザはどうしてるのかと思えば、普通にアルシュさんたちの走ってるんだか歩いてるんだか分からないようなペースについてきていた……。

本当、もう色々泣きたい気分だ……。

確かに体格差は相当ありますからね、一緒に歩いてたんじゃ遅いでしょうし、馬車を利用するのも面倒だ、と言う気持ちも分からないではないですよ。

でも、皆さん本当にそろそろヒトの年齢とか色々無視しすぎなんじゃないませんか!?

この世界に来てから、いろんなヒトに抱き上げられてばかりいる気がするの、気のせいなんかではない筈だ……。

「それでは予定通りということで。
ルディア、宜しく願います。」

「……はい。」

だから、この時幾分悄然とした気持ちで朽ちかけた門を潜った私に、
非は無かったと断言したい。

第6章

崩れかけて上部が完全に欠落した門を潜る――上部が無いのに潜ると言うのも変な話だが――。

敷地内に一歩足を踏み入れた時、空気が変わったのを感じた。

急に粘り気が出たと言うか、否、言葉にし辛い感覚だ。

決して物理的な刺激として空気の変化を感じ取ったわけではない。水の中に入ったと言うのとも違う、例えるなら田んぼや泥濘の中に手を入れるような、きつい訳ではないけれど何となく抵抗や圧迫を感じるのに似た、けれど行動を阻害するものではないのだ。

なんといえぱ的確に表現できるのかは分からないが、最も近い感じとしては空気の密度が上がったような、と言うべきかも知れない。

こんな感じになると言うことは知らされていなかったのも、首を傾げつつも、それでもあちこちひび割れ雑草を生やした石畳を廃園に向かって歩き出す。

門から廃園まで一直線に庭を突っ切っていくことが出来ないわけではないのだけれど、それには私の背丈を軽く越した草が邪魔なので、多少遠回りになるが、一応形を残している道を辿る方が結果としては早いのだ。

一歩進むごとにますます、空気の密度が上がっているように感じるが、嫌な感じはしないし、寧ろ何処となく懐かしさを覚えるくらいだし、きつと気にすべきではないのだろう。

そんな風に暢気に考えていたものだから、他の皆はどうなのだろうか、私から少しだけ離れて付いてくるはずの彼らを振り返って……後悔した。

目に入っただのは、まるでパントマイムをやっているような彼らの姿。セムは何事かを叫びながら壁を叩き、タウィーザは泣きそうな顔で壁に張り付いている。

その脇で呆然と壁を触り見上げているゲルド、アルシュは何だか興味深そうに壁を観察している。

更にその隣では、先ほどまでは姿を見せていなかったフィズさんがなにやら攻撃魔法っぽいものを壁に向かって放っていたけれど、その壁は一瞬波打っただけで、すぐに元に戻った。

いつもフィズさんとコンビを組んでいるはずのイドウンさんは見えないから、もしかしたら神殿へ連絡に行ったのかもしれない。

うん、つまり何と言うか、先ほどまで無かった筈の壁が出現している。

しかも、話に聞いただけだが、相当な実力者らしいフィズさんの魔法が効かない辺り、かなり頑丈そうだ。

向こうからもこちらが見えているのかどうかがよく分からないけれど、こちらから見分には無色透明。

一応、彼らの視線が私に向いているように感じられるから、向こうから見ても透明なんだろうと思う。

声や物音が聞こえないことから、どうやら完全防音完備らしい。どうしたの、と聞くわけにもいかなそうな彼らの切迫した様子に途方に暮れる。

これは、やっぱり一度戻った方が良さのだろうとは思うけれど……というか、本当ならその一択なんだろうけれど。

向こうから入ってこれないなら、私、ここから出ること出来るんだろうか？

もしかして、この世界に来てから最大のピンチだったり、するのかな……？

第6章

正直な話、困った、というのが本音だ。

ピンチ、なのかも知れないけれど、どうも緊迫感にかける。

門の外で必死になっている彼らには悪いが、空気こそ濃いものの、この空間が悪いものだとは感じられない。

何と言うか、悪意を感じない、寧ろ好意に満ちているような。

まあ、私が既に何者かによって洗脳されているという可能性もないわけではないだろうが、何故かここは“安全だ”という確信のようなものがある。

そして、なんとなくだけれど感じているこれは、アカシエがいつも私を呼ぶときのあれに似たもの。

誰かが、私を呼んでいる。

その誰か、は私の敵ではない。

そんな気がするのだ。

私を呼ぶ誰かがいるのであれば、きっとこの事態を引き起こしたのもそのヒトだろう。

なら、そのヒトに頼めば何とかなるんじゃないだろうか？

というか、そのヒトでなければ事態を代えることは出来ない気がする。

となれば、まあ、この先に行ってみるしかないよね！

とはいえ、心配してくれている彼らをそのまま置いていくわけにも行かず、下手をすれば洗脳されてと思われるかねない。

どうやら声は聞こえていないようだし、と少し考える。

出した結論は……。

鞆から出したノートに見開きで大きく文字を書く。

“危険は感じないので、予定通り行ってみます。”

それを彼らに見せると、慌てて荷物を探り始めた彼らの反論が来る前に踵^{かかと}を返した。

今日のことがナイルやエメラさん達に知られたら、また無茶をして、危ないことをして、と叱られそうな気がするけれど、でも、こうすることに何の不安も覚えないのだ。

もしこの予感が外れていたら――その時には次があるかは分からないけれど――、次からは直感を信じるのはやめておこう。

今回は、この勘を信じることにする。

かつては磨かれていたであろう石畳、荒れ果てても尚残っているその道を進んでいくと、やがて錆びたアイアンワークが良い雰囲気を出している、まさに廃園の呼び名に相応しい庭園が目の前に現れた。

第6章 (6)

錆付いた鉄柵に囲まれた庭園を良い風景と思うかどうかはそれぞれの好みによるだろうが、少なくとも私は嫌いではない。

人の手を離れ、人の影がない、それ故に物悲しさを誘う寂れた景色は、これで味わい深いもののように感じられる。

尤も、ここがかつての庭園であり、無秩序とはいえ今尚花が咲き乱れているからこそ、そして日の光の下だからこそ、そう思えるのだろう。

これが墓所や廃墟で風通しも悪い、じめじめした場所で夜だったなら、別の意味で雰囲気ある光景だっただろうし、それなら私は決してここに近寄ることはなかった。

幽霊は、幽霊だけは駄目なんだ……怪談を聞かされるたび逃げ回り、それを面白がったクラスメイトたちに追い掛け回されていた小学校時代は伊達ではない。

そのクラスメイト達の顔は忘れても、怖かった記憶だけは残り続ける。

それでいて、夜中に散歩するのは平気な辺り、自分でも変わっているな、とは思えけれど、安心して真夜中に庭に出ることが出来たのは、それが神殿の中だったからかもしれない。

そう考えると、案外神殿暮らしも私にとっては悪いものではなかったみたいだ。

この世界に来てからは”幽霊”なんて聞いたこともないけれど、やっぱり、この世界にも存在するのか……。

まあ、とりあえず今は”精霊”。

一字違いでしかないけれど、その一字の違いが大きいのだ。

グレイズ先生も精霊はあやふやな存在ではなく、明確に実在する一つの――或いは複数の、この辺りは研究者間での争点らしい――種

族だと言っていた。

今、私にとって確実なこと。

私を呼ぶモノは、この中に居る。

恐れることなく、足を一步踏み入れる。

ざわり、と空気が揺れた気がした。

音感が悪いが、悪寒がしたわけではない。

一つ一つは小さくさわさわと動いているようなものが、一斉に動いたような、そんな感じだ。

そして感じる無数の、視線……。

私の一挙手一投足にまで神経を張り巡らせている。

音にならないざわめきが、耳に入ってくるような気すらしてくる。

いや、違う――。

気がするのではなく、空気の振動ではない何かの波を、確かに私は感じ取っている……。

唐突に、まるで光を遮っていた暗幕を一気に取り払ったかのように、理解した。

ああ、これが、精霊の気配だ――。

そうと理解し、受け入れた瞬間、私の視覚と聴覚は、意識は、膨大な、波にも似た何かによって埋め尽くされた。

それはまるで白一色のようにも黒一色のようにも感じられた。

雑じり気のない、純粹。

全てが融けあった、混沌。

そのどちらでもあるような。

その根底にあるのは、強大なナニかのたった一つの意味。

一瞬にして溢れかえった莫大なエネルギーに押しつぶされそうになって、私と言う意識が飲み込まれる寸前、誰かに優しく抱きとめられた、そんな気がした。

第6章

まるで、夢を見ているみたいだ。

地球でも、あの世界でもない別の世界。

ただただ、その美しさに圧倒される。

ここは何処なのだろう……。

私の意志に関わらず、視線の主はあちこちへと視線を向ける。

3D映画も目じゃないこれは、きっと誰かの記憶だ。

3D映画が流行る切欠になったともいえる某SF作品は劇場に見に行ったけれど、この迫力は、その比ではない。

風を掴み、空を舞う。

空気の質からして違う。

何かが満ちている大気は刻一刻と色を変え、その姿をとどめない。

濃すぎて息も出来ないような大気の底で、そんな空気の重さなんて

感じないみたいに“誰か”は――ああ、歓喜を抱いて風を切る。

次々と場面が切り代わる。

広大な森。

何処までも広がる砂漠。

天を突く山々。

おおよそ人には耐えられないだろうその世界を”誰か”は悠然と飛び越える。

映画では共有できない”誰か”の感情を、私は感じている。

共に空を翔けていた仲間達が一頭、また一頭と減っていく。

けれど、その一方で新たな仲間達が生まれていく。

これは、そう、竜の記憶だ。

私が感じているのは“彼——或いは彼女——”の表層の感情だけだ。
この記憶の主が何を考えていたかまでは分からない。

でも、悲しみや、嬉しさというものは染み入るように伝わってくる。

世界は変容していく。

世界に満ちていた“力”は減っていく。

色濃かった大気の色が薄れ、徐々に仲間の数は減っていく。

生き方を変えるものも現れ始める。

空を降り、地を這うものに紛れていく。

でも、それを成し遂げることが出来たのは一部の者たちだけだ。

空への強い憧憬は、地に留まることを許さない。

それは地に降りたはずの血脈をも空へ呼び戻すほどに。

けれど、世界はそれを許容しない。

どれほど焦がれても、多くの仲間が空へ戻れなくなっていく。

空は奪われ、新たな仔は生まれない。

滅び。

それを身近に予感するようになった頃、それは生まれた。

“彼”、否、“彼ら”の特大的喜び、慈しみ、感謝、様々の感情と共に視界に写るのは一つの卵だ。

いつの間にか、視点は“彼ら”を俯瞰するものに変わっていた。

与えられる暖かな、優しい感情。

私は、これを、知っていた――？

知らないはずなのに沸きあがる懐かしさ、これは“私”が地球に対して抱くのと“同じモノ”だ。

泣きたくなる様な焦がれる想い、これは“郷愁”だ。

そして、同時に身を引き裂かれるような痛みも感じる。

寂しさ、恐怖、喪失、それらが縋い交ぜになった、痛みだ。

そうか、この卵は――。

第6章（後書き）

2011／08／14 大幅改稿。

第6章

何かが、聞こえる。

……水の音と、それからこれは、精霊の、声？
意識が急速に覚醒へと進む。

光を感じてゆっくりと目を開けば、世界は彩りに満ちていた。

空気が、夢で見たのと同じように遊色効果を持っているかのように様々な色に煌めく。

その中に星のような、蛍のような光がいくつも見える。

音のような、声のようなよく分からないそれと共に、光が明滅する。少しだけ私から離れて、周囲を取り巻くその光の帯に、“彼ら”が精霊と呼ばれる存在であると理解する。

それは夢で得た知識なのか、それとも直感的なものなのかは不明だけれど、すんなりとその理解は脳に受け入れられた。

彼らからは、まるで夢の中の竜たちと同じように、純粹な好意だけが寄せられている。

“こんなに好かれているのに、何故”、と多くの人に言われた言葉が蘇る。

まだ微睡まじろみから抜け切らない力の抜けた体のまま、彼らに微笑みかけた。

「——今まで、気が付かなくて、ごめん。」

そう口にすれば、彼らも嬉しそうに瞬いた。

起き上がろうと身じろぐとそれに合わせて微かな水音が耳に入り、どうやら半身が水に浸かっているらしいことに漸く気が付いた。

私が沈まないように抱え込んでいる、柔らかな”何か”に手を付いて起き上がる。

そこは、広い池の真ん中だった。

透き通った水もまた大気と同じように色づいていて、波立つ度に乱反射して色が変わる。

「……なんで、こんなところに？」

意識が途切れたのは庭の中だったはずだ。

少なくとも、視界に池のようなものは見当たらなかったはずだ。

しかし、遠くには離宮の尖塔も神殿の鐘楼も意識を失う前と同じような角度と距離で目に入るということは、そう離れた場所ではなさそうだ。

そう思っ、独り言のつもりで呟いた言葉に思いがけず、周囲から答えが返る。

『水の主アトルディアが、望んだ』

少し、ぶっきら棒なそれは精霊達の言葉。

「え。」

『アトルディアが、そう望んだ。』

驚きにこぼれた言葉を、再び問うたのだと思ったのか、律儀に答えを返してくれる精霊達。

先ほどこまで何を言っているのか分からなかったので、勘違いしていたが、どうやら、普通に意思疎通も出来るらしい。

まあ、そうでなければ精霊との交流なんて授業があるわけなかったのだが。

「この水は、アトルディアが――？」

『そう。』

尋ねれば、明朗だが些か説明の足りない答えが返る。

「アトルディア」は私の名前でもあり、私を守護する精霊の名前であり、私がこの世界にわたってきた場所の名前でもある。

この場合は精霊としてのアトルディアのことであるのは明確だ。

何故こうしているのかは分からないが、その答えで一つだけ分かったことがある。

水の中に居るのに、全く寒さを感じないのは、濡れている不快感もないのは、これが私を守護する精霊の力によるものだからなのだろう。

ふと水面を覗き込めば、そう深くない水の底に、意識を失うまでの庭園の花々が見えた。

それらは、水底でまるで風に吹かれるように揺らいでいる。

……これ、今外から見たらどう見えるんだろう？

私以外人が見えない以上どうでも良い事だが、そんなことが気になった。

第6章 (7)

一度見えてしまえば、何を悩んでいたのかと思うほどに簡単に精霊達とは意思の疎通が可能だった。

尤も、聞いたこと”のみ”には答えてもらえるものの、それ以外にはそれぞれの感情だけが撒き散らされている感じがたが。

それを理解するくらいには”会話”を続けた頃、地面？が動いた。私を半ば抱きこむように包み、浮いていた柔らかなその”地面”はスルスルと動き、状況を理解出来ないままに、足場を失った私は足先から水にゆっくりと沈んだ。

地球に居た頃、泳ぎは決して苦手ではなかった。

寧ろ水泳部に誘われたことがあるくらいには得意だった。

けれど、まるで浮力が働かないかのように体が沈んでいく。

普通だったら慌てて当然のその状況なのに、恐慌をきたすどころか安心して、今度こそ地面に足をつけたことに自分自身驚いた。その驚きはその水の中で呼吸が可能だったこと以上の驚きだった。

「なに、これ……？」

思わず漏れた言葉を、まともにしゃべれたことにまた驚く。

水の中のはずなのに全く問題なく話せてしまう。

精霊達も、沈んだ私に付いてくるように水の中に降りてくる。

そして、精霊と共に長く大きな何かが近付いてきた。

龍のようにも見えるが角やら髭のないそれは、一見、蛇のように見えた。

だが、近付き頬に擦り寄ってきたそれに鱗はなく、全身が毛に包ま

れていた。

その感触で、先ほどまで私を抱きとめていた”何か”であることが分かった。

そして、それが周囲で光る精霊達と同じモノであることも。

「実体を持つ、精霊……？」

それは周囲の精霊のように話すことはなかったが、肯定するかのよう
に再び目を細めて擦り寄ってきた。

実体のある精霊について講義で習ってはいたが、実物を目にするの
は初めてだ。

実体化することがある、というのが精霊を一つの種族であるとする
根拠らしい。

尤も、実体化できるのは強い力を持つ精霊に限られ、滅多に遭遇で
きるものではないともいうが。

何故そんな珍しい生き物がここに居るのかと不思議に思いながらも、
撫でると気持ち良さそうにするそれを毛を指で梳く。

暫くそうして、精霊たちの奏でる声を聞きながら、蛇に似た精霊を
撫で続けた。

うっかり、寝てしまいそうになった時に、はっと思い出した。
ここに来るちよつと前の状況を。

確か、私一人がこの廃園跡を含む古い屋敷の敷地内に閉じ込められ
たのではなかったか……。

そして、心配する友人達を置いて、一人奥へと進んできたはず……。

「……やばい。」

今が何時かは分からないが、確実に心配している。

しかも、イドウンさんが神殿に行っているかも、という状況だったはずだ。

もしかして、数時間耐久説教タイム、確定だったりする、のか……？

第6章

手が止まったことを抗議する様に頭を擡げた蛇もどきの視線を受けて硬直が解ける。

バシリスクに睨まれて固まるならまだしも、その逆というのも情けない……。

兎に角、今の状況を何とかしなければならぬ。

こんな水没している状況じゃ、例えあの結界みたいなのが解かれていたとしても、皆はここに入ってこれないはずだ。

何故こうなったかは問題じゃない。

撫でるのを止めてコトを謝りながら、恐らく唯一この状況を打破できるだろう——他の精霊たちでは力が弱すぎる——蛇もどきに尋ねる。

「この水、どうにかできる？」

“どうにか”という曖昧な言い方では意味が通じなかったのか、首を傾げる蛇もどきにもう一度、今度はもっと明確に聞いてみる。

「この水をなくして、他の人たちもここに来れるようにすることは出来る？」

出来れば門の結界みたいなのも、と伝えれば理解したのか、高く首を擡げる。

周囲の精霊たちも動き出す。

ポン、と——音がしたわけではないが——一瞬にして辺りを水底に沈めていた水が一気に消え去った。

不思議なことに、服も髪も体も全て乾いている。

ふと、水滴が落ちてきたような感覚に上を向くと、春雨のように柔らかな細かい雨がパラパラと降ってきた。空には虹が掛かっていて、それが煌めく大気と雨と相まって幻想的な美しさだ。

うつとりと見上げた視線を下に戻せば、これで良いのか、とも言いたげに首を傾げる……一瞬にして1mほどに縮んだ蛇もどき。精霊たちも先ほどまでの密度はない。

もしかして、相当力が必要な他の見事をしてしまったのかと思えば、気にしないで、と言う声が聞こえてくる。

聞こえてくる声に寄れば先程までの場の安定のために、必要な精霊の数だったらしい。

もうその必要がないからそれぞれ大気に散らばって行ったのだと。

そう話してくれている精霊たちが、ふと口を噤み——口、発声器官が彼らにあるかは不明である——、一斉にどこかへ移動しようかと逡巡したのが感じられた。

それと前後するように見知った気配——気配なんて今まで分からなかったが、それが置いてきた友人達と、護衛と保護者であることがすぐに分かった——が急いで近付いてきているのが分かった。

そういえば、この精霊たちは人が近付くと逃げてしまうのだと教えられていたことを、今更ながら思い出す。

「逃げないで!!」

慌てて叫んだ言葉に、精霊たちが動きを止めた。

驚いて明滅を繰り返す彼らに、静かに語りかけるように頼む。

「大丈夫だから。」

彼らは私の友人達。

ただ、貴方達と話をしたいだけ。
ここに、居てもらえる——？」

『……あなたが、望むなら』

「ありがとう。」

暫く、相談でもしているのか明滅していた光が静まると、その場に留まることを決めてくれた彼らに感謝する。
精霊たちが、笑うかのようにざわめいた。

いつの間にかマフラーみたいに緩く首というか肩に巻きつき、擦り寄る蛇もどきの頭を撫でていると、やがて走ってくる友人達の姿が見えた。

第6章

頭一つ抜きん出るように、一人突出してやって来たのはセムだ。

何故そんなに早いのかと思えば、見えるようになった今だから分かるが、精霊を身に纏わせている。

その後ろを追ってくるのはナイルで、こちらもまた精霊の補助があるようだ。

私を視認すると、更にスピードを上げ、私の名を叫ぶセムに、とりあえず無事だと伝える為に手を振った。

それでもスピードを緩めずやって来る彼が、ふいに減速した。

耳を澄ませば珍しく悪態をついているらしい彼の様子に、どうやら精霊が急に力を貸すのをやめたらしいと分かった。

自力だけで走ってくる彼のスピードはそれでも速かったが、私の元にたどり着く直前で、精霊の助力を最後まで得られたらしいナイルが追いつき、セムの首根っこを捕まえて止まった。

「だから、心配する必要はないと言っただろう。」

セムを窘めている様子から、ナイルは彼を止める為に急いでいたらしい。

てっきり、私を心配してるか、怒ってるかのどちらかで飛ばしているのかと思ったが、違ったらしい。

しかも、その口調からすればどうも何かを知っている感じた。

……が、首根っこを捕まえられ、強制的に急停止させられたセムは激しく咳き込んでいて、ナイルの言葉を聴く余裕はないようだ。

それに構わず、呆れを多分に含んだため息を漏らしつつ、ナイルは言葉を継いでいる。

口調が、いつもの彼ではなく、かつてギルドで一度だけ聞いたもの

になっている。

ギルドでかなりの有望株とされているセムを簡単にあしらうなんて、実はナイルは強かったらしい。

様々な驚きをもって二人を見てみると、セムに言いたいだけ言ったのか、掴んでいた襟首を離すと、こちらに視線を向けた。

どさっと何かが（何かではなく、落されたのはセムなのは明白だ）落ちる音と共に、多分、これを殺気やらと称すのだろうと思える怒りの感情が放出され、それに精霊たちが怯えるように私の後ろに下がったが、ナイルが視線は私に向けたまま、後ろ手で何かをしたら、セムから放たれていた殺気のようなものは霧散した。

ナイルは何事もなかったかのように私と私の周囲、特に精霊たちと蛇もどきをじっくり眺めると口を開いた。

「どうやら、無事、目的を果たしたみたいですわね。」

おめでとうございます、と微笑む声は優しかった。

ナイルは私に結構甘いほうだけれど、それでもその表情は滅多に見られないような優しさに満ちている。

その目は、時々私に向ける、私を通して別の誰かを見ているようなときの視線によく似ていた。

「ナイル……？」

一体、彼は何を知っているのだろう。

彼の言葉の真意を知りたくて名を呼んだ。

ナイルは、分かっていると言っても言うかのように一つ首肯すると、話し始めた。

「ここは、貴女の為に用意された仮初の聖域の一つだったのですよ。

L

第6章 (8)

「私のための、って……仮初の聖域って、一体どういう意味ですか？」

やはり、彼はここが何だか知っていたということだろうか。

ここが何かを知っていたならば、何故知っている人間がいるにもかかわらず調査依頼など出ていたのか？

「今お話するのが一番ですが……」

と、ナイルは後ろをちらと振り返った。

セムたちほどの勢いがないにしろ、それなりの速さでアルシュたちが近付いてくるのが見えた。

「彼らの居る前で話すのは問題があります。

気になることが多々あるとは思いますが、後ほど、詳しくお話し致しますのでどうか暫くお待ちください。」

そう言われては強く出るわけにも行かなかった。

彼にも、何か話せない訳があるのだろう。

諦めきれない気持ちを宥めつつ、皆が少しでも早くやってくるよう手を振った。

そんな訳で、今私は知りたいと言う欲求を抑えている真っ最中だ。内心にじりじりとした焦りを抱えつつも、依頼を果たすべく精霊を問いたださそうとしているアルシュとゲルドの通訳をしている。

隣では、タウィーザが精霊と戯れ、セムは未だ目が覚めない——どうやらナイルは彼を眠らせたらしい。どうやってかは知らないが。そのことについてアルシュたちは何も言わなかった。——。イドウンさんとフィズさんは次こそは何があっても大丈夫なようにと、すぐ後ろに控えていてくれる。

まあ、精霊たちも悪気があったわけではないようだから、早々何か起きると思えないのだが。

ナイルも今は何も話すつもりはないのだろう、ただ精霊たちの言葉を聴いている。

アルシュとゲルドも精霊と交流できるにもかかわらず、私が何故精霊たちの通訳をしているかといえば、ここの精霊たちは極度の人間嫌いで、私の言葉以外はまるで聞いてはくれなかったからだ。

便利なのか不便なのか、精霊の言葉は、精霊が望んだ相手にしか通じないようにできるらしい。

しかも、授業で聞いていた限りではどんな精霊とも実体のあるヒトと同じようにコミュニケーションとれるように思っていたが、実はそんなことはないという。

基本的には「何となく何を言っているのか分かる」といったレベルでしかないらしいが、精霊への交流適正が高い場合と、精霊がそれを望んだ場合に限り、そうでもないようだ。

どうやら、この場では私とナイルにのみ分かるように話をしているようだ。

時折、何人（匹？）かの精霊がナイルの方を向いたり、瞬いたりしているから、声に出さない言葉で何か話をしているのかもしれないかった。

第6章

精霊と言うのは、一概に”こういう姿である”というものではないらしい。

見るもの、聞くものによる精霊の姿は変化する。

同じ精霊を見ても、違う姿形に見えていることは普通にあることのようにだ。

私にはビー玉からピンポン玉サイズの、カラフルな光球に見え、男とも女ともつかない中性的な声に聞こえるが、他のヒトには違った姿で見えているらしい。

また、可視・不可視、可聴・不可聴は精霊自身の意思に最も左右されるが、見る側の才能によっても若干異なるらしい。

つまり、精霊が自分の姿を見せようと思っても、見ることが出来ないものもあれば、これは数が少ないが、隠れている精霊の姿すら見通すものもある、と言う事だ。

見える見えないも技能として磨くことは出来るが、その一方で何らかの切欠によって、或いは何の兆候もなく突如として、精霊を見る力を失うものも居る。

その原因はいまだ説明されておらず、精霊と明確な交流を行えるヒトの数は極わずかに留まっている。

その数少ない者たちを精霊話者と呼ぶ。

彼らは声すら介さず、直接精霊と意思の疎通を図れるのだと言う。

横目で見ていただけけれど、ナイルはどうやらその精霊話者の一人であるらしかった。

精霊たちの姿を見ることができるようになって、明確に意思疎通を行えるとはいっても、私はつい先刻、出来るようになったばかりだ。彼が精霊たちと何を話しているのかなんて分かるはずもなく、そも

そも聖徳太子でもあるまいにアルシュとゲルドの話を精霊に伝えながら、精霊たちのおしゃべりの中からその答えを見つけ出すだけでも私のキャパはオーバー寸前だ。

「……すみません、そろそろお腹空いたんですが。」

ついにそんな言葉が口について出たのは、一体どれくらい経過した頃だっただろうか。

「すまん、それほどに時間がたっていたか？」

アルシュは時間のことなど今気がついたとでもいうように（恐らく実際に全く意識なんてしていなかったのだろう）驚きの声を上げる。昼前に来て、太陽が天頂を過ぎたのが大分前なのだから、お腹を空かすには十分すぎる時間だ。

一日きっちり3食派の私にとってはもう我慢も限界に近い。

というか、食事はまだしも、飲み物さえ飲む暇を与えてくれないのはどうなんだ。

そうまでしても収穫はわずかだったとなれば、流石に気力も費える。なかなかこちらの意図が伝わらなかったということもあるけれど、聞いて分かったことを要約すれば、たったこれだけだ。

Q1. 何故ここに精霊が大量発生するのか。

A1. 居心地がいいから

Q2. 何故居心地がいいのか

A2. 力に満ちているから

Q 3. 何故力に満ちているのか。

A 3. アトルディアがそうしたから。

Q 4. アトルディアは何故そうしたのか知っているか？

A 4. 知らない。

Q 5. 誰なら知っている？

A 5. アトルディアに聞いて。

好き勝手に話したり、関係のないことを言ってみたり、思わせぶりなことを言ってみたり、そういう精霊の言葉の中から質問に対しての答えを見つけ出すのは至難の業だった。

なんというか、何十人もの小学生達が好き勝手話している中から、必要とする情報を探し出す、そんな気分だ。

この疲労感の大部分を占めるのは気疲れであろうという確信がある。10人が一斉に話す内容をしっかり把握していたという聖徳太子のその能力が本気で羨ましいし妬ましい。

私もそんな耳と脳が欲しかった……。

第6章

「本当に、もう兎に角、お腹空きました……。」

精霊と会話だなんてなれないことをしたためか、とても疲れた。

よくよく思い返してみれば、そもそもアルシュやタウィーザと会ったのだって昨日が初めてだったのだ。

ゲルドにしたところで、顔見知りでは会ったもののまともに話をしたのは昨日が初で。

そう考えれば、地球にいた頃から人見知りしがちだった私にしてみればよく頑張ったほうではなからうか。

まあ、この世界の人たちがより人好きのする人たちだというのもあるのだろうけれど。

兎に角、お腹は空いたし疲れたしで、外でさえなければ今すぐにも横になってしまいたい気分だ。

いい気なもので、蛇もどきの精霊はヒトの頭の上にとぐろを巻いている。

若干縮んだような気がするのは、果たして疲れによる気のせいか。果たして眠っているのか、いないのか、それは分からないがじっと動かない。

疲れているのはいくら重さをさほど感じないとはい、こんなものが頭上にいるからかもしれない。

「それじゃあ、そろそろギルドに戻ろうか。

あの辺りなら今の時間でも空いてる店多いしね。」

ゲルドが伸びをしながら言う。

回した肩がバキバキと鳴っていた。

やっぱりずっと座りっぱなしでは肩も凝るよね、そう思った矢先に

――。

「そうだな、どうやらこれ以上話をしたところで詳細は分かりようもないようだ。」

結構な長時間座っていたはずなのに、アルシュがなんということはないようにすくと立ち上がる。

私でさえ、さっきからあちこちギシギシ言っているというのに、なんて羨ましい……。

そんなこと重いながらも、いつまでも座って入られないので、彼らに遅れじと立ち上がる。

と、同時に思いっきり腕を伸ばしたら、ゲルドほどではないにしろ、あちこちからミシツやらパキツと音がした。

肉体年齢的には私が一番若いはずだけどな……。

そういえば、セムはどうしたのだろうかと思えば、ナイルが起こしているところだった。

どうやら、今の今ままであのまま(?)寝ていたらしい。

非常に疲れた顔をしているように見えるのだけれど、ただ眠らされていた、というわけではないのだろうか。

気になって二人を見ていたら、ナイルが私のほうへと近付いてきた。

「では、私は先に神殿に戻りますが、貴方はどうしますか？」

「多分、これからギルドに報告にいくと思うので、みんなと一緒にそちらに行くことにします。」

「分かりました。」

それでは、また後で。」

「はい。」

……あ、ナイル！」

先に帰途へと着こうとしたナイルに、言うべきことを言い忘れていたことを思い出し引き止める。

「ごめんなさい、えっと、私を心配して、来てくれたんですよ？心配かけてしまって、ごめんなさい。」

それから、ありがとうございました。」

そう言って下げた頭を上げると、ナイルが私に目線を合わせるようにしゃがんでいた。

真剣な表情で言葉をつむぐ。

「今は詳しいことは話せませんが、貴方がここに来れば何かあるだろうとは思っていました。」

ですから、私に謝る必要はありません。

でも、そうですね。

エメラの小言は覚悟しておいた方が良くかもしれませんね。

貴方が私に来るまで門のそばで待っていてくださったなら、弁護の余地もあったのですが。」

最後の方でにやりと笑ってはいたけれど、棄権の有無の確認も出来ていないのに私が勝手に行動したことに對して、やっぱり何か思うところがあったのだろう。

去り行く彼の背を見ながら、神殿に帰ってからを思うと少しだけ憂鬱になった。

溜息をつきたい衝動を抑えつつ、疲れた顔をしたセムの元へと向かった。

第6章

「……セム、大丈夫？」

「……。」

「セム？」

「——済みません、ルディア。」

「どうして、セムが謝るの？」

調子は大丈夫かと聞いたのにその返事は得られず、思っても見なかった謝罪が返ってきた。

「結果的に無事であったから良かったものの、貴方を危険な目に合わせた。」

「そのことについては、私も謝罪しよう。」

今まで何も起きなかったからといって、今回も何も起きないと決まっているわけではないということを失念していた。

すまなかった、アトルディア。」

「僕も謝るよ。」

「ごめん、ルディア。」

いつの間にか傍にいたアルシュとゲルドもまた頭を下げた。

「別に、危険なんてなかったよ？」

皆に、謝られる謂れは……。」

「それは結果論に過ぎない。」

事実、危ないことなど何もなかっただけにそう言ってみたのだが、即座にアルシュに断じられた。

「これは、ギルドに所属する先達としての謝罪だ。

どのような場所であろうとも、必ずすべきである安全の確認を怠ったことに対する、な。

私たちは、共に依頼に当たる際、後進の育成も視野に入れて行動しなければならぬ。

だが、街の中だからと警戒を怠り、気を緩めていた。

その結果が今回の事態に繋がったのは確かな事だ。

本当に、すまなかった。」

「言いたいことはアルシュに全部言われてしまいました……。

本当にすみませんでした。

謝罪を、受け入れていただけますか？

ルディア。」

自分よりも、遼に背の高い男三人に頭を下げられてるとはいえ囲まれるのはあまり気分のいいものではない。

でもって、情けない話だが、彼らに謝られると、私も謝らなくてはいけないことがあるのだ。

「分かりました、皆の謝罪を受け入れます。

それから、私のほうこそ済みませんでした。

一番謝らなくてはならないのは、勝手な行動をとった私です。本当にごめんなさい。」

声が聞こえなくなたって、彼らが私を引き止めていたことは分かっていたのだ。

それを無視して奥まで進んだのはどう考えたって私が悪い。

ぽんぽん、と軽く頭を叩かれて、許してもらえたのだと分かる。

「今後は指示に従ってくれよ。」

「はい！」

「なら、今回のことは、これで終いだ。」

そう笑うアルシュに、私も笑いたかったが、私にはまだ誤らなければならぬ人が残っていた。

後ろを振り返り、彼らの顔を見ないままに頭を下げた。

「イドウンさんも、フィズさんも勝手なこととして、心配かけてごめんなさい。」

多分、今回迷惑をかけた一番の相手はこの二人だ。

こういう件も含めて、何があるか分からないから付いていてくれる人たちなのに。

彼らの言葉を聴かず、私は動いたのだ。

そう自覚すると頭を上げられない。

頭を下げたまままでいたら、いつもより近い位置から声が聞こえた。

「謝罪すべきは我々の方です。」

どのような理由があろうとも、貴方から離れるべきではなかった。申し訳ありませんでした。」

「申し訳ありません、マレビト様。」

頭を上げれば、二人が跪いている姿が目に入った。

「あ、頭を上げてください!!」

二人とも!

お互い、謝罪を受け入れあって、それで良いってことにしましうよ!」

彼らにまで謝られては困ってしまう。

ただ頭を下げるだけでなく跪くとか、土下座でもすれば良いのか!? 本気でその考えを実行すべきか悩み始める前に二人が顔を上げてくれた。

ホッとしたのも束の間、イドウンさんが問題発言を投下してくれた。

「今回の件を鑑みた結果、お傍を離れるべきではないと痛感いたしました。」

今後は影からではなく常日頃からお傍に控えさせていただきます。

」

「――え?」

訳が分からず、フィズさんのほうへと目を向ければ――。

「既に上級神官殿の許可は得ておりますので。」

二人ともよく似た表情で微笑まれた。

学校行くときも、この人たち付いてくるの――?

思わず脱力仕掛けたところに、タウィーザの発言を受けて、完全に気が抜けた。

「そういえば、お腹空いたの大丈夫——？」

忘れていたのを急に思い出すのって、かなりくるんだね……。

一大謝罪大会が終わった後、脱力した私はフィズさんに抱えられてギルドへと辿りついた。

報告もそこそこに、そのまま皆で食事に繰り出したのは言うまでもない。

第6章 (9)

濃紺よりも尚深い空にはいつもと同じ七つの月が。

その月に照らされて花々は昼間とは異なる輝きを見せる。

日の中よりも鮮やかに精霊たちは宙を飛び交う。

「それで、教えていただけるんですね？」

「このことについて。」

「私が知る限りのことを話しましょう。」

所々苔むした、大理石に似た白い石で出来たベンチに座り、ナイルはそう頷いた。

ギルドでの報告は、手続きこそそれなりに時間が掛かったもののそれ自体はあつけないものだった。

精霊との対話で分かったことのみを伝えと、それで依頼は一応の完了となった。

あの時起きたことについては、誰もが口にせず、故に私が何かを聞かれることもなかった。

ただ、精霊を見ることが出来るようになったことに祝いの言葉をかけてもらった。

この後のことに付いては、ギルドの上層部でアトルディアへの調査依頼を出すかどうかを検討するとの事だ。

だが、最高位の精霊の一人であるアトルディアの下へ調査に行くとするのはある意味無謀なことであり、その依頼を出すことになるか

は微妙なようだ。

どちらにせよ、彼の精霊がいる森への立ち入りは学生のギルド員には禁止されている為、私たちには関係のないことと言えた。

まあ、私自身はこの件は関係なく、いずれ私の名の由来となったその精霊の元へと行かねばならないのだが、それも先の話だ。

ギルドでの報告が終わり、もう自力で動くのも億劫になっていた私は、抵抗することなくフィズさんの腕に抱かれたまま皆と少しばかり遅すぎる昼食を食べに行った。

既にちらほらと出店が始まっていた夜の屋台街は、昼の屋台街とは異なる趣で、結構楽しかった。

雰囲気的には居酒屋を屋台に買えて、夜鳴き蕎麦やらおでんなどといった飲み屋街に近いものがあつた。

それでも、まだ時間も早いこともあって、酔っ払っている大人の姿もなく、子供の集団がいても（一部大人が混ざっているが）さほど浮いた感じはなかった。

こうやって、日本にいた頃に近い食べ物、そのものの名前であったりするのは、過去のマレビットたちのお陰なのだと思うけれど、そう考えると、日本人がこの世界の食文化にかなり貢献している気がする。

まあ、そのお陰で非常に助かっているので何も言うことはないのだけれど。

流石は、「世界中の一流の食事を食べたければ東京へ行けばいい」と言われた国の出身だけはある。

尤も、日本人に限らず他の国の人も過去にきていたことはあるとは思いますが、少なくとも、私が学んだこの国の歴史の中では日本人と思われる人が多く載っていたのは確かだ。

そんな感じにそれなりに楽しい食事の時間を過ごしたわけだが、廃園での疲労感是我が思っていたより大きかったようで、お腹いっぱい

いになった後の記憶はなく、気付けば自分の部屋で寝ていたのだっ
た。

……やっぱり、帰りも抱っこされていたのだろうな、と思うとかな
り悲しいものがあるが、まあ考えなければ良いだけの事だ。

目が覚めたのは夕飯の時間も過ぎた頃で、お陰でというべきかエメ
ラさんの怒りを買うことはなかった……明日の朝が怖いけど。

それから風呂に入って寝直したまでは良かったのだが、夕方に寝て
しまったためだろう、深夜に目が覚めた。

羊を数えたり、ベッドの中でごろごろと転げまわったりと、どうに
も寝付けずにいたところにやって来たのはナイルだった。

第6章 (9) (後書き)

2011/08/23 一部修正。

第6章

ナイルに連れ出されて、今私は昼間来ていたあの廃園にいる。

夜は不気味かもしれない、と思っていたのだけれど、予想に反して月明かりと精霊のお陰でそんなことは全くなかった。

神殿で目覚めたときいなくなっていた蛇もどきは、深夜目覚めるとまるでそこが定位置であるかのように枕元にいて、今もすぐ隣を浮遊している。

そういえば、誰も蛇もどきについて言及しなかったけれど、一体何者なのだろうかと思う思いが今更ながらに沸いてきた。

そんなことを考えていると、ナイルは廃園のある場所で立ち止まり、私をベンチの上へと下ろすと自分もその隣に座った。

そこは石造りの泉水池の跡で、中央の噴水は枯れていたが、昼間の名残だろうか、長年放置されていた場所とは思えない澄んだ水が僅かばかり溜まっていた。

蛇もどきがスルスルと近付いてきて、日中のように私の首に纏わり付いたが、とりあえず気にしないことにした。

身長差で見下ろしてくるナイルを見上げ、その視線に真っ向から向き合った。

「それで、教えていただけるんですよね？」

「このことについて。」

「私が知る限りのことを話しましょう。」

所々苔むした、大理石に似た白い石で出来たベンチに座り、ナイルはそう頷いた。

「さて、何から話しましょうか。」

今はもう枯れた池を見つめながら、その瞳はずっと遠くを見据えるように、彼は話し始めた。

「全てを話すには、今夜だけでは時間が足りません。

まずは、あなたが一番知りたいだろうことからしましょうか。

ここが、あなたのために作られた仮初の聖域だと言いました。

あなたのため”だけ”ではないのですが、それも大きな要因の一つです。

あなたは今日、ここで”なにか”を見ましたね？」

その言葉に一瞬どきりとしたが、それは私に返答を求めるものではなかった。

寧ろ、彼はそれを確信していたようだった。

「私は、”それ”は何であったのかを問うつもりはありません。

ただ、私は”それ”を知っています。

私は継承者ではありませんから、実際に見たわけではありませんが。

どのようなものを受け取るか、と言うことに付いては知っていたとだけいっておきましょう。」

その告白は、驚きだった。

この世界の人々の、”竜”に対する拒否反応を目の当たりにしているだけに、尚のこと。

ただ神殿で歴史を学んでいたときには、文字情報として損なものか、と思っただけだったけれど、学校に通って、その中で受けた歴史の

授業の中で、学生達の生の反応を見たとき、否が応でも理解した、させられた。

子供でさえも、狂気にも似た竜への忌避感を抱くのだ、この世界では。

「ここは、あなたがその記憶を受け継ぐことを目的の一つとして作り出された聖域の一つです。」

なのに、私がその”竜”の一族の一匹であったことを知っていたというのだ、この人は。

何の恐れも抱かずに！

「生み出したのは、アトルディア。

あなたを、この世界に再生させた精霊です――。」

第6章

「――知って、いたんですか？」

私が、”何”であるかを……。知らず、声がこぼれた。

彼は、私の問いには答えずに、暫しの沈黙の後こんなことを言った。

「――少し、昔話をしましょうか。」

そういつて彼が話し始めたのは、幼い日の彼の話だった。

それは、まだ彼が少年であった頃のこと。

孤児として神殿が出資する孤児院で育てられ、将来は神官となることが決まっていたも同然だったが、それに逆らいたくて12歳になると同時にギルドに所属したこと。

ギルドで名を上げることが夢見て、神学校に通いながら空いた時間にはギルドで働いていた。

タクスさんとはその頃からの長い付き合いで、実は頭が上がらないらしいとか。

あまり時間はないからと、それほど詳しく話してくれたわけではなかったけれど、初めて知るナイルの過去を、彼が語るその言葉を、私は真剣に聞いた。

彼の話聞きながら、彼のことを何も知らないのだ、と認識を新たにしたあの日から、私は彼を知るために何もしていなかったことを

思い出していた。

一番身近であるはずのこの人を、私はずっと、知らないままだったのだ。

孤児院と学校とギルドとを往復する生活を続けていた彼は、ある時、異国のマレビトに出会う。

この時、マレビトと共にやってきたうちの一人がクレオさんだったのだという。

無茶をして、危うく大怪我どころか死に掛けた彼を助けてくれたのが、そのマレビトの一行だった。

彼は、彼女に懐き、暫くこの街に逗留した彼女にいつもくっついて歩いていたそう。

彼女は、そんな彼に困ったようなそぶりも見せず、好きにさせていたらしい。

この時、何があってそんなことになったのかナイルは説明してはくれなかったけれど、彼女達と共に彼はアトルディアの元を訪ねたのだという。

「ファアは、以前からあなたを知っていたそうです。」

「私のことを？」

彼女は同郷だったと聞く。

まさか、地球にいた頃の知り合いだったとでも言うのだろうか？しかし、ファアと言う名前に聞き覚えはない。

尤も、これは字だろう。

本名でなければ、私には確認のすべが無い。

その疑問はすぐに氷解した。

「彼女がこの世界に来たばかりの頃に、一度あなたを見たことがあったそうです。」

……。

ちょっと待て。

確か、そのマレビトがこの街へ来た、と言うのは20年以上前のことではなかったか。

つまりそれは、彼女がこの地に前回来たのが20数年前として、その時点で既に私はこの国にいて、更にそれ以前からここにいたということなのか？

「待ってください、じゃあ、私はもう何年……いえ、何十年も前から、この世界にいたと言うことですか？」

「そうです。」

アカシエの話では、私の体は長い時間をかけて再構成されたのだと聞いた。

長い時間、と言ってもあくまで数年単位の話だと思っていたのに。一体、いつから……。

「ファーが、初めてあなたを見たのは100年ほど前のことだったと聞いています。」

その頃のあなたは赤子同然だったとか。

20数年前に、私が始めてあなたに出会ったときは、今より少しばかり幼い感じでしたね。」

100年。

恐らく更に前から私はこの世界にいたのだろう。

100年か！

思わず笑いがこぼれる。

可笑しいわけじゃない、ただ、こぼれた声はそんな形になった。

「ふ…はは、は……100年、ですか。

私の認識では、地球での記憶は、たった、たった、7ヶ月前のことです。

いや、この世界の一月は地球より短いですから、半年経つか経たないか、つてくらいです。

それが——100年。」

しかも、この世界の1年は24ヶ月なのだ。

1ヶ月が短いとは言っても、1年は倍近くある。

その世界で、100年。

あまりに、長い。

あまりに、遠い——。

期せずして知らされた年月は、あまりに重い。

知らずにいたか、いないかだけの違いで、知ったからと言って何かが変わるわけではない。

何も、変わりはない。

それは分かっている。

それでも、その事実が、私にとっては重いものだった。

それは、最早地球に帰ることは出来ない、と知ったとき以上の衝撃を私に齎し、ナイルが「私が“竜”でもあると知っていたこと」を知った驚愕をも軽く打ち払うほどのものだった。

私が混乱を鎮めている間、ナイルは、何も言わなかった。

第6章

すり、と頬に撫でる感触に、ハッとした。

蛇もどきが、心配そうな顔をして黒のような深い藍のような、まるで夜みたいな不思議な色合いの目で私を見つめていた。

「落ち着かれましたか。」

静かに落ちてくるナイルの声。

「……すみません、取り乱しました。」

思いもかけないところで、思いもかけないことを知り、混乱した。帰れない、と言うことを納得……は出来ないにしろ、受け入れた。それでも、それは向こうの世界ではまだ家族が生きている、と思えばこそだった。

けっして、仲の良い家族だったと言うわけではない。

いつまでも馴染めない私に、実の親でさえも手を投げざるを得なかった。

それでも、いつかきつと何か変わる筈だと思っていた。

それは結局叶うことなく、叶わなくても仕方なかったことなのだと、この世界に来て教えられた。

そう言われても尚、彼らが私の親であり、兄弟であったことに違はなく、私は、彼らと共に荒れるようになりたいと心のどこかではないとも思っていたのだ。

でも、それはもう絶対に叶わない。

私はあの世界へ戻ることは出来ず、戻れたところで、もう彼らはいない。

家族だけでなく、数少ない友人達も。

1日が24時間であるかどうかは私には確かめるすべもないが、1ヶ月24日、1年24ヶ月、1年が600日弱のこの世界で、単純計算しても私があの世界方こちらに来て、地球で言うところの150年近くが経過している。

いくら日本人の寿命が延びたとはいえ、もう、誰も生きてはいない。それは、私にとっては、自分でも自覚していなかったくらい大きな衝撃だった。

ここは異世界で、そもそも数百年前どころか2000年以上前に私と同年代の日本人がこの世界に来说いるということからして、全く時間の流れは異なっている、というかまるで関係がないのだということとは分かっている。

きつと、神々からすれば、今この世界に地球の戦国時代の人間を連れてくることも、はるか未来の人間を連れてくることも、さして変わらないことなのだろう。

こちらで何年が経とうとも、それは地球には何の関係もないのだ。

そうと頭では分かっているても、主観的な時間感覚はそれとは異なる。私にとっては、やはり今の私はあの時の、初出勤しようとした朝からの延長線上にいるのだ。

私が過ごした時が、私の家族に何の影響も与えていないとしても、私の認識は一瞬で変わってしまった。

強い、強い喪失の感情だ。

私にとって家族は、ついさっきまでは会うことは出来ないけれど、遠くで元気に生きている、例えるなら外国にいるかのように感じられていたものが、まるで今では浦島太郎の気分だ。

私の家族は、もういない。

そう、感じてしまった。

きつと、これは数百年を当たり前に生きるこの世界のヒトには分からない感覚かもしれない。

そう思ったけれど、気付けば、ぽつりぽつりと思ったままに声に出していた。

ただ、分かっていたつもりだった、もう帰れないのだということ、今まで以上に強く実感してしまったのだ。

ナイルは、小さい子にするように私を膝に抱き上げ、背中を優しくとん、とん、と叩き続けてくれた。

第6章

私が落ち着くと、ナイルはアトルディアと初めて会ったときの話を再開した。

彼女は、まだ幼い私を抱きながら、彼らに私が”何”であって、”何”になるかを話したのだという。

既に彼女からその話を聞かされていたファーは、自分と同郷である私のことをまだ少年だったナイルに託したのだと。

「私に借りがあると思うなら、この子に返してやって欲しい。力になってあげたいけれど、その時私はここにいないだろうから」と。

「なんで、ファーさんは私を気にかけてくださったんでしょうか……？」

私たちには、何の繋がりもない。

ただ、同郷であるというだけの人間だというのに。

「それが答えです。」

彼女はこうも言っていました。

袖振り合うも他生の縁、情けは人の為ならず。

同じ世界の同じ時代から、同じように同時期にこの世界に来ただけで、十分すぎるほど縁深い、助けるのは当然だと。

自分も、かつての同郷のマレビトのお陰で随分と助けられたから、今度は自分が返す番なのだ、と言っていましたよ。」

「ファーさんは、誰かに助けてもらったんですか？」

それは、その時他の日本人もいたのか、という意味で聞いたのだが、

「あなたも、助けられているでしょう？」

あなたが好意的に受け入れられているその大部分は、アウトロー
シェンの初代国王にあるんですよ。」

その答えを聞いて、理解した。

そうだ、彼を初めとして、歴代の日本人達がこの世界で多くの人に
貢献してきたからこそ私は受け入れられているのだと、初めてギル
ドに行ったときも実感したというのに、今の今まですっかり忘れて
いたのかもしれない。

もしも、初めての日本人が、始源の魔法使いと讃えられるような人
ではなく、犯罪者だったとしたらどうだっただろう？

私たちは、最初から好意的に受け入れられるなんてことはなかった
筈だ。

気付かないところで、知らないうちに先人達に私は助けられていた
のだ。

だから、ファーさんも数十年前に一度会った（見た？）だけの私を
助けようとしてくれた。

いつか来る次の日本人の為に人助けをしたり、色々していたんだ
ろう。

お陰で、私はこんなにも親身になってくれる、守護者が出来たわけ
で、彼女がいなければ彼の言うとおり、彼は幼くして死んでいたか、
大怪我をしていたか、それでも神官にはなっていなかったか
もしれない。

もしかしたら、私が何であるかを知らない人が、守護者となってい
たかもしれないのだ。

アカシエが、ナイルだけは信じろと、そう言っていたのはこういう
意味も含めてだったのかもしれない。

まあ、ナイルの場合は守護者というよりは文字通り保護者のよう

な感じだけだ。

月並みではあるけれど、見ず知らずの沢山の人たちに支えられて今があるのだと、漸く本当の意味で受け入れられるような気がした。

「私はファーに助けられ、彼女から今度は私があなたを助けるようにと、託されました。」

精霊アトルディアからも。

そうして、いつかあなたが目覚めるとき、その助けとなれるよう神官の道を志しました。」

その時に、ここがいずれ私が”竜”としての記憶と、想いを受け取ることになる場所の一つだと聞かされたのだと。

体を作り直すだけでも、私の負担になるから、いつか私がそのことを受け入れられるようになった時、ここを教えるように、と。

そういえば、ギルドでこの依頼を受けたということを、ナイルには告げていなかった。

通称「変人の巣窟」の面々のことは話したけれど、それだけで話すことがいっぱいだったというのもあるけれど、精霊が見えないで四苦八苦している、ということは何となくナイルには言いたくなかったのだ。

もし、ここに来ることを知っていれば、彼は止めていたのだろうか。気になって尋ねれば、その答えは否定だった。

「知っていても、きっと止めはしなかったでしょうね。

あなたは十分、それを受け入れられると思いましたから。

そのこと自体は、別に何の問題もなかったのでしょうか？」

言われて、確かにその通りだったな、と思った。

私が混乱したのは、ナイルの話から新たに分かった事実にてあつて、
けっして、竜の記憶を受け取ったからではない。

その精霊が、とナイルが蛇もどきを指す。

「あの記憶を預かっていた精霊です。

どうやら、他のもの達からは姿を隠していたようですが。」

誰も気にしなかったのはそういうことか、と納得した一方でこんな
に確かな実体があるのに、と不思議な感覚も覚える。

「実体があつても、その本質は他の精霊と変わりません。
常にどちらのようにも在れるのが、精霊という存在の特徴の一つ
です。」

そんなものか、と温かな毛の間に顔をうずめた。

物理的な温かさだけでなく、どこか満たされていくようなその感覚
は、あの時見せられた記憶と同じもの。

そして、あの時私をこの廃園に呼び寄せたものの気配と同じ。

「ずっと、ここで私を待っていたんだ……」

訊くわけでもなく呟く。

同意するように柔らかな毛が頬に擦り寄った。

温かな感触に、涙がこぼれた。

第6章 (10)

あのあと、夜明け近くまで精霊たちが瞬く中で、私たちはいろんな話をした。

色々とお互いの話を、どんな子供だったとか、くだらないことも色々々々。

驚いたのは、ナイルもまたかつて変人達の巣窟の住人の一人だったということ。

彼だけじゃなく、ブラーシエ先生やツエフ爺もまた、昔々にはその面子の一人だったのだという。

……なるほど、変人の巣窟の名に偽りはないようだ。

明け方まで、その場で話し明かして、エメラさんを困らせない為にも夜が明け切る前に神殿へと戻った。

そのまま寝なおして、目が覚めたのは昼前くらいだった。

蛇もどきは枕元にとぐろを巻いていて、やっぱり毛が生えていても蛇という印象に間違いはなかったようだ。

ふさふさの毛皮を撫でれば目を開いて起き……浮き上がった。

確かな実体があるように感じらるのに、この生き物が精霊だなんて、分かってはいても信じがたい話だ。

けれど、目の前で数メートルに及ぶ巨体からたった数十センチという伸縮自在な様を見せ付けられては信じざるを得ない。

これは、私が知る常識の範囲外の生き物だ。

昨夜、私に記憶を受け渡すという役目を終えた彼／彼女は好きにしているという私の言葉に反して私の傍を離れようとしなかった。

もしかしたら、長く”竜”と近くあったために、その影響を受けたのかもしれない。

ファンタジー小説で読んだドラゴンと違い、この世界に連れて来ら

れた竜は群れる。

群れ、お互いを大切にする。

彼／彼女にとって、仲間といえるのはもしかしたら他の精霊たち以上に私なのかもしれないなかった。

好きにしろといった手前、付いてくるなとも言えず、結局、普段の生活の中で邪魔にならないサイズに縮んでもらうことになった以外に特に変わりはないかった。

ナイルには特定の精霊をそばに置くなら名付けた方が良いと教えられたけれど、どうやら彼／彼女もそれを望んでいるようだったけれど、しつくり来る名前が浮かばず、未だ名無しの蛇もどきのままである。

頭のすぐ脇を飛ぶ彼／彼女をつれ、部屋を出ると隣室にはエメラさんが控えてくれていた。

ナイルが昨夜連れ出したことを話してくれていたようで、あまり夜更かしをしないよう注意されただけで、怒られる様な事は何もなかった。

その日は結局一日を神殿で過ごした。

私が精霊を見れるようになったことで、今まで私の傍に群がっていたという精霊たちが度々干渉してきた為だ。

確かに数が多く、群がっていると評したセムたちの言葉は的確であった。

それぞれが持つ力は小さくとも、群ればそうとも言っていられない。

傍で明滅を繰り返されたり、一斉に声をかけられたりはまだしも、あたり構わず水やら火やら暴発させる精霊が相次いだのだ。

お陰で一部庭園が変形しかけたりした為に、庭師のおじさんに起こられてしまうという一面もあった。

ただ、彼らとしても悪気があったわけではなく、純粹に私と話が出るようになったことを喜んでいる彼らを責めるわけにもいかず、

苦勞した。

兎に角彼らと話をすることで漸く静まってくれたのだが、その頃には既に日も落ちていた、という有様だった。

話を聞けば、彼らの多くはアトルディアに命じられ、私が目覚めてから今までずっと傍にいてくれた精霊たちだった。

他にも、もともと竜とは仲が良かった精霊たちの裔や、アトルディアが私のために作ったという聖域で生まれた新しい精霊たちだということが分かった。

私は、知らず知らずのうちに、多くのモノたちに守られていたというわけだ。

今までの感謝と、これからもよろしく頼むと告げると、彼らは満足したように姿を消していった。

それでも、近くに気配は感じていたから、ただ私に見えないようにしただけなのだろうと思う。

それから二日後。

私は無事、精霊交流術の講義時間内に精霊召喚を成し遂げ、唯一残っていた最後の中間考査に合格したのだった。

第7章 (1)

学校に通い始めて間もなく6ヶ月を迎え、初めての学期を終えようとする頃、周囲はにわかには賑やかになりつつあった。

街行く人たちが皆が浮き足立っている。

それもそのはず、間もなく祭りが始まるのだ。

1週間かけて行われるというその祭りは夏至の夜に最高潮を迎えるのだそうだ。

空に昇る七つの月が全て満月になる唯一の夜、この日から1年の後半の12ヶ月、光月が始まる。

この祭りは光月の祭りとも年返しの祭りと呼ばれる、1年の折り返しを、それまで無事に過ごせたことを祝う祭りなのだそうだ。

因みに、新年を迎えるのは、闇月の祭り、年改めの祭りと呼ばれ、こちらも賑やかなものであるらしい。

この国では、冬至の夜に新月から始まる12ヶ月を闇月と呼び、夏至の夜の満月から始まる12ヶ月を光月と呼ぶ。

ある意味で、もう一つの新年の祭りといえるのかもしれない。

初めて迎える大規模な祭りに、私も人々の例に漏れずその時を心待ちにしていた。

「話には聞いてましたけど、本当に賑やかなんですね。」

ギルドの3階の窓から見下ろした大路は市の時間でもないというのに、それを上回るかという混雑具合だ。

「祭りが始まったらこの比ではありませんよ。」

というセムの言葉に、その光景を想像し思わず顔を顰めたら自他共に認める変人集団の面々に苦笑された。

いや、だって人ごみ嫌いだしとは流石に口にはしない……人に埋もれてしまう大変さはこの人たちには分かるまい。

何せ皆大きいから、日本の、じゃなくてこの世界の平均身長超える人ばかりだから、と思っていたら、同じく窓際にいたレグにぽんと肩を叩かれた。

振り向けば、分かるよその気持ち、とでも言いたげな視線とぶつかった。

ああ、ここにはまだ同士が一人残っていた！

お互い無言のままに手を握り合う。

相変わらずプニプにした肉球の感触が最高だ。

既に期末考査を終えたりと学校の授業が少なくなってきた最近、こうしてギルドに来る日が増えていた。

それは他の皆も同じようで、試験を終えた息抜きがてら、本を読んだり趣味に没頭したり、のんびりと過ごす人が多いようだった。

「そういえば、この辺りってお店があるわけでもないのに、何でこんなに人が多いんですか？」

屋台が出るのは夕方からで、それまでは特に開いてるお店が多いというわけではない。

それにこの辺りに多いのは飲食店であって、せかせかと道行く人たちが皆お腹を空かせているようには思えない。

「ああ、それはだな、この辺りは役所関連の施設も多いからだ。

ここは元からギルドと銀行が隣り合っているだろう？」

必然的にそういった施設も周りに集まったという事だ。
祭りに乗じて店を出しに来るものも多いからな。
恐らく、その申請に来ているのだろう。」

とアルシュ。

「へえ。」

道理で、何か堅そうな雰囲気建物が多かったわけですね。」

私の目にはどうも関心のあること以外は入ってこないようだ。
まあ、この辺りで仕事というのも滅多にないことなのだけれど。

「後は安宿が多いからだね。」

ここはアウトラーシェンの中でも辺境に位置する町だけど、聖域
と離宮のお陰でこの辺りでは一番大きな町だから、祭りの時期は観
光客が増えるんだ。

1週間も泊まるなら、普通の宿より月極め宿の方が断然安上がり
だから。」

補足したのはイシャーラ。

「お陰でこの時期はギルドにも人が集まる。」

嫌々そうに口にしたのはソレムだ。

「どうしてですか？」

「宿からあぶれてギルドに泊り込む人が必ず毎年いるんだよ。」

彼もそのクチ、こっそりとイシャーラは付け足した。

どうやらソレムは泊まっていた宿の契約更新を忘れていたらしい。

「他にもね、人が集まると問題も起きやすくなるから、警備や警護の依頼も増えたりね。

後は、店番の手伝いとか雑用仕事とか街中で出来る簡単な依頼も増える。

その上、学生達は皆休みに入る、と。

そうなれば、分かるよね？」

「皆休み中にギルドに登録に来る、ってコトですね？」

高校生や大学生が夏休みを期にバイトを始めるのにと多様なものか。

「そういうこと。

そういう子たちも皆でギルドに泊まったりするからまあ、人は増えるよね。

その上、僕らみたいに前からいるギルド員はその手の仕事からもあるがち、と。」

ああ、それはイラつきたくなる気持ちも分かる。

私は前もって仕事を取っておいたけど。

「ところで、そんなに沢山の人がここに泊まれるんですか？」

不思議に思って聞いてみれば、ふふふと楽しげにイシャーラが答えた。

「ルディはまだここ全部見たことないだろう？」

意外と泊まれる部屋もあったりするんだよ。

まあ、ほとんどは雑魚寝だけどね、中には個室もある。

ソレムは次善策としてそれを狙ったんだけど、そっちもとられちゃってねー。

お陰であの不機嫌なのさ。」

「まあ、自業自得だな。」

と、言いつつもアルシュの手には寝袋がある。

じっと見ていたら苦笑しつつもアルシュは答えてくれた。

「私は祭都の出身なんだが、何故か毎年この時期は姉がやって来てな。

自分で宿を取るでなく、私を部屋から追い出すんだ。

毎度のことで慣れてしまつて、こうしてここに寝泊りしていると
いうわけだ。」

人それぞれ、事情は色々あるようだ。

「そんなことより、アルシュ。

ちゃんと準備は出来てるんだろうな？」

「勿論、抜かりなく。」

苛立ちを紛らわすかのように、無理やり話題転換をしたソレムに対し、アルシュは悠然と数枚の書類を取り出しにやりと笑う。

よし、と満足げに頷くソレム。

今年もまた忙しくなるなあ、と伸びをするイシャーラ。

何も言わないけど、二本の尻尾がブンブンと揺れている――ネコつて楽しいとき尻尾振るんだっけ？――レグ、髭もヒクヒクと動いて

いる。

そんなそれぞれの様子に微妙に遠い目をしつつも諦念しているかの
ようなセム。

一体、何が始まるんだろう？

第7章 (1) (後書き)

2011/08/29 大幅加筆。

第7章 (2)

「それが誰も何をするのか教えてくれないんですよ！」

「あらあら、そうなの？」

「はい、それで自分達だけ楽しそうにしちゃって。」

若干一名ほど疲れた目をしていたけれど。

「タキは皆のことが気になるのね。」

相変わらずハルディアさんは微笑を絶やさない。

優しい顔でそう聞かれると胸にくすぶっていた苛立ちも静まっていた。

「まあ、あとで教えてくれる、とは言ってるんですけどね。」

やっぱり、一人だけ教えてもらえないというのは何となく気分が悪い。

「暫く、部屋にも来るなって言われちゃいましたし。」

私の感情に反応して、精霊たちが細かく瞬く。

それをなだめるように、ハルディアさんは手をかざすと一瞬勢いづいた水は再び春雨のような柔らかな勢いに戻った。

感情を俗座に反映させてしまうなんて、私はまだまだ精霊の制御が甘いようだ。

祭りまで残すところあと1週間。

学校の授業が全て終わったのを機に私はハルディアさんの元で精霊の制御の勉強を兼ねた畑仕事の手伝いに来ていた。

因みに全ての授業で高得点で合格をもらい、落第は免れた。

散々悩んだ中間考査と違い、精霊が見えないという問題を克服した今、問題となる科目は一つもなかった。

祭りを控えた街はますます賑やかになり、護衛の二人がいつも付いていても誰も気にしないくらいになっていた。

寧ろ、二人がいないと私はまともに街を歩けないくらいだ。

祭りまでの間を、ハルディアさんのところに来る以外は変人の巣窟に入り浸ろうと思っていたのに、何故かあの日以来立ち入り禁止を言い渡されて私は不貞腐れていた。

「さてと、畑の水遣りも終わったしお茶にしましょうか。

私はお茶を淹れているから、タキは裏の二人を呼んできてちょうだい。」

「はい、ハルさん。」

私が、水の精霊の力を借りて畑に水を撒いていた間、護衛の二人は裏庭の草むしりをしていてくれた。

ハルディアさんのところに来るのは私の都合であって、彼らはそんなことをする必要はなかったと思うのだけれど、自ら申し出て彼らは除草作業に勤しんでいた。

「さあ、暑かったでしょう。」

冷たいお茶を淹れたから召し上がれ。」

「はっ、ありがとうございます。」

「頂戴いたします。」

……なんだろうか。

ハルディアさんのところに来てからずっと二人とも態度が堅いんだよね。

もともと武官だから、他の神官たちに比べて堅いことは堅いんだけど……。

これは堅いというか……そう、緊張だ！

「イドウンさん、フィズさん、何でそんなに緊張してるの？」

「あ、いや……。」

「その……。」

どうにも歯切れの悪い二人に堪えかねたようにハルディアさんが噴出した。

「あはは、何よ二人とも。」

タキが不思議がってるでしょう。

私は今じゃただのおばあちゃんなんだからそんなに恐がらなくていいじゃないの。」

「いや、しかし。」

ハル教——。」

教？

教諭、かな？

ハルディアさんが教職に付いていたっていうし。

でも、それは街中の普通の学校であって、神学校ではなかったはずだけれど。

「あのね、タキ。

この子達は私の教え子なのよ。」

「イドウンさんもフィズさんも神学校の出身じゃなかったんですか？」

二人は神官である以上、神学校の出身だとばかり思っていたのだが。

「以前は街の先生をやっていたけれど、もっと前、若い頃に最初はギルドで精霊術を教えていたのね。

そうしたら、神学校でも教えてくれないかって神官長様に頼まれて。

その頃の教え子なの。」

「前、ギルドの人から鬼教師だったって聞きましたけど……。」

「あらあら、そんなことを言ったのは誰かしら？

そんなことなかったわよね？」

優しげに微笑まれたハルディアさんから目を逸らした二人の表情が、全てを物語っていた。

貴重な情報提供者の名前は、決して漏らすわけにはいかなそうであ

る。

第7章

それにしても意外や意外。

ハルディアさんが神殿やギルドでも教えるほど精霊術が得意な人だったなんて。

いや、むしろ意外でも何でもないのかもしれない。

私が精霊術を誰に学ぶかで、そういえば、とハルディアさんの名前を出した時、すぐにナイルは先方の都合が合えばそれも良いと言ったのだ。

あの時は全く気にもとめなかったけれど、つまりそれは、ナイルもハルディアさんの腕を知っていたということなのだから。

でも、こんなに穏やかなハルディアさんがまさか此処まで恐れられている人だとは思っても寄らなかった。

てっきり小学校の怖い先生くらいのイメージでいたのに。

もっとも、私は叱られたことがないから想像も付かないのだけれど、イドウンさんとフィズさんはお茶の最中も始終畏まったままで、お茶を飲み干すとすぐさまそくさとその場を立ち去ってしまった。せっかくおいしいお茶菓子もあるのにもったいない。

二人が去った後、私たちはお茶菓子を食べつつお茶をゆっくりと楽しんでから、精霊術の講習は再開した。

精霊術、別名精霊魔法とも言うそれはハルディアさんの言葉を借りるなら「術と呼ぶのもおこがましい」モノということになるのだが、まあ要は好意的な精霊にお願いをして様々なことを手伝ってもらう、あるいは行ってもらおうという、何とか魔法とは似て非なる他力本願な行為のことである。

魔法は十分な魔力と比較的強い意志さえ有れば、規模は兎も角とし

て大人であれば誰にでも使うことのできるものだが、精霊術は年齢も魔力量も問わない代わりに、精霊に好かれていなければ行使できないと言う制約がある。

まあ、誰だって好きな人の頼みなら快く引き受けるが、嫌いな人の頼みはなかなか引き受けたくないものだ。

精霊の場合、その選り好みが極端で、好きな人の願いは大袈裟なまでに叶えてくれるが、嫌いな―――というか寧ろ関心がないと言う方がより正確だろう―――人の頼みは微塵も聞いてはくれないと言うだけの話だ。

言うことを聞いてくれないだけならばまだマシで、彼ら自身が直接嫌悪の感情を抱くことは稀だが、彼らが好意を抱いている相手の害になる、と判断したモノに対しては容赦がない。

故に、精霊に好かれた者は、自分を好いていてくれる精霊たちを御す術を学ばなければならず、それを便宜上、精霊術または精霊魔法すべと呼んでいるだけだったりする。

酷い例えになるが、暴走しがちなストーカーを手懐け良いように利用する方法とでも思えば良いらしい。

精霊術の前提として、精霊と交信できることが挙げられるのだが、実はこれが厄介なもので、精霊の意志を汲み、こちらの意志を伝えられるという利点だけでなく、こちらの意志や感情が勝手に精霊に伝わってしまうという面も持ち合わせているのだ。

そうになると、交信できなかったとき以上に精霊たちは暴走し易くなってしまう。

ならば、精霊に好かれたものは精霊と交信させなければ良いのではないかという考えもあるのだが、その場合、好かれた者の意志に関わらず精霊たちが勝手に判断して結局は暴走してしまうのだという。尤も、そうなる前に精霊の加護持ちならば大抵の場合は幼少期の時点で自然と精霊を見れるようになるらしいのだが。

結論として、精霊に好かれた者が、しっかりと交信を行い、適度
手綱を締めることが最も確実であるらしい。

私の場合、“群がっている”とまで称された精霊たちが実は暴走寸
前にまでなっていたという事で、早急な精霊との交信の確立が求
められていたらしく、精霊交流の受講が必須とされていたらしい。
なぜ“らしい”ばかりかと言えば、それも含めて、私自身が精霊と
交信できるまで、ナイルがそれを押さえ続けてくれていたのだと、
講義を修了してから初めて聞かされたからだ。

本当に初耳、寝耳に水な衝撃の事実発覚だった。

それから、私は今度は早急に精霊を御す術を学ばねばならず、祭り
とその前後1週間、凡そ3週間の休みになる学校の講義の再開を待
っていては間に合わない（今すぐどうこうという話ではないが、問
題が起きる可能性が0ではない以上早いに越したことはない、とい
うことらしい）という事で、教師を捜すことになったのだが、な
かなか現役では適任の人物が居らず、白羽の矢が立ったのがハルデ
ィアさんだったわけだ。

因みに、ハルディァさんには神殿から正式にマレビットへの精霊術の
講師として依頼し、謝礼が支払われることになっていたのだが、彼
女はそれを断ったため、師弟としてではなく、今まで通りの付き合
いを続けてさせてもらっている。

実践の中で精霊術を学ぶという名目で、午前と午後の畑の水遣りや
ハーブ類の急速乾燥、水を熱したり冷ましたり、日常の中で使える
様々なことを行いつつ、座学と言うよりお茶会の続きと言った雰囲気
の講義を受けていた。

だから、もともと今期の講義が修了した後の休みはギルドへ行く時
間はほとんどなかったのだけれど、それでも、「立ち入り禁止」と

言われるのはそれはまた別の話で、いけないのと来るなと言われる
のでは何か違うというか、何とも言い難いもどかしい気持ちにさせ
られていたのだ。

多分、きっと、この気持ちを“寂しい”というのだろう。

第7章 (3)

「そう、そう、そんな感じ。」

基本はね、どれだけ明確に精霊たちをお願いするかってことなのよ。」

ハルディアさんは言う。

明確に、詳細に願えば願うほど、精霊術の正確性は増す。

精霊は思いを読み取ってはくれるけれど、精霊独自の判断も加えてしまうから、望んだとおりの結果を出す為にはそれをなす為に必要なのはどのようなことなのかを明確に彼らに示さなければならぬ。例えば水を撒くという単純なことであっても、その範囲は、強さは、量は、と精霊の解釈が介在する余地がないくらい明確に指示を出さなければならぬ、それが精霊魔法なのだ。

何となく、だいたい、勘で、魔力量さえあればそんなふうに曖昧でも思ったとおりに行使できる魔法と比べると、かなり面倒な手順が必要となる。

というか、魔法は思ったとおり以上の結果を齎すことはほぼ有り得ないが、精霊術は簡単に思った以上の効果を得てしまうと言う点が、最も難しいところなのだろう。

つまり、暴走しがちである、と言う事だ。

まあ、マレビトに限って言えば、常人とは比べ物にならない、尋常ではない魔力量のために暴走する、ということがありえるのだが。通常の場合は、狙いが曖昧でも規模が小さかったり、不発に終わることこそあれ、魔法は暴発することは滅多にないのだ。

魔法の場合、明確に狙いを定めるのは、第一に魔力の節約、第二に成功率の上昇が目的が、精霊術の場合は暴発率の低下のためであるという、似たようで異なる理由による。

「魔法は大人にならなければ使えないでしょう？」

だから制御も比較的楽なのよね。

でも、精霊術は大抵物心付くか付かないかって頃の子供が学ぶことが多いから、とっても大変なのよ。

暴発しがちで危険も多いのですね。」

だから、精霊に好かれた者は下手をすれば乳児期から親元から離れて、精霊術士の下で育てられることが多いのだとハルディアさんは言った。

ハルディアさん自身は、そういうことはなかったのだそうだけれど、彼女の師となった人の下にはそういう理由で預けられる子供がとても多かったのだそう。

確かに、赤ちゃんが泣くたびに精霊たちが騒ぎまわったのでは、大抵のお母さんはノイローゼになってしまっただろう。

稀に、乳児期から完全に精霊を支配下に置く子供もいるそうだけれど、”稀”だからこそそういう話は広く伝わるのだ。

精霊をうまく宥めるコツは、と聞けば。

「何かとよく頼ってあげることね。

貴方の為に何かしたくて仕方がなくて傍にいる子たちに何もするな、と言うのは酷よ。

頼んだときも、手伝ってもらって悪いなあっていう気持ちは持ちっ
ちや駄目。

そういう負の感情を持ってしまうと、次こそはもっと満足しても
らおう、って逆に張り切っちゃうの。

手伝ってくれてありがとう、とそう言ってあげるだけでとっても
精霊たちは満足するわ。

ヒトとの関係とは全く別、価値観も何もかも違うのだってよく認

識していることが重要よ。」

ハルディアさんの監督の元で、色んな訓練を行った。

水の精霊だけでなく、他の精霊たちにもお願いをして。

私に加護を与えてくれたのは、水の精霊の中でも高位のアトルディアと呼ばれる精霊。

だけれど、何故か他の属性の精霊たちも私を好いてくれている。

ハルディアさんは水の精霊以外との相性はあまり良くないらしいけれど、その時はフィズさんやイドウンさん、他にも護衛を勤めてくれている——最近メインが先述の二人だったけれど、もともとローテーションを組んでいたので二人だけではない——シュファンやカーデイ、ノードさんといった精霊術士でもある面々がそれぞれ相性のいい精霊との訓練に付き合ってくれた。

因みに、髪色からきつと火属性だ、と思ったイドウンさんは風属性だった。

漫画やゲームみたいに自身が持つ色彩で変わるものではないらしい。

「そういえばハルさん、属性ってなんなんですか？」

そんな疑問がわいたのは当然のことだったと思う。

フィクションの世界では火と水などは反対の属性で反発する、なんてことを読んだりもしたけれど、実際には火の精霊も水の精霊も仲良く共存していたりするのだ。

それ以外にも、例えばハーブを乾燥させるにしたって、水の精霊に頼んで水分を抜き取るという方法と、火の精霊に頼んで熱で水分を蒸発させる、という方法をとることが出来る。

多分、風の精霊に頼んで風を当て続けて乾燥することも可能なのだと思う。

他には、火を消すには火の精霊に頼んで消してもらう、水の精霊に頼んで水をかける、風の精霊に頼んで真空にしてもらう、土の精霊に頼んで土で包んでもらう。

結果的に全て火は消える。

方法は違えど、水と土の精霊の方法はともかく、火の精霊の方法と風の精霊の方法は空気が見えないものだけあって、傍目には区別が付かない。

しかも、どうやらそれぞれに楽な方法を取ってもらった結果であって、どの精霊も火の精霊と同じように火に直接働きかけて火を消す、ということは可能らしいのだ。

それ以外のことに關しても同様だ。

そうなると属性とは一体なんだ、というのが素直な気持ちだった。その問いに關する答えは、様々なフィクションに毒されてきた私には想像も付かないものだった。

「実はね、属性でもって何々の精霊って呼ぶけれど、精霊は全部同じ種で違いは無いのよ。」

曰く。

属性と呼ばれているものは精霊個人の好みの問題でしかないらしい。水の精霊と呼ばれるものたちが水辺にいるのは、ただ単に彼らが水辺を好むから。

火の精霊が乾燥や高温を好むのは、熱いところが好きだから。

風の精霊は、大氣中を漂って色んなところを巡るのが好きだから。

土の精霊は、一箇所に留まり続けるのが好きだけ。

正直言って、精霊と言うものに対するイメージがわずか数日間でガラリと変わった。

変わったと言うか、今まで抱いていた憧れにも似た敬虔な気持ちは全て崩れ去った。

そんなもの、微塵も残っていない。

つまり精霊とは、好きなことにしかまるで興味が無い、好きなことしかしたくない、というかするつもりも無い、なんていう究極のわがまま生物だったらしい。

そう聞くと、まるでニートのようではないか。

尤も、彼らには働いて糧を得る必要がないのだが。

精霊Ⅱ一族揃ってのニート集団、そう思ってしまうともはや夢も希望もあつたものではない。

正直言って、この世界に着てある意味最も知りたくなかった事実の判明であつた。

第7章 (3) (後書き)

……いづもどおり6時の予約投稿にしていたのに投稿されてなくて
変だと思ったら、18時予約になってたorz
今朝方までがんばった苦労は一体……orz

第7章 (4)

ハルディアさんのもとへ通い始めて数日、何というか、精霊たちにお願いするコツが分かってきたような気がする。

まあ、人に対するのと同じく変わらないと言うことだ。

ただし、人に多するときはオブラートにくるむようなことも齒に衣着せずに率直に願う必要があるわけだ。

大切なのは素直であること、そして飴と鞭だ。

やって欲しいことを明確にお願いし、精霊が暴走してしまったときは怒るのではなく、悲しむ。

とにかく悲しむ、これが一番精霊には効く。

怒ったところで、彼らはそれを新種の遊びと勘違いしかねないからだ。

感情を激高させるのではなく、冷静に、悲哀する。

目に涙を浮かべたりすれば効果抜群だ。

それはもう精霊にたいする嫌がらせなのではないかと思ってしまうほどに。

しかし、コツを分かってきたとは言え、それはある意味で私にとって苦行にも等しかった。

何せ、地球にいた頃は、自分の感情を抑えて抑えて胸の内に沈めて、自分ですらその思いが合ったことを忘れてしまうように感情を抑えて過ごしてきた私だ。

ストレートに感情を表現すると言うことがこんなにも大変であったとは想像だにしていなかった。

鞭罰が悲しみであるならば、飴報酬は喜びである。

願ったとおりに叶えてくれたならば、心から喜び感謝する。

精霊には上辺だけの言葉は通じない。

強い感情を伴わない言葉は、彼らにとってただの音の羅列でしかないのだ。

それが、精神のみの、肉体を持たない生物としての彼らの特性であった。

そんなこんなで、感情を露わにしなければならぬ日々を過ごし、精神的に困憊、彼の変人たちのことを考える余裕もないままに、ようやくハルディアさんから辛うじて合格点をもらえるようになった時には、気が付けばの光月の祭りは既に始まって二日が過ぎていた。

「さあ、そろそろコツもつかめてきたようね。

今、私に教えられることはもうないわ。

後はタキ次第よ、頑張りなさい。」

「ありがとうございました。

ハルさん。」

何とか精霊の暴発が起きないくらいにまで制御が出来るようになった、というか、ただ単に暴発する心配がなくなるくらい、つまりは精霊がある程度満足するくらいに頼り捲くっただけのような気がしないでもない。

うん、まあ、精神衛生上そういう考えはあまり良くなさそうだから、深く考えるつもりはないのだが。

「そういえば、もう1週間以上も経つけれど、その子の名前は決まったの？」

日向で丸くなっている毛むくじゃらを指してハルディアさんが言う。

その毛むくじゃらはいわずと知れた、例の蛇もどきの実体ある精霊だ。

実はまだ名前が決まっていない。

名前を呼ばずとも意識を向ければ理解してくれるし、実体があるとは言ってもその本質は精霊と同じであるから意思も通じる。

普段はそれで済んでしまっているがために、ぴったりの名前が浮かばないということを言い訳に名付けを済ませていないままである。

数日共に過ごすうちに、毛だと思っていたものが実際には羽毛であることなども判明するということもあり、一瞬それにちなんだ名前が浮かばないでもなかったが、あまりその名が相応しいようにも思えなかったために、やはり名無しのままなのだ。

第7章

「……それが、まだ決まっていらないんです。」

羽毛の蛇、と言えば、古代アステカの白き風神、ケツアルコアトルがまず頭に浮かぶ。

この蛇もどきも真白の羽毛に覆われているし空も飛ぶのだから悪くはないのだが、どうもしっくりこない。

かといって他に思い浮かぶ名がある訳でなし、神の名だから駄目なのだろうかと思うもケツァールと短くしてしまえば南米の極彩色の鳥になってしまいうし、ケツアルコアトルスでは翼竜になってしまいうくら蛇もどきが空を飛ぶと言っても、翼竜よりはまだ羽毛恐竜の方が近そうだなんだと考えているうちに思考が逸れる。

竜と言えば、自分自身が最後の竜種の産まれ変わりであると聞かされて、もう大分経ったが、これと言った実感もなく、ただ、まるで本に書いてあったことを鵜呑みにするように事実として受け入れるのみでしかない。

とまあ、そんな風に考えが脱線したりと、名付けは随分と難航していた。

既に半月近くも“蛇もどき”のままである。

流石にこのまま定着させるわけにはいかないと思うも、気が逸るばかりだった。

「まあ、気長に考えれば良いわ。急いで付けねばならないものでもないのだから。」

と、ハルさんは締め括った。

蛇もどきは自分が話題の種となっているのを知ってか知らずか、時

折も折もどと動いては日向ぼっこを続行していた。

蛇もどきの名付けに難航していたのには訳がある。

精霊の名付けはある意味で特殊なのだ。

名は体を表す、と言う言葉があるが、まさに彼等はその典型で、本来ならば肉体を持たない存在であるからなのか、名というものは、そのまま彼等自身の有り様に非常に強い影響を与えるのだと、精霊交流の講義で習った。

以前、属性とはその精霊の好みだという話を聞いたが、私たちがその属性で精霊を呼ぶことによってより強く属性に縛られることになると併せて聞いた。

属性でもそれだけの効果があるのだから、名が持つ影響ともなれば言うまでもない。

そうと言われれば、気軽に名付けてしまうわけにも行かず……まあ、深く考えすぎなのかもしれないけれど。

「そう気難しくならずに、気楽に考えればいいのよ」ともハルさんに言われたのだが、それが出来るくらいなら悩みはしない。

既に“蛇もどき”という仮称ですら何らかの影響を与えているのではないかと内心ヒヤヒヤしているというのに。

見た目からそう呼んでいるだけであって、しかも彼自身に呼びかけるときに使っているわけではな居のだからそれほど問題はないとは思^{にんげん}うのだが、相手は精霊。

私の理屈や常識が通用する相手ではないからこそ不安にもなる。

「このまま“蛇もどき”が定着しちゃったらどうするよ?。」

ハルさんの下を辞去し、神殿に戻ってから――。
いつものように寝台に潜り込んできたふかふかの蛇もどきを、さながら抱き枕のように抱き寄せながら尋ねてみたが、何か答えるでなく、静かにその目を閉じただけだった。

第7章 (5)

「ところで、彼の部屋の住人達はどうしているのかしら？」

そう、ハルさんから聞かれたのは昨日の帰り際。

「さあ、どうしてるんでしょうね。」

苦笑いで誤魔化したけれど、それなりに情報は小耳に挟んでいる。というか、アレだけ見た目だけはイイのが揃っているとやはり人目を引くようで、聞こうと思わなくとも自然と耳に入ってくるのだ。最近まで知らなかったが、彼らはやはり様々な世代の女性陣の注目を集めているらしい。

彼らは全員学生ということもあり、専業のギルド員より身近に感じられるようで、実力派のギルド員たちよりも一般の女性方からは人気が高いようだ。

更に彼らを上回る人気を誇るのがナイルやアカシエだと聞いたときには驚いた。

最もこの二人に関してはある意味で画面の向こうのアイドルに向けるような、手が届かない高嶺の花への憧れの的な感情のようだが。

まあ、そんな有る意味での人外二人のことはどうでも良い。

つまるところ、通称変人の巣窟の住人達は、手を伸ばせば届くかもしれない、そう少女達に思わせるに足る人物が揃っているという事だ。どこでそんな話を聞いてくるのかといえ、意外な事だが神殿である。

聖職者も婚姻が推奨されているこの世界、年若い神官見習いの少女たちや神殿づとめの女官も、まるでどこぞの女子高生のように恋バナやそういった情報には敏感だ。

食堂で食事をしている時にふと耳に入ることもあれば、私もまた変

人の一人であることを知る人が、色々話に来てくれてりするのだ。

話は戻って。

今、彼らがどうしているかという事だが、どうやら祭りに合わせた
出店でみせの中の一つとして出店しゅってんしているらしい。

しかも、場所は神殿にも程近い、神宮南大路の端の方だという。

そのあたりはかなり人気の高い激戦区らしいのだが、毎年その場に出店しているのだそうだ。

当然といえば、当然のことながら、予想にたがわず女性のお客さんがひっきりなしでやって来ているらしい。

しかしその一方で、意外にもその大量の女性人にもめげずにやってくる男性ギルド員も多いそうだ。

それもその筈、商品は例の美味しいポーションを初めとしたギルド員なら喜んで金を出すであろう、美味しさを追求した栄養補助食品類であるからだ。

荒仕事が多いギルド員がそれらを求めるのは当然のことではあるのだが、逆に言えば、売りに釣られてそんな日常生活では必要としないであろうものを買ってしまった巷のお嬢さん、お姉さん方が、一体それを何に使うのかは謎である。

因みにその情報をくれた神官見習いの少女は、その列に並びたかったけれど使う当てもないものに使えるお金はないから諦めた、と言っていた。

但し、場所が神殿からすぐなのを良いことに、友達数人と心行くまで彼らを眺めていたのだそうだ。

とまあ、そんな訳で、間接的な情報は持つてはいたが、未だ巣窟への立ち入り禁止は解かれておらず、その後の音沙汰もなし、と言う状況ではハルさんに言えるようなことは何もなかった。

尤も、ハルさんにはそんなこと位お見通しだったようで――。

「その分だと、彼らのお店のことは知ってるみたいね。」

と、朗らかに笑った。

そして、

「丁度、精霊術の抗議も終わった事だし、折角だから明日は祭り見物を兼ねて彼らのお店を訪ねましょうか。」

何か企んでいそうな含みのある笑いをすると、それを決定としてしまった。

第7章 (5) (後書き)

2011/10/4 加筆訂正

第7章

いい歳をした大人が、仲間外れにされたといじけるのは大人気ないことだと思う。

だが、今の私の状況を端的に客観的にいうのであれば、その通りだ。仲が良くなったと思えた友人達に来るなど言われ、それ以来ギルドにすら近付かず、彼らのことは気になって情報を集めるくせに、近くにいると知ってから也会いには行かない。

そう、要するに、いじけているのだ。

まるで、この幼い外見のままの年齢の子供のように。

私のそんな気持ちなどお見通しだったのか、彼らの店へ行くことを渋る私に

「私は明日、市を見て回りたいのよ。

勿論、付き合ってくれるでしょう？」

と、強引に決めてしまったのだ。

今の私は、ハルディアさんに精霊術を学ぶ生徒である一方で、ギルド員としては彼女の家事手伝いをしている身だ。

師——正式に師弟関係を結んでいるわけではない一時の師ではあるが——であり、且つ雇い主である彼女の希望を無碍にするわけにはいかなかった。

変人の集窟

あの場所への立ち入りを禁止されたのが長期休暇に入る前だったのだから、かれこれ2週間ばかり彼らとは顔を見合わせていないことになる。

あの部屋に立ち入ることが禁止されたからと言って、彼らに会いに行くことが駄目になったわけでもないのに、勝手に一人でいじけて会いに行かなかったものだから、どうにも明日を思うと気まずかった。

愚痴をこぼそうにも聞く者がいなくては零れる言葉が空しいだけ。
こんな夜に限ってアカシエの来訪もない。

思い悩んだところで仕方が無い、と、もう既に寝入っている蛇もどきを抱き枕に、そのままやがて訪れた睡魔に身を委ねた。

第7章

「さあ、タキ。

今日はたつぷりと祭りを楽しむわよ。」

あれこれと悩んでいた昨夜は一体なんだったのかと思うほど、あっけらかんとハルディアさんは準備万端の状態で訪ねた私たちを出迎えた。

「あら、彼らのお店に真っ先にいくとも思ったの？

行ったでしょう、市を見るついでに、って。」

啞然とした私に、ハルディアさんはそう言っただけで済んだ。

確かに、彼らのところに行くと思ったが、それがメインだとは言っていないかった。

何だか、昨日の自分が馬鹿みたいだ。

「さあ、後ろの二人は荷物持ちをしてもらわねえ。

しっかり働いて頂戴ね。」

「え？」

私があっけにとられているうちに、イドゥンさんとフィズさんが了承の意を示し頷いていた。

よく分からないうちに周りだけが進んでいく状況に戸惑っていると、ハルディアさんが言った。

「タキ、仕事は昨日でお終いよ。」

貴女にとっては初めての月祭りでしょう？

今まで勉強ばかりで全然見ていないのだから、今日からはしっかり楽しんで頂戴。」

「確かに、当日はとても楽しむ余裕はないでしょうからね。」

と、続けるのはイドウンさん。

明日は祭り本番の宵祭りの筈だが、何かあっただろうか？

「忘れましたか？

上級神官殿にも言われたでしょう。」

「えっと、何かありましたっけ？」

「宵祭りの祭礼には、貴女も参加するんですよ。」

呆れたように告げられた言葉に、そういえば、と大分前にナイルに言われていたことを思い出す。

「ただ離宮まで歩くだけって言われたように思うんですが……。」

言われたままのことを言ってみれば、ため息二つと、感嘆の声が返った。

「全く、あの方は。」

「あら、それじゃあ、漸くタキを正式にお披露目するのね。」

呆れた呟きを漏らしたのがイドウンさんで、フィズさんは無言を貫き、ハルディアさんは何か嫌な予感のする言葉を放った。

「あの、一体どういうことでしょうか？」

先ほどから一人取り残され気味の私としては混乱する他ない。
その問いに答えてくれたのは、先ほどから沈黙を貫いていたフィズさんだった。

「上級神官殿が仰った、離宮まで歩くだけ、というそれがこの祭りの最大の見所なのです。」

神官長始め、神殿に属する全ての者が正装で離宮までの道のりを練り歩きます。

恐らく、今回の最後尾を勤めるのが貴女になるでしょう。
現時点においてはそのように聞いております。」

「それって、凄いことなんでしょうか？」

話を聞いて浮かぶのは、祭りの踊り流しや、神輿の行列などで、私の拙い想像力ではそれが精々だ。

「当日は、精霊の力が特に強まる夜です。」

神官たちは皆、精霊の光を手にはっていきますが、その周りを多くの精霊たちが舞い飛び、幻想的な光景だと街では人気ですよ。

特に貴女は、それだけに精霊を引き連れているのですから、よく目立つことでしょうね。」

若干苦笑気味にイドウンさんが告げた言葉に、私の頭は一瞬固まった。

……ちょっと待て。

脳内で、描かれていた素朴な祭りイメージは脆くも崩れ去り、代わ

りに現れたのは、某ネズミーランドの光り輝く夜のパレードだ。
つまり、だ。

つまり、アレを、しかもアレのとりを私に勤めろって、そういうことか！？

第7章（後書き）

2011/10/06 一部修正、加筆

第7章 (6)

「タキ、これなんて如何かしら？」

「悪くないと思いますよ。」

色鮮やかな反物を前に、ハルディアさんは楽しそうに聞いた。

今、私達は喧騒賑やかな神宮大路の市に来ている。

普段のある意味で長閑ではのぼのとした様相とは一変して、酷く騒がしくもあるが活気に溢れているその様は、けっして不快なものではない。

各地から行商に訪れた流れの商人が、様々な品を並べ、この街の人だけでなく、近隣の――といっても距離は数日から数十日離れた――町や村から訪れた人々が行き交う様は色鮮やかで目にも楽しい。道行く人々は大人も子供関係なく、皆喜びと楽しさを露わに各店を覗いては去りまた戻りと巡り歩いている。

中でも、ハルディアさんが今見ているような、布地や貴金属、アクセサリー類の店では、幅広い年齢層の女性が、望んだ品を予算の範囲内で少しでも良い物を手に入れる為にここここで交渉に励んでいる。

特にこの当たりは女性向けの品揃えの店が揃っているのだろう、あまり男性の姿を見かけない。

それでも、中には恋人や思い人、家族へ贈る品でも探しているのか、一つ所で難しい顔で立ち尽くす男性の姿も見受けられた。

それ以外といえば、女性の勢いに押されたかのように、遠巻きに覗くように連れ合いを見守っている、微妙に引き釣った顔をして大量の荷物を持たされた男性だけである。

まあ、世界は変われども、女性の買い物にかける情熱……否、執念

と言うものに変わりはないらしい。

そんな中に、仕事とはいえ足を踏み入れざるを得なかったイドウンさんとフィズさんの二人は、涼しい顔をしてハルディアさんの大量の買い物に付き合っており、その忍耐強さに深く感謝するばかりである。

逆に私はといえば、元よりの人ゴミ嫌い、及びそれほど装飾品の類にあまり興味がなかったこともあり、二人より先にへばりそうではあったが、ふとすること今朝方の気になる発言に気をとられ、そのお陰で何とか持ち堪えているような有様だった。

第7章

「あら、私ではないわ。

勿論、嫌いではないし、良いかなとは思っけれど。

ねえ、貴女はこういうのは嫌い？」

先ほど手に取った反物を私の肩に合わせながら聞いてくる。

それは少し厚手の毛織物で今の季節にはまだ暑いけれど、秋になれば良さそうな感じの柔らかで手触りの良い生地だった。

色は、光の当たり具合によって微妙に色味を変える、まるで鴉の羽のような光沢を持った黒だ。

光の向きを変えると浮かび上がるように現れる文様は織りによるものらしい。

どこことなく着物の地を思い起こさせるその布は、嫌いなものではなく、私にとっては寧ろ好ましいものだ。

だが、見るからに高そうな生地で、どれくらいの値段がするのかわかり聞きたくないし、自分では手に取ってみようとも思わなかっただろう。

何せ、未だにギルドや学校へは古着の子供服を着て通っているくらいだ。

良いな、とは思っても、買える類のものではない。

「嫌いではないですし、良いとは思いますが、

質も良いものだとは思いますが、ちょっと手は出せないですね。」

心動かされないでもなかったが、財布の口を緩める気はないし、無理な返事に留めた。

変な期待をさせるのはお店の人にも悪い。

金がないわけではない、だがギルドで稼いだお金を普段の買い物な

どに使う一方で、神殿から支給されているお金の大部分は今後一人立ちするときの資金として貯金している。

それを崩してまで、今欲に流される気はなかった。

元々服には頓着しない方だし、今までも特に欲しいものと言うのはなかったから、それで事足りていた。

「そう、良かった。

それじゃあ、ご主人、これ戴くわ。

お幾らかしら？」

だが、ハルディアさんの私の答えに対する反応は斜め上をいくものだった。

「ちよっ……待ってくだ——。」

止める間もなく、さっさと会計を済ましてしまい、何も無かったかのようにその包まれた荷をイドウンさんに預けてしまった。

「きっとこの黒は貴女に似合うと思うのよ。

私に貴女に服を贈らせて頂戴。」

「っでも。」

「形式上は違うし、貴女もそうは思っていないかもしれないけれど、師として貴女に何か贈りたいのよ。」

そこまでして貰う謂れが無い、とは言えなかった。

短い期間ではあったし、厳しく扱かれたという訳でもなかったけれど、確かに彼女は私にとっての師であった。

逡巡している私に、イドウンさんの声が掛かる。

「素直に甘えれば良いのですよ。」

ハルディア教官は、精霊術師としても有名ですが、その能力を込めて作られた防具は更に有名です。

ギルドや神殿で教えていらした頃も、教え子が巣立つときには色々贈ってくださいました。

かつて私たちも戴きました。」

隣ではフィズさんも頷いている。

「——良いので、しょうか？」

「貴女が受け取ってくれるのならば、私は嬉しいわ。」

三対一では勝ち目は無く、私は白旗を上げた。

「それでは、宜しく願います。」

「ええ、楽しみにしていて頂戴。」

私たちの様子を見守っていた布地商の店主も、ほっとしていた様だった。

その上、店の前で色々話をしてしまって、商売の邪魔だったろうに、追加で色々とおまけまでくれた。

日本人的気質からすれば、非常に心苦しかったのだが、「かの霧氷と、今話題のマレビット様が買ってくださいったとなれば、十分店に箔が付きます。」と、逆に感謝されてしまった。

霧氷とは何のことかと思いきや。

「昔の渾名よ。」

と、ハルディアさんは微笑み、後ろの二人は若干顔色をわるくしていた。

うん、どうやらあまり聞かないほうがいい話題のようだ。

そんな感じで、ハルディアさんに連れまわされつつも、結構楽しみながら市を見て回ったのだった。

第7章（後書き）

2011/10/08 一部加筆

第7章

「ハルさん、本気の本気ですか？」

「当然でしょう。」

「ここまで来て逃げるのはなしよ。」

ああ、私はどうやらとんでもない思い違いをしていたようだ。
まさか、これほどとは。

午前中、ハルさんと買い物を楽しみ、一通りの店を見終わったあとで、残すは神殿近くの店だけになった頃、「まずは腹ごしらえね」と随分食事に気合を入れていたハルさんに、もうお腹いっぱい食べきれないと言うほど色々と食べさせられた。

食べ過ぎでふらふら、食事直後で眠くもなってきたところを、ハルさんに引きずられるようにやって来たのは、彼らの店の前だった。前といっても、彼らの姿は綴れ折の行列の彼方、フィズさんに抱っこしてもらって漸く人垣の向こうにそれらしき影が見えるだけだ。私たちがのんびり食事をしている間に、イドウンさんとフィズさんは交互に荷物をハルディアさんの家まで持っていたので、今は二人とも手ぶらだ。

とりあえず、彼らまでの距離を視認したところで、フィズさんに下ろしてもらおう……筈が、このままでは人ごみに埋もれてしまう、と言われ抱っこ継続中だ。

「ハルさん、本当にまだ並ぶんですか？」

「何言ってるの、残り半分も無いじゃない。

ここまで来て諦めたら、それこそ時間の無駄じゃないの。

さあ、次の問題よ。」

ため息交じりに尋ねてみても、当然との返事。

この遣り取りを繰り返すのも既に何度目かだ。

既に並び始めて数十分が経過している。

待ち時間の暇つぶしにと、この数日間で学んだことや、学校で学んだ精霊に関する問題を出題され続けている。

人ごみも辛い、そろそろ脳もオーバーヒートしそうである。

何故こんなことになっているかと言えば、変人の巣窟の住人達の店が余りに繁盛しすぎている為だ。

これだけの人――圧倒的に女性が多い――が一体どこに居たのかと思うほど、長い行列を作っており、その行列の先頭付近で慌しく動き回る彼らの姿が目に入る。

第7章

「これだけの人を見るの、この世界に来てから初めてですよ。」

ハルディアさんから出題される合間を縫ってそう呟けば、そうでしょうね、と同意の声が返る。

この祭りの市全体も普段の市とは比べるまでも無い規模だが、この一角は特に人が多い。

例えるならば、市全体が渋谷のスクランブル交差点くらいの人込みで、この一角は、夏と冬の某祭典の入場待ちの行列の一部を切り取ってきたかのような感じと言えば分かるだろうか。

まあ、性別は圧倒的の女性が多いのであのむさ苦しさは無いが。

いくら祭りで街の外からも人が着てるにしても、一体どれだけ居ると言うのだろう。

「彼女達は、いつもはあそこに居るのですよ。」

と、イドウンさんがにこやかに教えてくれた。

その指の指す先は――。

「離宮、ですか？」

「ええ、彼女達の半分くらいは離宮の侍女や神官、もしくはその見習い達ですよ。」

彼女達にとって、今日は彼らに直接出会える数少ない機会ですからね。

普段、会いたくてもあえない分、こうして押し寄せているわけです。」

「そうなんですか。

詳しいですね、イドウンさん……。」

「妹が離宮に居るものですから。」

こんなところで意外な事実が判明。

イドウンさんは妹がいたらしい。

いや、意外でもないか、この面倒見のよさは下に兄弟が居てもおかしくは無い。

そういう意味ではフィズさんも兄弟は良そうだ。

第7章（後書き）

次回更新前に加筆予定。

第7章

「因みに、フィズはこう見えて末っ子ですよ。」

「え？」

私の心の声が聞こえたかのようにイドウンさんは言った。思わず、フィズさんの顔を見つめてしまったが、その言葉を肯定するように頷くだけだ。

「彼は自分がしてもらったことを真似してるだけ、と言うことらしいですよ。」

「いや、だから何でそんな人の心を読んだかのように……。」

「最近のマレビット様はとても表情が豊かですよ。何を考えているのか、とても分かりやすくなりました。」

それって、褒め言葉なんだろうか……。

内心訝しんでいたつもりが、それも顔に出ていたらしい。

「見習いの精霊術士としては、良いことですよ。」

「……本当ですか？」

その割りに、私はハルディアさんが何を考えているのかよく分からないのだけれど。

「見習いとしては優秀、ってことです。」

そこから更に進んで、表面上何を考えているのか読めなくなるくらいにまで精霊を御せるようになって一流です。」

「……道は、果てしなく遠そうですね。」

「こればかりは、努力あるのみ、です。」

「頑張ります……。」

そう、気弱な目標を掲げたところで、ようやく、行列の終わりが見えてきた。

第7章 (7)

彼らとの久々の再会は、なんということとはなしに終わった。というよりも、何も、無かった。

一瞬、驚いたような表情を見せただけで、後は通常と思われる営業用スマイルで、事務的な会話だけで買い物済ませて、それだけだ。まあ、向こうは沢山のお客さんに囲まれて忙しそうにしていたから、立ち話なんてする余裕も無かったのだろうけれど。

買い物そのものもあっけなく終わり、後ろから押し寄せる女性陣に押しだされるように、店の前をあとにした。

ハルディアさんは置いてある商品を取りあえず全種類一つずつ買い、イドウンさんとフィズさんは2、3種類を数本ずつ買っていた。

私はといえば、飲みきりサイズのものを1本購入しただけで、会話らしい会話すら出来ず仕舞だった。

あれだけ緊張していったのに、あっけなく、ただ通り過ぎただけに近い感じだった。

相変わらず、どうしたらあの不味いものがこんなに美味しいジュースになるのか不可思議な改良ポーションを飲んだら、買い物と勉強と心労で疲れた体と脳を癒してくれる、そんな感じがした。

「相変わらず凄いところだったわね。

でも、お陰で色々と手に入ったわ。」

と、一息つくのはハルディアさん。

確かに、30分近く並んでいたわけだから、その混み具合は相当だ。そして、買った荷物を入れたバッグを両手に下げているが、かなり重たそうだ。

と思ったら、自分も片手に荷物を持ったイドウンさんが片方を持つようだ。

「本当に沢山買いましたね。」

と、ずっしりとした重さに呆れ顔。

フィズさんは自分が買ったものを片手に、もう片手には私を抱いたままだ。

いい加減、降りたほうが良いような気がするのだけれど、人込みが凄いからこの方が安全だ、と言われては確かに人に埋もれてしまう自覚があるだけに何も言い返せない。

「ソレム君が入ってから、品質も上がったでしょう。」

実は毎年楽しみにしてたのよ。」

「ああ、確かに。」

彼が神殿入りしてくれば我々としても助かるのですけどね。

残念ながら、工房入りを希望してるらしいですよね。」

第7章

戦利品を手話している内容を何とはなしに聞く。
「どうやらソレムの腕はギルド以外にも人気らしい。」

「ハルさんは、そんなにいっぱい何を買ったんですか？」

実は緊張のあまりちゃんと店を見ていなかったりする。

「そうねえ、ここで説明するのもなんだから、一旦うちに戻りましょうか。」

もう今日はお店はあらかた見てしまったものね。」

折角、神殿の傍なんだから、あなたたちは一旦自分の荷物を置いてきなさい、と言うハルディアさんの言葉にわずかな躊躇を見せたものの、すぐに戻ります、といって二人は神殿へと走っていった。

今、私はハルディアさんと一緒に市の中に設けられた休憩スペースで二人が戻ってくるのを待っているといるところだ。

「さてと、お邪魔な保護者も居なくなった事だし。」

早速、買ったばかりのポーションを清涼飲料水代わりに飲んでいると、そうハルディアさんが切り出した。

「なんですか、これ？」

渡されたのは小さな巾着袋だ。

中には何か硬そうなものが入っているようだ。

「さつき、黒髪の子から貰ったわ。

沢山買ったからおまけだ、って言われたけれど、どうやら貴女宛みたいよ。」

黒髪というとゲルドだろうか、セムだろうか。

「とりあえず、開けてみなさい。」

ハルディアさんに促されて袋を開ける。

おまけで貰ったという小袋には、飴が幾つかと小さく折りたたまれた紙が入っていた。

折りたたまれた紙を広げると、それは手紙だった。

そこのは、この間の説明が足りてなかったことを詫びる言葉と、祭りが終わったらまたギルドのあの部屋に来てもいいということ、そして、どうやって知ったのか精霊術の勉強を終えたことを祝う内容が簡潔に書いてあった。

自然と頬が緩むのが分かった。

私は、彼らから愛想をつかされたわけでも、避けられたわけでも、ましてや忘れられていたわけでもなかったらしい。

なんだか、私一人が、勝手に気まずくなって、近付きがたく思っていただけのようだ。

手紙から顔を上げると、微笑ましそうに見つめてくるハルディアさんと目が合った。

どうやら、彼女は実情を知っていたみたいだ。

「知っていたんですね、ハルさん？」

「さあ、何のことかしら。」

はぐらかして答えてくれそうに無い、彼女を追及するのは諦めて、飲みかけの瓶に口をつけた。

相変わらず、どうしたらあの不味いものがこんなに美味しくなるのか不可思議な改良ポーションが、買い物と勉強と心労で疲れた体と脳を癒してくれる、そんな感じがした。

第7章

ハルディアさんの家で、今日手にした戦利品の数々を見返しながら話に興じ、神殿に帰ったのは夕飯を食べ損なうギリギリの時間だった。

慌てて食堂に駆け込んで、満足するまでご飯を食べて、お風呂に入ったり色々して、さてそろそろ寝るか、と思った頃に彼らはやってきた。

一人は、まあこの時間に来る事もないでもない人、でも後の二人はこの時間にはまず会うことの無かった人だ。

どうやら、二人に一人が連れてこられたらしい。

その二人とはイドウンさんとフィズさんで、残る一人というのはナイルだった。

「夜分申し訳ありません。

こういったことは早めの方が良いかと思ひまして。」

「まだ寝ていなかったので構いませんが、こういった用件で？」

心底申し訳なさそうに言うイドウンさんに、何かそんな切羽詰った用があったらどうかと首を傾げる。

「今朝方の件です。

どうも十分な説明を受けておられないようでしたので、責任者を連れてきた次第です。」

「今朝方、の……？」

ああ！」

そういえば、あんなに気にしてたのにいつの間にやら忘れていたというこの情けなさ。

私の神経はやっぱり図太いか、もしかしたらどこかずれているのかもしれない。

それにしても、責任者を連れてくるって……いや、間違っではない、いないんだけど。

「貴女に光舞祭の概要を説明しなおすようにと言われたもので。」

ちょっと無然とした様子のナイルだ。

最近忙しくしていると言うのは聞いていた。

今も仕事の途中だったのだろうと思う。

暫く見ないうちに、人並み外れたその容姿にも疲れの色がくつきりと浮かんでいた。

ちゃんと最初に説明してくれなかったのは彼のほうだが、それなのに、こうも疲れた顔を見せられると私のほうが悪いような気がしてきてしまうのだから理不尽な話だ。

第7章（後書き）

2011/10/14 加筆

第7章

「忙しいのに、ありがとうございます。」

「いいえ、お気になさらず。」

私の伝え方が悪かったのだと、散々言われました。」

日本人的気質から思わず頭を下げてしまったのだが、自分の方が悪いのだとナイルは言う。

散々、とかなり強調していたが、一体誰に何を言われたのだろう。どうやら、一緒に来た二人だけではなさそうだ。

「早速ですが夜も遅いので、光舞祭の件についてももう一度説明させていただきますね。」

と、ナイルは以前にもしてくれた説明を繰り返してくれた。

光舞祭は夏至の祭りで1年の半ばを迎えたことを祝うものであり、かつ、神に感謝や祈りを捧げたり、願掛けしたりするという、日本と言うなら七夕と正月とお祭りを足したような行事であること。

そして、その中の一環として神殿に所属する者とその外の一部の者が、神事として神殿から離宮までを精霊の光や魔法の光を手を歩いていくのだという。

それは以前聞いたものと全く同じで……。

「どこか分らないところはありましたか？」

真顔でそういうナイルに、二人は頭を抱えるように唸った。

「ナイル上級神官殿、それでは説明が不十分です。」

「何処がです？」

「祭りの概要はともかくとして、その後です。」

「ですから、何が足りないというんですか？」

多分、ナイルは真面目に本気で言っているのだと思う。
この人は、冗談は嫌いだ。

「あんなもの、ただ大路を歩くだけじゃないですか。」

私たちは、認識の違いというものを漸く理解したのだった。

第7章

護衛二人やハルディアさん、それからエメラさん達にも聞いてみたところによると、1年で最も重要な祭りの一つである光舞祭、そのクライマックスである神事も、ナイルにとっては「ただ歩くだけ」というまるで普段の散歩のごときものと化してしまったことに、流石の私も若干の衝撃を禁じえなかった。

例えば、某ネズミーランドのエ○クト○カル○レードを「ただ電飾が派手なだけの行列だよ」、という人はまさか居まい。

光舞祭を見るのも参加するもの初めてだからあれと比較していいのは分からないが、多分、他の人の反応を見るに、ナイルの考えはそれに近いものがありそうだ。

「ああ、因みに貴女には興に乗っていただきます。」

何と言うべきか迷っているうちに、先に口を開いたのはナイルで、何でもないことのように彼は告げた。どうやらとことん感覚が違うらしい。

「ですから、ただ座っているうちに全て終わりますよ。」

まあ、少しばかり堅苦しい格好をしていたいただきますので、窮屈かとは思いますが。」

興……。

……皆が歩く中、一番後ろでキラキラと光る神輿に乗った自分の姿が思い浮かんだ。

「あの、それって非常に目立つと思うんですが……。」

「大丈夫です。」

両脇には布を下げますから、顔などは見えませんよ。

それとも、私たち三人の中の誰かが抱き上げて歩く方がいいですか？」

「……輿でお願いします。」

しぶしぶ、といった感じで了承した私に、ナイルは苦笑いを浮かべた。

「――申し訳ありません。」

このような扱いは嫌いでしょうが、警備上その方が確実なのです。祭りの時期はどうしても外からの人が多くなります。

今でも、渡り人の存在を疎ましく思っている人間はゼロではありません。

それに、この街に渡り人が訪れるのはもう20年ぶりくらいですから、多くのものが貴女を一目みたいと思っているはずです。

その為にも少し視線が高くなる輿は都合がいいのです。」

警備上の理由とやらを持ち出されると、普段から多くの人の世話になっている身では、そう贅沢も言ってはいられない。

「分かりました。」

ありがとうございます。

それで宜しくお願いします。」

「それでは、他に分からない点はありませんか？」

「えーと服装についてなんですが――」

そうして、色々と聞きながら夜は更けていき、分からなかった点や新たに生まれた疑問などを解消したときには大分夜は更けていた。翌朝は微妙に眠い目を擦りながらもハルディアさんの下に赴き、今度は神宮北大路の見学へ出かけた。

こちらにはほとんど簡易テントなどの店舗は見当たらず、変わりに見た目からして老舗や大店、といった雰囲気のお店が連なっている。それは、普段とあまり変わらないような光景ではあったが、それでも祭りにあわせて普段とはちょっと違った店作りやサービスをしていることが見て取れた。

そんな感じで、祭りを凄し、ついにその時はやってきた。

第7章（後書き）

2011/10/16 加筆

第7章 (8)

「本当に、これを着なきゃいけないんですか？」

明日は早いですよ、と昨晚エメラさんに言われていたとおり、まだ暗いうちから起こされて、連れて行かれたのは大きな浴場。

普段使っている場所とはちょっと違って、何処と無く静謐とした雰囲気を感じるところだが、滔々と湛えられた水面には湯気は見えない。

気温が高いから然程辛くは無いとはいえ、水を被れば半分寝ぼけていたような頭も一気に覚醒させられた。

廊下の窓から差し込む、顔を出し始めたばかりの太陽の光に、冷えた体を温めながら部屋に戻れば、見たことのないような、何処と無く見覚えがあるような派手な服が部屋で待っていた。

多分、これは神官の正装だろう。

見たことがあるような気がするのは、かつて一度だけ行った離宮でアカシエに拝謁するときに着せられていた服に似ているからだろう。ただ、どう思い返してみても、明らかに装飾品の類が増えている。

帯も若干色が派手目になっているような気がするし、額飾りや髪飾り、首飾りや腕輪などは無かった筈だ。

地の布の色も白単色ではなく金糸や銀糸の刺繍、裾や縁などにも装飾が施されている。

正装は重ね着が基本だし、これ、ちゃんときたら相当重いんじゃないだろうか……？

「はい、行きますよー。」

エメラさんの声と共に、袖の無いハイネックのワンピースのようなものをかぶせられ、腕を通す。

既に下には裾に刺繍をあしらった幅広のズボンを穿いている。

因みに、靴下もカラフルな模様が織り込まれていた。

更に言うなら靴は彫刻された木靴である。

袖なしワンピースの上に暗色系単色の帯をきつく締める。

実質、これが実用的帯であり、色鮮やかな帯は飾り帯びだ。

そこに、厚手の生地を使い様々な装飾を施された上衣を重ね、どこか和服の帯にも似た飾り帯を締める。

細い紐も何本も使った、私には一体どうやって結んでいるのかさっぱり分からないような飾り結びだ。

固めの帯で腰やお腹周りがきっちり固定されて、正直なところ少し辛い。

こんな思いは、二十歳のときの成人式の着付け以来だ。

全体的な仕上がりとしては、まるでどこか中央アジア系統の民族衣装に似た雰囲気がある。

綺麗な衣装ではある、あるのだが……一つ言いたい。

今の季節は夏である。

日本のようにじめつとした蒸し暑い暑さではないが、それなりにエグザダナも暑いのだ。

早朝の沐浴で冷えた体は疾うに温まっており、既に陣割と汗が滲み始めている。

祭りの本番は夜だというのに、何で今からこんな格好をしなければならぬのだろうか。

「ではこれから髪を結い上げますね。」

そのあとにお化粧しておわりですよ、とにこやかに微笑むエメラさんたち侍女さんたちの笑顔が恐かった。

まるで着物の着付けのような一種の拷問ではないかとも思える時間が終わったと思ったら、まだ受難は続くらしかった。

第7章

「……疲れた。」

今すぐにでもベッドに飛び込んでしまいたい欲求をどうにか抑えて、柔らかな粗朶に背を預けた。

もちろん、全て終えるのに数人掛りで2時間以上かかった衣装を崩さないようにすることは忘れない。

もしここで着崩してしまつて、また最初からやり直しになつてなつてしまつたら目も当てられない。

今はエメラさんたちも部屋にはいない。

今頃は自身の準備に勤しんでいることだろう。

神事は夜からなのに、どうして朝っぱらから堅苦しい衣装を身にまとうのかと思っていたら、なんと日中にも神事はあったのだ。

こちらの件に関してはナイルは、わざと私に告げなかったらしい。

その判断は正しかったといえるだろう。

事前情報があったならば確かに私は逃走を企てていただろうから。

やはり私はこの世界の神が嫌いだ、いや、憎んでいるといっても過言ではない。

例え、いかな理由があろうとも、私から滝根真帆という日本人、或いは地球人としての生を奪ったに他ならないのだから。

だから、この世界の神を憎む私からすれば、その髪の毛の神事に参加せねばならないなど、それこそ拷問にも似た時間だった。

神への感謝と祈りを捧げるとかふざけるな、といった話だ。

尤も、分厚い石造りの聖堂の中はこの夏の日差しの中でも十分に冷えていて、涼をとるには最適だったが。

この神事は、神官長を始めとした神殿のお偉いさんばかりが集うそ

の神事に何故私が出席しなければならなかったのかは謎だ。

ナイルや神官長とはよく顔を合わせるから慣れているが、あまりよく知らないおっさん方の注目を浴びるのは出来れば遠慮したいのだが、この神殿に世話になる限りそうも言えないのだろう。

祈ったからといってその祈りが聞き届けられるわけでもあるまいに、よくもまああんなに真剣になれるものだ。

そう思いながら最初は眺めていたのだが、静寂の中で真摯に祈りを捧げるその姿は、私にさえも厳粛な気持ちを引き起こさせた。

私自身が神が嫌いだからといって、その神を信奉する人々の心まで否定する必要も、権利でさえもきつと存在しないのだ。

しかしながら、私自身が信仰する気は更々無いままだ。

不自然な姿勢のまま、ちょっと休むつもりがいつの間にかうつらうつらとし始めた頃、私のカッコウよりは控えめだが、普段と比べれば格段に華やかな意匠の神官服を身に纏ったエメラさんが起こしに来てくれた。

負担の大きい姿勢を続けていたため、腕を回すだけであちこちがバキと軋んだ。

エメラさん達が用意してくれた軽いつまむ程度の食事を取ると、彼女達に先導され私は再び聖堂へと向かった。

廊下の窓から差す日は既に傾き、色も濃くなってきていた。

第7章

聖堂には既に多くの神官が集まっていた。

大勢の人がその場ににいるにも拘らず、無音というわけではないが静かな時間がそこには流れていた。

私は案内されるままに、祭壇近くに立つナイルの元へと向かう。

正直、人が多すぎて私の身長ではナイルが何処にいるかなんて見えもしなかったのだけれど、彼の元へ行くのだと聞かされていたので、間違いないだろう。

無事、彼の元までたどり着くとエメラさんたちは静かに末席の方へと去っていった。

代わるようにやって来たのは、武官としての正装をしたイドウンさんとフィズさんだ。

最も私の警護期間が長い二人が、今回の私の警護役として選ばれていた。

武官の正装は、他の神官たちに比べて何と言うか、派手である。

装飾性の高いベルトで帯剣しているだけでなく、あちこちに飾り紐があったり、そもそも着ている長衣の生地の色自体が白と金と赤を主体にしているって時点で派手だ。

普段とは違う、真面目な表情で私の前に跪き、挨拶の口上を述べる。私は、それに鷹揚に首肯して返した。

やがて堂内に満ちていた微かなざわめきさえも消え去ると、神官長を始めとした高位の神官たちによる祈りが始まった。

それは、まるで歌のようでもあり、例えるならば声明が一番近いかもしれない。

あれも宗教音楽の一つであるから、あながち間違った例えでもあるまい。

同じように音程が上下する幾つかの旋律が重なり合い不思議な和音を生み出している。

それは昼に行われた祈祷とは違い、歌でありながらまるで誰かに語りかけるような、そんな温かみを持った祈りだった。
そう、これは神への祈りとは違う、と理由は分からないながらも理解した。

ふ、と肩に僅かな存在の重みを感じた。

そこには確認するまでも無く、先ほどまでは姿を消していた蛇もどきが居ることが分かった。

ああ、そうか、と気が付いた。

これは、神ではなく、精霊への語り掛けであるのだと。

第7章 (9)

精霊語、と呼ばれる言語体系がある。

この世界の全ての言葉が分かる筈の渡り人でさえ、学習しなければ理解できない言語の一つだ。

精霊に語りかける為に用いられていたと伝えられるこの古い言葉を、その特殊性から精霊が我々とは一線を画す存在であることの証左として挙げるものも居る。

主に精神体としての存在である彼らは、明確な言語を持たないと言われているが、この精霊語こそが彼らの言語であつたとされている。あまり世に知られた言語ではない。

知っているのは神殿に属する者や、一部の精霊術士に限られるだろう。

通常精霊は、その好意を抱く対象としか係わり合いを持たないが、この言語にのみは反応する。

この言葉であれば、精霊を全く感じ取ることが出来ないものであつても、精霊に呼びかけることが出来るのだ。

出来ることなら、もっと早くに知りたかったものだが、私がこの言語を知ったのは、ハルディアさんに精霊術について学び始めてからの事だ。

長く伸びる重なり合う音韻に、始めのうちは気付かなかったが、語り掛けであることに気付くと同時にそれが精霊語であることに気がついた。

まだ学び始めて単語をいくつか聞き取るくらいしか出来ないが、それは精霊に顕現を希う請文であるとは分かった。

蛇もどきが姿を現したのも、この呼びかけに答えてのことだろう。

精霊術士でなくとも、精霊に呼びかけが出来るその言葉を、精霊に愛されている人々が歌えばどうなるか、それはきっと、明言するま

でもなく明らかだ。

柔らかな音の波に浸っていると、それはやがて静かに始まった。

ぽつ、と一つ光が灯る。

二つ。

三つ。

ぽつりぽつりと、聖堂に光が集まり始めた。

五つめを数え始める頃からその数は加速度的に増えて行き。

一気に膨れ上がった光は、一瞬聖堂を埋め尽くしたと思ったら、消えた。

「っ!？」

思わず声が漏れそうになるのを抑える。

これがいつもどおりのことなのか、誰一人驚いている人はいない。

聖堂に溢れかえっていた精霊の姿はどこにもなく、ただ蛇もどきだけが私の傍に居た。

私が一人混乱している間に祈りの歌は終わり、集ってきた時とは違い、列を組んで神官たちが退出していく。

呆然とした思いでそれを見送っていると、気が付けばもうほとんど聖堂に人は居らず、ナイルに促され慌ててその場をあとにした。

第7章

私たちが聖堂から向かったのは、神殿から離宮へと続く神宮北大路に出る神殿の北門だった。

他にも、神宮南大路を南に進み、その後東西に分かれエグザードナの街を半周するグループや、東西の神殿大路へと行き、そこから離宮へと向かうグループも居る。

だから、私たちは最も距離が短いグループと言えるが、実は一番初めに出発して、先頭は当然最初に着くが、最後尾は全体の一番最後にならねばならない、つまり非常にのんびりと衆目環視の下、進まねばならないというグループだ。

そのトリを勤めさせられるというのは、ある意味で嫌がらせかと思わないでもない。

私が北門に着いた時には、先頭に行く神官長は既に経った後で、小さく、その陰が見えるだけだった。

周りの皆が歩いていく中、ただ一人、否、ナイルと二人ユニコーンのような麒麟のような、四足の獣に牽かれる輿に乗るのは気が引けて、思わずため息がこぼれた。

それに気付いてか気付かずか、ナイルがぼつりと話し出した。

「懐かしいです。

まさか、自分がこの席に並ぶ日が来るとはあの時は思いもしませんでした。」

毎年ある筈の祭りに対する言葉にしては幾分不可解なその台詞に、続きを促すように首を傾げればナイルはどこか遠くを見つめるように優しく微笑んだ。

「以前、ファーもここに座ったんですよ。」

私はただ沿道からその姿を垣間見ただけでしたが。」

フアー、ナイルが傾倒している日本生まれだというマレビトだ。

私は、その本名を知らない。

彼女が居たからこそ、私はナイルという守護者を手に入れられた。

彼女が、私を守ることを彼に望んだから。

ナイルは、その願いをかなえ、今ここにある。

彼が、どれほど彼女を慕っていたか、彼女を思い出しているその眼差しだけでよく分かる。

そういえば、彼から彼女のことを聞くのはまだ二度目なのだった。彼のその後の人生を決定付けてしまうような人、一体どんな人だったのだろう。

第7章

私は、ただ輿の上からそういった人々を眺めるだけだ。

凱旋パレードや何やらの様に沿道の人に手を振るでもなく、基本的には道のその先にある離宮を見つめ、時折道行く人に目を向けた。通り過ぎる人波のその中に、ふと幾つか見知った顔を見たような気もしたが、単なる気のせいかもしれないと思うくらいには彼私の距離は離れていた。

幻想的な光景も、何時終わるとも知れず長々と続けば飽きても来る。特に、かつては多くの娯楽に触れていた21世紀初頭の日本人なら尚の事だ。

この世界は地球と比べれば格段に娯楽が少ない。

だから、こういった祭りでも熱気を失わないでいられるのだろう。

似たような光景を見ながら、まるで某所の牛歩のように遅々として進まない行列に、何度目かの欠伸をかみ殺した頃、漸くその違和感に私は気付いた。

飽きてさえいなければ、もっと早くに気付けたかもしれない。

いや、これは一種のアハ体験みたいなものだから、どちらにせよ気付いていなかったかもしれないけれど。

決まりなのか暗黙の了解なのかは知らないが、原則的に神官たちは神殿を出れば口を開くことはない。

まあ、数百人の神官が好き勝手に話しまわっていたら煩くて仕方ないだろうから当然のことかもしれない。

私もその慣例に則り口を閉じていたのだけれど、気付いたことがただの気のせいではないことを確かめたくなくて、隣に立つナイルに小さく声をかけた。

無言の集団とはいえ、動いているのだから無音ということはありません。

衣擦れや足音、騎獣の蹄の音や息遣い、車軸の軋む音などそれなりに音源は溢れている。

けれど、ナイルは唐突に話しかけた私の言葉にすぐに気がつく、座る私に合わせるように身をかがめた。

自分で声をかけておきながらなんだが、そういった気遣いを見せられるとくだらないことで声をかけたことが微妙に気まずさを齎す。

尤も、何も言わないのもそれはそれで気まずさを増すだけでしかないのだけれど。

「――あの、気のせいかもしれませんが、もしかして精霊の数が増えてませんか？」

明らかに、というほどではないけれど、徐々にその光球の数と光量が増してきているように見えるのだ。

第7章

最初、神官たちが持つ灯火が明るさを増したのかとも思ったが、違う。

私の気のせいではなければ、先刻神殿で見たときと同じように少しずつ、精霊が集ってきている。

ナイルは私の言葉に、一瞬、おや、と言うような表情を浮かべたが、すぐに得心が行ったのか一つ頷くところ言った。

「よく見てみてください。」

きつと、今の貴方になら見える筈ですよ。」

別に明き始めていたが見ていなかったわけではない、と反射的に言ってしまうそうになって、ふとあることに思い至った。

よく見てみる、今の私になら見える。

それは、つまり……。

神官たちが持つ灯火のために思い違いをしていたが、今、私は精霊を見ようと思っていなかったことに気が付いた。

ということは、現在目に映っている精霊たちは可視状態にあるという事だ。

精霊の力が高まる夜とはこういう意味かと納得した。

第7章

ようやく、そのことに思い至るうちにも周囲には精霊の数が増えていく。

……これ、精霊を見る気で見たらどうなるんだろう？

普段、私の周りにいる精霊たちは自らの意思でその姿を隠してくれている。

多分、今もそうなのだと思う。

けれど、今こうして現れ始めている精霊たちは特に人前に姿を現そうとかそんなことを考えては居らず、ただ力が増すにつれて自然と可視化が進んでいるだけのようだ。

ということは、そんな感じでここに集りつつある精霊たちは目に見えていないだけでもっと沢山いるはずだ。

精霊術の訓練の過程で、周囲に漂う精霊の感じ取り方についても学んだ。

まあ、習得率はいえちよつとアレだが。

それでも、絶対数が多いのであれば多少は見えるはずだ。

そう、ちよつとした好奇心のようなものに駆られた私は、大人気なかつたかもしれないが、多分悪くはなかつたと思う。

一瞬、視界が焼けた。

第7章（後書き）

現在、肩慣らし中です。

暫く更新文字数が非常に少ないとは思いますが、年内には以前のペースに戻……せたら良いなあorz

毎日更新だけはしますので、1週間か2週間おきくらいに見に来ていただければ丁度良いのではないかと思います。

お手数をお掛けして申し訳ありません。

第7章 (10)

それが白だったのか光なのかなんのか分からない。

ただ、強烈過ぎる認識しきれないそれに対処しきれずに、視界は塗りつぶされた。

条件反射のように思わず目を閉じ、更に両手で以って塞ぐも、そもそもが光学的な視界として捉えたものではないが故に、それには何の効果も無い。

物理的な現象によるものではないお陰で、視界が閉ざされただけで閾値を越えたことによる痛みは無いことだけが幸いだ。

意識して見るのを止めれば、強い光を見たあとの残像のようなものは無く、ただそこにあるのは先ほどまでと同じ夜の光景。ホッと、ため息がこぼれた。

背もたれに寄りかかり、一息ついていると僅かに笑っているような、笑いを堪えているような気配を感じた。

ちらと隣を見上げてみれば、いつもどおりの微笑むナイル。だが、その口の端は微妙に動いている。

「……分かってて、勧めましたね？」

思い返せば、最初に見るように言ったのはナイルだった。こうなることは分かっていたに違いない。

「申し訳ありません。

ですが、悪気があったわけではないのですよ。」

曰く、そもそも精霊を見る力が強くなければ私のようににはならないし、見ることに習熟していれば以下同文。

つまるところ、潜在能力ばかり高くて制御できていないという現状が、自覚できる形で明るみに出たということに過ぎない。
要訓練、ということをも身をもって教えてくれたわけだ、ナイルは。

「だからといって、他に方法は無かったんですが……。」

何だか、一気に疲れた気がする。

それと同時に気も緩んだ。

飽き始めてこそいたものの、解けないままだった緊張もすっかり解れた。

それを見越してのことか、ナイルが言う。

「折角の祭りです。」

ここではそういう気分にはなり難いとは思いますが、至少くらい楽しんでも、誰も文句は言いませんよ。

貴方は、今回が始めの祭りなんですから。」

初めてだから楽しんで。

もしかすれば、私を部屋から追い出した彼らも、そういう気持ちでいたのかもしれない。

私を市に連れ出してくれたハルディアさんや、今こうしているナイルがそうであったように。

そう思ったら、何だかすんなりとその言葉が出た。

「ありがとうございます。」

誰も見知った人のいない異世界に来て、その世界で出会ったいろんな人たちの心遣いに気持ちが暖かくなる。

思えば、日本にいた頃はこんな風に心碎いてくれる人なんて、周りにはほとんどいなかった。

それには、私自身にも原因があったのだろうと今なら分かる。

一方で、彼らには彼らなりの打算があつて、私によくしてくれてい

るのだと思うひねくれた思いもまた私の中にはある。

けれど、それらを抜きにしたって、彼らの気遣いは温かだった、自分を氣にかけてくれる人がいるというのが、こんなにも嬉しいものだとは知らなかった。

思い返せば、何時だって皆は、この人は私のために動いてくれているのだ。ナイル

かつて聞いた、アカシエの言葉どおりに。

たったそれだけのことで、と思う人もいるかもしれない。

でも、人への気遣いの大変さを私はよく知っている。

それを継続することが、どれだけ大変なのかも。

ましてやそれが、私みたいひね曲がった性格の人間に対してのことならば。

「ありがとう、アニルヴァーユ。」

だから、呼んだ。

彼の名を。

一度教えてもらったきり、一度も呼んだことの無いその真名を。

ともすれば周りの音に掻き消されてしまいそうな、彼にだけ聞こえるくらいの声で。

第7章

行列はなおも続く。

精霊たちの数は目に見えて増えている。

目に見えない精霊たちもまだまだ沢山いることは、見ようとしなくても気配を感じられるほどになっていた。

いくら精霊の力が増す夜だとは言っても、どうしてこんなにこの街に集ってきているのだろうと、不思議に思っていたのだが、それも離宮の姿が目映るようになってくると謎は解けた。

微かではあるが、神殿で聞いたのと同じ歌が聞こえてきたのだ。

神殿で聞いたときは、祈祷か声明のようだったけれど、ただ一人が奏でるこれはまさしく歌だった。

風に乗って呼びかけるその声に、精霊たちは惹かれてやってくる。

聴覚ではなく、別の感覚に直接触れてくるようなその声は、肉体という鎧を持つ私たちにさえ影響を与えるのだから、それが精神体である精霊であれば、その受ける影響は言うまでも無い。

それを誰が歌っているのか、すぐに分かった。

この世界の”生き物”にそんな影響を与える声が出せるのはこの街にはそもそも一人しかないのだから。

まるで伝説のセイレーンの歌声だ。

ふらふらと、酔ったかのように、或いは本当に酔っているのか、精霊たちは不規則な軌道を描きながらその声に引き寄せられる。

精霊には基本性別はないし、歌っているのも信じられないくらい的美形とはいえ男だけだ。

神殿ではただ聞いているだけだったけれど、その心地よい歌声に釣られる様に、私の口からも同じ旋律がこぼれ出た。
自分でも、何故そんなことをしたのか分からない。

何だか地に足の着かないふわふわした気分で、私は鼻歌でも歌うかのように歌詞のよく分からないそれを口ずさんでいた。
時折、来たれと、来よと、呼びかけるその歌を、誰にとはなしに歌っていた。

第7章

酒を飲んだわけでもないのに私までも、ある種の酩酊気分で旋律に音に乗せる。

ただの声ではなく、魔力を持った私の声は、微かなものでありながら、何処までも遠くへと響いていくようだった。

視界の中に、精霊の数が一気に溢れかえるのを、どこか夢でも見ているように感じて眺めていた。

その中には、先ほどまで姿を消していた蛇もどきや、普段私の周りにいる精霊たちもいた。

期せずしてなった神の裔とマレビトの二重奏は、何かを呼び出そうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8578p/>

マレビット来たりて

2011年12月7日00時48分発行